

やはり俺の加速世界は間違っている

亡き不死鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

加速世界に一匹の狼がいた。

誰にも気づかれず誰とも触れ合おうとしない孤独な狼。

今宵も見られず触れられず気づかれず、一人ぼっちの狼は加速世界を駆ける

目次

加速世界

やはり俺の加速世界は間違っている

加速世界

決意を……そして過去を

そして、彼と彼女の思い出が消える

そして彼は新しい道を歩み出す

そして、彼は彼女らと出会う

波乱の昨日、混乱の今日

休息と安息

無謀と勇氣

やはり女性との出会いは黒歴史の始まりである

良好な暗雲

病院ではお静かに

二年前

二人の白

過去からの問題

剣豪將軍参上！

空を見晴らせなかった人

高く、飛びたい

無限の世界

幕間

日常カムバック

休日の二組

透明色の脅威？

140 132 124 112 105 96 90 83 76 70 64 58 52 47 41 35 29 24 17 12 5 1

今こそ	148
加速世界の異変	158
失敗の過去、未知の現在、不安の未来	165
災禍の鎧く赤と透明く	
それが、君の望みか？	172
比企谷八幡の日常は少しずつ動きだす	178
災禍の鎧、急襲	186
八王会議	194
白い脚本家の影	203
黒と赤の邂逅	210
喰ラエ、強クナルタメニ	218
孤立したレギオンマスター	226
戦場にダイブしたなら：	233
能ある狼の隠されし牙	240
裏切りの先に見えぬ希望	247
孤王の独白	257
言葉	264
舞台を降りた後	270
舞台裏のエピローグ	277
暗躍する影く王の居ぬ間に？く	
最低から始まる入学式	284
歓迎戦	291
日常リタイア	298
蒼い可能性	304
黒蒼の劣等感	311

勸誘	317
開幕の火花	324
『守る』ということ	332
鈴の音が聞こえる戦場	339
『あの人』	346
白い瞳	357
囚われた王	366
幕間2	
一難去ってまた一難去ってまた一難	373
リアルの日常	381

加速世界

やはり俺の加速世界は間違っている

《Brain Burst 2039》

2039年、インストールするとソーシャルカメラの映像から再構成された加速世界で、現実を舞台にした対戦格闘ゲームが東京に住む百人の子供達にいつの間にかインストールされていた。インストールされたその子供達は、そのゲームで自分だけのアバターを駆使してそのゲームを遊びはじめた。

そして時は経ち、その中でも『純色の七王』と呼ばれるトッププレイヤーが名を馳せ、『レギオン』と呼ばれるプレイヤーの集団の長を勤め、日々敬愛と畏怖の念を贈られていた。

そんな中、純色の七王と同じレベルに到達したにも関わらず、まるで見向きもされない。噂ですら僅かにしか聞かない程の『無名のトッププレイヤー』がいた。

そのプレイヤーは純色の七王に因んでこう呼ばれている。

『無色の孤王』

これは、まるで都市伝説のような少年のお話

☆☆☆

『領土戦』

毎週土曜の夕方に設けられている領土戦争時間にレベル不問のチーム戦を行い、平均勝率5割を上回ることシステムに認められる東京の全区をそれぞれ舞台にした陣取り合戦だ。

もちろん前述した七王…いや、今は六王もそれぞれ領土を持っている。赤のレギオン《プロミネンス》は練馬区、中野区の半分。緑のレギオン《グレート・ウォール》は渋谷区、目黒区、品川区、世田谷区の一部のように各々の領土を保持していた。

そんな中、青のレギオン《レオニーズ》、黄色のレギオン《クリプト・コズミック・サーカス》、紫のレギオン《オーロラ・オーバル》、白のレギオン《オシラトリ・ユニヴァース》の四つのレギオンに囲まれた一つの小さな区、《千代田区》でも一つの領土戦が行われていた。

そこでは無色のレギオン《ロスト・ネメシス》のレギオンマスターに三人のバーストリンカーが挑んでいるところであった。

原始林ステージ。木が生い茂り視界が悪い森の中を二人のバーストリンカー、《プロミネンス》に所属する『ブレイズ・ハート』、『ピーチ・パラソル』の二人が走っている。ついでにもう一人の参加者『オーカー・プリズン』は陣地で待機しているようだ。

「はっ…はっ…。ねえ！これ敵に会わないまま勝ちやうんじゃない？」

「油断は禁物だよハトつち。ここって毎回一対三なのに一度も負けた事ないんだって！」

「だーいじょぶだって！いざとなったら私の『シアリング・ノート』で奴を灰にしてやるさー！…あれ？相手って名前なんだっけ？」

「もう忘れたの!?相手は…えっと、ちよつと待って。…あれ？」

領土戦では『相手陣地のターゲットを破壊する』、『相手プレイヤーの全滅』などがある。故に一対三の場合一人が守り二人が固まって相手陣地を目指すのが基本になっている。

もちろんアバターによるが。

…そんな中、たった独りで三人を相手にしているプレイヤーは地を蹴り木を蹴りとまるで忍者のようなスピードで相手陣地を目指していた。

実は三分程前先程の二人の上を通り過ぎたのだが、全く気づかなかったのでそのまま直進している。

「あそこか」

そのプレイヤーは森の一部だけ切り開かれ視界が良くなっている部分に今回のターゲットを見つけほくそ笑む。ターゲットの近くに一つのアバターの姿が見えたが気にする事なく突き進んだ。

森から抜ける

相手はまだ気づかない

駆け出しターゲット目掛けて跳躍する

相手はまだ気づかない

腕を上げターゲットに振り下ろす

相手はまだ気づかない

そして手が振り下ろされ……ターゲットは粉々に砕け散った

☆☆☆

「……………」

本日最後の領土戦を終え、俺…比企谷八幡は小さくため息をついた。

…疲れた。毎週毎週なんで俺の領土に来るんだよ。他の王の所は不可侵条約だかなんだかを採用してるってのに。そろそろ俺も直談判しに行く時期か。

……無理だよな、どうせハブられる。

レギオンに入っている者なら間違いなく知っているが、黒の王除く六王は互いに不可侵条約を結んでる。そして知らないだろうから一応言っておくが、俺もレギオンマスターなんだ。だから純色の七王とも全員知り合い…いや、何人かはもしかしたら友達かもというレベルまでいってるかもしれない。

なんせレギオンマスターになるための試練が最低四人は必要とかいう運営の悪意を感じる設計だったんで、現在の緑の王と青の王に土下座して協力してもらった過去まである。…あれ、友達に土下座って

普通だよね？

……ま、現在はレギオンメンバー俺一人という、レギオンの意味あるのかとツッコまれる状態にあるから顔を合わせづらいというものもあるか。

「……さて、寝るか」

現在時刻は午後四時。明日はみんな大好き日曜日だ。

朝に寝て昼に起きる事も、夕方寝て朝二度寝する事もできる。ビバ日曜日！学生の味方だね！

……寝よ。

加速世界

月曜日。学生の誰もが嫌い怨まなかったことはない日だろう。たまに月曜日が休みになるとその怨みの対象は火曜日に行く。人間は優柔不断だ。

さて、学生である俺も当然行かなくてはならない学校がある。その名も『梅郷中学』。中学二年生の俺は小学校時代の思いでトラウマを参考に小学校の同級生が誰も行かない所を選び、クラスの連中と関わらない（関われないともいう）まま一年以上が過ぎた。

そして今現在、というかかなり前から俺の頭を困らせている奴がいる。

「聞いているのか八幡」

そう、俺の目の前にいるこいつ。

黒雪姫と呼ばれるこの学校の副会長。成績優秀容姿端麗、男女問わず人気者。ぼつちで人に気にもされない俺とはまさしく住む世界が違う存在が、わざわざ俺に話しかけてくるのだ。

「…なんのようっすか?」

「食事の誘いに来た」

……そしてこいつはいつもこういう誘いを俺の席に来て言ってくる。俺の席は窓際の真ん中。そこに学校の人気者が学校の日陰者に話しかけるなど口を酸っぱくして言いたい。っーかメールがあるだろうが。なんでわざわざ目の前に来て言うんだよ。

まさかこいつ俺の社会的+物理的な抹殺を狙ってんじやないだろうな。実際さつきからクラスの周りの視線が集中し過ぎてヤバイ。

「…いや、俺より取り巻きの方々を誘った方が」

「大事な話がある。今日の昼、食堂に必ず来い。来なければ校内放送で呼び出すからな」

越権行為反対!こんな所で大事な話とか言うなよ。勘違いしちゃうだろ。

他の連中は大概勘違いされたようで、後ろから感じる視線が冷たい。視線が質量持つてたら氷漬けにされて蜂の巣になるレベル。

……まあ、俺と黒雪の大事な話なんてブレイン・バーストの話しかないだろうから問題ないけどな。俺の勘違いの話ね？他の奴らは知らん。

そうこうしているうちに予鈴がなり、黒雪も自分の机に戻っていた。俺は未だ突き刺さるクラスメイトの視線を無視して机に突っ伏し、意識を手放した。

☆☆☆

『子を作ろうと思うんだ』

『……へえ』

昼休みの食堂で黒雪に直結させられ、その後の第一声がそれであった。

誤解のないように言っておくが黒雪の言う『子を作る』というのは雄しべと雌しべの話ではなく、ブレイン・バーストの話な。

実は黒雪姫もバーストリンカーであり、しかも俺と同じレベル9。黒の王と呼ばれる程のプレイヤーなんだ。

『それ、俺に言う意味あんの？一応言っとくけど俺と黒雪ってある意味敵同士だぞ？』

『ふっ、無色の孤王に裏切り者の王。肩を並べるには相性がいいと思うけどな』

『生憎肩を並べるなんてあいつしかした事ないからわかんねーよ』

『それは残念だ。：話を戻すがその子は面白い子だぞ。ゲームセンターのスカツシユゲーム、そのの高得点保持者だ』

『スカツシユゲーム？ああ、そういえば俺も昔やってたな。なんせあそこは人が全然来なかったからな。なに？もしかしてそいつもぼっち？』

ぼっちが増えるよ！やったね、八幡！……いやぼっちが増えてもぼっち同士が関わる訳でもないからそこらへんの事情はどうでもよくはあるんですがね。

『まあな。…そうだな、言うなればいじめられっこと言う奴だ。もちろんその問題も解決するつもりだ』

『それに恩きせて子になれって?』

『無理強いはしないさ。ただ、ブレイン・バーストの相性の良さでは他に居ないと思わないか?』

…確かに。ブレイン・バーストの適合条件に『大脳応答に適性を持っている』という条件がある。

実際あのスカッシュゲームをやれば分かるが、アレは見かけに反してかなり反射神経を必要とする。ボンボン跳ねてたまに顎を狙ってきやがるんだ。…久しぶりにやってみようかな。

『じゃあ後はもう一つの条件、『生後間も無くからニューロリンカーを付けていること』はどうなってるんだ?』

『それを聞こうと思ってね。実はもう呼んである。…いや、丁度来たようだ』

『は?』

黒雪はニューロリンカーからケーブルを抜き、食堂の方でキョロキョロしてる丸っこい奴を呼びかけた。あれは一年らしい。

…なんだ典型的なぼっちか。イケメンぼっちだったら今すぐ投げ出して帰るところだった。しかし一年からイジメの標的にされるなんて運のない。

ま、俺程のぼっち道を極めればいじめっ子どころかクラスメイトにすら認識されなくなるがな。

「あの、なんで僕呼ばれたんですか?」

「まあ掛けたまえ。食べながら話そう。直結の仕方は知っているか?」

直結用のケーブルを渡されビクンと体を震わせ辺りをキョロキョロ見回す。

…分かるぞ少年。こんな公衆の面前で直結するなんて大概カップルがやることだ。それらから無縁な俺達に直結を申し込むなんて、まさか俺のこと好きなんじゃ!なんて勘違いしてもおかしくない。その上ぼっちは周りからの自分の評価を分かっている。だから相手に

釣り合わない自分への周りの目が恐ろしいのだ。

ま、俺には関係ない。そして俺は未だに手を付けていなかったラーメンを啜るのだった。

☆☆☆

それからしばらく経ち、一年の男が俯いたり真剣な表情になったりとぼつちやり二十面相をしていると、食堂の入り口が騒がしくなってきた。金髪ピアスと頭悪そうな連中が食堂中を見回し目の前にいる一年の姿を見つめると真っ直ぐこっちに向かってくる。

「有田あ！てめえ約束すっぽかすたあいい度胸じゃねえか！アア！」
「ヒイツ！」

どうやら今日もなにか命令されていたらしいな。それをすっぽかしてこつちにこれる度胸は認められるか。

……さて、どうする？

「ああ、君が荒谷君か？」

「…！はい、そうです」

おお、すげえ変わり身の早さ。美人は不良をも更生させるのか。流星生徒会副会長、ここから不良更生の素晴らしい一言が…

「君の事はハルユキ君から聞いているよ。暴力を振るうしか脳のない猿のような男だとね」

……おかしい。俺の感覚がおかしくなければこの言葉で更生するのはせいぜいDMくらいだ。まるで不良に暴力を振るえと言っているような……ああ、そう言う事か。

「有田あーこの野郎!!」

黒雪の言葉に切れ、有田？に殴りかかる不良。…理由は分かった。だが流星にそのまま殴られろって酷過ぎんだろ。まあ説明するんだろが……ここは俺も、

「「バースト・リンク！」」

バシイイイインという音と共に世界は青く染められ、周りの人間達が停止した。ここは初期加速空間ブルーワールドと呼ばれるソーシャルカメラが映し出すある意味別の世界みたいなもんだ。

その中に俺も含めて三人だけ青以外の色を持つ存在がいた。言うまでもなく黒雪と有田だ。ここではローカルネットワークの仮想世界でのアバターが採用されている。黒雪はほぼ現実の姿に、エロい黒衣装にド派手な蝶の羽根を付けている。どれだけ自分に自信があるんだよ、とツツコミたいがよくよく見ると『あれ？現実の方が可愛くね？』となってしまうからたちが悪い。ついに二次元を三次元が超えた瞬間かもしれない。

……それに引き換え、いや、それに加えてが正しいかもしれない。有田のアバターはちっさいピンクの豚。……なにそれ自虐？俺でもアバターくらいでは良い夢見たいと目が腐つてない適当な男アバターに執事服を着込ませてるのに。

「こ、ここはどこですか？黒雪姫先輩に……えっと、比企谷先輩？」
なぜ疑問系？それ以前になぜ俺の名前を知っている。大方黒雪が教えたんだろうがせめて本人に一言言うべきだろ。

……ここに有田が居るって事はブレイン・バーストリンクのインストールに成功したってことか。ブレイン・バーストの子作りは一人一回と決められているからな。失敗しなくてなによりだ。

「無事にできて良かったよ。おや、八幡も居たのか」

「まあな。これからお前がやる事の想像がついたんでな」

「ほう。それは？」

「有田殴らせてその不良を現行犯逮捕ってとこだろ。最近の不良はソーシャルカメラの死角を共有してるらしいしこんなチャンスはそう無いだろうからな」

余談だがソーシャルカメラの死角なら俺も幾つか知っている。ぼっちたる俺が教室で一人飯するわけにもいかないなので、昼のベストプレイスを日々探しているうちに見つけたってわけだ。

俺の答えに黒雪は満足そうに頷き有田は震え上がっている。その有田を論すようにこの世界の説明を続けていく。再び空気になった

俺は服の乱れを直したり黒雪の慎ましい胸に目が行き黒雪に睨まれたりしていた。

…念の為言っておくがこの初期加速世界は完全に止まっているように見えるが実はそうではない。思考を千倍にしただけなので現実世界は刻一刻と進んでいる。なので先程より不良の拳が有田の顔に迫っている。その拳を自分の手で受け止め、「その程度か」と遊んでいると始めの時より近づいているのがよく分かった。

「ではハルユキ君。加速が終わったら全力で後ろに飛びたまえ。そうすればあまり怪我をせずに済む。ではもう出ようか。『バースト・アウト』と言えばここから出られる。いくぞ「バースト・アウト！」」
……アレ？もしかしなくても俺置いてかれた？邪魔しないように隅っこで大人しくしてたから存在すら忘れられた？

「…………バースト・アウト」

俺も胸に宿る虚無感をなるべく感じないようにしながら仮想世界から抜け出した。

世界が色を持ち急速に動き出す。つまり殴られかけてた有田が完全に殴られた。有田は吹っ飛びその後ろにいた黒雪にまで被害が起きる。その結果黒雪の頭からは二筋の血が流れ出た。

「黒ゆぶっ！」

「姫！大丈夫ですか!？」

「誰か救急車を！」

「先生と警察もだ！」

取り巻き連中に吹き飛ばされ輪の中から弾き出された俺はその後の光景をただ眺めていた。黒雪は頭を切っただけで大事には至らず、不良は逮捕され、有田は頬に湿布を貼られただけだった。……実際に殴られたのは有田なのにこの扱いの違いは流石と言ったところか。

だが一つだけ言いたい。……今日の昼、俺いる意味あった？

決意を……そして過去を

不良が退学になったところで俺の生活が変わるところなどなく、今日も今日とて学校に向かわなければならぬ。だが登校する間は密かに俺の楽しみの場となっている。ブレイン・バーストはリアルタイムで行われている為、当然他人の戦闘を見ることが出来る。観戦リストに見たい奴を登録するだけでそいつが戦闘をする時勝手に加速してくれる。もちろん朝早くから戦っている奴は稀だが、朝一番の興奮を俺に与えてくれるのだ。

なんて事を思っているといつも通り世界が青く染まり、続いて世界が変貌していく。建物の一部が崩れ落ち、ドラム缶から火がチラチラと出ている。世紀末ステージだな。

対戦者は……おっ！最近俺が注目してるアツシュ・ローラーじゃないか！バイクを乗り回す世紀末メガラツキーでギガクールなバーストリンカーだ。

対戦相手は…

「シルバー・クロウ？」

視界の下で自分の姿を見ながら遊んでいる野郎がいる。ニュービー？あ、でも見方によつてはかつこいいかも。

とか思ってる間にシルバー・クロウが空を飛んだ。いやバイクに轢かれてね。打撃ダメージと落下ダメージのワンキル喰らってゲームが終わった。

……派手な開幕戦だ。俺の時なんか勝手が分かってない者同士三十分彷徨ってただけだからな。結果は負け。話しかけたら殴られてそのまま時間切れ。なにそれ超理不尽。

「……………学校行こ」

加速世界第一のトラウマを呼び起こした俺は朝から重い足取りで学校へ向かうはめになった。

☆☆☆

「シルバー・クロウってこいつかよ…」

直結するなら俺いらなくね？との俺の意見は聞かれることもなく却下され、その日も食堂に強制連行された。相変わらず有田と黒雪が直結してたので無視して牛丼を食っていると対戦を申し込まれた。この学校にバーストリンカーなんて俺含め三人しか居ないので申し込んだのは有田だろう。

視界が変わる。空がオレンジ色になり足元が草花で満たされる。

《黄昏ステージ》か。

「ひ、比企谷先輩？それが先輩のアバターですか？」

「……………」

ブレイン・バーストを入れて数日の有田でも驚くだろうな。なんせ

：

「体が……ボヤけてる？」

俺には色がないからな。何も無いところに薄っすらと人の形がボヤけているように見えているはずだ。

《クリア・ウルフ》。それが俺のアバターだ。透明色、カラーサークルにもメタルカラーチャートにも属さない、色と呼んでもいいのかすら分からんやつだ。本来ならボヤけすら無いんだが《神聖系》のステージだと何故か見えるらしい」

これマジチートじゃね？って思うだろ？実際通常対戦なら一回殴って後は休んでれば時間切れで勝てるからな。

…そんなことばかりしてたら挑んでくる奴も観戦リストに入れる奴もいなくなつたが。このアバターの得意な事は『逃げる！隠れる！不意をつく！』。極力戦わない。絶対に働きたくないでござる！

……まあそれはともかく、このクリア・ウルフは攻撃力、防御力が桁違いに低い。それを補う為の必殺技だが攻撃の為の必殺技がレベル7まで無かつたくらいだ。劣等感から生まれるアバターといっても偏りすぎでしょ、流石に消えたいとまでは思っていないんですねえ。

「てか今朝のあれ有田のだったんだな」

「おや、八幡も見ていたのか？」

「おお見えた見えた。カラスが空を飛んだ瞬間は初めて見たな」

「ちよちよ！比企谷先輩！」

「フフ、初めての闘いだ。仕方ないだろう。…さて、八幡。頼みがある。ハルユキ君に戦い方を教えてやってくれないだろうか？言葉では色々と限界があるのでな」

「断る、と言いたいとその前にコイツに聞きたい事があるんだけど？」

「ほ、僕にですか？」

「バーストリンカーになるなら個人的にどうしても言いたい事がある。」

「……お前さ、本当にいいの？加速ってのはお前が思ってるより人の心を掻き立てる。」

「なんせバーストポイント、加速する為のポイントがゼロになった瞬間ブレイン・バーストは強制アンインストール。しかも一部の人間しか知らないがブレイン・バーストの記憶までなくなっちゃう。自分の為に他人を蹴落とすのを完全黙認してるゲームだ。」

リアルでぼっちしてれば味合わない苦しみをゲームで感じるかもしれない。親に裏切られる事もあれば、レギオン…仲間に裏切られる事だってある。」

「軽い気持ちで、ただの遊び感覚でやるんなら、悪い事は言わない。辞めとけ」

「ブレイン・バーストは最高年齢でも15歳までしかない。だから殆どの人間は遊び感覚でやっているのかもしれない。」

「だが、ブレイン・バーストは思考速度を1000倍に引き上げる事で数年以上の精神年齢の加速を促す事もある。」

「年を食えば何がつくか？それは知恵だ。相手を蹴落とし自分の利益だけを着々と上げる為の知恵を身につける。そこから始まるのがプレイヤーキルなどだ。」

「そして実際に仲間がポイント全損したときの絶望は……正直耐えられるもんじやない。そして、現実に戻り何も覚えていない奴との対面で、今までの絆が全て消える絶望を知るんだ。」

…別にこれは裏切りじゃない。それでも隣に居た奴が、隣で戦つた奴が、隣で笑つてた奴が、自分との関わりを否定した日には……

「……比企谷先輩」

……余計な感傷に浸つちまった。有田の考え……まあ何となくだが、答えの察しはつく。

「僕は……僕はまだ、先輩に黒雪姫先輩に返すべき事があります！先輩は、僕を地獄から救い出してくれた」

「もうそこに地獄はない。今まで以上の生活は確実だ」

「それに！先輩には何か目的があるはずです！スカツシユゲームをチェックしたり、こうしてレクチャーする手間をかけるだけの目的が！」

「その目的がお前のポイントだったらどうする？お前が稼いだポイントを取る為かもしれない」

「それくらいなら幾らでもやります！僕は……もともと黒雪姫先輩みたいな人と話せるような存在じゃ無いんです。……それでも僕は先輩の期待に答えたい！先輩の掛けてくれた慈悲に報いたい！その答えが……何であつても。……だから僕は戦います、バーストリンカーとして！」

マスクで分からないが有田は真剣な目で力強く黒雪に言った。俺がやったのは忠告ですらない。ただ自分を押し付けただけだ。……らしくない。

「……悪かった。少し言い過ぎた。黒雪も悪かったな、お前の子なのに俺が口出しして」

「……いや、ハルユキ君の素直な気持ちを直接聞けて嬉しかったよ。だかなハルユキ君、慈悲なんて言葉を使うな。私は愚かで無力な中学生でしかない。君と同じ場所に立ち、同じ空気を吸う人間だ。……距離を作っているのは君の方だよ。この仮想のたかが2mが、君にはそんなに遠いのか？」

……遠いだろうよ。むしろ恐怖を感じているかもしれない。トツプカーストの視界に入る、それだけで苦痛な人間だっている。……それに繋がりができちまった人間は裏切られる事を恐れるものだ。

……繋がりが、切れた事がある人間なら、尚更な。

「……先輩は僕を地獄から救い出してくれた。これ以上は望みません」

「……そうか」

有田の返事に些か悲しそうに黒雪は返した。

……思い出してしまふ。

俺があの時、期待を持たなければ後悔せずに済んだのか？

俺があの時、希望を持ち続けなければ絶望せずに済んだのか？

……なあ、教えてくれよ。

小町

そして、彼と彼女の思い出が消える

あれは俺が小学二年生の時だった。《Brain Burst 2039》とタイトルのついたゲームらしきアプリがいつの間にか俺のニューロリンカーにインストールされていた。学校でクラスメイトとうまくいっていなかった俺は休み時間や帰ってからの殆どの時間をそれに費やした。当時は100人と数十人しかバーストリンカーが居なかつたので東京の隣区を歩き回ったりもした。

そして二ヶ月ほど経った頃俺は一つのシステムを見つけた。それは自分の『子』をつくるシステム、つまりバーストリンカーとしての後輩を一人参加させる事ができるものだった。

すぐさま俺は小町にこの事を話した。小町も俺も生まれてから直ぐにニューロリンカーを付けられている。後に俺は子育ての簡略化、小町は正しい教育の為と知ったのだが今は関係がないので割愛。

小町のインストールは無事終了。小町のアバターは《レモン・サン》。明るい黄色のアバターで、フラッシュの目潰しやレーザー光線が得意だった。明るい性格も相成って対戦相手と友達になったりもしていた。

それからは俺と小町はタッグを組んだり、あまり差がなかつたので兄妹同士で対決したり、東京中と一緒に散歩したりもした。学校で楽しみが無かつた俺は妹の小町と遊んでいるのが凄く楽しかった。

ブレイン・バーストをインストールして一年近く経った頃、レベル4以上から入れる無制限フィールドに入り浸っていた俺はレベル6、小町は学校の友達も順調に増えて忙しくなりレベルは4だった。レベル差に文句を言われる事もなくエネミー狩や対戦に精を出し、一年前と変わらず俺達はずっとこのゲームを楽しんでいた。

☆☆☆

そして……ある日、俺は机の中に一通の手紙を発見した。それにはピンクの紙に女の子らしい文字で『今日の放課後校舎裏に来てください』と書かれている。直ぐに机の中にしまい込んだ。

その日の授業中は貧乏ゆすりが止まらなかった。授業が終わると速攻校舎裏に待機。ガラスで髪を整え格好の乱れを確認し、何時でもバチコイの覚悟で望む。

そのまま一時間待った。だが誰も現れず、そこまできてようやく俺は騙された事に気づいた。思い返せばクラスの何人かがずっと俺を見て笑ってた気がする。

「……うぜえ」

ブレイン・バーストで一、二年分くらいは他の奴より年上のつもりだったので、イタズラをされても気にはならないが取り敢えずあいつらは許さない。俺の絶対に許さないリストには加えよう。

苛立ちを抑えつつ帰路につく。帰る際には手帳を一つ買った。いい加減絶対に許さないリストが覚えきれなくなってきたからな。

……ついでに小町にプリンでも買ってやってやるか。

「小町く、入るぞー」

プリンとスプーンを片手に小町の部屋を訪ねる。当然ノックは忘れない。返事がないので入ってみると、椅子に座って目を閉じているところを見ると無制限中立フィールドに潜っているらしい。プリンが温まると勿体無いので冷蔵庫に入れ、直ぐに自分の部屋に戻り椅子に座る。

「アンリミテッド・バースト」

世界が変わると空から煌々と月の光が降り注ぎ、足元が白い砂一色になった。

《月光ステージ》だ。レアなステージに来たもんだ。ここはエネミーが少なく危ないトラップもない比較的安全なステージ。唯一音が響きやすくて他のバーストリンカーに見つかりやすいってのが難点…

バシユ！

突然、視界の端で一筋の光が空へ向けて飛び立った。まるで夜空の月に飲み込まれるように伸びた光線を見た瞬間、俺は弾かれるようにその場から駆け出した。なんせあの光は俺が体感時間数年もの間見続けた小町の：《レモン・サン》の必殺技だからだ。

俺の記憶上あのレーザーを真上に放った事はない。取り越し苦労なら上等、緊急事態なら…：小町に手を出した奴らはぶっ殺す！

流星は隠密と移動術に優れたアバターなだけはある。風になったかのような速度で光の発生源に辿り着いた。

そこで見たものは…：六人のアバターに囲まれ、倒れ伏している小町の姿だった。しかもただ倒れ伏しているのではなく、黒い鉄板のようなものに押しつぶされているのだ。それをしていてであろう鉄板を何枚も並んでいるだけのアバターは他の五人より少し離れた位置で五人が小町のHPを削るのを待っているようだ。

そうこうしている間に五人のうちの一人が剣を持ち上げ小町の腕を切り落とした。

「きゃああああああ!!」

その時の俺は今思えば風よりも速く動いた自信がある。風切り音がすぐ隣を通り過ぎる感覚を無視しながらそいつに殴りかかった。

「俺の妹になにしてんだてめえらああああ!!!」

キレた。その時ばかりは普段温厚な俺もキレた。一人を殴り飛ばした後、すぐさま小町にたかっていた四人を蹴り飛ばす。何をどうやっただかなんてもう覚えてない。ただガムシヤラにひたすら小町から遠ざけた。

殴り、蹴り、踏み、噛み、五人のHPを一瞬で削り取った。六人目、とも思ったが何時の間にか消えていたが、今はそんな奴より小町だ。鉄板をどけ、辛そうな小町を抱き寄せる。

「お…に、ちゃん。…遅い、よ」

「こま…レモン。悪い。遅くなっちゃった」

「まったく。…帰ったら、私、プリン食べたいな」

「任せとけ。既に冷蔵庫にはお前用のプリンを入れてあるから」

「あはは、流石はお兄ちゃんだね」

声が震えている。当然だ、集団で襲われた上、全損してしまうかもしれなかったんだから。それに無制限中立フィールドでは痛覚が通常対戦の時よりも格段に上がる。

…小町はここで殺され、行き返り、また殺されるという行程を何回されたんだ。小町を襲った奴らは一時間すればここに生き返る。そいつらに小町の分をやり返したいが、今は小町の安全が大事だ。

小町を背負い、脱出用ポータルを目指し歩き出した時、背中が重みが消えた。

「油断大敵だよ、ウルフくん」

声のした先には何処かに消えたはずの鉄板野郎が右手部分をなくしたまま立っていた。どうやって現れたのか、何故右腕がないのか、そんな疑問も流れたがそんなものはどうだっていい！小町は!?

「お、にい……」

聞こえた声は……そこまでだった。吹き飛ばされた小町は空中で霧散し、後にはもう何も残らなかった

「そん……な……。嘘……だろ?」

「嘘じゃないさ。ポイント全損。そうだね、ゲームオーバーってところかな?」

「ポイント……全損……」

ポイント全損。俺はポイントを全て失った人間がどうなるのかを直接見た事はない。だからポイント全損に陥った人間がその後どうなるのか……まさか現実世界でも……。

「……ッ!」

嫌な予感がする…。俺は身を翻しポータルがある方向へ走り出した

「ウルフくん。どこへ行くのかな？」

「……邪魔だ鉄板野郎」

どう移動したのか俺の行動を阻害するように目の前に立ちはだかる鉄板野郎。今はお前の相手をしている暇はないんだ。現実での小町の安否を確認しないと…

「酷い言われようだ。そのどの色にも属さずメタルカラーにすら属さぬ君のアバターについて知りたくて今宵の茶番を演じたのにさ」

「茶番…だと？」

……そうだ、実際俺を見たけりや通常対戦で十分だ。それをわざわざ無制限中立フィールドで俺を待つ必要なんてない。

……つまり、こいつは…そんなお遊び感覚で小町のポイントを全損させやがったのか？

「……………ああ、限界だ」

「なにを…………む」

俺の体を半透明な光が包んでいく。だが、それも一瞬だけ。今度は濃い過剰な光が透明な俺の身体に纏わり付いていく。

…でもそれもどうだっていい。さっきまでは我慢できた。小町を助けられなかったのは俺のせいだ。あと五分早くイタズラだと気づいていれば小町は全損しなかった。あと五分早く買い物を済ましてれば小町を助けられた。……あと少し、俺に力があれば……。

…だがな、幾ら何でも仮想世界とはいえ妹の死を茶番扱いされて…

「キレねえ兄貴はいねえんだよ!!」

全身を黒い光に染め上げ鉄板野郎へ突撃する。奴は板を一枚俺との間に広げた。だが今の俺にはそんなもんは効かねえよ。四足歩行にチェンジし加速しながら真つ直ぐ板へ突っ込む。力を、光を、両腕に集め、放つ。

「アローン・デイナー孤高狼の晩餐」

両手の光が巨大化し右手と左手がまるで顎のように間の板を、そしてその後ろの鉄板野郎をまるごと呑み込んで行く。攻撃力とは縁が

無かった俺には考えられない攻撃だ。

そんな余韻に浸る余裕もなく鉄板野郎の死亡マーカーの確認だけ行い俺はポータルから現実へ戻った。

「小町！」

「うひゃあう!?!お、お兄ちゃん?どうしたの?」

現実に戻った俺が向かったのは当然小町の部屋。悪いがノックはなしだ。それでも能天気そうに俺の買ってきたプリンを口に含んでいる所をみると現実にブレイン・バーストの力が及ぶ事はなさそうで安心した。まあ当然っちゃ当然だよな。

「…よかった。悪かったな小町。俺が遅れたせいでポイント全損させちまって」

「?ポイント?なにそれ、新しいゲームの話?」

「は?」

「……ついさっきの事を覚えてないのか?うちの小町なら謝ったら『許してあげるからなんか頂戴』くらい言ってくるはずだ。それをまるで知らないかのように……」

「……おい小町、ブレイン・バーストって知ってるよな?」

「なにそれ?」

その日俺は、一つの絆と一つの思い出を同時に失った。

そしてこれにより俺と小町のレギオン、《ロスト・ネメシス》を作る
事になるのだが、それはまた別のお話。

そして彼は新しい道を歩み出す

……あー、久しぶりに思い出しちゃった。確かあの時からだっけな。今までより一層他人との関わり合いに敏感になったのは。疑心暗鬼になって触れず触らず、そのくせ他人の繋がりに目は光らせ、それが偽物だとわかった時に……恐怖を抱くようになったのは。

人とうまく関わるには自分を騙し、相手を騙し、相手も騙されることを承諾し、自分も相手に騙されることを承認する。まるで裏切りを容認しているようなシステムだと再確認した。

……俺には無理だ。自分が心から楽しかったと思ったものを否定されるのは、俺には耐えられない。それをされたのが騙しあつてすらない家族だったから尚更だ。

別に小町は悪くない。悪いのは俺だ。あんな手紙に期待を持って、今までの時間に希望を持ったから、勝手に後悔して絶望している。

……だから、俺はぼっちでいい。ぼっちがいい。ぼっちでいれば他人に期待をしないし、期待もされない。自分は騙せないから裏切られる事もない。

だから、俺はこれからもぼっちで居続ける。俺が俺であるために。……なんか今のかっこいいな。別にぼっちで困る事もないしな。精々移動教室の時置いてかれた時くらいだ。

「八幡。さつきからなにをブツブツ独り言を言っている。こちらの話は終わった。ハルユキ君に戦い方を教えてくれないか?」

そういやそれが目的で対戦挑まれたんだっけ?しかし対戦を挑まれる事自体が久しぶりすぎて対戦の仕方なんて殆ど覚えてないんだがなあ。

「あー、取り敢えず自分の名前のとこ押してみろ」

「あ、はい。……えーと、通常技がパンチとキック。必殺技は頭突きしかないんですけど……」

「……諦めよう」

「やっぱり僕には無理ですよね…、あはは」

「馬鹿者、そう簡単に諦めるな。必殺技は大した事なくとも、それを補う強さが必ず何処かにある。というかウルフはそれを知っているだろう」

「…まあ確かに、『同レベル同ポテンシヤル』なんて言われてるからシルバー・クロウにもなんかあるんだろうが…：銀の特徴ってなんかあったっけ?」

「切斷、熱、貫通、毒攻撃に強く、打撃、腐食に弱い。常識だぞ」

出た黒ユキペディア。いやブラック・ユキペディアの方がデュエルアバターっぽいかな? 通常技が検索で必殺技が知識披露とか。ないかな、ないね。

「…：実は有田が空手の達人だったなんてことは」

「…：それだったら荒谷達にいじめられてませんよ」

ですよー。実際期待はしてない。俺は他人に期待はしないからな。当然された事もない。だが頼まれた事は最後までやる。これぼつちの信条ね、自分には嘘をつかない。つてことで、

「…：んじやま、いっちょ教えてやるよ。比企谷流戦闘術を」

☆☆☆

時は放課後加速世界。またもまたもや世紀末ステージで今朝の再戦をするために《シルバー・クロウ》と《アッシュ・ローラー》は対戦を始めた。現在クロウは歩道橋の上に身を潜めている。

俺が教えたのはなんて事はない、俺の三種の神器『逃げる、隠れる、不意をつく』の一つ、『不意をつく』だ。アッシュのバイクはとにかくうるさい。よって場所も距離も大体分かるから不意をつきやすい。でも歩道橋って微妙に高いよね。クロウと付くくらいだから高い所は得意なのか?

ついでに俺と黒雪は建物の上に座っている。クロウから見ると月がバツクになつてカツコいいかも。あ、俺見えないや

そんな事を考えているとクロウがアツシユに超必殺・飛び蹴りを食らわせた。見た感じクリティカルヒット。アツシユをバイクの上から吹き飛ばした。

まず作戦その1は成功。そのままクロウはバイクの方に向かつて行く。そして跨り、ここからは見えないがカチカチ動かすと、ブルンブルン！とバイクから排気ガスと共に爆音が響き出した

「え、えと……いやっほおおおおい!!」

「俺様のバイクウウウ!!」

アツシユに突っ込んで行くクロウ。

俺の作戦その2、『武器がないなら相手のを使えばいいじゃない』作戦。ブレイン・バーストでは所有権は得られないが相手のを強化外装を使う事ができる。だから相手が腰とかにつけている銃や剣を奪つて敵を傷つける事も可能だ。ソースは俺。昔やってさらに対戦相手を滅らした経験トラウマがある。

「うりやあああ!」

「ノオオオオオオ!」

紙一重で躲したアツシユ。それに追撃をかけるためクロウがドリフトし……バイクから吹っ飛んだ。すっかりハンドルを握っていないかったのか俺は二回目のカラスの飛ぶ瞬間を目にする。周りのギヤラリーからも爆笑が起きていた。

「勝手に事故つてくれるたあ、俺様メガラツキー!行くぜカラス野郎、俺様が本当のバイク捌きつてもんを身を持って経験させてやるぜえ!!」

バイクをふかし今度はアツシユがクロウに向けて突っ込んで行く。こうなったら仕方がないので作戦その3に入ろう。

作戦その3とは……逃げるんだよお!!先人も『逃げるが勝ち』『三十六計逃げるに如かず』とありがたいお言葉を残している。しかも今は逃げられれば勝てる状態。つまり今逃げる事はマラソンランナーがゴールに走るのと同じくらい当然だ。

「ハルユキ君も随分と奮闘しているじゃないか。これは教える人の腕がよかったおかげかな？」

試合中に視線を此方に向ける事なく黒雪が話し始める。それだけ確認してから俺も視線を元に戻し応対する。

「そんなんじゃないよ。不意打ちも逃走もお前は考えついてただろ」「そうだな。だが相手の強化外装を使うなんて発想はなかなか思いつかなかったよ」

「その結果はアレだがな」

状況は丁度クロウが頭突きを失敗して轢かれたところだ。場所は建物の屋上。地上じや逃げきれないと踏んだのか屋上まで逃げたはいいものの相手が壁面走行なんぞしてきてからはずっと一方的だ。

あいつレベルアップしやがったな。まだクロウのHPは半分以上残ってるがライフ的には負けている状態にある。同レベル同ポテンシャルの法則に則れば完全初心者の有田には荷が重いだらう。

「そうかな？ 私には彼がこれから何かを見せてくれる気がするよ」

黒雪の言葉にクロウを注視するも、相変わらずバイクを避け続けている。ここから何かするのは…

「お？」

「そら見ろ」

クロウが最小の動きで避け、バイクの後ろに捕まった。しかしそれでバイクを止められる筈もなく尻尾のように振り回されている。

「…加速世界にガス切れてあったか？」

「ないんじゃないか？」

「ならあいつは何を狙ってた？」

「それを今から彼が見せてくれるさ」

振られていた両足を地面につけ、スピードの低下を狙ったのか足で滑っているようだがバイクは全く止まらない。それどころか摩擦ダメージでクロウのHPがガンガン減っていく。そして残り一割を切ろうとしたところで…バイクが急停止した。

「なん……だと……」

「よくやった、シルバー・クロウ」

視線の先では後輪が浮き上がりバイクの上と下で言い争っている二人のバーストリンカー。言い争っているだけだが妙に仲が良さげに見えるから不思議だ。そして最後にクロウの必殺技の頭突きがアツシユのHPを削り取った。

……：「そういや小町もよく観戦者や対戦相手と仲良くしてたっけ。俺は話しかけられる度に相手がビクツと身体を震わせてくるからずっと黙ってたがな。虚しいような懐かしいような。」

「おい、終わったぞ」

「おう」

「さあ、私達も戻ろう。今日の主役がお待ちかねだぞ？」

「そうだな。んじゃ黒雪、」

俺そろそろ降りるわ」

そして、彼は彼女らと出会う

「俺、そろそろ降りるわ」

「な、なにを…」

黒雪が何かを言い始める前に加速が解かれた。目の前には既に世紀末ステージの面影はなく、俺達は一般生徒の入り混じる梅郷中学の校門に戻ってきていた。

「はち…」

「おつかれ。ほれ、かあちゃんからお小言だ」

「か、かあつ?! いいいや、僕と黒雪姫先輩はそんなんじや…つてお小言ですか!？」

「い、いやそんな事は言わないぞ?! ナイスガッツだったよ。正直負けたかと思つたが、君の粘り勝ちだな」

「いやあ、僕もダメかと思いましたがよ。それにアイツレベル2になつてて……」

後ろでは有田が今日の出来事を話したがる小学生のように戦った感想、感情を告げている。

これでいい。子は親を頼るものだ。どこの馬の骨とも分からない奴に指導だなんだとやらせるもんじやない。ブレイン・バーストは親に愛情を受けなかった子供達が大多数を占めている。つまりこのゲームの親とは第二の親と呼んで過言ではないだろう。

だから邪魔者は早いうちに消えておくべきだ。人間という生き物は目の前に虫がいればはたき落とさずにはいられないし、目の前に小石が鎮座していれば思わず蹴つてしまうこともあるだろう。

それほどもだに『邪魔者』というのは人間の意識を奪う。その邪魔が俺のような人間なら尚更だ。ぼっちは人に迷惑をかけないように生きているので、俺が迷惑をかけたなら本末転倒だ。

さらに言うならば、そろそろ潮時だったんだ。ぼっちの俺が副会長の黒雪と一緒にいること自体間違いだ。ぼっちはぼっちらしく振る

舞うことを強要され、リア充はリア充としての振る舞いを強要される。つまりこれはただ元に戻るだけ。明日からは俺は再びクラスメイトHだ。もう食堂で注目されることも、クラスで目立つこともない。そう考えると足取りが少し軽くなった気がした。

☆☆☆

自宅。それは帰るべき場所であり、休むべき場所であり、遊ぶべき場所である。普通の家ならば飯は出てくるし、風呂もトイレもある。ゲームに小説、漫画やテレビと利点をあげればキリがない。その中でも自室というのは絶対不可侵の領域であり、プライベートの塊でもある筈だ。俺にATフィールドが張れるなら真っ先に自室に張るだろう。俺は常に自分に張ってるがな。

だが今、俺の目の前で絶対不可侵の領域が侵されている。下手人は三人。そのうち一人は見覚えがある奴だ。その一人とは…

「んで、なんでお前がここにいるわけ？」

「かったいこと言わないでよお兄ちゃん！可愛い可愛い妹が可愛い妹の友達を連れてきてあげたっていうのに」

俺の妹の小町である。というか今重要なことだから二回言ったのに友達には一回しか言いませんでしたね。この妙にちやつかりしたところが妹らしいというか、愛嬌があるというか。やっぱ妹は最強ってのはつきり分かんだね。

…いやいや、妹の可愛さに誤魔化されるところだった。なんで俺の部屋にいるんだよ。自分の部屋があるだろうが。それとも友達に俺を紹介した後部屋でネタにするとか？お兄ちゃん泣いちゃうよ？

「すみません。勝手にお部屋借りちゃって…」

「こんにちはー。わー、本当に小町ちゃんの言ってたとおり目が腐ってるんですねー。あ、私は一色（いっしき）いろはっていいですよ！小町ちゃんと同級生でーす！」

「あ、ごめんなさい。えっと、お兄ちゃん？私は上月由仁子（こうづき

ゆにこ)です。小町ちゃんというはちゃんの一つ下で五年生です」

「あー！ユニちゃんそれは小町のお兄ちゃんだよ！この比企谷小町の目が黒いうちは実妹の座は渡さないからね！」

そのままの流れで三人で話し始めてしまった。さすが俺。空気になることに関しては右に出るものは居ないな。

……ふむ、女三人が集まれば姦しいというがほんと喧しいな。控えめに喋ってる上月を見習いなさい。一色とやらは小町と同じくらい喧しいからちよつとお黙りなさい。というか顔合わせは済んだんだから小町の部屋に戻れよ。まだ録つてあるプリキュアみないといけないんだからさあ。

しかし願いは届かず小町が今度は俺の紹介を始めた。

「紹介し忘れてたー。小町のお兄ちゃんの比企谷八幡でーす！」

紹介終わり。短っ！なんと名前だけで終了。自己PRしろと言われても出来ないから別にいいけどさ。それでも何かあるでしょ。かつこいいお兄ちゃんとかイケてるお兄ちゃんとか友達いないお兄ちゃんとか。最後はいらぬいな。

それにそんな説明されても困るでしょ。ほら一色なんて興味なさそうに携帯弄ってるし、上月に至っては俺の呼び方考えちゃってるよ。…フツ、俺は今日二人目の天使を見つけてしまったようだ。天使と書いてエンジェルと読み、上月と書いてエンジェルと読む。小町？マイエンジェルですよ？

「……顔合わせも終わったし自分の部屋に戻れ」

「えー、可愛い可愛い妹を追い出すなんてお兄ちゃんポイント低いよ。ま、いつか。いろはちゃんもニコちゃんも行くこー！」

「はいはい。じゃあ失礼しました！えーと、……先輩！」

「おう」

「お邪魔しました。ごめんねお兄ちゃん。勝手に入って」

「気に済んな。上月だったら大歓迎だ。いつでも来い。むしろ毎日来い」

「ふえっ!？」

「私への先輩の対応がニコちゃんと違い過ぎませんか!？」

「気のせいだろ。ほら、いったいっただろ」

「むー。納得行きませんけどー。まあ今回は見逃してあげましょう」
「え、えと。じゃあまたね！」

手をフリフリしながら小町の部屋に入って行く上月を見守る。今日は間違いなく良い日だな。ぼつちに戻ったし、天使とも知り合ったし。今日はまさに吉日ってやつだな。よし、嫌な事がある前に寝るに限る。

ニューロリンカーを外し、俺は布団を頭から被りそのまま目を閉じた。

なーんてな。んな訳無いだろ。

ガバツと布団を取っ払い、再びニューロリンカーを首に巻きつけた。俺じゃなければそのまま本当に眠りについたかもしれない。だがな、俺は違う。良い事があった後にはかならず悪い事が起こるのが世の常だと俺は知っている。小学校の頃のラブレターの事も、小町の事も、俺は無駄にするつもりはない。小町とずっと楽しく遊べると思っていた時、一寸先は闇だった。小町の全損の後は一難去ってまた一難とばかりにブレインバーストの記憶や思い出が奪われた。二度ある事は三度あるというのなら、三度目の正直もまた闇だ。仏の顔も三度なら俺の顔が三度以上もつ筈もない。訓練されたぼつちは同じ手には引つかからない。百戦錬磨の強者なのだ。負ける事に関しては俺が最強。負けてそれを次に生かす天才だ。あんま人類舐めんなよ。クーロン力奪うぞ？

「さて……バーストリンク」

すぐさまマッチングリストを調べる。小五、小六なら十分バーストリンカーの可能性はある。だがマッチングリストに写ったのは俺の想像以上の奴だった。

『Clear・Wolf

Scarlet・Rain

Chestnut・Needle』

「スカレット・レインにチェスナッツ・ニードル。……二人ともかよーいやいや、つかスカレット・レインって二代目赤の王じゃねえか」
なんつーもんをウチにあげてるんだよウチの妹は。いや待て。つまり……つまりだ。上月もバーストリンカーかよちくしよおおお!!いや泣いてない。泣いてないよ。俺を泣かせたら大したもんつすよ。やっぱ俺には小町しか居ないって再確認出来たしな。一色？知らない子ですね。

ガチャ

俺が再び布団に包まり悶えていると誰かが入ってきたようだ。両親は居ない筈だから小町だな。丁度よかった。お兄ちゃん小町が恋しくなった所だよ。もう小町成分ないと生きていけないかもしれない。ここはもう一気に補充させて頂くしかないな。

「小町ー！」

「きやあむぐう」

布団に巻き込むように小町を引っ張り込み抱え込むと、抱きしめながら頭を撫でる。ここは日頃の感謝を込めて一心不乱に愛でよう。

「やっぱりお兄ちゃんにはお前しか居ないよ。俺が間違ってた、他の子にうつつを抜かすなんて。お前というものがありながら。こんなお兄ちゃんを許してくれ」

撫でる、撫でる、抱きしめる。まずは三セットいってみようか。その後……

「え、えーと。小町ちゃんのお兄ちゃん、大丈夫？」

……………待て。落ち着け。クールになるんだ。俺が見ているの

は幻覚さ。マジックが注射器に見えるのと同じ原理だよ。だからほら、見てごらん。腕の中にいる赤い髪が……

「こ、上月……さん」

「あ、あの、いきなり激しいのはちよつと……」

赤面してる顔。暴れたからか少し汗ばんだ服。上目遣いでこちらを見つめてくる上月。この（社会的に）死にそうな状況を突破するには……

「警察は勘弁してください」

そう、土下座だ。いやむしろ土下座以外ないな。土下座以外ありえんのですぞwww。現実逃避してる暇はないな。取り敢えずコマンド『ようすをみる』を発動する！

まだ上月は俺がクリア・ウルフだと分かっているはずだ。ならば謝り倒せばなんとかか……

チラツと上を見ると……ごつつ悪い顔しとるやん。

「へー、こいつはいいな。手間が省けた。ねえお兄ちゃん。私さ、ちよーつと頼みたい事があるんだけどなー。いいよね……クリア・ウルフさん？」

前半の口調がなんか壊れてる。あれが素なんてことないよね？そうだったら俺そろそろ女性不信に陥るよ？既に人間不信だけど。

……しかしこの状況は断れそうにないな。断ったら（社会的に）死ぬし。

「……分かった。要件を話せ、スカーレット・レイン」

故人曰く、『押してダメなら諦める』。諦めることなら得意分野だ。諦める事を諦める事も得意。最終的に諦める事を諦める事まである。そんなんで俺は大人しく目の前のちびっ子に従うことにした。

とにかく訂正だけしとこう。やっぱ今日厄日だわ。

波乱の昨日、混乱の今日

家族水入らず、という言葉がある。

家族とは最も身近で最も遠慮せずに最も楽でいられるコミュニケーションだ。なんせ生まれた時にはそのコミュニティに既に入っている状態という特典付きなのだから対人スキルの乏しいぼっちにも優しい設計はまさに神の作りし至高のシステムと呼べるだろう。他にも誰かから『どこからどこまでが家族か定義してもらえるかしら?』なんて言われる事もない。友達なんかよりよっぽど分かりやすく信頼できるつてもんだ。

嗚呼、迷惑をかけ迷惑をかけられ、助けられ助け合う家族の心はなんと美しいことか。

結論を言おう。

「家族水入らずとか言って息子を置いて旅行にいった俺の両親は心が醜い」

「あんた家族に家族扱いされてねえんじゃねえの?」

いやそれはない。ないと信じたい。……ない、よな?なんで後半になるにつれて不安になるんだよ。だけど母ちゃんの『学校あんだから行きなさい』ってどう考えてもおかしいと思う。だって小町も学校じゃん!小学校と中学校に休みの違う日はこここのところありませんでしたよ?

いや小町はいい。小町は可愛いから旅行に連れて行ったのもなら問題はない。問題があるのはあのクソ親父だ。小町を溺愛するあまり俺を目の敵にするのは分かるが、旅行に行く前にここぞとばかりにドヤ顔するのはやめて欲しい。うっかり殴りそうになった。家族のよしみでやらないけど。代わりに冷蔵庫のビールの炭酸でも抜いてやろうかと考えたが、それをやると母ちゃんが怖いのでそれも却

下。とりま水扱いされたので親父のコーラを水で薄める作業を決行した。

「まあ家の奴等がいけない方が私は都合がいいけどなー。よかったじゃねえか。家族が出払ったおかげで私は寢床が確保出来て、私のお願ひも聞けて一石二鳥だろ？ね、おにーちゃん」

「…へーへー、そつすね」

まあ未来の事は今度考えるところとして今は今の事を考えよう。前述の通り家族三人は旅行に出かけ、残っているのは俺と目の前で俺の漫画を読んでいる上月由仁子ことスカーレット・レイン。ブレイン・バーストのレギオンマスターでレベル9のバースト・リンカー、二代目赤の王だ。初代の赤の王の話は諸事情で今回は割愛させてもらう。

まあそんな事はどうでもいいんだよ。この表では天使の笑みを浮かべつつ裏では墮天使の如き性格をしている小学生様は、俺の悪事（勘違い）を黙認する対価として数日の寢床を要求してきたのだ。

なんでも、『寮長のババアと喧嘩した』とのこと。元々反りが合わなかつたらしく二三日は帰らないと豪語して飛び出たはいいが、行く宛があるわけでもなく公園で黄昏て居たところを小町に拉致られたらしい。

……うん、色々突っ込みたいところがあるんだけど。まずついさつき友達になつたばかりっていうのがビククリだわ。流星は俺の可愛い妹小町ちゃん。どうやら俺と小町にはコミュ力で圧倒的な差があるようだ。知ってたけど。小町のコミュ力を言い表すと『……くっ、コミュ力6万……10万……馬鹿な、まだあがるだ?!』って感じ。…え、俺？『コミュ力たったの5か、ゴミめ』。5もねーよバーカ。

「おいウルフ、目がスゲー勢いで腐ってきてるけど大丈夫か？」

「…うるせえ、目が腐ってるのは元からだ。っーかお前他の王にリアルバレした事についてはいいのかわ？」

「……………あー、お前も王だったっけ」

『は？何言ってるのこいつ』みたいな顔やめて欲しい。素で忘れられてたつて一瞬で分かるからな。最近ではソーンの奴が毎回毎回俺が話すたびにビクツとするから話が振られない限り沈黙を保つ事にし

てる。その結果誰も俺に話を振らないので存在を認知されていない事がある。

…なるほど、そう考えると仕方が無い気がしてきた。

「まああんたが何かしない限りは私は何かする気はねえよ。ここで警察に突き出して寝床無くしても困るしな。次は問答無用だけど」

「だから勘違いだつて言ったろ。小町だと思つたんだよ」

なんせ俺の部屋にズカズカ入つてこれるのは小町くらいだからな。まさか俺のBT^{ボッチ}フィールドを破つたのが上月だったとは驚きだ。こいつの正体が実は使徒なんじゃないかと錯覚しそうになる。墮天使だったけど。

「…随分妹を可愛がつてんじゃねえか。もしかしてチエスナッツ・ニードルつて小町か？」

「残念ながら外れだ。小町はバーストリンカーじゃねえよ」

「およよ、んじやいろはか。てかお前レベル9だろ？私が言うのもなんだけどよ、子とか作らねえわけ？」

……恐らくその言葉は単純な疑問を口にしただけなのだろう。ただタイムリングが悪かった。丁度今日思い出してしまった記憶を、トラウマ第一号と呼べる追憶を、再び思い起こしてしまう。無力な自分を、残酷な世界を、性根の腐ったPK集団達を。

そして、一人しかいないレギオンを守り続けている自分の女々しさを改めて突きつけられた気がした。

「……………俺には子も親もいねえよ」

「…ふーん。あ、そ」

口から出た言葉が自分の思っていたよりも冷たく聞こえた気がしたが、それを察してくれたのかそれ以上上月は喋るのを辞めた。

そこから先は特に特筆すべき点はなかった。俺が適当に作った飯を食い、部屋からラブプラスを発掘されてバカにされ、スマブラでボコられバカにされ、プリキュアをバカにされサドンデスルールを忘れて対戦しかけたくらいだ。

いやープリキュアの時はマジでやばかった。ボッチのガンジーを自称する俺も抵抗しかけるとは。『警察』の二文字で瞬殺されたけど

な！

まあ一概につまらないと言うほどの一夜ではなかったのは認めよう。あそこまで騒いだのは小町以外だと初めてだったしな。

……だからあまりにも不意打ちだった。次の日の放課後に黒雪が車に跳ねられたと聞いた時は。

☆☆☆☆

河北総合病院へと足を向けた俺を出迎えたのは今にも死にそうな顔をした有田だった。目元に涙を溜め、こちらと向き合いつつもチラチラと手術室の方に目を向けているところを見ればこいつが黒雪を相当心配してるのが分かる。

……なんだよ、すっかり親子やってんじゃんか。

「あー、それで黒雪の容体……は分かるわけないか。一応事の経緯だけ教えてもらってもいいか？」

「……はい」

小さく返事をする有田はポツポツと話し始めた。昨日俺と別れてから有田の幼馴染と黒雪が衝突したこと、黒雪が何者かにリアル割れて幾度か襲撃されていたこと、そして……有田と黒雪が喧嘩していたところに突っ込んできた荒谷から黒雪がレベル9のみに許されたコマンド、所持ポイントの99%を失う『フィジカル・フル・バースト』で有田を自分を犠牲に助けたこと。

……こんな時、俺はどう言えばいいのか分からない。そもそも俺と黒雪の関係ってなんだ？

友達？ いや違う。リアルを知っていても俺と黒雪は友達なんて言うほど関わりはない。せいぜい知り合いつてところだろう。

なら仲間？ それも違う。おなじゲームをやっているもレギオンは別。言わば敵同士だ。

だったら……なんだ？ 俺と黒雪の関係って。知り合いのお見舞いってだけならわざわざ事情を効く必要もない。敵同士ならそもお

見舞いに來ることもないだろう。

「……………比企谷先輩」

どこか決意を固めたような目で俺を見据える有田が沈黙を破った。今までオドオドしてる姿ばかりだったから少しばかり新鮮である。

「お見舞いありがとうございます。僕が黒雪姫先輩が起きるまで待つてるので安心してください」

「…お前の話だと黒雪のポイントはレッドラインなんだろう？しかも襲撃者もいるらしいし。なら俺もここで…」

「大丈夫です」

今度は話を遮られた。

「大丈夫です。僕は……………まだブレインバーストを始めてたった数日、ほんのちよつとしか経ってないのに黒雪姫先輩に沢山の物を貰いました。なのに今日……………僕は……………」

後半になるにつれ声は小さくなっていく。自責の念に駆られているのか視線も下がり、体そのものまで小さくなっていくような錯覚を覚える。

「……………だから、僕は絶対に黒雪姫先輩を守ってみせます！たとえ何があつて、誰が來たとしても」

「……………前に俺が言った言葉、覚えてるか？ポイントが0になった瞬間ブレインバーストとその全ての記憶を忘れるってやつ」

「……………もちろんです」

「お前と黒雪が知り合ったのはブレインバーストがあつたからだ。その記憶を忘れるって事の意味……………分かつてるよな？」

そう、それはつまり『黒雪と有田の関わり全ての記憶』が消える事と同意だ。それと同時に黒雪と有田の繋がり全てが消える事となる。現在では元とはいえイジメられっ子の有田とトップカーズである黒雪。別世界の人間を周囲は決して認めない。唯一の例外があるとするれば、それはトップ自身がその存在を認めた場合のみそれが許される。トップ以下の人間は最終決定をトップに任せ、それに従う事はあれど逆らう事は決してないからだ。

だが黒雪の記憶が消えた場合、その例外も共に消える。トップの周

りにトップが許可しない生物がまとわり付くのを周囲は認可しない。それどころか確実に排除に走るだろう。

その意味を有田が理解していかないはずがない。上位の存在の慈悲は許されても、下位の執着はありえない。それは……下位の人間の方が強く意識するからだ、自分の立ち位置を。あるべき場所を。

長い沈黙の後、有田ら再び俺の目を見据えた。

「……………はい」

…その全てを受け入れ、その全てを背負うと言うならば……俺にここでやる事はない。大人しく退散しよう。有田の親ではないが、バーストリンカーとして親子の絆を信じ切っている俺だ。少しくらい黒雪の子を信じてみようと思っただけだ。

「そうか。なら、俺は帰る。家に喧しい居候を待たせてるんでな」

「…ありがとうございます」

「……………おう」

病院の外に出るまで見送ってくれた有田を一瞥し俺は大人しく帰路につく。振り返る事はしない。ぼっちはぼっち故に自分の意見を絶対に曲げない。だからさっきの選択が間違っていないと、俺だけは俺を信じてやらなければならぬのだ。

「あー、まだ上月の奴家にいるんだよな」

独り言を呟きつつも歩を進めていく。うーん、正直あいつのテンションに付き合う元気が今日はねえしな。飯も適当にしてから……そうだ。

久しぶりにあいつの所に行ってみるか。

ニューロリンカーを操作し一通のメールを送る。ゆっくり過ぎしたい時の加速世界内のベストプレイスへの言伝をメールに載せ、俺は残りの家路を辿った。

休息と安息

「アンリミテッド・バースト」

家に帰り上月を適当にあしらった俺は、自室に戻りコマンドを唱えた。行き先はブレイン・バーストの上位世界、レベル4以上からしかいく事の出来ない無制限中立フィールドだ。殿堂入りしないと会えないミュウツウの洞窟とかレックウザの塔みたいな所。古いか。

行き先は旧東京タワー。杉並区から渋谷区を越えた港区の奥にそびえ立つ高い壁がそれだ。距離が結構あるのだがそこは『ウルフ』と名がつく俺のアバター。走る事なら負けはしない。

某タイトルに走らされる人と違い姿も見えないしご乱心の王様の邪魔も入らないので、セリヌンティウス役のあいつの元へ行くのにも弊害はない。フィロストラトスもないしな。

しかし着いたら着いたで問題がある。先程旧東京タワーと言ったが、真の行き先はこの頂上。上を見上げると腰が痛くなりそうな程の高さを誇り、フィールドの属性によって壁が姿を変える厄介な柱は悉く侵入者を拒んでいる。

現在の属性は焦土ステージ。地形が脆く生物もいなければオブジェクトを壊しても必殺技ゲージすらたまらない煤けたステージだ。旧東京タワーも例に漏れずまるで火に焼け焦がされたかのように炭化して、巨人に祈られまくった嘆きの壁のようだ。

「さて、登るか」

ここで一つ言っておくと俺のアバターは平面走行は得意だが壁面走行は苦手だ。つーか無理。なのでいつも裏技を使う。右見て左見てもう一回右を見る。アッシュ・ローラーやスカーレット・レインみたいな乗り物アバターの気配なし！他にも後ろ見て上見て誰もいない事を確認した。

普段なら見えないし気づかれないしでこちらも気にもしないのだが、これからやる事は見られるとちよつと事なのだ。

旧東京タワーの麓に付き体制を整える。発動するのは必殺技でもなければ通常技でもない。ブレイン・バーストの裏技、インカーネイト心意システ

ム。心意システムとは事象を感情や心の力、イメージ力を制御し
事象の上書きをする事だ。厨二心を擲るシステムだが、心意の乱用は
心の闇に呑まれる可能性がある」とオリジネーター他多数が反対し、現
在では『心意で攻撃されない限り、心意で対応してはならない』とレ
ギオン全てで決定されている。不可侵条約に入れてもらえない俺で
すら承諾させられたと言えば事の大きさが分かるだろうか？まあ
カードや記憶もよく書き換えたりするからよくあるっちゃーよくあ
る事だな。

それはともかく俺は心意システムを発動する。黒い過剰光が身を
包み、今ならなんでも出来る気がする全能感が溢れ出す。それと同時
に駆け出す。一気に数十メートルを駆け上がり、炭と化した旧東京タ
ワーを登って行く。

「よつと」

数十秒で頂上に到着した。旧東京タワーは無制限中立フィールド
では円柱状になっており、天辺は平らになっている。そしてここでは
下でどんな属性のステージになっていようとも、変わる事なく緑の草
木と緑の屋根の家が存在している。

そう、ここは加速世界のホームだ。ブレイン・バーストではめっ
ちや高いバーストポイントと引き換えに加速世界に家を買う事が出
来る。といつても俺の家じゃない。この家は何度も言ってきた『あい
つ』の家なんだ。

緑の屋根の家にノックする。すると中からキュルキュルという緩
い音がして扉を開けられ：

「こんにちは。久しぶりね、狼さん」

この家の持ち主、スカイ・レイカーが現れた。

☆☆☆

レイカーに迎え入れてもらった俺はテーブルで向かい合いお茶会

もどきをしていた。

「本当に久しぶりですね、狼さん。現実世界だと……一ヶ月ぶりくらいでしょうか？」

「あー、そういやそうだった。リアルが充実し過ぎて忘れてたわー」

いやーほんと充実してたわー。家では小町。学校で一人、稀に黒雪。昼休みに黒雪に絡まれる事を除けば満点だったな。そこが最大の減点だが。

「……そうですか。楽しそうで何よりです」

……何故か部屋の室温が下がった気がした。特に背筋のあたりが。加速世界なのに風邪か？いや、加速世界での感覚は二倍に強化されているはずだ。つまり現実世界の俺が風邪になっている可能性が高い。もしや上月の仕業か？最近はやりの構ってちゃんか？だが無意味だ。俺が構ってやるのは小町だけだからな！

いやまあそれはいいとして、なんかレイカーの視線が冷たい。もしや俺が来たのが迷惑だとか、一ヶ月前にも来たくせにまた来やがったのか、的な意見を主張されてるとしたら八幡立ち直れない！

「……いや、あのさレイカーさん？前にも、というか何回か言ってると思うが別に俺が来るからってわざわざ迎えて貰わなくても大丈夫ですよ？ここには何度も来てるんで困る事もないんですが……」

俺は緑の庭からフィールドを見渡すのが好きなんだ。独りで広大な世界と対面する妄想とステージの属性ごとに違う風景を見渡すのが趣味になりかけているくらいだ。なので独りでも大丈夫……どころかむしろ独りがいいのだが、レイカーの要望でここに来るなら連絡しろと言いつけられたのだ。

リアルでこそ会っていないがメルアドを押し付けられたので毎回連絡はしているのだが……正直必要性があるように思えない。俺が連絡し、今のようにお茶会をした後レイカーと並んでフィールドを眺めて飯食って帰る。これが俺とレイカーの基本的な関係だ。

……うん、やっぱ必要性ないよな？

「狼さん」

再び底冷えするような声が響く。目元だけ見るなら笑ってる。レ

イカーは口も鼻もないから目元でしか判断出来ないがまあ笑っている。

「言いたい事は、それだけですか？」

怖い！レイカーさん怖いよ！笑っているのに怒っているのがわかるデスマイル辞めてくれませんか？いやほんとこええよ。あと怖い。

「ひゃ、いや、あの、なんでもないっす、はい」

「そうですか、では今日はゆっくりしていつてくださいなね」

今度こそ普通の笑いを見せてくれた。やっぱり何事も普通が一番。完璧超人の生徒会長や負完全の副会長よりも普通で普通な庶務が一番だよな。途中から普通じゃなくなっただけ。あ、ついでに一番好きなキャラは球磨川先輩です。

「そういえば……」

無心で妄想の世界に入り浸っていると、何かを思い出したようにレイカーが口を開いた。今度はどんな言葉で俺のSAN値を削つてくるのかと思わず身構える。

「私、最近子が出来たんですよ。誰かさんが一ヶ月も来ていただけなかったせいで言うのが遅れましたが」

「……へえ。レイカーに捕まるなんてそいつも運の悪いこつて」

「なにか？」

「にや、なんでもないっす」

……ふむ、子か。黒雪もそうだったが最近ハイレベルプレイヤーの子作りが流行ってるのか？iPS細胞の波が加速世界にも到来しているとか。

加速世界にもビッチ化の波が！実はアバターにもiPS細胞が埋め込まれているという今明かされる驚愕の真実ウウウ！そんなオカルトありません！

「なにか？」

本日二回目のデスマイルいただきましたー。すみません、ノーセンキューで。

顔どころか顔色すら分からない筈なのに心の中を覗いてくるレイカーさんまじさとり。もしくは俺のさとられ説。べー、超やべーわ。

「……………まあいいでしょう。元々こんな事が話したかった訳ではありません。誰かさんが一ヶ月も来ていただけなかつたせいではありかつた事がたくさんあるんですよ」

本日二回目のマジスマイル。いやほんと、アバターなのにうつかり惚れそうになるから辞めて欲しい。そしてそのまま告白して振られるところまでいってしまいそう。振られちゃうのかよ。

…しかしまあ？こんな嬉しそうに言われてるのに断るのも悪いし？少しくらい雑談に応じてやってもいいかな。それに…ほらあれだ、煉獄ステージ見ても気が滅入りそうだし？変遷が起きるまでだったら別にいいかなって、ハチマンはハチマンは思ってみたり。

そう結論をつけ入れてもらった紅茶に口をつける。

うん、甘い。

そこからは適当な会話が八割を占めた。ロータスが子を作った話。小町の魅力を延々と聞かせたりとかもした。その流れでレイカーの子の話も聞いた。

…アツシユ・ローラーだというのは意外だったが。というか話している間のレイカーの生暖かい視線がやけに気になった。千葉の兄妹なら妹の話が八割を占めるよな？な？

そして時は流れ遂に訪れた変遷が加速世界全てを覆いつくした後、俺とレイカーは共に外にでた。

「氷雪ステージですか。待った甲斐がありましたね」

ミルク色の空に分厚い氷で出来たオブジェ達。煉獄ステージと比べりや天と地だ。それに荒れ狂う吹雪の中で自分だけが特等席にいるという優越感は何者にも捨てがたいものがある。

それに加えて俺はこの旧東京タワーの上で感じる風が好きだ。氷雪ステージのように冷たい風が吹き付けるのも、煉獄ステージのモワツとした風が吹き付けるのもその場で変わっている世界で、自分だけは変わらずにいる事実には酔いしれたりする。

「はい、狼さん」

いつも通り旧東京タワーの端っこに腰を下ろした俺にレイカーが手を差し伸べてきた。

……いつもやる事ではあるが、とてつもなく気恥ずかしい。

だが既に慣れきったイベントなので、俺は差し伸べられた手に自分の手をおいた。

「色彩模倣」

俺のコマンドと同時に、俺の身体の色が空色に変わる。

これは俺の初期アビリティで他人の色、特性を写し取る事ができる。しかし俺は声を高々にして言いたい。

これ、なんの意味があんの？

色が貰えても強化外装が写し取れるわけでも、ましてや必殺技を写し取れるわけでもない。完全に色だけ。あと一応その色の特徴も。だったら無色のほうが強いんじゃないんですかねえ？

「ふふ、お揃いですね」

……頬をかき目を逸らす。まあ心意の黒色を纏ってるよりは目に良いので問題はないが、やはり慣れないものがある。ボツチにはお揃いとかペアアルツクとかは無縁のものだからな。

そうこうしているうちにレイカーが俺のすぐ隣に腰掛けてきた。これも毎度思うけど近いよ。肩と肩が触れ合いそうなレベル。ボツチのパーソナルスペース侵略してますよね。

「さて、景色を見ながらお話を続けましょうか。例えば……今日きた本当の理由とか」

……俺はレイカーには敵わない。何度も思うが、改めてそう思った。

無謀と勇気

俺とレイカーは視線を合わせずじつと旧東京タワーから見える景色を眺めていた。とある事情で膝から下がなくなっているレイカーも、わざわざ車椅子から降りて隣に座っている。めちやくちや座り辛そうに見えるが本人は大丈夫らしいので気にはしてない。

「話してくれませんか？ 今日ここに来た本当の理由を」

肩が触れ合いそうな程の距離からレイカーが優しい声で問いかける。元々ここに来たのはレイカーと黒雪がリアルでの知り合いで、唯一連絡先を知っているので報告しようと思ってきたのだ。八割くらいゆつくりしたかったからだけど。

「……黒雪。いや、ロータスが交通事故にあった。集中治療室に運ばれて意識が戻らない状態だったよ。しかもタイミングの悪い事に……」

「さっちゃんか!？」

弾かれたように此方を向くレイカー。って近い！近い！アバターでも男子に不用意に近づいちゃ行けないって教わらなかったの？勘違いしちゃうでしょ！俺が！だから近い！

「お、おい落ちつけ。お前が慌てても何も変わらないぞ」

「…すみません。取り乱しました」

ようやく離れてくれて一息つけた。この慌てようだと黒雪に襲撃仕掛けてる奴が居る事は言わない方が良い気がしてきた。俺のHP的に。幸いにもさっきのセリフは途中までしか聞かれてなさそうだしな。

「それで、タイミングが悪いというのは？」

「……………しつかり聞かれていたでござる。大丈夫かな、俺。ここから突き落とされる未来が見える気がするけど問題ない？ いや俺悪くないよな？」

「…あいつの子が言うにはここ何ヶ月かロータスがレベル4のバーストリンカーに襲撃を受けてるんだと。マッチングリストに現れないというおまけ付きでな。で、だ。あいつは事もあるうに学園ローカルネットで使うアバターで決闘を受けちゃったらしい」

「……ということは、敵にリアルが…」

「そういうこった。敵にリアルが割れてる以上、このチャンスを相手が逃す筈がない」

「なら今さっっちゃ…ロータスは無防備って事に」

「あー、今ロータスにはあいつの子がずつついてるから大丈夫だつて」

「……その人のレベルは？」

「………1」

「病院に行つてきます」

「待て待て！俺にも考えがあるんだよ！」

いくら俺でもレベル1の有田が完璧にどうこう出来るとは思ってない。信じはしよう。しかし、それでなにもしないかどうかは別物だ。

「いいか？敵はバーストリンカーである以上中学生以下だ。もしも対戦を挑んで来るとしたら学校前の早朝、最悪授業時間くらいだ。深夜に来る可能性は限りなく低い。無いと言つてもいい。だから俺達の仕事は早朝からだ。まずは襲撃者、もしくはあいつに対戦を挑ませる。そっからはひたすら泥試合だ。俺とあいつ、もしくはお前も来るならロータス含めた5人でひたすら対戦。こっちは3であっちは1。やり続けりや相当疲労がたまる。人海戦術つてやつだ。で、そうなつたらこっちのもん。病院のネットワークからそいつの名前が消えた時……」

ニヤアと音がしそうな笑いを浮かべる。そこまできればもう詰み。

「病院から出た奴が襲撃者、『シアン・パイル』だ」

数の暴力、物量作戦。本来向こうがやってくるはずの戦術を此方がやってやる。嫌われ者にとってアウェイはホームだ。ルールも決まりも縛りもない。好き勝手やるのに文句は言わせねえ。

「…………やはり、貴方は凄いですね」

黙って聞いていたレイカーが口から称賛の言葉を出した。

だが褒められた作戦でないことは確かだ。これはあいつ、有田の覚悟を踏み躪る、もしくは利用するのと変わらない。対戦で俺とレイカーが負ける事は多分ないだろう。だからレベル1の有田はただ相手の体力を削る捨て駒役だ。レベル4がレベル1を倒してもそこまで得はない。そんな打算で俺はあいつの思いを潰そうとしている。

それで悪意をぶつけられるだろう。起きた黒雪からも敬遠されるかもしれない。それでも今重要なのは黒雪のポイント全損を防ぐ事だ。こんな不確定で失敗するかもしれない作戦を偉そうに語っているのも虚勢である部分が高い。綺麗な方法で勝てないなら、無茶苦茶にしてやった方が俺らしい。

「…まあそういう事だから安心しとけ。敵が使ってるバックドアだけは踏み台にされてる奴が病院に来なけりや使えない。だから今度こそ本人が来る。だから後は…」

「狼さん」

…大人しく待ってろ。と言おうとしたがまた遮られた。最近話を遮られる事が良くあるけど流行ってるんだろうか。流行りには疎いもんで。

しかしノリでレイカーも来るかと聞いたが女性にリアルばれは怖いだろう。なんせ俺も怖いからな。黒雪にばれた時も夜寝れなかったくらいだ。

「私にもお手伝いさせてくださいね。ロータスは私にとって大事な友達ですから」

…ピシツとした声で言われてしまえば俺にはもうどうする事も出来ない。自由意志は尊重すべきだと思うしな。

…あれ？それって結局俺もリアルバレするのか。うわ、会いたくねえ。治療室の前で二人も男子中学生がいれば嫌でもバレるだろうし。女性との出会いは黒歴史の始まりだって名言を知らないのか。今作っただけ。

「…なら一っただけ条件がある」

「条件、ですか？」

「ああ。一番始めの戦いだけはロータスの子のシルバー・クロウに任せてやってくれ」

「…シルバー・クロウ。しかしなぜ？貴方の話し通りなら彼のレベルは1、襲撃者は4。同レベル同ポテンシャルの法則に従うなら無謀とは言いませんが、勇気があるとも言い難いと思えますが…」

「あー、なんていうか。あいつの覚悟を聞いたから、かな。それと…：今お前が言ったのが理由だな」

「？私がおかしいましたか？」

「無謀と勇気って奴だ。レイカー、お前は無謀と勇気の違いってなんだと思う？」

「無謀と勇気ですか。また難しい問題ですね」

たびたび使われる『無謀と勇気は違う』という言葉。俺はこの言葉が嫌いだ。『勇気』は物事を恐れない強い心を持った奴。『無謀』は後先考えないただのバカ。まあ多少の違いはあれどだいたいこんな見解だろう。

では勇気と無謀の違いは何か？

それは行動を起こす奴の元々の評価だ。例えばイケメンリア充が成功率50%の行動を起こしたとする。それが成功しようが失敗しようがそれは勇気があると周りに褒め称えられる事だろう。

だがそこいらのボッチが成功率10%の行動を起こした場合はどうだ？やる前から無理だ無謀だと嘲られ、成功すればまぐれだ偶然だと軽んじられ、失敗すればやはり当然と嘲笑われる。イケメンより40%分多くの勇気を出したというのに周囲の奴らはそれを見もしない。

そのくせ日本一怖いお化け屋敷だとかジェットコースターだとか大した危険もない事に勇気という言葉を使い内輪で盛り上がり、一世一代の告白は皆で誤魔化しながら勇気という鎧を纏いたただの逃走経路に作り変える。「俺は勇気を出した」と周りに触れ回り、「勇気を出したのだから仕方ない」と周りに慰めて欲しいだけだ。

あいつらは一人で奮い立たせる勇気を知らない。誤魔化しようが

ないのに、一人だからこそ誤魔化せてしまう勇気を外に出す事を知らない。誰も知らないから、誰にも言っていないから、自分の心の中だけだから、きつと成功しないから、そんなふうに分かれない中にも積み重なった想いを弾き出す事を知らない。逃げ道を用意出来ない恐怖と戦いながら、後の事を想像しながらどうにか絞り出したモノを、『無謀』だと理解していてなお引き摺り出した力を本物の『勇気』と呼ぶんじゃないか？

だったら有田が出したモノは本物の『勇気』だ。俺という身代わりが、責任を押し付け悪意を背負わせられる存在が居たにも関わらずあいつは俺を追い払った。黒雪を守る存在が自分しかいない事をわかっていながら、黒雪を守り通す事が『無謀』だと分かっているながら、逃げ道なんてないと分かっているながら、あいつは黒雪を守る事を選んだ。

知っているんだ。大切な人が消えそうになる恐怖と実際に消えてしまった悲しみを。その恐怖から絞り出した『勇気』の大きさを、俺は知っている。

ガムシヤラになったとしても、6人もいたあの場所に突っ込むのは怖かった。小町と共に俺も全損の危機にさらされるんじゃないかと身震いがした。なまじ残っていた理性が悪い想像を幻視させてきた。だがそれ以上の勇気を出した自信が俺にはある。無謀だなんて上等だ。バカの代名詞くらい好きだけ背負ってやる。大事な奴を守るための扉を通るためなら軽いもんだ。

そしてあいつはたった一つの前に進むドアをこじ開けた。だったら後は有田次第だ。そこから先はただの純然なる興味。先が気になるアニメのように、ただ結果が知りたいだけ。

だから未だに考え続けているレイカーに言っただけだ。

「ただ俺は、あいつが『無謀』は『勇気』だって証明してくれるかもなっと思ってただけだよ」

やはり女性との出会いは黒歴史の始まりである

「……………そろそろか」

レイカーとの会合を済ませた翌日、俺はファーストフード店の前で待機していた。

レイカーに「どうせなら一緒に行きましょうか」という「おい、デュエルしろよ」レベルで気安く誘われたのが原因だ。もちろん俺は反対したよ？昨日レイカーにリアル割れの危険とお互いへの影響を思いつく限りの言葉で説明したのだが、結局三回目のデスマイルで論破された。論どころか一言も発さずに論破するレイカーさんマジばねえっす。苗木君もビックリだ。

「ごめんなさい。待ちましたか？」

聞いた事のある声が俺の耳に届いた。ただし現実では聞いた事はない。加速世界でのみよく聞いていた声だ。

「おはようございます。狼さん、ですよね？」

現れた人物に俺は身体が固まった。そこに居たのは絶世の美女とって過言でないほどの女性がいたからだ。容姿の良さもさることながら、制服を完璧に着こなし、スカートが絶対領域を作り出しているという素晴らしさ。

その上胸に膨らむ二つの山は黒雪とは比較にならないくらいでかい。視線が顔↓胸↓足↓顔の無限ループの永久機関。今の俺は他人に見られたら完全に不審者だ。目だけでいつも不審者扱いだけど。

「あ、リアルでは初めましてですね。倉崎楓子、中学三年生です。お名前、教えていただいてもいいですか？」

え、なんだって？なんて難聴系主人公の裏技は一对一の状況では使えない。ならばここは発音をしっかりと第一印象をよくしなければ。通報されたら困るし。

「ひぎやぎや……………」

……………はい、終わったー。もうさすがと言わざるを得ない。言ったら

？女性との出会いは黒歴史の始まりだって。一日先の未来をこうもあつさり予言できるとかノストラダムスもビックリだよ。

やつぱり歴史は繰り返すもんなんだ。戦争だって常に繰り返されてきたんだから今更俺の黒歴史が繰り返されたって大した問題じゃない。そう思わないとやってられないや。

「……比企谷八幡。中学二年……です」

名前と学年だけ言って倉崎……先輩から目を逸らした。今の心情を一言で表すと『帰りたいたい』。もしくは逃げたい。あつたかい小町が待っているお家に帰りたいよう。あ、ダメだ。今小町いねえじゃん。喧しい上月しかいなかったわ。

集合時間から病院が開くまで三十分程。結局立ち話もなんだから目の前のファーストフード店で時を潰すことになった。

しかし気まずい。朝だから客は比較的少ないが店員からの「え？なんでこいつ？」みたいな視線が痛かった。その後の「こいつよりも俺とかどつすか？」みたいに店員がチラチラ倉崎先輩を見ていたが、完全にスルーされていたのが違う意味で痛かった。ざまあ。

それも席に着いた時には消えたが、今度は美人の先輩との一騎打ち。ふええ……八幡のライフがなくなっちゃうよお。

「少しお話ししましょうか。何か軽いモノでも入りますか？お姉さん奢っちゃいますよ」

「……いえ、自分の分は払えるんで大丈夫です」

「……あつちとは結構印象が違いますね。別に敬語を取っちゃってもいいんですよ」

「……あー、いえ、大丈夫です」

お、おかしい。加速世界だったらいつも普通に話せてるのに全然対応出来ない。というか倉崎先輩も様子がおかしい。頬が紅くなってきたりするし目が……なんというか、獲物を見るようなモノに変わっている。

前者だけなら「あれ？この人俺のこと好きなんじゃ」とか勘違いして振られるところだが、その目だけでそんな勘違いが吹き飛んでしまっている。

そんなことを考えていたら俺の右手が倉崎先輩の両手に捕獲された。ヤバイ、喰われる！

「比企谷さん、私は加速世界のように貴方と気ままに話せる関係が好きなんです。現実で初めて会った相手に難しいかもしれないかもしれませんが、どうか今まで通りに接していただけませんか？」

「……………え？この人今なんて言った？確か『……………貴方……………が好きなんです……………』って言ったよな？惚れてまうやろー！とはならない。いや、当たり前だけどね。そこまで耳は腐ってないし。」

それにやっぱモンスターを狙うハンターみたいな目をしてるのが怖い。常にニコニコしてる人ってなに考えてるか分からなくて超怖いよな。他にもギャーギャー騒いでる奴とか喋らないで本読んでる奴とかも何考えてるか分からなくて怖い。なんだみんな怖いじゃん。

「……………ああ、鍛えてみたい」

「え？」

「今まで通りに接していただけませんか？」

いま艶めかしい声が聞こえた気がしたけど気のせいかな？しかも倉崎先輩リピートしてるし。え、スルーで？アツハイ。

しかし仮にも先輩である人に普通に接するってかなり緊張する。こいつ調子乗ってる的な意味で。

だけど、なんかどうでもいい気がしてきた。どうせこの人との関わりは今日で終了。リアルで会うことなんて滅多にないだろうし見たとしてもスルーすればいい。会うとしても加速世界の中だけなんだから気にする必要もないだろう。

「……………分かったよ。倉崎先輩」

「んーまあいいです。気が向いたら楓子お姉ちゃんとも呼んでください」

…もしやもしやとは思ったがなんだこの溢れ出すビツチ臭。天然ゆるほわだと思ったら養殖ゆるほわだった感じ。世界には小学生低学年なのに高学年の奴を顎で使える養殖ゆるほわもいるしな。

つーかそのせいで久々にクソ親父の教えを思い出しちまったじゃねーか。親父曰く、『美人を見たら美人局を疑え(体験談)』。まだ小学

生の頃に聞かされた言葉だ。小学生相手に何考えてんだと思うが意外的を射ているから困る。無駄に年食ってるなよ親父。

「うふふふふ」

……………怖い。

☆☆☆

結局地獄の三十分は終始倉崎先輩のペースで終わった。SAN値がゴリゴリ削られフラフラしながら店を出て病院へ向かった。

へんだなーおかしいなー黒雪を守る戦いのはずなのに怖いお姉さんと話しかけてないぞー。…はあ、マジ疲れた。会話一つでここまで疲れるのにリア充は毎日よくあれだけ喋っていられるもんだ。そういうスキルあるしリア充はきつと社畜の才能があるんだろう。ならば社畜の才能がない俺はやっぱ専業主夫をやるしかないよな！

「……………つと、ここだな」

「……………に、さっちゃんが」

先程までのおちやらけた雰囲気を消し、真剣な顔で倉崎先輩は病院を見つめる。タイミング的にはピッタリだったらしく数秒前まで反応しなかった自動ドアがゆっくりと開いていく。そして歩を進めた俺と倉崎先輩は病院のグローバルネットワークに接続し、親の仇を見るような目で病院の入口を睨みつけている有田に近づいた。有田の目の下には隈が黒々と浮かび上がり目はまるでゾンビのようだ。ちよつとシンパシーを感じる。

「よう。その様子だとまだシアン・パイルは来てないみたいだな」

「……………比企谷先輩、後ろの方は？」

あいさつを返すことなく後ろの倉崎先輩に目を向ける。まあ仕方ないか。有田にはどこのどいつか知らない奴がこんな緊迫状態の時に現れたんだから警戒するのは当然だ。誰だってそうする。俺だってそうする。

「……俺のゲームの知り合いだよ。名前は……」

「倉崎楓子です。お名前を教えてくださいませんか？」

「……………有田春雪です」

「有田さんですね。よろしくお願いします」

一つ礼をすると倉崎先輩は有田の対面に座り、有田は再び病院の入口を睨みつけ始めた。俺も座るとこの一角を沈黙が支配した。

……………沈黙が落ち着くとか俺はもう人としてダメなのかもしれない。倉崎先輩もふざける気配はないし有田は必死だから会話をする余裕もない。不謹慎かもしれないが今この時が今日一番ゆつたりできてるな。

そしてどれくらいの時間が経った頃か、不意に有田が立ち上がった。異常ありか？と思いい入口を見るとイケメンがいる。チツ。

コホン、どうやら有田の知り合いのようだ。手だけで有田に『待て』のサインを出すと病院のネットワークに接続するため入口付近で虚空を操作し始めた。

……………違和感がある。見たところ制服は確か新宿あたりの学校のものだ。隣の区とはいえ、普通こんな朝早くから知り合いの知り合いが入院した程度で病院に見舞いに来るだろうか。答えは否である。

人間とは友人が怪我をしたとしても放課後の帰りにのついでによつたり、クラスで『○○のお見舞いこうぜー』的なノリでもないと見舞いになど来ない。たとえ来たとしても間違はなく放課後だ。病院が学校の通り道だったとしても時間のない朝にくる事はない。

しかしあのイケメンは朝のクソ忙しい時に現れた。それも自分に関わり合いも重要性もない人間に対してだ。そこから導き出される答え。それは…………

あいつが襲撃者、シアン・パイルだってことだ。

顔は覚えた。もしもあいつがシアン・パイルじゃないならそれでもいい。また次の候補が来るまで待てばいいだけだ。しかし可能性は限りなく高いだろう。

なんせ他人の悪意を感じる事だけは超一流の俺がそう感じるのだから。あのイケメンの有田を見る目は友人を相手にした奴の目じゃない。笑みで上手く隠しているがああな感情は嫌悪だ。俺がサッカーの組み分けの時に毎回受けている視線だからすぐに分かった。サッカー部の田中君、毎回『うわ、こいつかよ』みたいな視線やめて欲しい。気づかないふりするの大変なんだぞ。

「バーストリンカー！」

俺がいつも以上に目を腐らせていると、有田が加速コマンドを叫んだ。それと同時に、俺はクリア・ウルフになり観戦状態になる。場所は病院ではない建物の上だ。隣にはレイカーもいるのでまあまあ気が利いている。

そして対戦する二人の名は『シルバー・クロウ』と『シアン・パイル』。どうやら有田の割り込みは成功したようだ。

「……さて、『無謀』と『勇気』。お前はどっちだ？」

ガコン、と音を立て1800の数字が1799を刻んだ。

『勇気』を出した『無謀』なカラスの三十分が始まる。

良好な暗雲

ステージは煉獄。蟲が湧いてて気持ち悪く、天気も淀んでいてどことなく気持ち悪く、建物も気持ち悪いステージだ。

そんな気持ち悪いステージで対戦が始まったのだが、問題とも言えない問題が発生した。

……見えねえ

有田達がいた場所が病院の中だったせいか外で観戦してる俺達には二人の姿が全く見えないでいた。始まった時にカツコつめた俺がバカみたいじゃん。

対戦者が見えない事もあり視線は違う所へ向かった。俺達から少し離れた場所には何人もの観戦者、バーストリンカーが同じようにシルバー・クロウとシアン・パイルの対戦を眺めていた。

病院の中にこんな多数のバーストリンカーが居るとも思えないので、恐らくはシアン・パイルがグローバル接続して観戦者を呼んだんだろう。

……つまり今回の対戦はシアン・パイルのアップールのようなものだったらしい。病院の中が見えない事をいい事に、黒雪をボコリ最後の最後だけ観客に見せて自分の価値を見せつける、といったところか。そんでその後はポイントの独り占め、と。随分あのイケメンはずる賢いらしい。汚いなさすがイケメンきたない。

しばらくただ音と体力ゲージの減りだけを見ていたが、ようやくエレベーターらしきもので左腕を失ったシルバー・クロウが屋上に上がってきた。

いやはやさすが有田、エンターテイメントのなんたるかが分かってるな。イケメンとは違うのだよイケメンとは。……なぜだろう、これだと有田をバカにしているように聞こえる。

ま、まあそれはさておきイケメンことシアン・パイルも屋上に登っ

てきた。そこからは結構普通の対戦で、シルバー・クロウの拳が熱い想いと言葉と共に何度もシアン・パイルに突き刺さった。

しかし悲しいかな、ここでレベルの差、カラーの差というのが顕著に現れた。シアン・パイルはほぼ純色の青、つまり近接型であり力強さと硬さに定評がある。その逆にシルバー・クロウはメタルカラーだが硬さがなく相手の体力を一気に減らすことが出来ない。そこにレベル差が加われれば、もはや岩タイプに体当たりを続けるくらいの結果にしかならないのは自明の理。ただひたすら殴り続けるしかないのだ。

……………そんなもって、この世界でそれは最大の悪手だ。

『スプラッシュ・ステインガー!!』

シアン・パイルが叫んだのは必殺技コマンド。殴り殴られ溜まりに溜まった必殺技ゲージを消費して発動する対戦の華。シアン・パイルの胸部から尖った複数の物体がモロにシルバー・クロウの身体に突き刺さった。車に轢かれたような勢いで吹き飛ばされ、盛り上がった地面に激突する。ガツンと削られる体力。グツタリとした姿からは再現された激痛でマヒしていることが伺えた。

「……………カラスさん、大丈夫でしようか?」

「さあな。失敗した時の俺達だ。気軽に見ればいいだろ」

「……………しかし…」

「元々あいつみたいに初期アバターに目立った特徴がない奴は時間をかけてポテンシャルを開花させてくタイプだ。それを二三日でどうにかしろっていう方が無茶な話なんだよ」

「…なら狼さんが昨日言っていたのは?」

「それはそのままの意味だ。開花するのが今日かもって思ったんだが……………」

視線の先にはシアン・パイルの右手についたどデカイ杭の下敷きにされているシルバー・クロウ。しかもさっきの拍子に右足も取れてしまっている。動くことも逃げる事もできず今にもトドメを刺されそ

うになっている。

ようするに、今回の賭けは俺の負けだ。ディーラーも対戦相手もない一人ギャンブルだが。『あーあ、また勝てなかった』というやつだ。自分にすら勝てない俺は負完全を超えてるのかもしれない。

「……それも無理っぽいな」

『スパイラル・グラビティ・ドライバー!!!』

腕の後ろを噴射口のように使い、右手でシルバー・クロウごと病院の屋上から最下層まで貫いた。ほんの僅かだけ体力ゲージが残ったがレベル、経験、必殺技の練度、相性を考えてここからの逆転はありえないだろう。

てか対戦前は友達っぽい雰囲気出してたのに始まってからは親の仇と言わんばかりに戦っている。あれが俗に言う『青春』ってやつなら、やはり俺は青春も友達もいららないな。

「……さて、終わったらすぐ加速だ。しつかり備えとかねえと」

「……なにも」

「あ?」

「なにも、言わないんですね」

「……勝った奴にかける言葉だったら沢山あるんだがな。『よくやった』『努力の成果だ』『お前ならやれると信じていたよ』。なんでもいい。」

「だけど、負けた奴にかける言葉つてのを、俺は知らないんだよ」

『よくやった』『おしかったよ』『次があるって』。どれもこれも声を掛ける側は何も考えずに言う言葉だ。心配、同様の感情を隠しもせず突きつけてくる。その感情が相手にとってはそのただの責苦に変わるというのに。

勝手に期待して、勝手に裏切られて、そして勝手に相手を失望する。だが『優しくするくらいならいっそ思い切り責めて欲しかった』だなんていうのは『優しくされた奴だけの』現実逃避だ。責められて嬉しく思う奴なんていない。同情よりも気が楽になる事なんてない。結

局、仲間だと思っていた奴に糾弾されて絶望に浸るだけだ。

だから俺は何も言わない。何を言われても自分を責める事になるのなら、初めから考える事は少ない方がいい。期待して失望することも、期待されて失望されることも俺は嫌いだ。

だが失敗したとしても、有田には『次』がある。その次を作るのが今回の俺の役目だ。

期待も失望もしないから、逃げる事も負ける事も責めないから、せめて折れることだけはしないでくれ。そうでなければ、いくらなんでも黒雪が報われない。『子』を守りきった『親』を裏切る事はしないでくれ。

『見てくれたかな、特に青のレギオンのみんな！僕はまだまだ戦えます。ちよつとポイントを使い過ぎたからって、捨てるには惜しいはずだ！でしょ!?!』

シアン・パイルの演説を聞き流しながら残り時間を見る。残りとはあと五分程。それだけ確かめ、改めて自分の敵であるアバターを見据えた。デカイ図体でノロそうだが、右手の杭が危なっかしい。しかし自分にはなんの問題もないだろう。なんせこれから戦うのは黒雪を生き残らせる為の作戦だ。そしてそれを成功しうる手札を俺は持っている。心配すんな、俺なら勝てる！

じつとシアン・パイルを見続け、そのまま残り時間が三分を切った瞬間、突如として対戦フィールドに光の柱が立ち上った。

発生地点はシルバー・クロウが最下層まで叩きつけられた時に空いた巨大な穴だ。その柱は光で軌跡を残したままさらに急上昇。減速する事なくどんよりした雲に突っ込み、雲を散らした。

そんな事をしでかしてくれた下手人は雲に隠れて見えないが、それが誰なのかはすぐにわかった。シルバー・クロウの必殺技ゲージが少しずつ減っている。

つまり……つまりだ。あいつの、シルバー・クロウのアビリティは……。

「完全……飛行型……アベリテイ」

言葉を発したのは俺ではなく隣のレイカーだった。さらにそれを証明するかのように雲の上から舞い降りたシルバー・クロウは翼を広げ、まるで世界全てを見下ろすかのような佇まいで空中で完全に停止してみせた。

左腕はなく、右足だって取れている。身体に至ってはどこもボロボロだ。それなのに背中に光り輝く銀翼が観戦者の視線を独り占めして離さない。

それは俺も同じだった。今の状態を言葉で表すのは難しい。すげえと言いたいのには言葉は出ないし、それよりも空を飛んでいる姿を見たい気持ちがあった。

俺は今日、加速世界に入って、初めて空に憧れたのかもしれない。手が届くと思えない高さを自由に羽ばたく光景を俺は当然忘れられないだろう。それ程までにその光景は衝撃的だった。

「空を……飛んでいる……」

…それでも俺は周りのバーストリンカーより冷静だったのだろう。なんせ隣にスカイ・レイカーがいたのだから。

スカイ…空の名を冠しながら、空の彼方を渴望しながら、それでも空を飛べなかった少女。この情景を見てレイカーが何を考えたのかは分からない。

レイカーも言ってしまうえば失敗した人間だ。心意の力を空を飛ぶ事に注ぎ込み、遂には脚さえも飛ぶ為に斬り落とした狂人。そこまでも手に入れられなかった力を目にして、レイカーは何を思うのだろうか。嫉妬か、羨望か、更なる渴望か。それは分からない。

しかし今回の件はレイカーにとって明らかかなマイナスだ。レイカーの前で飛べるという前例を、『希望』を見せてしまった。

『希望』とは麻薬だ。『もしかしたら』『今度こそ』と思ってしまう。

レイカーの過去を僅かながら聞いた俺は知っている。『今度こそ』空を飛べるかもしれない。『もしかしたら』うまく飛べるかもしれない。そんな『希望』にいつだって裏切られてきたレイカーを、俺は知っている。いつだって期待して、いつも裏切られて、いつからか希望を

持つのは辞めた。そんな過去を生きてきたレイカーにもう一度希望を与えてしまった。

空を追い求めたこいつが今なにを思っているのか、それだけは、俺は聞くことが出来なかった。

☆☆☆

あの状態からシルバー・クロウはシアン・パイルに勝利した。いつの間にか起きていた黒雪はネガ・ネビュラスの復活を宣言した。

万事上手く行ったはずだった。有田は覚醒し、黒雪は全損することはなく、物語ならハッピーエンドだったろう。

それなのに胸の奥に蟠りが残る。

加速が終わってからは、有田にお疲れと一声かけて俺とレイカー……倉崎先輩はすぐに病院を出た。どちらも無言で言葉は発しない。かけるべき言葉が分からない俺に、喋ることは出来ないのだから。

「……………んじゃ、俺こっちだから」

居た堪れない空間を抜け出すが如く俺は倉崎先輩に別れを告げた。かなり長く感じたが今日は学校だしまだ早朝だ。サボる度胸もない俺はおとなしく学校に登校するのが吉だろう。

「……………狼さん」

離脱しようとした俺の背中に倉崎先輩のお声がかかった。心なしかいつもよりテンションが低い気がする。言わないけど。

「今日の夜、いつもの場所にいつもの時間に来てくれますか?」

「わかった」とだけ返し、振り返らずに学校に急いだ。なぜ振り返らなかったのは俺の中だけの永遠の謎になるかもしれない。

病院ではお静かに

ダラダラノロググツタリとしながら下校中の生徒達の間を歩いて行く。

あー疲れた。朝から人と喋る事なんて稀だから一日のエネルギー全てを使い果たした気分。その上授業中に寝ようと思っても倉崎先輩の声が耳から離れない。

よって疲労はあれども寝れはせず。朝に消耗した体力を回復する事も出来ず帰路につく事になった。

コミュニケーションで精神力を削られ、仕事によって体力を削られる。社畜の皆様は毎日こんな生活を送ってるのか。親父に感謝を送ったあとやはり専業主婦になるべきなんだと再認識した。専業主婦こそ勝ち組。超ヒモ王に俺はなる！

「……一応黒雪のここにも寄っとくか」

どうせ通り道のすぐ近くだしな。帰るルートを少しだけ変更し朝行ったばかりの病院に足を向ける。一度立ち止まり病院の大きさを確認した後に入りに入ろうとした時、足が止まった。

……なんで俺黒雪のお見舞いに行こうとしてるんだ？

いやいや、俺と黒雪の関係ってそんなんじゃないだろ。ブレインバーストについてちよつと話す現実では無関係（俺からは）っていうのが本来の俺と黒雪の距離じゃないか。

「クラスみんなであいつのお見舞いこうぜー」のみんなにすら入れてもらえない俺がお見舞いに行くのは正しいのだろうか？もちろん否である。

そもそも朝も思ったが俺が知り合いのお見舞いの時点でおかしいだろう。同じ考えが出るなんてもしかしたら今の俺は俺じゃないの

かも知れない。ヒツキー？誰それ。俺、ベクター。ちげえから、俺八幡だから。つーかヒツキーマジ誰だよ。

「…帰ろ」

黒雪の無事は確認されたし入院してるのだから今日だけじゃない。だったらお見舞いに行くのは有田だけでも問題ないだろう。催促されたら行こう程度の心構えでいいはずだ。

…レイカーにも呼ばれてんだよなあ。やっぱ帰るが正解だ。夜のためにとつと寝よう。

帰ってすぐ寝て夜起きて遊ぶ。遊ぶわけでもないけど、この行動がなんか中学生っぽくていいよな。そして明日一日が辛くて授業中に寝て先生に起こされるのもまさに中学生。今しか出来ない事をやるのは大切だよな。よし帰ろう。すぐ帰ろう。今すぐ帰ろ……

『ピコン♪』

踵を返した瞬間視界の端にメールを告げるアイコンと音が響いた。誰だ？思い当たるとしたら小町あたりだが。旅行先の自慢話とかありえる。だったら親父の可能性もある。小町とのツーショットでも撮ってきた日には、俺は小町を一日デートにでも連れて行かないと気が済まなくなる。むしろ帰ってきたら絶対連れてこう。結局上月のせいで小町成分補給してないし。これは最優先事項に決定だな。気分的に鼻歌でも歌い出しそんな雰囲気でもメールのマークを叩いた。

『差出人：黒雪姫』

本文：学校が終わったら私の病室によってくれ』

……なるほど、親父よりも面倒くさい奴が送ってきたらしい。しかも振り返ればすぐそこには目的地である病院が。上がったテンションはだだ下がりだ。この時間だと『ごつめーん☆寝てて気づかなかった』という手が使えない。しかも発達しすぎたニューロリン

カーのせいでメールそのものに気づかなかったという手も使えない。ぼっちには優しくない設計だ。

「…いくか」

☆☆☆

病院の中に入り受付の人に聞いた番号の病室の扉をノックする。

「どうぞ」

すぐに聞き覚えがある声が響き、扉が自動ドアのように開いた。中に入るとベッドから上半身を起こし、髪を三つ編みにした黒雪と有田がベッドのすぐ横の椅子に座っていた。

「よう。ほれ、土産」

「あ、ありがとう。相変わらずだな君は」

黒雪は俺の渡した土産を見て苦笑する。

なんだよ、美味いだろMAXコーヒー。俺のソウルドリンク舐めんだよ、B〇SSより絶対美味いぜ？さらにさらにBIG B〇SSより美味しい。BIG B〇SS食えないけど。

「じゃあ寄ったんで俺はこれで…」

「待ちたまえ。お土産欲しさに呼んだ訳がないだろう」

「なら早くしてくれ。お前が見舞客が来るだろうが」

「安心したまえ。友人達には今日は来ないように言い含めてある」

「…さすが手が早いっすね」

俺の知り合いの中でこいつほど手が早い奴もそういない。

なんせ、

仕事を片付ける手が早く、

男（有田）に対して手が早く、

俺に対して（精神的暴力の面で）手が早い。

ピッチピッチタッチの三拍子揃った副会長。さすがですお姫様！

「おい八幡。目を腐らせているところ悪いが、本題に入ってもいいか

？」

「お、おう」

ブルツと一瞬悪寒が走った。冷気の発生源は目の前のデスマイルを浮かべているお方。レイカーのデスマイルに勝るとも劣らないレベルの冷気を発している。なんせ笑顔を直接受けてない有田も影響を受けてるくらいだ。最近聞かなくなった温暖化を抑えてプチ氷河期起こせるレベル。どっちも迷惑には変わりないな。

「ハルユキ君から聞いたんだが…倉崎楓子なる人物と共に病院を訪れたらしいじゃないか。詳しく聞かせてもらおうか」

「倉崎？誰すか？朝も俺一人でしたよ。有田の見間違いですって。ほら寝不足だったし」

「そんな訳がないだろう。あとその気持ち悪い敬語をよせ。そもそもハルユキ君がその名を知っているはずがない」

「いや俺も連れてくる気はなかったんだよ。でも元メンバーだろ？一応マスターの危機を知らせといたんだよ」

「……ほんとあつさり手のひらを返すな」

ほんと連れてくる気どころかリアルで会う気もなかった。口は災いの元つてやつだ。お前も来るか？みたいな事を言ってしまったからあんなことになったんだ。ほんと過去は取り返しがつかない。

「ただ俺にもっとコミュ力があればリアルでもあれくらい気やすく誘えるのだろうか？きつとそうだったら不良みたいな奴に「愛してるぜ！」とか言えちゃうし、俺以外女子だけの部活に入っても平気で、しまいには生徒会長になる後輩の手伝いとかしちゃうかもしれない。なにそれちようリア充。そんな俺がいるなら変わって欲しいぜ。」

「はあ。まあフーコのことはいい。……まだ私には会う勇気が出てないからな」

「ならなんだよ。俺この後帰って寝ないといけないんだけど」

「うん。こう言っただけなんだが私は結構賢い方だと思っている」

「話変わりすぎだろ。いきなり過ぎてついていけないんだけど」

「会話しようぜ言葉のキャッチボール。俺が投げると誰も返してくれないんだよ。むしろ俺の投げた玉でそのまま他人とキャッチボ―

ルし始めるまでである。体育の時間とか。まあ投げる事自体が殆どないんですけどね！

「そして君も同じくらい知識、知恵が備わっていると確信している。偏った知識と悪知恵かもしれないがね」

「おうよく分かってんな。規制強化される前のアニメとかの話なら任せろ。便利な親父と名高いうちの親父のアカウントで自由自在だ」

元々小町が頭悪そうな雑紙が見たいっておねだりして親父のアカウントを家族皆が使えるようにしたんだが、結局小町が使ったのは数回だけで殆どは俺が使ってる現状。適当に調べて「ふむふむ、なるほどねー」と言う作業はすぐに飽きたらしい。そのおかげで数々の名作と出会えたから小町には感謝してる。一応親父にも。

しかし話題そらしも失敗したらしく黒雪は気にせず話を進めてきた。

「まあそんなわけで聞きたかったんだよ。今回の件で、八幡が何をしようとしていたかを」

「……………終わったことだから別になんでもいいだろ」

黒雪の言葉に一瞬詰まってしまう。やましい事を考えていたわけではない。レイカーに説明した事で殆どあつてる。

…途中までは、であるが。

「八幡の行動はあらかじめハルユキ君に聞いたよ。八幡が早朝に来た理由は分かっている。小中学生での襲撃は早朝と相場が決まっているから。ここまでは誰でもわかる事だ、それはいい」

「言葉を選べ黒雪。お前のすぐ隣に分かってなかった奴が居る事に気づくんのだ」

「あ、あはは」

すぐさま隣で肩を落とした有田のフォロワーに回る黒雪。一瞬で二人だけの世界に入ってしまった。なに、こいつら付き合ってるの？もしかしなくても有田ってリア充？……………爆発しないかなあ。

「ご、ごほん。えー、そう！朝の事はいい。問題は朝八幡が何をしようとしていたか、だ」

「二回目だな」

「うるさい。…それで、朝何をしようとしていた？」

「そりゃ様子見だろ。有田がどうなるか見届けたただけだ」

「嘘をつくな。お前がそんな大人しいわけがないだろう」

「お前クラスに居る時の俺を見ろよ。授業中も休み時間もめっちゃくちゃ大人しいからな。机に突っ伏して全く動かないぞ」

ミミズだってオケラだってアメンボだって生きてるのにあいつだけ死んでるって言われるくらい大人しい。クラス委員長なのに悪口推奨した田中君は絶対許さない。またいやがったな田中君。

「それは普段の八幡だろう。問題が起きた時、お前は異常な程動く。二年前の事、忘れたとは言わせないぞ」

「……………」

二年前。それは全ての、特に王と呼ばれるバーストリンカーにとって転機となった年だ。ほぼ同時にレベル9に到達した王達にレベル10になるためのルールが運営から通達された。そのルールとは『自分以外のレベル9プレイヤーを5人倒す事。ただし一度でも他のレベル9プレイヤーに敗れるとポイントが0になる』という鬼畜仕様。

そしてそれを受け入れられなかった王達がレギオン丸ごと停戦協定を結ぼうとしたのも二年前だ。それは黒雪が加速世界最大の犯罪者とされた事件でもある。

それは加速世界の人間なら誰でも知っている、停戦を特に進めていたレッド・ライダーの首を黒雪が斬り落とした事件だ。幸いにもそれ以上全損する奴は出なかったが、改めて王達にこのサドンデスルールの恐ろしさと身の危険を知らしめた事件だった。

ここで終わればまだ良かったのかもしれない。黒雪という加速世界の敵が現れた事で全レギオンが一致団結する事が出来た筈だ。

しかし、ここでさらに問題が生じた。

「そう……………私に続いてお前まで停戦を拒否したことだ」

二年前

「私に続いてお前まで停戦を拒否したことだ」

黒雪の言葉に俺は必死に目を泳がせた。まず黒雪が怖い。二年前がどうかより怖い。まさに蛇に呑み込まれたカエル、猫に食われたネズミだ。やられちゃってるし。

「いや、停戦協定を拒否したことはない。そんな個人の自由だし私だって反発したわけだしな。異常だったのはそのあとだ」

「…もういいだろ。こんな事で時間を潰すのは不毛過ぎだ」

半ば逃げるように目を逸らす。何が悲しくて怪我人と口論なんてせにやならん。しかも過去には様々なトラウマがあるのにそこを踏み抜かれたらたまらない。

「……………そうだな。ここではそんな話はするべきではないな」

「分かってくれたか。なら俺はこれで…」

「あつちの話をするならあつちに行くべきだったな」

……………ん？は？ちよつとま…………

「バーストリンクー」

そのコマンドと合わせて周りの世界が変わっていく。

フルダイブ用の紳士服のアバターの色がどんどん消えていき、最終的には無色透明になった。そして目の前にはシルバー・クロウとブラック・ロータスが向き合っている光景が目にはいる。

ドロウ申請をしたらしきクロウとロータス二人はすぐさま横に並んだ。その姿はまさに仲間とか友達みたいに軽い雰囲気を出している。実際そうなんだろう。

きつとここが小学校なら俺が加わった瞬間

「ヒキガヤ菌だー！」

「タッチー！」

「今バリアしてましたー」

「ヒキガヤ菌にバリアは効きませーん」

とか始まったんだろうなー。あー懐かしい。懐かし過ぎて殺意が出そうだわ。てかロータス達いつまで黙ってるんだ？ずっとキョロキョロしてるだけ……あ。

「ウルフ！どこだ！出て来い！」

「う、ウルフ先輩！何処ですか!？」

まだ俺の姿見えてないじゃん。普段のクラスメイトの対応と全く変わらなかったから気づかなかった。姿があってもなくても変わらない希薄な存在感であったとき。ちゃんちゃん。

というかこれならもう帰ってもよくね？ここにいるメリツトないし、むしろデメリツトの方が遥かに大きい。ここはとつとと退散を……

「出てこないなら今度学校で校内放送で食堂に呼び出すぞ！」

「よう、呼んだか？」

「ひっ！」

「…っ！そこにいたか」

メリツト？シャンプーかなにかですか？俺めっちゃシャンプー好きですよ。水かけると猫になるし可愛いし。

その反面二人の反応は酷いもんだ。クロウはビクツと肩を震わせ小さい悲鳴を上げたしロータスも多少なりとも驚いたようで声がうわずっている。呼んだロータスまでこの反応ってどういう事？

……しかしこの反応に慣れてきた自分が恐ろしい。加速世界でも現実世界でもこんな反応だから仕方ないか。

「ようやくゆっくり話せるな」

尖った両腕を器用に組み、話を戻すぞと前置きしてから黒雪は話し始めた。ついでに顔の向きが俺から30°くらいズレてる。しかし全く気づいていないようで真剣な声色を出し始めた。

「あの停戦は私達のような王達ではないバーストリンカーにとつては二つの側面があった。一つは他レギオンを好き勝手に倒す事が出来なくなる事によるレベル上昇への不安。

そしてもう一つは全損への危機が圧倒的に少なくなった安心感だ」
「レギオンは自分の居住地、もしくは行動範囲にあるところに入る事が多い。んで自分のレギオンの領地では対戦を拒否できる、だろ」
俺は領地が遠過ぎて無縁な話ですけど。

「そうだ。純粹な対戦をしたければどのレギオンも保有していない地域に行けばいいし、ただレベルアップしたいだけだったり全損の危機に陥ったならあまり好きではないが自分の領地で絶対倒せるレベルの相手を淡々と狩ればいい」

「もしくはオトモダチを誘って上でエネミー狩りをしてチマチマポイントを稼ぐとかな」

これもオトモダチ居ないし俺には無理な方法だな。ちよつと運営しつかりしてくれよ。レギオンの恩恵全く受けてない人がここに居ますよー。

「う、上？エネミー？なんですかそれ？」

唯一全く話についていけないクロウが困惑の声を上げる。こいつインストールしてからまだ一週間も経ってないんだよな。そこらへんも配慮して説明口調で話してただけど気づいてるのか？

「ああ、すまないクロウ。今度説明するから今は話半分で聞いていてくれ。一定レベル以上が行ける上位ステージだと考えてくれれば問題ない」

「は、はあ」

「まあとにかく、停戦によってそういう懸念事項も減っていったんだよ。停戦するという事は敵に警戒しすぎる必要がなくなる。それによってレギオン内部に目がいくようになった。

……と、思われてたんだ」

言葉に一区切り付けると、ロータスは威圧感溢れるオーラ（不可視）を放ち始めた。それに気圧され後退りをしてしまうと、ジャリつと音を立ててしまい今度こそ真っ直ぐにマスク越しに睨みつけられた。

「協定が結ばれてから直ぐ、加速世界で様々な噂が流れ始めた。曰く、『いきなり衝撃とダメージを喰らった』『レベル9が挑んできたと思ったらよく分からないうちに負けた』『催眠術とか超スピードとかそん

なチャチなもんじや断じてねえ、もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ』などだ」

「……………」

…突っ込んだら負け突っ込んだら負け突っ込んだら負け。すごいツツコミを入れたいがここはスルーだ。見ろ、クロウはなんかスゲーみたいにブーツとしてるしロータスも本気っぽいじゃないか。

だから、だから突っ込ませんな黒雪イイイ!!

「もちろん噂が広がれば広がる程正体は掴めてくる。しかもそいつはレベル9だし乱入する相手のレベルは常に6〜8、それも全勝。全レギオンの高レベルプレイヤーは気が気じゃなかったそうさ」

「え、でも自分の領地なら対戦を拒否できるんじゃない？」

「その通りだ。だがなハルキ君。それは『逃げ』なんだよ。高レベルプレイヤーというのはこのブレインバーストというゲームを勝ち抜いてきた猛者達だ。当然プライドがある。相手がレベル9、つまり自分達の王と同格であろうと逃げるわけにはいかなかったんだ。それどころか嬉々として立ち向かったそうだよ」

まあ気持ちは分かる。ゲームつてのは自分よりちよつと格上の相手をする方が楽しく感じるものだ。一撃で死ぬスライムよりは倒せるか倒せないかくらいのもスキャラ相手にした方が楽しいのと同じだ。

どっかの世界作り変えた魔神さんだって弱過ぎる相手にはストレス感じるらしいし。

「高レベルプレイヤーが浮足立てばその波を受けるのは低レベルプレイヤー達だ。そいつに注目し過ぎた結果、ノウハウを理解しきれなかったプレイヤー達の全損が相次いだそうだよ。漠然とした他レギオンという敵ではなく、明確な敵が現れた事による弊害でな。」

その上当時は丁度停戦協定と共に赤のレギオンは後継争いが勃発していたから皆がピリピリしていた時だ。外に目を向け中に目を向け、気づけば私の噂なんて片耳にも残らない程度になっていたよ」

人間というのは不思議なもので何かを信じる時は大概が目を見た時だ。百聞は一見に如かずという言葉の通り、自分が見たものは殆ど

信じる、ライト兄弟とかは別として。実際にロータスがライダーの首を落とした所は王達しか見ていないわけだから噂しか聞いていない奴らは『な、なんだってー』と一応のリアクションをとってその話は終わってしまうのだ。そんな噂に構うくらいなら目の前の噂、しかも目で見れ参加できる噂に食いつくのは当然の帰結だった。

それによって王達とその側近以外のメンバーには大きな隔たりが生まれる。それに加えて分かりやすい敵が現れたので遂には『黒の王』という存在を見ていない人間の方が多くなったんだ。

「その上どうタイミングを見計らったのか、何時の間にかその敵すらも消えていたのだから不思議だよ。始めは騒がれていたのに直ぐ様忘れられてしまった。存在そのものに心意……あのシステムが使われているのかと疑ってしまう程の消え方だった」

「……………」

「それでも一部の高レベルプレイヤーの間ではまことしやかに噂されてきたそうさだ。

協定どころかレギオンにすら人を寄せ付けず、色を纏わなくともその名に恥じない凄まじい狩りを見せつけ、対戦中の咆哮は正に『王』であつたとな」。

「……………」

「それは認識不能、インビジブル、ライトハンター、光速狩獣という二つ名を持ち、レベル9でありどこから聞きつけたのかレギオンマスターである事もわかったことから、最も親しまれる形でこう呼ばれていた」

『無色の孤王』

空気が止まった気がした。ロータスの演説のような話し方と相なつてか、余計な言葉が出ないでいた。もうクロウも分かっているだろう。元々の話から脱線しているようで脱線していない二年前の話。

……そう、先程から話に上がっている二年前のブレインバーストを

しつちやかめつちやかにした犯人とは…

「クリア・ウルフ。八幡、お前の事だ」

二人の白

突然だが過去の話をしよう。俺が東京全体に喧嘩を吹っかけまくったきつかけの出来事についてだ。

今から二年前、八王会議が開催される数日前の夜、俺はレベル9に上がったテンションを抑えるために無制限中立フィールドにエネミー狩りに来ていた。

狙いは巨獣級ビーストか野獣級ワイルド。俺がソロで倒せるのは巨獣級までだ。しかし攻撃力の問題で倒すのにかなり時間がかかるので一番の狙い目は野獣級である。しかも現在は魔都ステージ、俺では周囲を破壊出来ないので必殺技ゲージを溜められない。これは初めの相手を選ばなければいけないかもしれない。

とは言っても特に決まった相手を探す気はなかったもので、巨大な鳥型エネミーに乗ってアナザーしたり、恐竜型エネミーに乗ってドラえもんしたり、ゴリラ型エネミーに乗ってデーデーコングしたりしなからフィールドを駆け回っていた。

そんな事をしながら数時間、本日狩ったエネミー数、0。乗っただけで愛着が湧いて結局倒せないでいた。人間は嫌いだが動物は嫌いじゃない。まああれだ、今日のところは見逃してやる！俺の機嫌がよくてよかつたな！

「さて次は猫型エネミーでも探しに……げっ」

「げ、なんて酷いなあウルフ君」

「こんばんわ無色の王」

気分一転心機一転と駆け出そうとした時、横からかけられた声で冷や汗が流れた。

俺の横に立ちほだかるのは二人のデュエルアバター。加速世界なら俺でも『もうなにも怖くない！』みたいな感じになるけど、この人達相手には無理。絶対に無理！

一人は俺と同じレベルで白の王と呼ばれてる『ホワイト・コスモス』。『オシラトリ・ユニヴァース』のレギオンマスターだ。

全身真っ白で、ゴツゴツに装飾された王座みたいなのに座っている。その上には白い球体、さらにその上にはワープゾーンでも発生しそうな輪っかが浮かんでいた。

普段の俺とこの人は関わりがまったくいいほどない。精々王達が集まる時くらいだが、なんか身体が拒絶する。というか硬直する。現実でも加速世界でも苦手な奴は多いが特に苦手な方筆頭だ。

だが現在最大の問題はもう一人、ホワイト・コスモスと同じレギオンのメンバーである『ホワイトレド・スピリット』だ。

こちらも体がほぼ白いが、余計な装飾が殆どなく完全な人型。胸に膨らむ双山がF型^{女性}である事を教え、柔らかい微笑みを浮かべているマスキュラは見るものを安心させる雰囲気を持っている。

目立った部分といえば双山の谷間に乗っかる形で存在する大きな目玉模様くらいだが、これが凄まじく問題だった。

かつて教えられたこの人のアビリティ、『マインド・スキャン』。読んで字の如く『読心』。

さとり妖怪さながらに心を読んじゃうこのアビリティは、アバター一人を対象に心を読めるらしい。しかもON・OFF自在で切り替えも自由。ただし有効範囲はたったの10m！これで安心読心能力！

………ひつろい。いや10mって結構広いからね？10mのビル見上げてみる、普通に高いから。ほんとなんで俺にだけ教えたんだろ。両親に『あなた、実は私達の子じゃなかったの』って言われるくらい知りたくなかった。『ウルフ君にだけと・く・べ・つ♪』とか耳元で囁かれて『じゃ、じゃあ』って流された過去の俺を殴りたい所存である。

おかげで見つかるたびに心臓バクバクで小町に祈りを捧げちゃうし、その能力でリアル割れの恐怖が一層増した。いつリアルで襲撃されるか分かったもんじゃやない。幸い今までなかったけどずっと警戒

する羽目になったじゃないか。

しかしほんとタイミングが悪い。現在の俺の身体は薄い緑のAvatar^{アバター}になっていてるので二人から俺の姿は丸見えだ。ゴリラ型エネミー^{ドッキング}の頭の上でついつい色を写し取ってしまったんだ。ほら、遠くから見たらまさに！って感じになったと思っただけです。まさか本当に見られてないよね？それっぽいからやったけど見られてたら加速世界でまで黒歴史ができて八幡立ち直れない！ってこの人相手に思い出すのってめっちゃヤバイイイイ！

「…………へえ」

あ、オワタ＼（^o^）／。マスクニヤツとするのやめてください（恥ずかしくて）死んでしまいます。

「いやあく奇遇だねえ。前の何ちやらって鎧倒して以来だっけ？お姉さん寂しかったよー」

「そ、そっすか」

心が読めるからだろう、ニヤニヤしながら腕を組んできた。右腕を完全にロック。逃げようと考えれば拘束が強まり、諦めれば拘束が緩む。諦めたフリをして逃げようとしても当然逃がしてもらえない。

万策尽きたか、早いな俺の策。策なんてないけど。

「そ、それで何の用っすか？俺そろそろ落ちようかと思ってたんスけど…」

「あれ？猫型エネミーはいいの？」

「いる場所わかってるんで問題ないっす。きっと今の時間は冷蔵庫の上で寝てると思うんで」

「へー。ウルフ君猫飼ってるんだ。今度リアルで遊びに行っちゃおうかなあ」

「マジで辞めてください」

この人なら普通に可能だから怖い。バーストリンカーの殆どは東京に住んでいる。だから名前と顔さえ分かれば日帰り余裕だ。しかし当然リアルで会うとなるとお互いのリアルを晒さなくてはいけない。つまり全くもって無意味、無価値。だからお願いします辞めてください！

「……まあいつか。今回は違う用事で会いにきたんだしね」

「…やっぱ会いに来たんすね」

「そ。コスモスちゃんよろしく」

「ええ」

ヒラヒラと手を振ってようやく離れてくれた。代わりにコスモスが近づいてきたが、既に修羅場を掻い潜った俺に怖いものなんてないぜ！

自分に活を入れつつも、腰が引けてくるのを自覚しながらホワイト・コスモスと相對する。油断してはならない。現在の状況だとコスモスに一回殺されれば俺は全損してしまう。それだけは避けなければいけなかった。

だからコスモスが懐から銃型の強化外装を取り出した時は逃走準備を整えたが、コスモスの口から出たのは意外な言葉だった。

「無色の王、貴方にこれを渡したい」

差し出されたのはオーソドックスな回転式ハンドガン。その側面には交差する拳銃、赤の王であるレッド・ライダー作の銃に必ずついているマークが存在していた。

「ライダーの銃？」

「ええ。数日後の八王会議で赤の王はこれを皆に配ると言っていました。これはそのサンプルです」

「サドンデスルールに対する停戦について、だったか？確かあいつは停戦派だったよな。」

なに？もしかしてそれが核兵器レベルの抑止力だとか言わないよな？」

加速世界にはみんなが使える核兵器、心意システムが存在するが、それは各自の心の闇と向き合う行為だ。発生させるのが人間である以上、一定量以上の力にはならないはずだ。

だからほぼお巫山戯で言ったのだが…

「その通りです」

肯定されちゃった。

「赤の王はこの『八の神器』^{エイト・アークス}によって八つのレギオンの王達を止めよう

と考えています」

「いや、無理だろ。それに心意が使つてあるのは分かる。だけどそんな小さい銃で……」

「装弾数無限。命中率百パーセント。一発一発に強大な心意の力を宿し、百人に襲われようとも容易く敵を殲滅できる、と言われてもですか?」

「……は?」

めーちゅーりつ100%?そーだんすーむげん?しかも一発の威力が強大つてチートか?取り敢えずチートチート言つてれば満足みたいな転生主人公か何かですか?ライダーさんは。

バツカジャネーノ視線をコスモスに浴びせると、コスモスが手に持った銃を誰もいない方角へ向ける。

そして一発、カチンと撃鉄が落ちた音がなると同時……

目の前の地形が削り取られた。

それは比喻に非ず。たった一発の銃弾が過剰な光と威力によつて魔都ステージの建物と地面を抉り取った。しかもそれはすぐには終わらずコスモスは一発、また一発と何度も撃ち続けた。

装弾数無限。命中率百パーセント。一発に強大な心意を宿している。どれもこれも無茶苦茶だ。しかし実際に目の前で起きてる事まで否定する程愚かではない。

ライダーは皆にこれを配ると言っていたらしい。つまりこの銃を八丁拵えたわけだ。ここまで停戦に拘ると逆に男らしく見えてくるから不思議だ。きつと反対派のロータス辺りの説得に使うつもりなのだろう。

「……その銃の事は分かった。で、あんた達はなんで俺にその銃を渡しにきたんだ?」

そう、停戦になろうがなりまいが俺には知ったこっちゃやない。元々通常対戦なんてここしばらくやってないし、レギオンメンバーなんぞいないから迷惑をかける事もない。領地を守つて旗と名を飾つてお

ければ俺は問題ないんだ。

しかし返ってきた言葉はやはりと言うべきか、俺の聞きたい言葉ではなかった。

「私は数日後、『バケツ』の中に『石』を投げ入れます」

「石？」

「その『石』は見た目は大きな波紋を呼ぶでしょう。しかしその波紋は『バケツ』の中で終わってしまう。『石』もバケツの底に沈むでしょう。だから私は『海』に『新しい石』を投げ込みたい」

「……ちよつと待ってくれ。本気で意味が分からない」

「その『石』が起こす波紋は小さく、水面に与える影響は少ないでしょう。しかしその波紋は遥か彼方まで届く可能性がある」

「……」

「その波紋が津波を呼ぶ事を、そしてその『石』に貴方がなる事を私達は望んでいます。性急な変化はなく、永い時が必要となるでしょう。……あわよくば、その津波がバケツの底に沈んだ『石』を海に戻す事を」

それだけ言い終わるとコスモスは黙ってしまった。つまり言う事は全て言ったという事か。

「……うん、サツパリわからん。石？バケツ？海？津波？わけわからん。石が人なのは分かった。しかしそれ以外は全くもって分からない。謎解きゲームは得意じゃないんだ。」

小学校の時、隣の席の田中君に『悪いな比企谷、このゲーム三人用なんだ』と、誘われてもいないのに自慢されたクイズゲーム。しかもパツケージに堂々と『最大四人まで遊べるよ！』と書かれていて何も言えなかった。あ、よく考えたらクイズゲームじゃなくてコミュニケーションが苦手なだけでしたテヘペロ♪

うんうん言いながら真面目に不真面目な事を考えていると、小さく溜息をつかれライダーの銃を差し出された。

「……………これは渡しておきます。さようなら、無色の王。次は八王会議で」

渡された『八の神器』を受け取ると、コスモスは王座を翻しフィールドから出るためのポータルに向かって行った。スピリットさんも片方のアイライトだけ消してウインクするという奇妙な行動をしつつも、コスモスの横に並び去って行った。

残されたのは俺一人とライダー自作の銃のみ。裸で渡されても強化外装の譲渡は出来ないのだからとこれはもうすぐ消えてしまうだろう。何故渡したのか、俺に何をさせたいのか、俺程度の人間には分からない。

なら成り行きに任せようと思う。何も出来ないなら何もしなくていい。何もしないという助けだってあるのだから。

俺は更地になったフィールドへ『八の神器』を向けた。その体制のままシリンダーを降り出し弾を見つめる。シリンダーには青、赤、紫、黄色、緑、白、黒、そして透明の弾丸が装填されていた。

シリンダーを戻し、引き金を引いた。カチンと音を立てる撃鉄。

弾は、発射されなかった。

過去からの問題

それから八王会議が開かれロータスがライダーの首を落とした瞬間、コスモスが言っていた『石』がロータスであることを確信した。

小町の全損以来人間関係に唖く：いや敏感になった俺だが、なにもそれは現実世界に限った話ではない。加速世界では表情なんてまるつきり分からないが、現実世界で養った観察術で声色や細かい仕草により判断できた様々な関係性を見てきた。

だからこそ分かった。分かっていた。普段強気なロータスが、コスモスに対してだけ警戒を解いていた事。八人が集まる時、それとなく二人がいつも隣り合っていた事。それもロータスがさり気なくコスモスの隣に移動していた事を。

その姿は子猫が親猫に寄り添うかのようで、白の王と黒の王の二人が親子である事を如実に示しているようだった。

：警戒しておくべきだったんだ。普段隣り合っていたはずの二人が何故か離れ、ロータスがライダーの隣に陣取った事を。

何故わざわざコスモスが俺に『八の神器』を見せつけ、尚且つそれが偽りの情報であったのかを。

：少し考えれば分かっただろ。コスモスが俺に見せて、ロータスに見せてない訳が無い。

停戦に然程興味がない俺と停戦にされては困るロータス。恐らくその反応は正反対であり、同じでもあっただろう。

『八の神器』の威力を目の当たりにした時は共に驚愕したはずだ。その後、片やある種の尊敬の念を抱き、もう片方は混乱と焦燥の淵に突き落とされたことだろう。いや、ロータスにとってライダーは敵とはいえ、共に戦いあった相手だ。裏切られたとも思ったかもしれない。

『戦わないバーストリンカーに何の存在価値がある！たとえサドンデスルールを突きつけられようとも、我々は対戦をし続けるべきだ！』

かつての会議でロータスの言った言葉が思い起こされる。最後まで

で停戦を否定し続けた少女の言葉は、他の王達には届かなかつた。しかも言葉しかないロータスとは裏腹に、ライダーには停戦を強制できる『八の神器』がある。実際には弾が出なくとも、コスモスが俺の時のように『弾は発射される』という思い込みをロータスに刻み込んでいたはずだ。

だからロータスはライダーが銃を配る前にライダーを永遠に加速世界から退場させたんだ。

しかし結果は最初から最後まで空回り。ライダーは力づくで停戦を結ぶ気はなく、全てはコスモス達の手のひらの上。

手のひらで弄ばれた『石』は、八王会議というバケツに放り投げられそのまま捨てられた。築き上げられた信頼なんて、たった一つの些事で崩れる。それが人間関係だ。

だが気に入らない。他人の事情に首を挟む気はないが、それでもこだわりの俺にもある。

コーヒ―はマツカン派だし、キノコタケノコ戦争ではどっちでもいい派にこだわる男だ。

であるからして、このゲームにおいて親子仲至上主義の俺としては親であるコスモスの手でロータスに実害が行くのを見逃すのはそれに反するものであつて、少しばかり手を出すのも吝かではない、というかなんというか。

ほらあれだ。コスモスが新しい石を海に云々とか言ってたし？ちよつとばかりコスモスの策略に乗ったフリ（ここ重要）をしてもいかなつて思つたんだよ。あくまで乗ったフリ。

まあそんなわけで石は石らしく、石の如く加速世界にひとなみ一波起こしてやろうと思つたわけだ。

だがそこからが大変だった。加速世界だと現実世界のカーストポジションはまるで意味をなくしてしまう。おかげでヘイトを稼いで目を逸らさせるような作戦は取れなくなった。しかもアバターの地味さから、注目を集めて話題独占みたいな事も出来ない。

ならどうするか。ここで俺はブレイン・バーストのプレイヤーの年齢に注目した。当時のバーストリンカーの最大学年は中学一年。大

人に憧れる者、少しばかり大人になった気分を味わっている者達が溢れていた。しかしその大部分が当然のことながら好奇心溢れる子供だ。ならばそこを刺激してやればいい。

好奇心旺盛な少年少女が食いつくといったら、そう『噂話』だ。それは神獣級エネミーの存在であつたり、幻の強化外装だつたり、八王の存在そのものだつて噂話たり得る。恋話を求める女子、かつこよくなれる情報を求める男子。どいつもこいつも噂話を必ずと言っていいほど把握している。そのせいで俺が一時間校舎裏で待つてた事も翌日クラスメート全員に知れ渡つてましたとも。：チツ。

…おほん。つーわけで噂話を作つてやった。唯一目立つてあろうレベル9というステータスのおかげで、情報のレアリティは相当高い。題目は『東京全区に現れるレベル9』つてところか。

思つたとおり食いつく食いつく。俺の目論見通り、破竹の勢いで広がった噂はロータスの噂を覆い尽くすように東京全域に広まった。

この噂を作る為に東京全域を移動しまくつた時に発生した料金が予想以上だった事以外は大体計画通り。さらにさらに度重なる疲労で一週間程寝込んで久しぶりに出没しようと思つたら、ロータスの噂ごと俺の噂も消えてた事以外は計画通りだった。

あの時は本当に予想外過ぎて帰つて寝ました。噂つて一週間で消えるものでしたっけ？噂つてアバターの影響受けるんですかねえ。いや、きつと全て月島さんのおかげだな。ありがとう月島さん！

とまあそんな感じの二年前の昔話黒歴史でした、ちゃんちゃん。

☆☆☆

「……懐かしいな」

二年前の事は良くも悪くも記憶に残る。思い出し過ぎて怖い人達の事まで思い出した事以外はこの一言に限るだろう。

あれから二年。結局バケツに沈み込んだ石を拾い上げたのは、俺で

はなく銀の鳥だった。コスモスの望んだ津波は起こらず、人知れず復活した黒の王は加速世界への復帰を果たしたんだ。

「思い出したならいい加減吐いてもらおうか。朝、お前は、何をしようとした？」

……そういえばそれを聞いたかつたんでしたね。あまりに遠回りし過ぎて完全に忘れてたわ。

「……その前にお前の予想を言えよ。合つてたら言つてやるぜ？賢くて知恵も知識も備わっている黒の王様？」

「……うん、堂々巡りになるよりかはいいか」

思つたより簡単に承認してくれた。なんだ、これでいいなら始めからこう言えばよかった。合つてようが間違つてようがその通りつて言えばいいわけだし。

「そうだな、順序立てて言つていこうか」

腕組みもどきから片腕を出し軽く掲げる。

……指でも立ててるのか知らんが、指がないので手をフラフラしてするようにしか見えない。こいつ天然……というよりはドジっ子の氣質があるんだよなあ。

「まず一つ目、フーコを連れてきた理由だ」

……え？理由なんてあるんですかロータスさん！あの人元々居ない予定だった人つすよ？

「それは襲撃者、シアン・パイルを特定する確率を上げるためだったんだろう。」

……もしくはあいつが付いて来たいと言っただけか」

後者です。友人としてもうちよつと慎みを持つよう言い含めといてください。俺じゃああの人を止められないんで。

レイカーブリッジ封鎖できません！それどころか俺が封じ込められてます！

事件は現実世界で起こってるんじゃない、加速世界で起こってるんだ！あ、今日で現実世界にも侵略されたんだった。

うわあ、ざる警備。

「……あー、正解だ」

「よし。次はお前が朝何をしようとしたか。…まあこれは簡単だ。先程も言ったとおりシアン・パイルのリアルを割る為だろう」

「まあ正解だな」

これは隠す必要はない。それこそ基本的な知識だ。ブレイン・バーストにとつて一番恐ろしいのはアバターを纏っていない現実世界。特に女の場合はリアルでは何も出来ないだろう。なのでより一層リアル割れには注意を払わなければならない。だから顔見知りの皆さんとも未短いお付き合いをお願いしたいものだ。

「……だが、それでは足りなかったんだろう？」

「……………」

……ドジっ子でも頭はいいんだよな、こいつ。スペック高いのにドジっ子属性を付けてギャップ萌えとかどこのヒロインだよ。

っか俺とロータスの温度差がやばい。ドキドキしながらテストの問題を解いてる生徒と答え知ってるから適当に流してる先生の気分。

「あちらが持っているのはレベル9のリアル情報。しかもフィジカルフルバーストを私が使ったから制限時間も限られている。

そこから手っ取り早く解決する方法と言えば、シアン・パイルを全損させるか襲うのを諦めさせるしかない。しかもリアル情報を割らせない保険付きでな。

ならその方法はなんだ？当然相手のリアルを割ることだ。しかしそれをやるには状況が少し変わってくる。

私とシアン・パイルが交渉する場合、互いが互いにリアル情報というナイフを相手の首に突きつけているので私達は一蓮托生、片方が情報を漏らせばもう片方も躊躇なく道ずれにできる」

しかし、とロータスは一つ溜めを作った。

「交渉をする人間が私ではない第三者の場合、確かにこちらも脅せてはいるが私が人質になってしまっている。

彼奴はレベル4、私はレベル9。私が対戦で負けた場合失うポイントは一回につき15ポイント。フィジカル・フル・バーストで99%のポイントを失っている私には大損害だ。

元のポイントが1500以下なら一回、3000あっても二回で全損してしまう」

ロータスは淡々と自らが以下に危なかったかを紡いでいく。

ポイントの残高は不明。しかも二年もの間加速世界から逃げていた黒雪は減ることはあっても増える事はなかっただろう。

「相手のリアルを割り、かつ己のリアルを明かさずに、精々3・4日で全てを完遂させるのは難しいだろう。下手したら私のポイントが3000以下かもしれない

………なら、どうするか」

僅かばかり視線を鋭くさせたロータスが言葉を続けた。

「それは、相手に私と同等以上のポイントが稼げる存在を用意する事だ」

この言葉にはさすがのクロウも気付いたのか俺に目を向けようとして顔を彷徨わせた。

『意識なきプレイヤー』と『意識ありしプレイヤー』。この違いは彼奴にとつては破格の差がある。

『意識なきプレイヤー』は一日一回確実なポイントをくれる。だが『意識ありしプレイヤー』、しかも脅迫ネタを持った『意識ありしプレイヤー』は別だ。

直結して一日に何回もポイントを奪うでもよし。シヨップでポイントをカードにさせて纏めてポイントを奪うでもよし。

ありとあらゆる方法でポイントが手にはいる。それもリアル情報を盾にな」

「……………」

俺は沈黙を保った。だがロータスにとっては十分だったようだ。

「この役をお前がやろうとしたのだろうか？ 真つ正面から行けば相手は少なからず警戒する。そこに今までより好条件な取り引きをチラつかせれば間違いなく飛びつくどふんでな」

苦々し気な声を出すロータスは右手の刃を振動させ始めた。現実世界だったら拳を握りしめているのかもしれない。

「違うか、ウルフ？ 違うなら違うと言ってくれ、謝ろう。

だがあっているなら……」

言葉の続きをいう前にロータスは黙り込んだ。

……さすがだよロータス。いや、黒雪。それは確かに俺がやろうとしていた最有力候補だ。問題の先流しどころか破綻が訪れそうな選択だが俺はやったと思う。

もつと簡単で、もつと安全な方法を見つけていなければそうなっていたかもしれない。

「…そうか」

全く、本当に最近は何日続きだ。レイカーの件も、黒雪の件も。

……だけど、ようやく長かった問題に一つ、解を付けられそうだ。

「大ハズレだ」

剣豪將軍参上！

「大ハズレだ」

俺の言葉の後に小さな沈黙が訪れる。黒雪の仮定の話を、可能性の話を否定した。

しかし堂々とした話を否定されたにも関わらず、黒雪は安堵の溜息を吐いた。

「…そうか、ならよかった。いやな、またウルフが自分を犠牲に何かをするんじゃないかと心配していたんだ。考え過ぎなら、それでいい」
そう言っただけで身体力を抜く黒雪を俺は無意識のうちに冷たい目で見てしまう。

ああやつぱりだ。こいつは勘違いをしている。

元ネガ・ネビユラスのメンバーはこいつを慕って集まっていたし、現実でも生徒会副会長という立場から人が集まっている。そんなこいつにとって誰かが自分のために何かしてくれるのは普通のことだったのだろう。

でなければあそこまで自分を助けるために、俺が何かをするなんて仮定は考えられない。

だけど、それは違う。『みんな』がそうであっても『俺』はそんな殊勝な事考えちゃいない。

二年前はコスモス達への反抗心から、今回の件もただ見捨てては自分の気分が悪くなるからってだけ。全ては自分のためだ。

そして今の言葉で納得した。二年間もわざわざ教室でぼつちな俺に話しかけてきたのも、昼食の誘いをしたのも、黒雪が勝手に感じている罪悪感だ。自分のために傷ついたらと誤解して、勝手に負い目を感じているだけだ。

「ロータス」

理由なき善意を、俺は信じられない。けれどようやく、その理由がはつきりした。そして、理由がそんなことなら、もうそんな重荷は下ろしてやるべきだ。

「俺は別に、お前だから助けたわけじゃない」

全てが終わったように安心していた黒雪に唐突に言い放つ。驚愕からか疑問からかロータスもクロウも動きを止めた。

「今回は俺の気分を悪くしないためだし、二年前のも俺の自己満足のついででお前の噂が消えたっただけだ。それについてお前がどうこう考える必要なんてない」

「う、ウルフ？ いったいなにを…」

狼狽えるような黒雪を見て思う。こいつは優しい。思い込みが激しくて、どこか子供っぽいくせに、どんな相手にも正面からぶつかっていく優しさと強さがある。そんなやつにとって俺はただ優しくする一人でしかない。いちいち気にさせるくらいなら、その必要性をなくしてやるべきだ。

「今更だけど、悪かったな。変な気を遣わせたみたいで。ぼつちな俺にわざわざ話しかけたりとか、怠かっただろ？ まあ、でもこれからはもう気にしなくていい。そうやって俺の心配をする必要もまったくなしだ。だから…」

黒雪にも子が出来た。なら、时期的にもちょうどいい頃合いだ。黒雪は余計な事を頭の中から消せるし、俺は本来のぼつち生活に戻れる。まさに win-win。余分な物は少ない方がいいに決まっている。

「……気にして優しくしてんなら、そんなのはやめろ」

だから俺は拒絶する。気を遣われて保たれる人間関係なんて、俺は

ごめんだ。

ゲームと違って現実には過去が付きまとい、現在に影響を及ぼす。たった三十分のぶつかり合いだけじゃない。現実とは誰かが発する一言一言ですら何を引き起こすか分かったもんじゃやない、そのくせ誰も抱えている天然の地雷原なのだ。みんな同じ現象を見ていても、受け取る側が勝手に地雷を撒き散らしてしまう。

普段から地雷を踏み抜かれてる俺とてわざわざ爆発させて欲しくなんてない。だから爆発する前に取り除くんだ。そこに存在しなければ、爆発する事もなくなる。綺麗で素敵に解決だ。

「…ち、違う。私は…」

ガシャン！

黒雪が何かを言う前に、いつの間にか一桁まで進んでいたタイムカウントが0を刻んだ。なんと測ったようなタイミング。何かを言われる前に終わって助かった。

現実で言われる事なら無視すればいい。逃げ道なんてすぐ後ろにあるからな。これが本当の戦略的撤退！でも逃げ道って言った時点で逃げる気満々ですがね！

そうこうしている間に透明な身体に色が付き、気づけば三十分前に見た病室に戻っていた。

目の前には不安そうに黒雪と俺に忙しなく視線を移動させている有田と、呆然という言葉が似合いそうな顔をしてベッドにいる黒雪。

一秒待っても何も言われないという事は特に言う事もないのだろうと判断し、俺は踵を返し病室を出る。後ろから聞こえる黒雪の声も今となつては足を止める理由にもならなかった。

それに現実時間では病室に入ってから十分も経ってないだろうから帰っても寝る時間はある。ならこれ以上時間を浪費する訳にもない。忘れかけてたけど、レイカーとの約束もあるしな。

☆☆☆

「もう今日は本当になんなんだよ……」

憂鬱な朝、憂鬱な学校、憂鬱な病院を乗り越え勇者八幡は自宅への旅路を歩いていた。しかし今日という日はどこまでも俺の邪魔をしないらしい。

目の前に立ちはだかるはコートを羽織った男。指ぬきグローブをはめ、腕組みをしながら道の真ん中に仁王立ちをして通行人に迷惑そうに避けられている。

それに気づいた瞬間、俺は進行方向を180度回転させた。

はちまんはにげだした！

しかし！まわりこまれてしまった！

「フハハハ！八幡よ、なぜ逃げる！ふむう、知らなかったのか？大魔王からは逃げられない！」

「……何のようだよ、材木座」

予想以上の脚力を発揮した大魔王（笑）の材木座。余裕ぶっつてはいるが額が汗だらけだ。拭けよ。

「けぶこんけぶこん。何の用とは心外なり。この剣豪將軍・材木座義輝を古の世から召喚したのは他ならぬ八幡であろう？」

「……………あー」

……完全に忘れてた。昨日の夜に黒雪がヤバいから何とかする方法を考えて、めっちゃ簡単な方法見つけたってんでメールしたんだっとな。

まあ本気で眠かったから『・明日・放課後・交差点』しか送ってないのによく待ってたなこいつ。

「あー、とあれだ。……お疲れ、もう帰っていいぞ」

「へポン!?……ぐ、ぐらむぐらむ。さ、さすがは我が相棒。我を欺くなど、かの調和の女神コスモスですらなしえなかつた事をやすやすと成し遂げるとは!」

剣豪將軍は神と対立してんのか?てか調和の女神なら騙くらかしたりしないだろ。騙し合いたけりゃ混沌の方とやれよ。

「まあ悪かつたよ。何日かかかると思ってたら朝だけで解決しちまつたんだ」

「ふむ、おぬしのセリフから察するにいいい!その問題、我らの決闘世界の話とみた!」

「大体あつてる」

気づいたと思うがこいつは俺の数少ないリアルを知ってるバーストリンカーだ。何年か前に不幸にも、不運にも知り合ってしまった。全てはこいつのキャラが悪いんだが、今は置いておこう。

材木座はレベル6のバーストリンカーだ。こいつと直結する勇氣ある親を見てみたい気がするが、それも今は置いておこう。

結局黒雪に話さずに帰ってきてしまったから、ここで作戦を説明することにする。俺の作戦、それはああああ!!

1. シアン・パイルに黒雪が負ける↓黒雪ー15ポイント
2. レイカーに黒雪の病院を教えて、レイカーにわざと負けてもらう。黒雪ー6ポイント

3. 材木座に病院行かせて以下同文。黒雪+1ポイント

4. 報酬として俺が材木座とレイカーに多めにポイントをやる。

5. 黒雪の目が覚めたら改めてシアン・パイルと脅し合ってもらい、レイカー達にやった分のポイントを黒雪に返してもらう(ここ重要)

これだけ。対戦に一日一回の制限がある以上、シアン・パイルが他の奴にバラさない限り黒雪が全損する事はない。そして全てのプレイヤーにメリットがある。後はレイカーに話した人海戦術での嫌がらせ。レイカーに負ければー6ポイント。材木座にも援助を頼めばー8ポイント。勝つかは知らんが。つまりー14で黒雪に勝つても一日+1なので余裕はなくなり毎日病院に通う事だろう。まあ黒雪

の後にグローバルネット切られたらその限りではないが、その時はその時だ。

この作戦の最も大きい利点は、俺が殆どなにもしなくていい所。最善の選択肢を他人がやってくれるなら万々歳だ。

黒雪は早急な解決をすると予想していたらしいが、俺は長期的な解決を考えた。材木座の存在を黒雪が知らない以上、黒雪が辿り着けるはずがない答えを導き出したわけだ。

……本来なら黒雪の病院さえ教えればレイカーとリアルで会う必要なくね？とも思ったが時すでに時間切れ。後の祭りはお片づけなので、正直本気で今材木座がいらぬ子になってる。

「つってもさつきも言ったがもう解決したんだ。今度なんか埋め合わせするわ」

「ほむほむ。ならば今宵は我とタッグ戦を……！」

「うん、それ無理」

「だろうな、我も嫌だ。」

しからば！いずれ再び邂逅したとき、我の望みをその身を持って叶えるが良い！では、新刊を買わねばならぬのでな。サラダバー！」

ダダダダッ！ではなくドタドタッ！という効果音を立てながら材木座は走り去った。

こういう時はあいつの性格はありがたい。バカみたいに騒ぐのに此方について毛ほども追求してこない。俺があいつの立場なら呼んだ奴を殴ってるところだ。呼んだのに「お前に用なんてねえよ」とか言われたら間違いなく殴ってた。

ふむ、少しだけ材木座相手に罪悪感が芽生えてきた。今度材木座が問題を抱えてきたら余程の事がない限り助けてやる事にしよう。

とはいえ同じ区に住んでるといっても今までもろくに遭遇しない事からエンカウト率は低いだろう。材木座も次に会った時と言っていたから会わなければ借りを返す必要もないのか。

哀れ材木座。己の無駄口を呪うがいい。

空を見晴らせなかつた人

時は夜、激動の一日の疲れを僅かでも取るために眠りについて数時間。上月による「おっはようお兄ちゃん!!」という声と共に肘鉄を喰らい、取れた疲れをチャージしてから無制限フィールドにダイブした。

原始林ステージの鬱蒼とした森の中を、木を蹴りキノコを蹴り小動物を撫でながら旧東京タワーまでの道のりをほぼ一定のスピードで走り続ける。

たまに現れるステージ特有の恐竜もどきが徘徊していたりするが、側を通ろうが踏みつけようが不思議そうな顔をして元の行動に戻って行くので気にせずに進んでいる。「無視してやる」と心の中で思ったならッ!その時ステに行動は終わってるんだ!

それより木々の間に垂れ下がってる蔦に足を取られ数度転びそうになった。許すまじ。

そうこうしている間に旧東京タワーの麓に着いた。原始林ステージでは高層建築物は巨大樹に変わっているので、目の前には樹齢何年だよと突っ込みたくなる程の大木が聳え立っている。

…これが世界樹か。いや、もしかしたらこの中には飛行石が埋められていて、空に飛び立つのを待っているのかもしれない。

「……バルス」

小さな声で呟いてみても何かが起こるわけでもなく、すぐさま左右前後を確認して黒歴史になっていないことを確認した。

凄まじい羞恥を感じながら、俺は東京タワーを駆け上がった。途中で心意使ってないことに気づき、哀れにも落下したのは別の話である。

☆☆☆

「いらっしやい、狼さん」

扉をノックするといつも通りにこやかなふいんき（何故か変換できない）でレイカーが出迎えてくれた。

…あれ？普通だ。もつと暗く「…どうぞ」みたいなのを予想してたから出鼻を挫かれた感じがする。暗いよりはいいけど。

「どうかしましたか？紅茶を入れるので座っててください」

「アツハイ」

言われるがままにいつも座っている椅子に腰を下ろした。ブーツとレイカーの後ろ姿を眺めながら今朝からの事を思い出す。

クロウが空飛ぶ↓

レイカーに希望をポン↓

なんか暗い雰囲気で招かれる↓

明るく出迎え↑今ここ

三つ目と四つ目に何が…？「私より高い存在はいらない！」とか言つて有田の存在でも抹消してきたのか？

ならなぜ俺をここに呼んだんだ。「それはね、お前を食べるためだよ！」みたいな事されないよね？身の危険を感じるZ・E！

「はい、どうぞぞ」

「!？」

け、気配を感じなかった。いつの間にか紅茶とクッキーらしき物を用意して対面にレイカーが座っている。

俺に悟られずここまで行動を終わらせるとは、こいつ絶対忍者だろ。アイエエエ！ニンジャ!?ニンジャナンデ!

「ふふ、また面白そうな事を考えていそうですね」

…やっぱこいつ忍者じゃなくてさととりだわ。さとりもどきはスピリットさん一人で十分だっつもの。

それはともかく俺が呼ばれた理由をそろそろ教えて欲しい。互いに甘い紅茶を飲みながら黙っていても別にいいのだが、ジツとこちらを見つめている目の前の存在が気になって仕方がない。

ぼっちは沈黙は得意でも視線は苦手なのだ。

「……あー、その、なんだ。大丈夫か？」

知らず知らずのうちに出てしまった言葉は主語も目的語も曖昧になってしまった。「何が？」と聞かれたら多分答えられない。

次に言われるだろう言葉を予測しながら身構えている俺に対して、レイカーは特に何かを言う事もなく静かに笑みを浮かべていた。

「……なんだよ」

「いえ。狼さんは優しいなあって」

優しい？「大丈夫か？」って聞くだけで優しくなれるなら世界が優しきで包まれちゃうよ？

しかし理由なき優しきは嘘だ。まあ大抵の理由が「優しくしてる私ってばちよー可愛い☆」みたいな理由だから理由ある優しさも嘘みたいなものだけだな。

つまり世界が嘘で包まれてしまうからこのままでは地球の危険が危ない。

「気にさせちゃってごめんなさい。今朝、私がショックを受けたんじゃないかって心配してくれたんですよね」

「……まあ事情と状況考えるとちょっとな。アレ見るきっかけ作っちゃったのは俺だし」

なんとなくで行動した事で何が起るかなんて誰にもわからない。それでも原因の一つが自分だと思えば、無視しておくのは難しい。

顔を顰めている俺に、レイカーは再び微笑んだ。

「私は大丈夫です。誰かが空を飛べたからといって、私が飛べるようになるとは思っていません。スカイ・レイカーというもう一人の私とは長い間空を飛ぶために試行錯誤してきたんですから。」

ひたすら真っ直ぐ上に向かったこと。心意の力で空に駆け上がったこと。足を切り落としてでも空に憧れたこと。どれもこれも私とスカイ・レイカーの思い出です。

それを否定するなんて出来ません」

「……………」

「それに、少し安心もしているんです。

私は空を飛ぶためにあらゆるものを犠牲にしてきました。自分の戦闘力、ネガ・ネビュラス副長の責任、そしてサツちゃん：ロータスとの友情。全てを捨て、巨大な罪を背負い、それでもなお私の手は空には届かなかった。

それでも今日、『空の彼方』という私の肩には重過ぎた夢が、下ろしても捨てきれなかった消えかけの種火が、猛火の如く燃え上がる瞬間を目に出来たんです。

感謝こそすれ、あなたを責めるなんてできませんよ」

最初から最後まで、レイカーは淀む事なく言い切った。きっとその言葉は偽りのない言葉だったのだろう。

だがそれでも、本当に納得出来ているのか？ オリンピックに出たいと願った少年が、目の前でその試合を見て夢が叶ったと思うだろうか。

偽りのない言葉が本心だとは限らない。自分ではそう思っている、心の奥底では欲望が渦巻いている事なんて腐る程ある。無理矢理自分を納得させて、嘘で心を塗り固めて、そのうち嘘が自分の言葉になって出てしまう。

そうでもしないとレイカーは潰れてしまうのだろう。夢のために足を切り落とせる人間が、この世に何人いる？ 夢のために親友を裏切れる人間が、この世に何人いる？ 夢のために周りの関係全てを壊せる人間が、この世に何人いる？

そこまでいくと、もう常人ではなく狂人だ。空への欲望だったら、こいつはシルバー・クロウの百倍は優にあるだろう。そこまでしても、空を見晴らす人は大空の下に跪いた。

死ぬ程努力した人間に、何もしていない人間がどんな言葉を掛けれるんだ。中身の無い言葉を投げ掛け、思いの籠らないセリフを吐き、格好付けた語彙をさらけ出す事なんて、出来るわけがない。

「……………そうか」

だから俺は何もできないし何も言えない。

何を言ってもマイナスにしかならないと分かっている時点で、俺は言葉を探さなくなった。

プラスマイナス収支でマイナスにならないなら、それは喜ぶべき事だ。たとえ既にマイナスの領域に入っているとしても、それ以上の損害が出ないようにする事が最善なはずだ。

そう断じて俺はそれ以上口を開く事を辞めた。

たとえばブレイン・バーストのレベルが上がっても、人間としてのレベルは上がらない。今まで心地よく感じていた沈黙が苦痛に変わった時、改めてそれを実感させられた。

どれだけ時間が経っても、俺は俺のままだ。

☆☆☆

あの沈黙の中で息をされている程神経が太くなかった小心者の八幡君は、早めの戦略的撤退をした後フィールドを走り回っていた。

レイカーの家の中にいた間に変遷が起こったらしく、現在のステージは黄昏ステージに変わっていた。神聖系ステージの影響で、僅かに黒みがかっていただけの身体の色が更にハッキリと色を表に引き上げている。

黄昏ステージ特有の深いオレンジ色の空、大地に生い茂る草花達と比べてこの薄黒い色はやけに目立っていた。二足歩行だろうが四足歩行だろうが嫌でも身体の色に目がいってしまう。

この色は心意システムを使った際にどうしても残ってしまうのだ。心意の力を使うには己の心の闇と向き合う必要があるのだ、劣等感から生み出されるデュエルアバターにその闇の一部が取り付いてしま

う……と、俺は考えてる。

そして心意には正と負の心意がある。勇気や希望から生み出される正の心意。怒りや憎しみから生み出される負の心意。俺の心意が黒いつて事は……ま、お察しだ。

その知識があるせいとか、浮き上がっている黒が自分の負の部分の周りに曝け出しているような感覚がしてこの姿は好きになれない。見るたびに『俺が間違えた』と指摘されている気分になるんだ。

間違えた事なんてとづくに受け入れているのに、いつまでもいつまでも面倒くさい。せめて黒に近い灰色とかだったらもうちよつと考えてみようかなーとか思うけど、黒に近い黒つてそれただの黒だろうが。だが灰色というのは黒と白が混じりあつて出来るのだから、黒しかない俺に出るわけがない。つまり俺はいつまでたつても黒でQED。

……自分の不利を証明するって新しい自虐を考えついてしまった。この一人遊び、全国の子供達に広めればぼっちの加速化待った無しだな。

再び思考の渦でサーフィンしながら、もういつそのこと心意を真っ黒になるまで纏つてブラック・ウルフにチェンジしてやろうかと模索していると、羽ばたき音と共に巨大な影が目の前に現れた。

「ウオオオオオン!!」

重音の鳴き声を上げ、地上五メートル程の位置でこちらを睨みつけているのは鳥形のエネミー。大きさに巨獣級くらいはいきそうなエネミーだ。

一言で言うならば……カラス鳥。

もちろん銀色ではない。薄い青色をしていて、羽の数は三対六本。オレンジの空のせいで背景とのミスマッチが凄まじい。

顔と嘴の形と羽根の特徴から、なんとかカラスだと判断できる奴だった。

「……散歩したい時に限ってピンポイントで狙われるとは」

小さく愚痴ってしまう。今日は空空空空お空様つて空に関わりま

くってるんだ。このままだと空を突き破ってお星様になっちまう勢いだ。お前をお星様にしてやろうか？お？

「ウオオオアアアア!!」

「ごめんなさい！」

いきなりデカイ声出すなよ！反射で謝っちまっただろ！

もう怒った。激おこぶんぶん丸通り越してムカ着火ファイヤーしちゃうくらい怒った。

目の前のバカラスを見据え小さくコマンドを唱える。そして結構前からアイテムストレージで埃を被ってたアイテムを顕現させた。

「こいつは強化外装《幻想の手綱》。ショップで買ったタイム用のアイテムだ。結構したからお前に使うのは心苦しいが……俺の平穩を奪った罰だ。

…ちよつと散歩付き合えや！」

それから数分。叫び声をあげるエネミーに、同じく奇声を上げて襲いかかって行くアバターの姿が、そこにはあった。

………ていうか俺だった。

その後手綱を握りながら高笑いしていたアバターだけは、俺ではないと信じた。

☆☆☆

side スカイ・レイカー

クリア・ウルフがホームを去ってから幾何かした頃、スカイ・レイカーはいつもウルフと空を眺める場所で独り、空を見上げていた。

「怒らせて……しまったでしょうか」

思い出すのは一人の少年。夢は遂げられたと告げると、何も言わずに出て行ってしまった人。

空に憧れた私の前で空を飛ぶ瞬間を見せてしまったと悔やんでいたようだったから、その誤解を解こうと発した私の言葉は、逆に彼を怒らせてしまったようだ。

でも、私の言葉に嘘はない。燃え燻っていた火種は燃え尽きた。火種とは、火をおこすのに必要な物だ。火を点け終えた火種にもう存在価値は見いだせない。だから今日の朝、私の夢は終わったはずだ。

「……不思議ですね。夢は叶った筈なのに、いつもよりも空が遠く見えます」

黄昏ステージの空は何度も見た。だが今までで、ここまで空が私を拒んだことがあっただろうか。

目指していた道は、沢山の物を犠牲にしてきた夢は、それが当然のように私を見限った。空を目指していたはずなのに、空を夢見てきたはずなのに、胸に残るのは、虚しさだけだった。

「……………」

それ以上は何も言わず、スカイ・レイカーは車椅子を操作して脱出用ポータルに向かった。

激動の1日ではあったけど、元々隠居した身だ。また明日からも特に何も無い、平和に空を眺める日が続くのだろう。

そう、夢を目指していた頃と何も変わらずに。

自分に言い聞かせるように、ゆつくりとレイカーは車椅子を進めていく。しかしその速さはいつになく遅い。

レイカーの車椅子は心意、意志の力で動いている。心の中で、自身自身の行動を阻害する想いが宿っているのだ。

それをレイカーは自覚している。

これは…期待だ。誰かが自分の後ろ髪を引いているのを…いや、引いてくれるのを待っているのだ。

まだ夢は終わってないと、まだ諦めるなど、自分に教えて欲しい。そんな百パーセントの我儘を、誰かに叶えて欲しいと期待している。

「……女々しいですね」

誰に言つて欲しいか分かっているのに、自分の本心を打ち明けたのに、彼の性格からそんな事をするはずがないのに、それでもどこか期待を無くせない。

それもあと一メートル。先程よりもゆつくりと、ゆつくりと車輪を進めていく。

そしてとうとうつま先がポータルに触れた時、バサツバサツと羽ばたき音が聞こえた。

鳥型エネミーなんてこの世界には溢れているはずなのに、それがレイカーを引き止める役割を果たすには十分だった。

入ろうとしていたポータルに背を向け、その音を頼りに振り返る。

その先には、ついさつきまで家に居た彼が片手を上げて呼んでいるのが見えた。

来た道と同じようにゆつくり戻るレイカー。その口元が緩んでいく事は、レイカー自身すら気づかなかつた。

高く、飛びたい

クリア・ウルフこと比企谷八幡がスカイ・レイカーのホームへ訪れる前の時間、彼は優雅に空の旅を楽しんでいた。

先程タイムしたばかりの鳥型のエネミーの背に寝転がり、黄昏に浮かぶ雲の間を羽音と共に駆け抜け、上空より見下ろす風景は成る程確かに素晴らしい。

空を目指すのも悪くないと思える程度には絶景だった。

「……ここまで飛べればレイカーも満足だったんかね？」
ずっと気になっていた。

現在のレイカーの最高到達地点は約350メートルらしい。そして今俺がいる場所の高さはおよそ5000メートル。レイカーの限界の十倍を優に超えるこの場所を、レイカーは望んでいたのだろうか。

あいつはもつと高く、もつと遠くまで飛びたいと願ったと言っていた。だがその身に宿ったのはその願いを叶えるにはえらく不適切な物。

俺は運営じゃないから、欲望やら劣等感やらから生み出されると言われても何%反映してるかなんて分からない。むしろレイカーのアバターを見るとそこまで影響してないようにも見え、それっぽい理由で適当に作ってるんじゃないかとすら思えてくる。

だが俺は、そんな楽観的な考えは出来ない。加速、ソーシャルカメラのハッキング、更には全損後の記憶消去までやってのける奴が、このゲームのプレイヤーにとってのメインイベントを適当にするなんて思えないんだ。

だからレイカーのアバターと欲望の関係性も必ずある。といっても俺がどうこう言ってもレイカー本人じゃない以上正解には辿り着けないだろう。

なら連れてってやろうじゃないか。空の果てまで、この俺が（テイ

ムしたエネミーで！」

実際に見るのと憧れるのは違うからな。目指すべき場所をその目で見れば、折れた夢も少しは修復出来るかもしれない。

「…よし。ならばはレイカー次第か。てかまだホームにいるのか？」
「眩きながら手綱を操り下降させる。」

…きつと俺を知る人間なら、俺が誰かの為に動こうとしている事を驚くだろう。だが俺には理由なんてない……わけがない。異常事態に緊急事態が重なっても、やるべき事は早めに終わらせたいんだ。

今俺がやるべき事は、レイカーとの関係を『終わらせる』か『続けるか』だ。

元々レイカーとの関係は、景色を見たり茶会をしたりするだけの関係だった。王だとか他レギオンだとかの立場を無視して、気軽に過ごせる加速世界のベストプレイス。そのベストプレイスを構成する要素の一つにレイカーが入っていたことは否定しない。

なんやかんや言ってもレイカーの指示通りホームに行く前に連絡していたのは、あいつの出してくれるお茶や話が好きだったからだ。

だが今日、そこに痼りが出来てしまった。

今まで燻っていたはずのレイカーの夢を、俺の軽率な行動で消し去ってしまった。

別に努力を止めるのは構わない。自分の限界を悟って、歩き続けるのを辞めてしまうなんて事もあるだろう。現にレイカー自身は隠居としてホームを買ったと言っていたくらいだ。

だけど、諦めてはいなかった。歩みを止めても、空への憧れを消してはいなかった。

諦めなければ、いつでもまた進めるんだ。

黒雪がいい例だ。現実時間で二年の間止まっていた時間が、今日再び進みだした。きっかけ一つでまた進めると、黒雪が示したばかりだった。

「…だからこれが、俺のケジメだ」

最後の最後で人任せだが仕方がない。

レイカーの望む場所を見せてあいつが満足し、夢を諦めるなら俺は

もうレイカーのホームに行く事はないだろう。

勝手に感じる負い目だが、諦めの原因は消え去るのみだ。

「けれど、まだあいつが空へ行こうと言うのなら……」

「よう、さつきぶり。空の散歩、付き合ってくんね？」

また、あの心地の良い空間を作れるかもしれない。

☆☆☆

六枚羽根の鳥のエネミーの上で、スカイ・レイカーは困惑していた。現在の高さはおよそ5000m。手を伸ばせば雲に触れそうな場所まで彼女は訪れていた。

「狼さん、どこまで上がるつもりですか？」

「……空の果てまで？」

此処に連れてきたのは、目の前で手綱を弄んでいる狼さんことクリア・ウルフさん。険悪な雰囲気であれてしまったので、散歩の誘いは喜んで受けた。

「ただ空の散歩というには、高度を上げ過ぎな気がする。私を乗せてからはずっと上へ飛び、そうこうしているうちに目測10000m程の高さに到達している。」

「ここまでくると景色は一面空か雲ばかり。曇っているわけではないので下の景色も見えるのだが、ただただ小麦色の大地が広がっているだけだった。」

「……狼さん、少し高度を下げましょう？散歩というには……」

「少し不適切です、と続けようとした。しかしそれは、不自然に遮ってきた彼に止められた。」

「…なあレイカー。お前は、ここで満足か？」

「え？」

突然の問いかけ。満足かと聞かれても、何に？と返す。それが当然だと首を傾げると、あちらもわかっていたのかそのまま続ける。

「今回の散歩は謝罪のためだ。悪かったなレイカー。お前の夢、諦めさせちまって」

少しだけ上がっていた気分が、再び急速に下がった気がした。

「…ですから、私はあなたを責めてなんていません。自分でも、今回は満足しているんです！」

知らず知らずに語気が強くなってしまう。

アバターの翼が空へ届いた。その翼が自分の背中になくとも、空に届きえない自分は満足したはずだった。そう自分に言い聞かせ、納得させたはずだった。

なら、実際に感じているこの虚無感は何んだ？満足とは虚しさを感じる事だっただろうか？

「いいじゃないですか。もう…終わらせても。」

人の身で空を目指すなど烏滸がましかった。そう自分に言い聞かせ、空に最も近い場所に留まり続けてきました。

それでも今日、人であっても空を飛べると、自由に羽ばたけると、証明されたじゃないですか。

同じ人であっても、彼は飛べて私は飛べない。なら私は選ばれなかったんです。

彼の下を飛び、ただ空を見上げる程度の飛行能力しか得られない、私の弱さの結果です」

今日シルバー・クロウが飛んだ事を知らなくとも、きっと数日のうちに私の子が教えてくれただろう。

早いか遅いか、それだけの差だった。

二番手は嫌い。負けるのだって大嫌い。私より空が飛べる人がいるなら、それより高く飛べばいい。そのための努力なら幾らでもした。

……そう、した。

心意に縋った。友を裏切った。己の身体すら犠牲にした。時間の浪費は当然したし、空の為にすべてを捨て去った。…でもダメだった。

「…不可能に向かい続けられるほど、私の心は強くない。

諦められなくても、諦めざるをえない。でも、諦めるキツカケがなかった。だから最近まで、惰性で夢を目指していた。

そこへ私より高く飛べる存在が現れた。夢を諦めるには、最良の理由が現れたのだ。

空を目指す私に、私よりもその夢に相応しい人が居たからという理由なら、他の理由よりは潔く諦められる。

「…捨てさせてください。数年越しの、私の夢を」

今日この空で、私は夢をきっぱり諦める。

そう決意し、彼の言葉を待った。

彼は何て言うのだろう。彼の事を考えると、沈んだ気持ち少しだけ浮かんでくるように思える。

先程のように、「そうか」で終わりかもしれない。

私がホームで期待していたように、「まだ終わってない」と引き留めて来るかもしれない。

もしかしたら「そんなんでどうする！」なんて説教をされてしまうかも。

マスクの下だけで小さく笑う。真剣な時に不真面目な事を考えてしまうのは彼の影響だろうか。

そんな彼も、今回ばかりは真剣な雰囲気を消さなかった。そして逆に、私も微笑みを消す事はなかった。

「…ああ。夢を捨てるなら、俺は止めない」

ようやく彼の口から出されたのは、私の考えを受け入れるものだった。

多少残念に思いつつも、それが当然だと思う。今まで話していて能動的な人とは思わなかったから、今私のために空へ連れて来てくれたことは素直に嬉しい。だから、これで十分。

自分を納得させ、一言お礼を言つてこの散歩を終わりにしよう。そう考え、口を開こうとした。

「……止めはしないが、せめてお前が目指した場所を、俺に見せてくれないか？」

「…え？」

続いた意外すぎる言葉に、おもわず思考が止まった。そんなレイカーを気にすることなく、ウルフは言葉を紡いだ。

「言つたら、今回の目的はお前への謝罪だ。だがお前は謝罪なんてしなくてもいいと言う。」

なら、今度はお願いだ。お前が目指した夢を、お前が目指した場所を、全てを犠牲にしても辿り着きたかった高みを、俺のこの目に見せて欲しい」

そこまで聞いても思考は動こうとしない。疑問が溢れるかと思えば、勝手に頭が都合のいい解釈を生み出してしまう。

これも私のためで気を使ってくれてるんだとか。夢を捨てるという辛さを共有してくれようとしてるんだとか。そんな考えが湧き出てくる。

それと同時に、ただ責任を感じているだけとか、ただの思いつきなんじゃないかという考えも湧き出てきた。

そして、もう一つ。

この人と、思いを共有したい。そんな願いも生まれ始めた。

サツちゃんには理解されなかった。ういういにも難色を示された。カレンにも賛同されなかった。グラフにもいい顔はされなかった。

だから独りで目指してきた。何を言われ、どんな壁にぶつかつても独りで乗り越えてきた。なら、最後くらいは、壁から降りるときくらいは、誰かに捕まってもいいかもしれない。

「…分かりました。一緒に、空の果てに行きましょう。」

そこで、私が夢を捨てるのを見届けてください」

「…ああ。任せろ」

小さく答えると彼は先程よりも早くエネミーに高度を上げさせた。下を見ると、既に地面は途轍もなく遠く見える。その後上を見ると、まだまだ果てしない空が続いている。

…私が目指していた場所の高さを、改めて実感した。でも、まだだ。こんな高さじゃ足りない。もつと、もつと高くと心が訴えてくる。

高く、飛びたい。

無限の世界

高い高い空の上。レイカーと話してから何分経っただろうか。

現在地は上空……何kmだろう？

感覚的にはもう30kmは超えてると思う。宇宙までの距離は地上から100kmらしいのでそこまでいく覚悟はしておいた方がいいかもしれない。

しかし目元問題が一つある。アバターでありソーシャルカメラを通じた仮想空間なので凍死や窒息死はないが、仮想空間故にソーシャルカメラがカバー出来る範囲も限界があるのではないか、という事だ。

来年あたりにヘルメス・コードという東太平洋上にある宇宙エレベーターに、ソーシャルカメラを実装するらしいがいかんせんそれは先の話。今この状況では期待できないだろう。それ以前にカメラは内向きだろうからあっても意味ない気がするけど。

まあ不確定要素を懸念しても仕方がない。そう思い直して、俺は視線をレイカーに向けた。

夢を見せてくれと頼んだ後から会話は一度もない。俺は黙々とエネミーを操作し、レイカーはずっと静かに座っている。

時折下を見て高さを確認しては、上を見てまだ満足していないと言わんばかりにこちらを見つめてくる。それを受け止め、また果てしない高みへ上っていく。

それを繰り返していた。

しかし、当然俺は時間を無駄にしていたわけではない。ぼつちが誇るのには深き思索にある。本来対人関係に割かれるべき時間を全て自分一人に向け、内省と反省と後悔と妄想と想像と空想とを繰り返し、思想と哲学にまで至ってなお余りある思考力を自在に使用することが出来るのだ。

俺はそれを使い、レイカーの観察と理解に励んでいた。信じられるのは己の観察眼のみ。あと小町。むしろ小町の方が信じられるまである。小町にお金の溜まる不思議な壺を売られたら買う自信もある。話がずれた。

兎にも角にもレイカーを理解しない限りは、空へ辿り着いても流れで終わってしまうだろう。

だが分析すればするほど、レイカーを止めるのを躊躇ってしまう自分が出てくる。

正確な時間はわからない。それでも年単位でレイカーは空を目指してきたんだ。レベル9の俺が言うのもなんだが、このレベルに上がるまでかかった体感時間は半端じゃない。つまりそれだけの時間を、こいつは独りで努力し続けたんだ。

……そう、独りだ。レイカーは同じレギオンのメンバーにすら賛同されなかったと言っていた。つまり、否定はされなくともレイカーにとっては孤独に感じていたということだろう。

…正直、尊敬する。たった独りで頑張り続けることの大変さは、少しは分かっているつもりだ。加速世界でなら、俺も同じような事をしているから。

でも、その思いで勝っている気は全くしない。俺は小町のため。レイカーは自分の為にやっているから。

努力というのは、他人の為にやるより自分の為にやる方が途轍もなく難しい。

当然のことだが、努力をただ始めるだけなら自分の為の方が簡単だ。やりたいから、気になるから、出来そうだからと何でも理由になる。場合によっては皆がやってるから、親がやれと言ったからなど、始める理由すら他人になるかもしれないが。

しかし、そこからだ。そこから先に踏み込める人間は相当少ない。部活や趣味に、他人以上の努力に励もうとする人間が全体の何%いるだろうか。

部活が終われば同じ部の人間と駄弁って帰り、趣味は気分が乗った時だけで終わりにするのが当たり前だ。

別にそれが悪いとは言わない。むしろ普通の事だ。本気でオリンピックに出ようなんて考えていないだろうし、本気で作家や漫画家になれるとも思っていないだろう。

だからこそ、自分のための努力というのは難しい。誰かの為に努力するということは、努力に理由と言い訳が付けられるということだ。始める理由と同じだ。皆がやってるから俺もやろう、とか親に言われて仕方なく、とか言ってれば本気じゃなかったただの仕方なくやっただけだからだと、あらゆる結果に言い訳ができちまう。

しかし、自分のための努力だとそうはいかない。

ここまでで十分だと語りかけてくる心を見無視し、まだやるのかと叫び続ける身体に鞭を打ち付け、よくやったと膨れ上がる自尊心を押しさえ続けなければならぬ。

目に見える結果が出なければ尚更だ。やつても無駄だと諦念が溢れ返り、なぜ出来ないのだと現実に見下され、最後に自らの滑稽さを自覚してしまう。

レイカーはこれを何度繰り返してきたのだろう。飛ぶための努力をしても飛距離は伸びず、友人達には呆れられ、身を削ろうとも現実を突きつけられる。

そこに全く努力していない存在が、自分を嘲笑うかのように己の夢を踏み越えていった。諦めるには、十二分の理由だ。

それでも、認められない。どうして独りで頑張ってきた人間が、否定されなきゃいけないんだ。有田が悪いなんて言わない。何が悪いと言えば運が悪い、だなんてくだらない言葉遊びをするつもりもない。

何度思考を繰り返しても同じ考えに辿り着いてしまう、まるで1＋1＝？という問いの？の答えをひたすら求めているような錯覚に陥りながら、俺はずっと身構え続ける。

これから辿り着く空の果てでレイカーは、そして俺は何を思うのかを。そこで何が起き、何が出来るのかを。止まらない思考の中で、ただただ、考え続けた。

☆☆☆

地上およそ100km地点

「ここまで、か」

「そう、みたいですわね」

あれからさらに数時間。俺たちはとうとう最上空まで辿り着いた。先ほどまで羽ばたき続け、上昇を続けていたエネミーが遂に高度を上げられなくなったのだ。

「もう推力が発生しないのか。この世界にちゃんとした空気のようなものがある事に驚くべきなのか、それとも拘りすぎなGMに呆れればいいのか…」

ボヤきながら深呼吸をしてみる。しかしこれといって違和感はない。臓器がない上、そもそも仮想世界なので酸素そのものが必要ないからか、薄いらしい空気にも何も感じることは無かった。

それでもここが頂上である事には変わりはない。これ以上飛べないと言うのなら、ここが『空の果て』で間違いないのだから。

静かに周りの風景を見回す。

地球だ。巨大な星である地球を、まさに今俺たちは見下ろしていた。下界では地平線に沈みかけていた太陽は、広大な地球に隠れながらも圧倒的な存在感を醸し出している。かつて突っ切った雲は、複雑な模様を描きながら地球というキャンパスを白い絵の具で彩っている。

上に見えるのは、超が付くほど夥しい数の星々が煌めいている姿だった。まだ宇宙には実装されていないはずのソーシヤルカメラが撮った映像なのか、それともただのデータとして存在しているものを

貼り付けただけなのか、それはわからない。それでもこの写真の中に入り込んだかのような風景は、確かに俺の心を揺さぶっていた。

この巨大さに羨望を、この雄大さに敗北感を、この極大さに未知の恐怖を。全てを忘れてこの空間に身を委ねたくなくなってしまった。

だが忘れてはいけない。ここに来た目的は俺の前で同じように空を、太陽を、地球を、そして宇宙を見ているスカイ・レイカーなことから。

目の前のレイカーは視線をある一点に絞り、それを食い入るように見つめている。それに倣い、俺もその一点のみに眼を凝らすと、そこには、地表を宇宙の冷氣から守るように包み込む、薄い空色のヴェールが存在した。

そのヴェールはまるで宇宙と地球との境界線、^{スカイ}空を象徴するかのように淡く、ささやかに輝いていた。

「……………あの、儂いスカイブルーのラインが……………」
唐突に紡ぎ出された囁きが、レイカーの思念そのもののように意識を刺激した。

「私が目指し、夢見て、時として憎み、そして諦めようとしている空の全てなのですね」

言葉につられるかのように夕焼け色の両眼から、大粒の涙が溢れ、零れて、ふわりと虚空に漂った。やがてその涙は空に撃ち落とされるかのように、極小の重力に引かれて落ちていく。

上げられていた視線はこちらを向き、この状況を噛みしめるかのようにレイカーは言葉を奏でた。

「ありがとうございます、狼さん。ここに來ることが出来て、この光景が見られて、本当に良かった」

「…そうか。」

……………それで、夢は捨てられそうか？」

「……………ええ。ここに來て、ようやく悟れた気がします」

スツと膝下を隠していたスカートを捲り、亡くなってしまった足を愛でるように撫でた。

「…この脚を失わせ続けていたのは、執着ではなく、恐れだったのです

ね。空という限界を、本当の空の大きさを知ってしまうのを、夢が終わるのを恐れていたみたいです。自由な空を望んでいたのに、自らの思い込みで世界を狭めていたみたいです」

嘲笑するように、そして悔いるように、しかし嬉しそうにレイカーは己の発見を語っていく。

「でも、違った。この世界は……無限、なのです」

謎は全て解け、未知は全て暴かれたと言わんばかりに晴れやかにレイカーは言つてのけた。

ああ、確かに、この世界は無限だ。あれだけの時間をかけて空に昇ったのに、まだまだ終わりは見えてこない。小さく光っている星は遙か彼方であり、そこに至ってもまだ先がある。目の前で全貌を見せている地球もまた、大地は遥か下にあるのだ。

…そんな状況に囲まれているからだろうか。レイカーの次の言葉が、この先の結末が、完全に予測できてしまった。

…それからすぐ、レイカーの口から予想していた言葉が吐き出された。

「それが知れて、今度こそ、私は満足です」

登り始めの頃とは違う、今度こそ悔いもなくした晴れやかな声色だ。それはおれにとっての敗北宣言にも等しい。『ここを目指す気はもうない』と、言われたようなものなのだから。

落胆は…あまりなかった。心のどこかで、きっと無理だろうという気持ちが強かったのかもしれない。

この打算まみれの提案をしたのが、人との関わりを拒否し続けた俺だ。成功させようなど分不相応で、失敗するのが妥当なのだろう。俺のせいで諦めさせてしまった夢をこれ以上荒らすのも不粋というものだ。夢も宝も腐る前に捨てた方が、腐り果てて絶望するよりはマシだろう。

……せめて、マイナスに傾いていた状態からプラマイゼロくらいには持っていかれたらとうとうと自惚れながら、今度こそ、終わりにする。夢

を諦めさせ、踏み荒らした俺には、もうそれ以外の選択肢は残っていない。

「……レイカー」

…戻ろうぜ。

そう、続けようとした。その寸前、レイカーが何気なくしたたった一つモーションが、やけに目に付いた。下を見下ろし、そして空を見上げる。

ここに来るまで、何度も何度も見た動作。エネミーを操作する俺に對して、もつと高く上れのサイン。最後のアイコンタクトは無かったが、確かにその動作をレイカーは行ったのだ。

それだけで、ただそれだけで、今まで考え続けた1+1=2?の新しい答えが見えた気がした。そう、まさにこれはくだらないダジャレのような、単純ななぞなぞのような、見方の違い。

…なるほどな。1+1=2と言われる中で1+1=田という答えを出した奴は、実は天才なのかもしれない。すでに分かりきってる答えを覆す奴を、正解だと誰もが分かっている答え以外の答えを出せる奴を、この式をただ適当に考えたかもしれない奴を、今だけが拍手喝采しながら賞賛してやろう。

全ては勘違い。たった一つ、その前提を覆すだけで全ての答えが変わっていく。

…その前提とは、

レイカーが目指していた場所は、空なんてちっぽけな場所じゃないってことだ。

……本当に、このゲームが素顔を晒さないゲームでよかった。きつと今の俺の顔は凄まじく気持ち悪いだろう。

そう思えるくらい、俺はニヤついていた。

レイカーが目指していた場所は、今いる空の頂上、その更にも上。
そこを飛ぶためには翼ではあまりにも力不足で、そもそも空気や重力に縛られるような場所とはあまりにもかけ離れた、誰もが一度は行きたいと思っただことがあるであろう場所。

宇宙だ。

見たことは殆どないが、レイカーの強化外装、《ゲイル・スラストター》は噴射型推進器だったはずだ。大地を走っている俺たちとは違う、空を駆け巡るシルバー・クロウとも違う。

この広過ぎる世界をたった一人、自由に飛べる宇宙戦用のアバター。それが、空を見晴らす人。空の頂上すらも見晴らせる、長く苦しんだ少女の、本当の姿だ。

この事を早く教えなければ。不思議な義務感に任せるように俺は口を開いた。

『お前の夢はまだ終わってない』

その、たった一言が、俺は言えなかった。

感情で動き出そうとする俺を、理性で動かそうとするもう一人の俺が押しつぶす。開いた口は死にかけの魚のように動くのに、そこからは一言たりとも言葉が出てこなかった。

そんな俺を諫めるように、理性が俺に問いかける。

『よく考えろ、言つてどうする？その考えが正しいという確証でもあるのか？間違つていて、また淡い希望を持たせて裏切つたらどうする？もし合つてたとしても、宇宙ステージが出るまで気長に待てとでも言うつもりか？何年も挑み続けていた夢にようやく引きどころ見つけたレイカーに、これ以上の苦痛を強いるのか？間接的に夢を諦めさせた俺が、まだ荒らし足りないのか？』

感情で動く愚かしさを、俺はもう忘れたのか？』

理性の俺が語りかけるだけで、頭はどんどん冷めていく。

ラブレターの事を、小町の全損の事を、俺は忘れたのか？理性的に行動していれば、友達がいらない俺にラブレターが来た時点で怪しいと気づけたはずだ。理性的に行動していれば、あの鉄板野郎が消えた時点で近くに潜んでいる事に気づけたはずだ。

これ以上、失敗を繰り返してはいけない。吐き出した言葉は呑み込めないが、込み上げた言葉は呑み込むことができる。

「…そろそろ帰るぞ。時間も時間だしな」

感情で出かけた言葉を理性で包み込んで無難なセリフを作り出し、エネミーを操作して高度を下げ始める。その流れに乗るようにレイカーに背を向け、エネミーの頭の先にある地面に目を向けた。

…高い。もしいまここで飛び降りたら、地上に落ちる前に摩擦エネルギーで消滅してしまうだろう。そうなれば死亡マークは地上に出来るのだろうか？それならこのまま降りていくより早く地上につけるかもしれないな。

なんて、冷めた頭に腐つた目で惚けた事を考える。そうでもしないと意識してしまいそうになるんだ。俺の真後ろから向けられる視線に。

見てはいなくとも感じるソレは、俺を見透かすように突き刺さってくる。だが、その視線の持ち主はそれ以上先には踏み込んでこなかつ

た。

元々俺とレイカーはいつも話し続けているような関係じゃない。普段からよく話すのはお茶会の時くらいで、景色を眺める時は互いに黙っている。互いが話す時に話し、互いがゆっくりしたい時は黙り、片方が話したくない時は無理に会話を作らない。

そんな互いをなんとなくに理解して、相手の意志を尊重し、でも自分の意志も譲らない。この浅過ぎなくて深すぎない関係が、俺は嫌いじゃなかった。

だからいま、こんな状態になってしまっているのは仕方がないことなのかもしれない。

後ろから感じた視線はすでに消え、なのに背中には新しい重みが増えられている。そこまで広くないエネミーの上で、二人のアバターが背中を合わせて座っている姿は、周りから見れば珍妙な光景かもしれない。

視線を外すから無視するな、なんて都合のいい言葉がレイカーから発せられたような錯覚がした。何も伝えてないし何も話さない。それなのに不思議と安心する感覚を味わいながら、ゆっくりと空を舞い降りていく。

「…じゃあな」

「ええ。さよなら、狼さん」

心地よい沈黙はホームまで続き、別れる時もあった一言ずつ。それ以上の言葉は必要ないと、互いに分かっているのだ。

ほぼ同時に入った脱出ポータルの中で一瞬だけ目があつた後、俺たちは現実の身体に戻っていった。

☆☆☆

「……………」

現実に戻ってきた俺は直ぐにベッドに仰向けでダイブし、いつもと

変わりばえのない天井を眺めていた。

ホームに向かう時に決めたことを変えるつもりはない。夢を諦めさせた俺に、これ以上レイカーの敷地を踏み荒らす気はない。これからは何か用事や緊急事態にでもならない限り、あの土地を踏む機会はないだろう。

「……………はあ」

多少の名残惜しさを感じながら、俺は部屋の明かりを消して目を瞑る。

改めて振り返ると今日は激動の日だった。リアルレイカーとの対面に始まり、完全飛行型の登場。黒雪との思い出話に、あいつとの関係をリセットした。そして最後に宇宙旅行もどきとレイカーホームとの決別。

……………今日だけで関係が二つもリセット、いや後者はデリートか。最近は脳の加速だけじゃなくぼっち化の加速もしてるのか。

いやぼっちの加速ってなんだよ。一人からさらに減ってぼっち1／2にでもなるのかね。

『アイコン♪』

「…あ？」

今にも妄想と共に寝ようとした俺を現実に引き戻したのは一つの着信音。薄眼を開けると視界の端にメールが届いていることを知らせるアイコンが現れていた。

「小町か？それとも……………他に候補がないな。つまり小町か」

ダルい腕を動かし、アイコンをタッチする。差出人は……………

『倉崎楓子』

「……………レイカー？」

スイツと画面をスライドさせ、メールの本文へ移し替える。

『また近いうちに来てください。』

甘いお菓子を留意して待っています。

おやすみなさい。

スカイ・レイカー』

……どうやら早速用事が出来てしまったらしい。行かないと決め
たが、呼ばれてしまったからには仕方がない。

目の前の画面に指を走らせ、短い文を書き上げる。

『了解。』

おやすみ』

これでよし。

送信されたことを確認し、ニューロリンカーを外す。

無意識のうちに上がってしまった口角は、きつと俺の気のせい
だろう。そう断じてニューロリンカーを枕元に放り投げ、今度こそ俺
は泥のように眠り始めた。

次の日、あまりに寝過ぎて学校に遅刻したのはまた、別の話し。

…起こせよ上月。

幕間

日常カムバック

激動の一日の翌日。俺は学校には間に合わないと悟った後、一日くらい休んでも何も言われんだろうと結論付けて惰眠を貪っていた。クラスメイトが勉強に張り付いているであろう中で一人、椅子の背もたれに寄りかかりながら寝ている間に送られていた最愛の妹からのボイスメッセージを再生した。

『やつぽーお兄ちゃん！そっちの生活どう？エンジヨイしてる？』

小町はとつてもエンジヨイしてあります！温泉とか温泉卵とか温泉饅頭とかちよー美味しかったよ！

今日は旅行のシメにデイスティニーランド寄ってから帰るから、家に着くのは夜遅くなるかなー。

早くお兄ちゃんに会いたいのを我慢して、小町はお兄ちゃんの方まで楽しんでくるからね！あ、今の小町的にポイント高い！』

メッセージはここで終わっている。お前温泉飲んじやったのかとか旅行の楽しみ温泉だけかよとか聴きたくなかったが、久しぶりに妹の声が聞けて多少なりとも俺もテンションが上がっているらしい。まあ旅行のシメがデイスティニーとはな。さすが我が妹、分かっているらしい。

「……てか上月どうすんだよ」

俺はリビングのソファアで笑いながらテレビを見ているツインテール娘に目を向ける。

三日間同じ屋根の下に暮らしていたにもかかわらず、あまりに忙しくて初日以外はまるで背景のように存在をスルーしていた。しかし家族が帰ってきた時に小学生がいるのはさすがにマズイよな……。

「なあ上月。今日みんな帰ってくるらしいけど、お前いつまで家にいるの？」

ん？と首を傾げながら上月はテレビに向いていた顔をこちらに向

ける。一瞬天使モードに戻ったかのようなあどけなさを醸し出していたが、要件を察するとうげーとでも言いたげに顔を歪めた。

「あーマジかよ。もうそんなになるのか」

ソファアーに体を投げ出し、足をパタパタさせながら思考に耽る姿は小町に通ずるものがある。その外見に中身が備われば完璧だったのに…。

「……しゃーねー。そろそろ迎えを呼ぶか」

「迎え？」

「そつ」

足をパタパタさせるのを止め、今度は虚空にタイピングを始める。喧嘩したと言っていた寮長でも呼ぶのだろうか。

しかしどう説明する気だ？家出少女を匿ってくれる優しいお兄さんとか怪し過ぎるぞ。相手が聞き分けのない大人だった場合即通報もありえる。しかも事故とはいえ上月を撫で回したのは事実であつて…。

あれ、詰んでる？

「オーケーい。夕方杉並と練馬の半ばにある公園で待ち合わせだ」

俺の苦悩を知りもせず上月はとつと迎えを呼んだらしい。まあうちに呼んだわけじゃなさそうだから、ひとりで行ってもらえば問題ないか…。

「おいウルフ、あんたも付き添いな」

「は？」

…とか思ってた数秒前の俺を殴りたい。

この堕天使ちゃんはどうしても俺を追い詰めたいらしいな。だが無意味だ。

せつかくの休み（違うけど）、俺はこの家を梃子でも動かんど！

「嫌に決まってるんだろ。なんで俺が…」

「お・に・い・ちゃん♪」

俺の言葉を遮り、鼻と鼻がくつつきそうになるほどの距離まで詰めてくる。俺が思わず仰け反るのと同時に上月も一歩下がり、首にある赤いニューロリンカーを軽く叩いた。そして鼻歌でも歌いだしそう

な声色で、今まで見た中でも最高の笑みで、目の前の天使はこう言った。

「け・い・さ・っ♪」

……天使の口から出たのは悪魔の言葉。それは帝王の如き絶対性を持ち、平民たる俺はただただ平服するしかなかった。

「……どこまでもお供いたします」

☆☆☆

「お供するとは言ったけどな……」

気怠い表情を隠しもせず、俺は昼に脅された通り上月の送迎に付き添っていた。

道中の上月は外出用の顔で明るく振る舞い、小さい頃の小町を連想させてくれる。それだけなら素晴らしいのだが……

「お兄ちゃん、わたしのどかわいちゃった！ジュース買って！」

「ねえお兄ちゃん。あんな所にクレープが売ってるよ？わたし食べたいな〜」

「お兄ちゃんそこにサーティワンがあるよ！今日ダブルが安いんだって！これを買わない手はないよ！」

……うん、ほんとに妹そっくりだわ。甘え上手というか、あざといというか。てかそれに流されちゃう俺もダメな気がする。まあ古今東西『可愛いは正義』という世界の理もあるから問題はないけどな。俺の金以外は。

「…ねえお前何しに来たの？お前を送り届けるはずが、俺の金が世界

の経済に送り出されてるんだけど」

「世界？よく分からないけど、お兄ちゃん世界に何かを送り出せるなんて凄いな！」

「…お前の本性知らなけりや笑って流せたんだがなあ」

いかにせん、今の性格が猫の皮だと知っていると馬鹿にされているようにしか思えない。

それに軽く言ってるが中学生、しかも小町じゃなく俺なのだからもらえる小遣いは少ないのだ。あつて困るものではないが、なくて困ることは沢山ある。少し金策についても模索すべきかもしれないな。

働く…のは嫌だから、働かなくても稼げる方法を。

「ふう、ぐちそうさま。おい、ついたぞ」

「…いきなり戻るなよ」

猫を被っていると分かっているけど、やはり天使モードの方が個人的に好きだ。というか素が怖い。天使モードとの差がありすぎて二重人格を疑うレベル。ついでに女性全員の表の顔を疑うまでである。

俺を置いて公園の中に進む上月の後を追いつ、俺も公園へと足を踏み入れる。平日だけあつて学生とおもしろき人間は少ない。精々幼稚園から保育園程度の子供と同伴の親が何人かいる程度だ。

そこまで大きくない公園の中、ポツポツと離れて置いてあるベンチの一つに上月は迷うことなく進んでいく。その先には、上月より一つ二つ大きい程度の男子生徒が視界の端をチラチラと落ち着きなく見ながら座っていた。おそらく時計でも見ながら待ち合わせの相手を待っているのだろう。

それが正解だと教えるかのように、上月を発見した男子が凄い勢いで上月に駆け寄っていった。

「に、ニコちゃん…どこ行ってたの!?たしかに寮長さんも酷いと思っただけど、三日間も帰らないなんて！おなかすいてない？泊まる場所はどしたの？まさか野宿とか…！」

「してねーから。落ち着けて」

詰め寄る男子の頭に軽いチョップを喰らわせる上月。

というか素の方で接していることに少し驚いた。いくらあれが外

行き用だとしても、完全な部外者だけにしか見せないわけではないだろう。

つまりそれだけあの男を信頼しているということか。プロミネンスのメンバーか、それとも親か子だったりしてな。

まあ何はともあれ無事合流出来て、しかも通報直球ルートも回避したし、俺は帰るかね。散財しかしてないけど。

「おいこらウルフ、ちよっと待てよ」

「うおっ!?!」

上月の待ち合わせ相手に存在を認識されていないことをいいことに、面識を持つ前に退散しようと思ひ公園の入り口に歩き出したのだが、随分と目ざといよ形で上月に手を掴まれ、その男子の前に放り出された。

そいつもいきなり目の前に年上の男が現れたからか、それとも上月が男を連れてきたからか、目に見えるほどの動揺を浮かべ始めた。

「ににににニコちゃん!!?もしかしてこの人のうちに行ってたの!?!? お持ち帰り!?!? 事案!?!? それとも警察を…」

「さて、落ち着け、K.O.O.になれ、いやC.O.O.になれ。」

妹だ妹。妹が上月の友達で、俺は見送りを頼まれたんだよ」

慌てていても人の話は聴ける子のようなので、この数日間を嘘と真実を織り交ぜながら説明すると、少しずつ落ち着いていった。さすがに小町どころか親も居なかったと知ったらまた通報ルートが開通されちまうから慎重になった。

：うん、そう考えると落ち着いてくれて本当によかった。通報ルートを回避出来てなかった訳ではなかったようだ。もう永久に復活しないでいてくれ。

「ま、それにこいつもバーストリンカーだし、そのうえ王だからな。何かされたら加速世界って戦場もあったからそこまで心配しなくても大丈夫だよ」

「アホか。コマンド言えなくなったらどっちにしるだろ。てか人がいるところでそういう話はよせ」

「大丈夫だよ。この近辺に学校はねえし、学校終わったばっかできき

なりここに直行してくる奴もいないだろうしな」

いや目の前にいるだろうが、お前の連れが。それにサラツと王なのバラすの辞めてくれませんかねえ。

この後の流れは分かるぞ。「え、王？何色!?…透明？なにそれパチモン？」みたいに疑われるんだろう。聞いたことないからとパチモン扱いされたことを何度も盗み聞きしたもんだ。

しかし少年はさきほどのように騒ぐでもなく、語尾を縮めて呟くだけだった。

「お、王なんですか。ってことはレベル9、なんですよね…」

…ん？思った以上に反応がない。というよりは…なんだ？卑屈さというか羨望というか、それに似たようなものを感じる。それにさつきから気になっていたんだが、こいつ上月に対して負い目のようなものがある気がするな。性格もあるだろうが…なんというか、店長に頭が上がらないバイトのような…。…ただ上月の性格のせいな気がしてきた。

「なんでもいいが、そろそろ解散しようぜ。遅すぎるわけでもないが小学生がずつといてもいい時間でもないぞ。帰る時間もあるし」

「あーそうだな、そろそろ帰つか。おいウルフ、連絡先寄越せ」

「…ほらよ」

「お、おう。なんだ、案外あっさり渡すんだな」

「いや、どうせ渡すことになりそうだし」

国家権力には逆らえませんが、勘違いでも先に撫でまわした前科があるし。

「…はあ。改めてそいつは水に流すよ。三日間世話になったしな。ついでに…ほれ、私の連絡先もやる。寂しくなったらいつでも連絡してね、おにーちゃん♪」

「はいはい、あざといあざとい」
「うっせ」

上月はゲシツと俺の足を軽く蹴り、笑いながら迎えに来た少年と去って行った。

厄介ごとは昨日で終わり、頭を悩ます墮天使ちゃんも帰宅。今度こ

そすべてを忘れて日常に戻れそうだ。

☆☆☆

二日連続同じような動作で仰向けにベットにダイブする。そこま
で疲れてはいないが、二日連続で休むのはマズイのでタイマーをセッ
トしていつでも眠れる状態にしておく。

やることなくなると頭が暇になり、また色々考えてしまう。今回
頭に浮かんだのは、先ほど別れた上月のことだった。寮監さんに怒ら
れたのかとか、俺に飛び火が来ないかとか考え出すとキリがない。

「…まあそれでも、上月もこれで安心しろ」

突然だが、俺は自分がなかなか賢いと思ってる。ブレイン・バー
ストで精神年齢の上昇に加え、様々な謀を見てきたからか現実でも行
動の思惑を読む癖ができてしまった。

かつて小町が言っていた。F^{女性}型アバターはブレイン・バーストをプ
レイしている、無性に現実の男性に恐怖を感じるらしい。強い自
分、硬いアバターに覆われている仮想世界と違い、生身の弱い自分が
晒されている事自体が怖いらしい。

それは王である上月も、いや王だからこそ不安が何倍もあるだろ
う。特に上月はまだ小学生。中学生の男子が相手となれば手も足も
出ないはずだ。

だからあいつは慎重に保険をかけた。最低でも二人俺のリアルを
知っている存在を作ること、「私の情報を売ればお前も道連れだ」と
俺に示すことができた。

そして連絡を交換することで交換した時の状態、上月のリア友（リ
ア充の友達ではない）が存在し、かつそいつもバーストリンカーであ
ることを意識させて自分の安全をより強固にした。

つまり…

「俺にはなんの関係もないな」

連絡先を交換しても、それは互いの保険であって交流するためのものではない。俺はあいつに連絡しないし、あいつも俺に連絡することはないだろう。

ただリアルを知っているというだけの関係が続くだけ。それならこれ以上考える必要もないと結論付け、俺は上月について考えるのをやめた。

そして考えるのをやめたならば後は寝るだけだ。タイマーがかかっていることを確認し、俺はゆっくり意識を……

「たっだいまー！小町ちゃんのお帰りーい！」

…手放せなかった。むしろがっちりキャッチされるまでであった。頭を働かせないなら身体を働かせるとの妹神のお告げかもしれないな。

再びくだらないことに動き出した頭をよそに、ドタドタと聞こえる階段に俺は足を向けた。

休日之二組

黒雪、レイカー、上月。この三人の問題ごとが全て終わってから何日たっただろうか。

激動過ぎる一日ベスト5に入りそうなくらいイベントが続けて起こった日+αだったが、それ以降は平々凡々普通の毎日。むしろ黒雪がいない分、今までよりも平和だった気がする。

……その日から二週間ほどたった土曜日。つまり今日、再び俺にとってよろしくないイベントが起こっていた。

「狼さん、デートをしましょう」

「……………は？」

先ほどから寒気がするほどの笑顔で対面に座り、俺如きには到底理解できない言葉を発したのは、スカイ・レイカーこと倉崎楓子先輩。昨日の夜、突然この場所に呼び出すメールが入ったのだ。

呼び出されたのは梅郷中学から程よく近く、値段もリーズナブルでお財布に優しく、なかなかいい雰囲気なカフェ。リア充ほしいほいな場所であり、休日効果も相成ってカップルの数も多い。あーんとか、口にご飯粒ついてるよーとかいってイチヤイチャしてる奴らが大量にいる場所なのだ。リア充が爆発出来たら連鎖するレベル。

「……………ねえ狼さん。私は今すぐこーく怒っています。なんでだと思います？」

殺気と共に意識が無理矢理倉崎先輩に引き戻される。

余所見したら殺気を放たれるなんて緊張感があり過ぎるな。さらに怒っているのに男をデートに誘うなんて…。謎が謎を呼ぶぜ。

……それはともかくとしても、真面目に考えても怒っている理由な

んで見当がつかない。そも二週間まるつきり会ってない相手の心境を読めだなんて無理ゲーにも程がある。

ならば、ここは俺の最も身近な女子である小町を基準に考えてみよう。

小町が怒る理由：冷蔵庫のプリンを勝手に食べた時、買ってきたアイスを勝手に食べた時、出かけてお土産を買うのを忘れた時。ここから導き出される答えは……！

「……ダイエット中とか？」

「殴りますよ？」

「嘘ですごめんなさい冗談です」

ふええ…軽く上げた拳に死のオーラを感じるよう。いやまじ怖い。椅子に座って無かったら瞬時に土下座するレベルで怖い。てか今も机に付けた頭が上げられないくらいに怖い。あと怖い。

「……そんなに太ってるように見えるんですかね……」

…小さく呟きながら、自分のお腹をプニツと軽く摘まむ倉崎先輩が視界の端に映った。

どちらかというとおなかよりも少し上の箇所が見るからに豊かなので勘違いを…。いやほんとすみません。女子との関わりとか小町や黒雪しかなくて分からないんです。ついでに黒雪の怒った記憶は制服にカレーうどんの汁が飛んだ時でした。

「……すみません降参で」

「はあ、仕方がないですね」

俺が頭を上げると同時に、自然な動作で溜息を吐きつつお腹にやっていた手を頭に当てる。その流麗な仕草に感嘆しつつも俺は倉崎先輩の言葉を待った。

「二週間」

「……」

「これがなんの数字か分かりますか？」

「……俺と先輩が最後に会ってからの期間……だよな」

「そうです」

…よかった。さらっと答えちゃったけど、これで間違ってたらまた

恥をかくところだった。勘違い……自意識過剰……ナル谷……うつ、頭が。

「……えーと、それで？」

「…なんで会いに来てくれなかったんですか？」

「え？」

「待ってますって送ったのに…」

「……あー」

忘れてた…わけじゃない。ただなんか気まずいというか、1日2日で行くのも鬱陶しく思われるかもなーとか、小町の相手やプリキュアの視聴とかでタイミングを逃していたらいつのまにか二週間。時間が経つのは早かった。

「……まあ、その、なんだ。…悪い」

「…んー、まあいいです。ですからデートしましょう」

「いやその理屈はおかしい」

行くと約束したのに行かなかったのは俺が悪い。理由も大したことなかった事もあってそれは認めよう。だけど…

「俺とお前の関係は加速世界^{あつち}だけだろ。なんでわざわざ関係のないリアルで呼び出したんだよ」

そう、黒雪の時は緊急事態だったのでやむを得ないが、バーストリンカーがリアルで会うのはかなりリスクだ。俺はそんな気はないが、PKを仕掛けてくる奴もいるだろう。特に加速なんて力を持つもの同士、警戒はするに越したことはないはずだ。

「そうですね…」

うーん、と目を瞑り顎に手を当て考えてますのポーズをとる倉崎先輩。考えてる時点で何も考えてないのは明白なのだが、女の人の思考は邪魔しちゃいけないってばっちゃんが言ったので無言を貫き通す。

そして数秒で答えが出たのか、ピコーンと効果音が聞こえそうな仕事で指を立てた。

「狼さんをもっと知りたかったから。それじゃあダメですか？」

「……いやダメでしょ」

「むう。嘘ではないんですけど…」

…お、おう。ボソツと言うのやめてください惚れてしまいます。

そんな俺の心の叫びも聞かれず（聞かれても困るが）倉崎先輩は懐から一本のケーブルを取り出した。

「続きはこっちで話しましょうか」

そしてそのまま取り出したケーブルを自分のニューロリンカーに挿し、もう片方を俺の方に差し出してきた。その瞬間、店の中の視線が一気に集まった気がする。

直結。ニューロリンカーの防壁の99%を素通りできるので、基本これをするのは絶対的な信頼をおいた相手、家族だとか彼氏彼女とかだけと言われている。

その中で、さらにこんな昼間っから店の中で見せつけるように直結しようとするなんてカップルくらいしか考えられないだろう。俺が今の状況を第三者視点で見てたら、即座に呪詛を唱えてるだろうから周りの奴らの反応も分かんではない。でもこっちみんな。

「……ん」

このままフリーズしてても仕方がないので、取り敢えず受け取ることにした。ゆっくりと渡されたケーブルを掴み、これまたゆっくりと首に持っていく。

見られて困るものはないか、悪用されて困るものはないかと必死に稼いだ時間を使いつつも記憶を巡らせる。しかしよく考えると、普段よく使っているのは家にある親父のアカウントだし、消えて困るほどの連絡先はない。困るのは精々買った電子書籍くらいだ。なんだ問題ないじゃん。

『てかこれ二回目だな』

そも今まで何度も黒雪と直結してきたのだ。悪用されても最小限に、見られても特に困らないように整理しておく癖が知らずと付いてしまっていたのだろう。この二週間はぼっち飯だったから失念していた。

『さて、これでゆっくり話せますね』

『俺は直結してる時点でゆっくりできそうにないんですが…』

『それは二週間も来てくれなかった罰です』

倉崎先輩は周囲の視線など、まるで意に介してないように自然体だ。思考発声された声も淀みなく、むしろ少し楽しそうな声になっている。

俺が縮こまっているのを見て喜んでいいのか、このドSめ。

『…さて、もう少し楽しみたいですが本題に入りましょう』

わー待ってましたー。早く終わらせて帰らせてー。休日のぼっちパラダイスは7日のうち2日しかない貴重な時間なんだぞー。

まあ毎日がエブリデイでぼっちだから希少価値はそこまでありませんがね。

『狼さんに会ってもらいたい人…というよりは、その人のお願いを聞いて欲しいんです。そして、まずその人に会うためにする事があります』

『する事？…というか俺の意思は…』

『する事というのはですね…』

無視ですかそうですか。ええツツコミませんとも。

こういう強引なところは黒雪そっくりだ。これが類は友を呼ぶというやつか。…なるほど、俺がぼっちな理由の一つが解明された気がする。

しかし俺が世紀の大発見をしたとしても、倉崎先輩はまるで気にしない。俺は急速に目の腐敗が加速していくのを感じながら、倉崎先輩が首筋のニューロリンカーを小突くのをボーッと眺めていた。

『タッグ戦ですー！』

☆☆☆

同時刻、神田神保町に存在する大型書店の一角、そこに二人の少女が向かい合って座っていた。

一人は丸っこい目とこれまた丸っこい体をした、今加速世界を騒がせている完全飛行型アビリティを所持する少年、有田春雪。

もう一人は控えめな服に同じく控えめな髪型、そこに昨今では珍しい赤いプラスチックフレームの眼鏡をかけている、一昔前なら文学少女という言葉が相応しい少女。

書店という雰囲気にもマッチする少女と、書店とは些かミスマッチな少年という組み合わせ。それに加え、この二人はなんと直結をしているのだ。これに関心を示さない奴はいないとばかりに、近くに座っている女子高生は興味津々のご様子で二人を盗み見していた。

しかし二人は揃って互いの目を見たまま微動だにしようとしなかった。それもそのはず。現在二人は加速世界の中で対戦中なのだから。しかし対戦といってもこの二人が戦っているわけではない。タッグ戦と呼ばれる二対二の対戦だ。

そもこの二人がこうしているのは春雪ことシルバー・クロウがレベルアップしたことにまで遡る事になる。いや、この場合してしまっただけというべきか。

このブレイン・バーストというゲームは、レベルアップするには相應のバーストポイントを支払う必要がある。レベル1からレベル2に上がるためには300ポイントが必要だ。しかしハルユキのドジっ子スキルが発動し、レベルアップ可能になった対戦後すぐにレベルを上げてしまったのだ。その結果、ハルユキに残されたポイントは僅か8。全損一步前という状況に陥ってしまった。

そこで急遽ポイントを安全圏まで戻すため、新ネガ・ネビュラスに加わったシアン・パイルこと黛拓武により用心棒バウンサーに頼む事にしたのだ。

《用心棒バウンサー》

レベル2以下でポイント残高が危なくなったバーストリンカーに雇われ、依頼人が安全圏まで復帰できるまでのタッグマッチの相棒を務めているバーストリンカーの事をそう呼んだ。

その用心棒にハルユキは依頼したのだが、どこの因果作者のイタズラか、その用心棒本人に転倒という名のダイレクトアタックを決めてリアルを割るといおっちょこちょいうタクティクスを決め込んだのだ。

その先が今である。

バーストリンカーだけが感じられる僅かな間に乱入すること二回、乱入されること二回。合計四回のタッグ戦全てに勝利したハルユキのポイントは、充分安全圏といえる70台まで回復した。

ここまでくるとハルユキの気分も緩み、ほっとした気持ちになってくる。

『……きたの』

しかし、それだけでは問屋が卸さないとばかりに目の前の用心棒、今はフルダイブ用アバターのイタチの姿をしているバーストリンカー、《アクア・カレント》は小さく声を上げた。

『あ、あの。来たって、何が来たんですか?』

オドオドしつつも一戦三十分、フルではないにしてもそれなりに意思疎通をしてきた慣れか、囁む事なく聞くことができた。

それに対し、カレントは真っ直ぐハルユキの目を見て答えた。

『……あなたの最後の対戦相手』

『最後の…対戦相手、ですか』

ハルユキが言い終わる前にカレントはタン、タンと小さな手で対戦相手を指定し、《DUEL》と名のついたボタンが現れた。

『……あの、カレンさん』

『なに?』

『始まった時にも聞いた気がするですけど、マッチングリストの並びってレベル順ですよね?』

『そう』

『いまカレンさん、一番レベルが高い相手を選ぼうとしてたように見えたんですけど……』

『……………』

タンッ

『ちよつとおおおお?』

ハルユキの叫び虚しく、質問を無視してカレントはボタンを押した。それを言及する暇もなく、ピンクの豚型アバターは色を変え大き

さを変え、見慣れた銀色のアバターを纏っていた。

ここでようやく足元や景色が落ち着き、ハルユキ自身も周りを見る余裕が出てきた。

ステージは《魔都》。オブジェクトが異常に硬く、シルバー・クロウではまるで壊せないステージだ。その変わり地面は規則正しく組み合わされた石畳なので、地上戦では安心して戦える。飛んでしまえば関係ないっちゃないが。

「あ、対戦相手！」

対戦が始まった以上、カレンに文句を言っても仕方がないと判断し、すぐさま対戦相手の名前の確認を急いだ。そこに表示されていたのは……

・ Sky Raker (Level 8)

・ Clear Wolf (Level 9)

「え、ええええええええ!?」

休日の加速世界、そこに大きな悲鳴が響き渡った。

透明色の脅威？

東京のとある一角、ブレイン・バーストというゲームアプリをインストールしている者のみが入れる仮想空間で一つ、見れば誰もが気にして止まない対戦が行われていた。

少し前からタッグ戦を行っていたものなら間違いなく気づき、しかし決して対戦を挑まないであろう相手に、ついに一つのペアが対戦を申し込んだのだ。

しかも挑戦者は現在加速世界で知らぬ者なしといって過言ではないシルバー・クロウとバウンサーとして名が通っているアクア・カレント。これに興奮しない奴はモグリだと言わんばかりに観客のテンションは右肩上がりだ。

しかし、ほんの少し冷静になるだけで上がっていたテンションは、下降こそしなくとも停滞するだろう。その理由は、もう片方のペアに誰も挑まなかった理由と共に容易に理解できる。

- ・ Silver Crow (Level 2)
 - ・ Aqua Current (Level 1)
- V S
- ・ Sky Raker (Level 8)
 - ・ Clear Wolf (Level 9)

誰もが思った。

∴これはひどい。

ブレイン・バーストは『同レベル同ポテンシャル』を基本としている。もちろん多少なりとも差はあるだろうが、圧倒的な差はない。なのでレベルが相手より上というのはそれだけでアドバンテージになるのだ。

それだけではない。このゲームにおいて、当然ながらプレイヤーにはレベル上限が定められている。某モンスターゲータのようにLv100か、はたまた廃人作成ゲータのようにLv9999までいけるのか

?

答えは、それより圧倒的に少ない。lv10が最大である。

ゲームがある程度していれば納得できると思うが、ゲームそのものが手抜きでない限りレベル上限が低ければ低いほどレベリングにかかる時間が増えるといっていいたいだろう。さらに一つレベルがあがる度にてぎるステータスの差も想像に難くないはずだ。

さて、それを踏まえてもう一度対戦プレイヤー達を見て欲しい。

片やレベル初期値とその一つ上。片やレベル最大値寸前とその一つ下。差は歴然だ。単純なステータスなら天と地の差があり、クロウとカレントの敗北は確定しているように見えた。

観客もどつちが勝つかではなく、何分粘るかとか何故挑んだのかという話に移行している。

しかし始まったからにはひたすらバトル。どのプレイヤーもひたすら闘争心を……

「無理です！ぜつつつたいに無理ですつて！」

闘争心を……

「レベル8とレベル9つて……もう最強クラスですよ!!?しかも一人王ですよ!!?やれてもひたすら逃げるくらいしかできませんって！」

「速度の関係上あちらの方が速い。だから逃げることもできないと思うの」

「ならなんで挑んだんですか!!?」

……一部逃走心を燃やしていた。

ハルユキにとつて、王とは親である黒雪姫と同等の存在。つまり自分では手が届かない、遙か高みの存在となっている。

「えーと、えーと。たしか前にウルフ先輩のアドバイザーについて少しだけ聞いたことがあるんです。早く思い出さないと……」

とはいえ、口では逃走心丸出しでもハルユキだって始めから逃げる気なんぞはさらさらない。ゲーマーであるハルユキには、王と戦えることがビツクイベントなのは分かる。

だからこの対戦で少しでも学べることはないか。それをするために必要な記憶を、必死に思い起こしていた。

☆☆☆

「なに？クリア・ウルフの特性？」

たしかあれは二週間ほど前、幼馴染であるタクムと和解できたと思ったら今度は比企谷からの決別宣言をされた、その三日後だったか。

黒雪姫が退院する前にレベルアップしてみせると意気込んでいたハルユキはタクムの援助の元、様々なバーストリンカーと戦うと同時に、加速世界についての知識も取り入れていた。フィールドの属性、自分のアビリティの活用の仕方などをだ。

その中の一つ、アバターの色の特徴で気になったことがあった。基本的に赤なら遠隔、青なら近接、緑は防御に優れ、黄色は妨害に優れている。そんな基礎の基礎程度の知識だが、それでも疑問に思った。「…ええ。比企谷先輩の色って透明：なんですよ？でも教えてもらったカラーサークルに透明なんてないじゃないですか？だから参考までに教えてほしいかな…と」

比企谷の話を出した瞬間に黒雪姫の機嫌が直下したのを察し辞めようとも思ったが、ハルユキにとっても引いたらそこまで思い、とりあえず最後まで言い切った。さすがに三日程度で自分を拒絶した人間の話をするのもどうかと今更ながらに感じたので、これで断られたらそこまで思おうとしていたのだが、小さく咳払いをしてハルユキに向き合う黒雪姫を見るにどうやら答えてくれるようだ。

「…ふむ。まあ可愛い我が子が教えを請うているのだ。素直に教えてやりたいのは山々だが…正直私にも正確には分かっていないんだ」

「へ？黒雪姫先輩にも、ですか？」

「ああ。そもカラーサークルによる特性も説明書があるわけではないんだ。だから言ってしまうえばバーストリンカーが勝手に言っているようなものなんだよ。」

未だに黒や白の特性も分かっていない現状で、透明色の解明などは論外とまで言われている。……まああいつを記憶してる数少ない奴らからだかな」

「ほへえー」

黒雪姫の説明にハルユキは静かに感嘆の溜息を漏らす。ブレインバーストは2039年に配信されたはずなので、現実時間で既に5年以上、加速世界で換算すればそれ以上の時間が経っている。

それだけの時間があれば各々がこのゲームについて調べまくったはずだ。バーストリンカーの中には調べ物が得意なアバターだっていなくはないだろう。それでも解明されていない比企谷と黒雪姫の希少性に素直に驚いた。

それと同時に、加速世界初の完全飛行型アビリティという希少性でならその二人にすら勝っているかもしれないと思いきり口元が緩むが、自分はまだまだペーパー。気をぬく暇はないと己を律した。

「……だが、分かっていることも幾つかはある」

しかし話は終わらないらしい。微笑ましいものを見るような顔でハルユキをみる黒雪姫は、子としてはなんとも頼もしく見えた。

そんな親の言葉を聞き逃さんとしつかり耳を傾ける。

「透明色の特性かは判明していないが、彼奴の必殺技にはある特徴があるんだ」

「必殺技？通常技やアビリティにじゃなくてですか？」

「そうだ」

何人ものバーストリンカーを相手にしてきたが、色の特性は通常技やアビリティに強く出るとハルユキは思っている。

近接の青なら剣などの近接武器、遠隔の赤なら銃などの遠隔武器だったりだ。そうでなくても紫系統ならば必殺技ゲージを使わずに電気を放ってきたりする。もちろん必殺技は一層特性が出るのは間違いないが、それは相当珍しいものだと思った。

(いや、それを言ったら僕なんか必殺技を使っただって銀の特性なんて出ないじゃないか。それより今は先輩の話を聞かないと)

「そ、それでその特徴ってなんなんですか？」

「……それは」

ゴクリ、と自分の喉がなるのが聞こえる。特性が解明されていないアバターの特徴。希少な者はそれ相応の強さを備えているのが王道だ。エグい能力かもしれないし、ハイリスクハイリターンの代物かもしれない。期待と不安が入り混じる中、黒雪姫が口を開くの待った。

しかし、それは違う意味でハルユキを驚かせるものだった。

「それはな、平等さ」

「びよう、どう？」

「ああ。あいつの必殺技は全て、全プレイヤー全カラーに同効果をもたらす。まあ敵ではなく自分を対象とする必殺技も幾つかあるから一概に全てとも言い切れんがね。」

しかしそれ故に、下位のプレイヤーとの差は他の王と比べて小さいと言っている。王ともなれば通常技一発で中堅プレイヤーを葬るなど珍しくもないからな

くつくつと笑う黒雪姫に薄ら寒さを覚えると同時、比企谷もそんな人達と同レベルの存在なんだと再認識する。

「まあ奴のアイデンティティーであり最も厄介でもある、透明で見えないということそのものの方が特徴と言ってもいいかもしれないな。実際に戦えば分かるが……何もないところから痛みが来るといっている。見えず、すばしっこいとなるとこれまた面倒くさいこと限りないだ」

「か、加速世界最速!?」

あまりにさらりと出てきた称号に、ハルユキは目に見えて動揺を表す。

それもそのはず。最も優れたステータスを持っているだけでも驚きなのに、それを持っている人が人なのだ。なにせ……

「見えない上に最速って……それなら、もう最強じゃないですか!!?」

見えなければこちらの攻撃は当たらず、逆にこちらの攻撃は防げない。さらに最速ともなればなおさらだ。しかもレベル9ともなれば素のステータスも違う。下位のプレイヤーとの差が小さいなんて

言っていたがむしろ逆、最も遠いバーストリンカーではないか。

「落ち着きたまえ。ブレイン・バーストは同レベル同ポテンシャルを基としているのは君も知っているだろう。君が想像しているようなぶっ壊れ性能ではないさ」

「え、ええ〜？でも、見えなくて速くて強いんでしょう？神聖系ステータジでは僅かに見えるといっても、やっぱり強すぎませんか？」

考えれば考えるほど比企谷先輩に勝てる姿が想像出来ない。むしろノーダメージで比企谷先輩が完勝する未来だけがありありと想像できるようだ。

「確かに彼奴は見えないし速い。だがな、強いというのは間違いだ」
「へ？」

しかしその予想を黒雪姫はバツサリと切り捨てた。

「八幡のクリア・ウルフは色を持たない。それはこのゲームで言えば長所を持たぬとも言えるのだよ。青色を持てば近接に強くなれるように、何色も持っていない彼奴には切り札になりうる攻撃手段がないのさ。さらに緑のような守りを強める色もない。

はつきり言えばクリア・ウルフの攻撃力、守備力は全アバターで最弱なんだよ。それに加え、常時透明色を保てないようにするためか奴の体には色を吸収する特性もある」

「色を、吸収？」

「うむ。これは又聞きになるが、彼奴が直接相手のHPにダメージを与えた際に確認された情報らしい。そのダメージ量に比例して、クリア・ウルフの色が徐々に攻撃したアバターと同じ色になっていくそうだ。

予測ではHPのやパーセンテージ量の可能性が一番高いと言われているよ。二割削られれば20%色が染まる、という感じでな」

「な、なるほど。半分も削られれば完全に視認できるってことですか。ん？でもそれって…」

「それだと今度は最弱に近くなってくるんじゃない？」

レベル云々を抜けば攻撃防御ともになく、色によるアドバンテージも時間によってなくなる。それでは勝てる勝負がなくなってしまう。

「…余ったポテンシャルを全部速さに持ってかれた、もしくは速さ以外に注ぎ込むポイントが無かったと言われるほどだしなあ。必殺技も私の知る限り一撃必殺なんぞ皆無、むしろじわじわ削っていくものばかりだし」

うーむ、と考え込むが黒雪姫は小さく笑い、いたずらっぽく言った。「ま、戦ってみれば分かる。長所だなんだと言い表せはしないが、奴は強いよ」

☆☆☆

あの時はこんなに早く戦うだなんて思いもしなかった。それでも僅かながらでも情報アドがこちらにはある。善戦、あわよくば勝利を目指そうと力強くハルユキは拳を握った。

そうこうしているうちに敵が十メートル以上離れている時に表示されるガイドカーソルも消えた。つまりそれは相手が近づいている証拠だ。

ローレベルのこちらが仕掛けるには力不足だったので、仕掛けてくれるのはありがたい。気持ちのいい緊張感を張り巡らし、ジツとガイドカーソルが消えた方向へ警戒を向ける。

「…シルバー・クロウ」

「はい、カレンさん。頑張りましたよー！」

「それはもちろんなの。でも…」

「大丈夫です！もう覚悟完了しましたから！」

「だからそうではなくて…」

逃走心に火を燃やしていたことについてだと思っただがその心配はもうない。やる気も闘争心も漲っているのだから。

「敵。後ろなの」

「へ？」

緊張感が不意に途切れる感覚と同時、僅かに振り返れたその先には

空色のアバターが二つハルユキ達に襲いかかった。

今こそ

開幕早々、ハルユキことシルバー・クロウは地面を転がっていた。真正面からくると思っていた敵が、なんと真後ろから突撃してきた。それで反応が遅れたのが一番の原因だ。

転がる前に見えたのは、空色の狼型アバターがこれまた空色のF型女性アバターを背に乗せて走って来たと思ったら、突撃の少し前にF型アバターは離脱しアクア・カレントへ、比企谷先輩と思わしきアバターはそのままシルバー・クロウへの先制攻撃を行ってきたことだ。

急な展開に驚きつつもなんとか転がりながらも体勢を立て直しアクア・カレントに目を向けると、そこでは車椅子に乗ったアバターとカレントがなかなかの接戦を繰り広げていた。

相手の手刀を見切り間に水を展開して防御を固めるカレントと、車椅子をギョルギョル言うほど回転させながら高速で手刀を繰り出してくるもう一人のバーストリンカー。

レベル差をあまり感じさせない攻防にハルユキは目を奪われていた。

「余所見してていいのによ？」

しかし今は対戦中、それもタッグ戦だ。当然敵は二人いる。

完全に不意をつかれたハルユキは、戦闘中の二人から距離を離されるように再び吹っ飛ばされた。

「ぐっ！アアアア！」

転がり続ける体を無理矢理跳ね起こし、うまくファイティングポーズを構え、綺麗な空色に変色しているクリア・ウルフと対峙した。

「……随分と華やかになりましたね、ウルフ先輩」

「…レイカーの命令でな。今日のタッグ戦はこうしろって言われてんだ。俺的には初めっから自分の姿がハッキリしてるっていうのは違

和感バリバリなんだがな」

やれやれ、とでも言いだしそうなくらい軽い雰囲気を醸し出すウルフを見てみると、とても王には見えない。立ち振る舞いが威厳に全く結びついていないのだ。

しかし雰囲気がどうあれ王には変わりがない。相手がハンデを負っていても、不利なのは間違いなくこつちだ。油断なんてしてる暇はない。

握っていた拳をさらに強く握りしめ、今度こそ迎撃してやると意気込みウルフ先輩を睨みつける。

「…あー、やる気満々か…：よつと」

声とともにトンツと、まるで跳ねるかのような軽さで走り出し、本物の狼のように四足歩行に変形したウルフ先輩が凄まじいスピードでこちらに突っ込んでくる。

カツカツと魔都ステージに軽快な足音が鳴り響きながらも、己の脅威となる狼は着々と迫ってきていた。

しかしシアン・パイルのような巨大な相手ではなく、アツシユ・ローラーのような見慣れた乗り物が相手でもない。完全な動物型のアバターへの対抗策、それがハルユキには全くわからなかった。

(カウンターを…でも四足歩行になって高さが違う。蹴り？いや、それだと体制が崩れる。パンチだと上手く力が入らないし…)

うだうだ悩んでいる間にウルフはクロウの眼前に迫っていた。

(…くつ。ならんこは…蹴り！)

下から襲いかかる相手には下からの攻撃。そう考え、ハルユキはウルフの顔面めがけて蹴りを放った。しかし…

「うそお！！？」

まるで早送りが起きたかのようなスピードで、狼型だったアバターは元の人型アバターに再び変形したのだ。人型に戻ったウルフは正面を狙っていた蹴りをあつさり躲し、小さな踏み込みとともにガラ空きになったクロウの腹部を力強く殴った。

「ぐっ…はっ」

肺から空気が漏れる。しかしそれだけでは終わらない。クロウの

耳に小さくてもしつかり聞き取れるコマンドが聞こえた。

ワン・トツランナー
「独走者」

瞬間、ハルユキは戦慄した。

(必殺技……！)

二つのペアが戦うまでどちらも地形オブジェクト破壊による必殺技ゲージ稼ぎをしていなかった。つまりハルユキと戦っている間に溜めた事になるが、攻撃しかしていないにも関わらず必殺技ゲージを溜めていることになる。

しかしそこまでハルユキが考えている暇などなく、次に感じたのは僅かな風と背中を中心に出現した腹に食らったのと同じくらいの衝撃だった。

「……ッ!?!」

殴られた、漸くその考えに至ると同時に、再び目の前にウルフが現れた。まるで瞬間移動、一瞬だけすぐ隣を何かが通り過ぎたのを視認するのが精一杯だった。

『八幡は現加速世界最速と言われている』

『余ったポテンシャルを全部速さに持つてかれた、もしくはは速さ以外に注ぎ込むポイントがなかったと言われるほどだしなあ』

かつて聞いた言葉が思い起こされる。なるほど、確かに速い。想像以上だ。きっとローレベルのバーストリンカーならこの速さについていけず、今のように体力が尽きるまで殴られ続けることになるだろう。

…でも、

「僕には…これが…!!?」

リイインと音を立てながら、折りたたまれていた金属フィンが背中に展開されていく。ハルユキだけの、加速世界の武器だ。レベル9に殴られ続けたにも関わらず、まだ体力は7割も残っている。ウルフの攻撃力の低さの確認と同時に、必殺技ゲージが幾分か得られた。ならば、あとはひたすら飛ぶのみ!

「う、おおおおお!!」

広げられた翼の空気抵抗による減速を行うと同時に、右の翼だけを

震わせる。それにより直進していた軌道は急速な左旋回に変化する。当然そんなことをすれば建物に一直線だ。硬く窓もない鋼鉄のビルに突っ込めば殴られるだけでは済まないダメージを受けるだろう。しかしハルユキに恐怖はない。目の前にあるのはただの壁、邪魔しないどころか動きもしない。

(そんなものに、僕の翼は止められない！)

バサツと両翼を羽ばたかせ、体を仰け反らせながら壁スレスレを上昇する。このままいけば何者にも邪魔されない大空に、いつも見ている素晴らしい場所まで飛び立てることだろう。

「ナープ・エスケープ・ゾーン
臆病風の発生地」

しかし、そこは未だ地上に属する場所だ。前になくとも後ろにある。それを指し示すように突如背後から吹き荒れた突風が、クロウを鋼鉄の壁に押し付けた。

ギヤリギヤリギヤリギヤリ!!?!!?

金属と金属をこすり合わせる音が鳴り響きながら、シルバー・クロウが壁を滑り登っていく。なぜか壁とクロウがまるで磁石にでも引き寄せられているかのように、クロウが翼を震わせても離れる気配はまるでない。ただ体力ゲージが恐ろしい速度で減っていくのを見ているしかなかった。

「く、そおおお、おおおおお!!?」

…かと思いきやビルの半ば程になった時、急に風の拘束が解かれ、今度は壁を転がるようにして弾き飛ばされた。グルグル回る視界、どっちが上か下かも分からずガムシヤラに羽を震わす。

しかし現実残酷だ。加速世界初の完全飛行型といっても熟練度などたかが知れている。複雑な難飛行などしたこともない。運にすら見放されたのか、空に舞い上がることなく銀のカラスは大地に身を叩きつけられた。

「ぐ……あ……」

ないはずの肺から空気が漏れ出す。

体力は先ほどの壁との抱擁と破壊不能オブジェである地面との接吻で既に二割も残されていなかった。

（あ、あはは。やっぱりだめか。そりや王とレベル2になりたてじゃゾウとアリくらい違うし、比企谷先輩が戦うのを見るのはは初めてだもんな。対応出来なくて当たり前だ）

軽く顔を上げた先には、三メートル程離れた場所にウルフ先輩がこちらを見下ろしている。トドメを刺すわけでも、こちらを挑発するでもなくただジツと見下ろしていた。

暗にもう勝負はついたと言われているのだろうか。それならこちらは全く反論できない。クロウの体力は二割弱、カレントもレベルの差が現れてきたようで残り体力は半分を切っていた。

だがあちらはどちらも七割以上残っている。ウルフ先輩に至っては1ドットも削られていない。

（そりやそうだよな。ウルフ先輩と戦った僕が、1ダメージも与えられてないんだから）

思い返せば思い返すほど、純粋な差が分かる。クリア・ウルフもシルバー・クロウと同じで通常技はパンチやキックだと思われる。だが戦い方はまるで違う。ただ必殺技ゲージが溜まるまでの時間稼ぎのようなものではなく、速さを使うことで常に相手よりアドバンテージを得ることに特化されているように感じた。おそらく必殺技ゲージがない時の戦い方も考えられているのだろう。

だがそこまでなら他の上位リンカーも同じだ。タクとのタッグ戦は必ずしも同レベルであるわけではない。それどころかシルバー・クロウのレベルが1なのだから格上であることの方が多い。

しかし、それでも……

（空を飛べない事なんてなかった……）

シルバー・クロウの、有田春雪だけの力だった。ただ一人空を闊歩し、誰もがハルユキを見上げた。誰からも見下され、虐められ、地獄の日々だったハルユキには考えられない世界がそこにはあった。

でも今はどうだ？自分は圧倒的な力に打ちのめされ、雑兵の反逆は王にカスリもしない。翼を広げようと、その前に目の前の狼はカラス

を大地に引きずり落とすだろう。

(……もう、今回は諦めよう。そうさ、僕はまだレベル2。これからグングンレベルアップして、ハイリンカーの仲間入りして、ブラック・ロータスの最強の駒にまでパワーアップすればいい。それからまた、再戦しよう。それからでも遅くないさ。

だから……だから……)

……だから、なんだ？

諦めて、次？次もダメならまた諦めて、また次を繰り返すのか？

それは……

(それはもう、とつくに経験してるじゃないか)

加速世界じゃない現実世界で、僕はそれを体験してる。諦めて、流されて、受け入れて、誤魔化して。それでいったいどうなった。

そうだ、諦めは僕に安楽と沈滞の世界をくれた。大人しく従ってれば殴られない。端っこで縮こまっていれば気にされない。意見を主張しなければ楽な場所に収まることを、知っているんだ。それでも、分かっただろ。

(負けるにしても、足掻いて足掻いて、見苦しく負けろ。せめてそれぐらいでなきや、あの人の駒にすらなれない。そう、アツシユさんとの戦いで分かったじゃないか)

あの人の、黒雪姫先輩のために戦う。レベル1のヒヨッコが、何年も前から始まっているゲームに飛び込んで、格上ばかりの世界で戦うと決めた。それがとても辛い道のであると覚悟して、だ。

『もうそこに地獄はない。今まで以上の生活は確実だ』

かつて比企谷先輩に言われた言葉が蘇る。そうだ、僕は一度違う道を提示された。進まなくていい、苦しまなくていい、ただ日々を過ごす、休み時間はスカッシュゲームでもしながら時間を潰して、帰ったら冷凍ピザでも食べながら殺戮ゲーを楽しむ毎日。

そんな素晴らしい日常を蹴って、初めて…そう、初めて自分の意思で前に進んだじゃないか。

だったら僕がやるべきなのは諦めることじゃない。諦めていたことを、諦めないでいられるようになったのなら…！

(いま僕が言う言葉は、”今度こそ”じゃない！)

「今こそ、だー」

硬い地面を殴りつけるように立ち上がり、二本の足で大地を踏みしめ、空色の狼と視線を合わせる。

そうだ、今見る場所は”前”だ。”上”をみて見上げるな。”下”を見て見下ろすな。上を見れば萎縮する。下を見れば油断が生まれる。

(真っ直ぐだ。真っ直ぐ、”前”だけを見ろ)

再びハルユキは構えを取る。今度は油断もよそ見もなく、対戦への意識だけを残している。

そうすると、不思議と視界が広がっていくような感覚にハルユキは襲われた。視線はウルフに向けられているのに、周りの景色や相手の体力ゲージや必殺技ゲージまでもが手に取るようにわかってくる。もちろんその間にも警戒は全く解かれていない。まさに対戦するためだけの状態だ。

(…初めてかもしれない。タクの時みたいになんか意識じゃなく、意識的に極限まで集中して戦闘するのは)

戦闘態勢は整った。それに合わせるように、初めの焼き増しをするかの如くウルフが四足歩行の猛スピードで突っ込んできた。

(…ウルフ先輩の必殺技ゲージは何故から割も溜まってる。攻撃しかしてないのにこの量は異常だ。まだ何かしらのアビリティがあることになると、それは今考えても仕方ないから後回しだ)

わずかな時間であろうと今のハルユキの思考は止まらない。むしろどんどん思考が加速していくようにすら感じられた。

(必殺技ゲージがあるってことは攻撃と同時に使ってくる可能性は十

分ある。分かっている必殺技は二つ。ワン・トップランナー 独走者と臆病風の発生地。

前者はまず間違いない移動速度を上げる必殺技だ。周囲に何も起こらなかったのに、急に移動速度が上がったから当たっているだろう。記憶を遡ると、僅かずつゲージが減っていた気がする。

後者は風力による行動阻害と言ったところか。ダメージ判定があるか分からないけど、飛ばされたら今度こそ空を飛ばせば問題ない。

それ以外の必殺技ならそれまで！今警戒するのは、通常攻撃だ！
今度はパンチやキックで悩んだりしない。それは上級者がやることだ。初心者がボスと戦う時にやるべき事は攻撃じゃない。

「……ふっ！」

ギリギリまで相手を見続け、攻撃を喰らう寸前に自分の腕を間に入れる。捌く、なんて上等なものじゃない。腹で受けるはずだった攻撃を腕で受けただけの行為だ。証拠に体力は数ドット減ってしまった。
(それでも、反応出来ない速さじゃない！)

元々狂ったように高速で動き回るボールを打つスカッシュゲームが得意分野なのだ。反射神経や動体視力には自信がある。今の状態と相成ってそれは達人の域へ達していた。

「……独走者」ワン・トップランナー

しかし敵は王だ。何もしないわけもなく、再び必殺技を使用してきた。

コマンドと同時にウルフの必殺技ゲージが一割減った。これでもた風のような速さで攻撃してくるのだろう。

そんなことを考える暇もなかった。

「……っ？」

それはただの反射だった。ゲームで慣れた速さよりさらに上の速度で顔面に迫り来る拳を、咄嗟に上げた手に当てることで軌道をずらした。それにより鋭い爪は頬を掠るだけで通り過ぎた。

だがそれで終わらない。速さは未だ変わらないのだから。必殺技発動後はウルフのゲージが減っていることから制限はあるだろうが、それはまだ先の先だ。それが尽きる前にクロウの体力が底をつくだろう。

崩れた態勢を整える暇さえなく、今度こそはと、二度三度高速の攻撃がクロウにぶち当たった。

風前の灯火の体力は遂に残り数ドットまで減った。あと一撃でこのゲージは敢え無くなってしまおうだろう。

(…やっぱり強い。でも、ゲーマーとして、バーストリンカーとして、せめて最後に……！)

そう願ったハルユキの先に、最後の一撃を放とうとしているウルフの姿が現れた。ただの偶然、高速の攻撃を途絶えさせない最短の距離がそこだったただけだが、ハルユキにはそれが自分に与えられた最後の希望だと悟った。

最後まで諦めないものに、勝利の女神は微笑むと言われる。だからもしかしたらこれは、今までそっぽを向いていた女神の欠片ほどの慈悲かもしれない。

拳を振り切り反転したウルフに向けて、クロウも拳を上げた。

速さは足りない。レベルも、熟練度も、足元にも及ばないだろう。出来ることといえばただ一つ、全力の一撃を放つのみ！

「お、おおおおお!!」

向かってくるウルフに今出せる最大の一発を向ける。だがここでもウルフは冷静だった。わざわざクロスカウンターをしてやる義理もない。踏み出した一步を止め、クロウの拳がギリギリだが届かない場所に止まった。

「おおおおお！とどけえええ!!」

「なっ……!!」

突き出した拳を後押しするように翼を震わせ、自爆特攻のように自分ごとウルフに突っ込んだ。

しかし、快進撃はここまでのようだ。人型のアバターの顔を狙った攻撃は、一瞬で狼型アバターに変化したウルフの頭部をチツと小さく鳴らすだけに終わった。

逆にウルフはガラ空きの腹部に一撃を入れるチャンスが到来する。

それを逃すわけもなく、シルバー・クロウの体力は0を刻んだ。

「……………ふう」

最後の最後でレベル9相手に抵抗したクロウに歓声が響く。しかしウルフには耳に溢れる歓声より、視界の端にある1ドット削れた自分の体力ゲージだけが映っていた。

加速世界の異変

『お疲れ様です』

『……おう』

結局あの後には特にレイカーに加勢することもなく、タッグの意味など皆無な戦いに終わった。というかレイカーがカレントのライフを削り取りバーストアウトする前に聞いた話なのだが、先ほどの元々互いに対戦することを決めていたとか。しかもこの後合流するのだとか……。

『…なあ。さっきの対戦、意味なくね?』

『ふふ、対戦に意味を求めるなんてナンセンスですよ?』

そうはいつでも通常対戦なんてここしばらくまるつきりやっていないのだ。基本バーストポイント集めは無制限フィールドでソロ狩りしてるし、現実じゃ対戦を挑まない挑まれないのコンボが常に発動している。対人戦も観戦者がいるのも不慣れなのだ。他人に常に見られてるなんて恐怖しか感じない。

『ですがもう一人が鴉さんだったのは驚きましたねえ』

『…知ってたんじゃないのか?』

『いいえ、カレンからは聞いていませんでした。ですが私の勘が告げていたんです。やるなら今日しかないって』

そうだったでしょう?とウインクしてくる倉崎先輩に対抗する手段は目を逸らすくらいしか俺にはなかった。ちくしようあざと可愛い。いや、この場合はあざと綺麗とでも言うべきか。小町のような幼さより大人っぽさを感じるあざとさは初めてだ。効いたぜ…。

「遅れてごめんなさいなの」

俺が必死に虚空に目を向けていると、その射線に入り込むように一人の女性が現れた。眼鏡越しでも分かる美少女なのだが、大人しい雰

困気でクラスの端で読書でもして空気になってそんな人だ。

まあいきなり話しかけてきた上に遅れてごめんなんて言ってきたのだから、こいつが先ほど倉崎先輩と一騎打ちしていたアクア・カレントなのだろうが……

「……………」

「……………」

「……………」

……………なにこの空気。カレント（推測）と倉崎先輩が見つめ合ったと思つたらどちらも沈黙してしまい、かといつて俺が話すことなど出来るはずもなく場が沈黙に包まれている。普段なら沈黙など気にしないしむしろ推奨なのだが、目の前の二人が真剣な雰囲気を出している場面だと居心地が悪くなってくる。

だが二人がこうなるのも仕方がないのかもしれない。ネガ・ネビュラス崩壊の際にカレントは帝城を守る四神に無限EK、エネミーに延々と殺される状態に陥ってしまったと聞く。黒雪と倉崎先輩はなんとか現実に戻れたが、カレント合わせて三人の幹部が無限EK状態。そのうちの一人との対面はさすがの倉崎先輩でも感じるものがあるのかもしれない。

「…喫茶店を待ち合わせ場所にしたのは失敗だったの」

「…そうですね、同感です」

そう言い合い、倉崎先輩が立ち上がりカレント（仮）と手を握り、笑い合った。先ほどの真剣さはどこに行ったのか、二人とも破顔している。

つまり…どうということだ？カレントによる八つ当たりがあるわけでもなく、むしろ会えたことを喜んでいる？いや会うのすら嫌なら今日の会合があるわけないんだが…。むむむ、わからん。

「さ、まずは座って。立ちっぱなしというのも迷惑でしょうし」

「ん、分かったの」

結局なんて笑いあつてたのか分からないまま、空気八幡は現実に戻り戻された。流れるような気軽さで倉崎先輩とカレント（本物）が直結していたのことはもう違和感すら感じない。

カレントは取り敢えず何か注文しなければと紅茶を頼み、俺と倉崎先輩も飲み物を再度注文してから1分もしないうちに全ての飲み物が届くことで会話の準備が整った。

『まずは自己紹介なの。私は氷見あきら、アバターネームはアクア・カレントなの。リアルでは二人とも初めましてなの』

『相変わらず妙に丁寧ね、カレン。私は倉崎楓子、こちらこそリアルでは初めまして』

『…比企谷八幡、クリア・ウルフだ。こちらこそハジメマシテ』

『クリア・ウルフ…無色の王。噂は極々稀に耳に入るの』

『…そりやどうも』

ここは稀にでも耳に入るのを喜ぶべきなのか、誰かが俺のことを話題にしたのを恐れるべきなのかよく分からない。まあ俺のアバターは影の薄さが売りですし？むしろ加速世界じゃ影の方が濃いまであるから噂になったことを驚くのが正解か。

『…それで？倉崎先輩から聞いたのは、これから来る人をお願いを聞いてくれてただけで細かい事は聞いてないんだが』

『では早速本題に入るの』

クイツと紅茶を一口飲み、真っ直ぐこちらを見据えるカレント（リアル）。ぼっち故に視線は苦手だが、美人の視線は殊更苦手だ。威圧されてるわけでもないのに自然と視線を外してしまう。

それを気にするでもなく、カレントは最低限の説明でこう言った。

『今日の9時ジャスト。上に行つてここに出向いて欲しいの』

思考発声と同時に送られてきた地図、そこには目的地を示すであろう赤丸が描かれていた。

☆☆☆

そして9時より1分ほど前、俺は結局言われるがままに無制限フィールドにダイブしていた。やっぱり、美人二人には勝てなかったよ…。まあ二週間分の負債はそれで帳消しにしてくれるらしいのでよしとしよう。その代わりもう一度誘われたので、今度は二週間経つ前に行こうと思った。

さておき今回の目的だが、ここ最近エネミーをティムしている奴らがいるらしいので、そいつらの確保かアバターの確認を頼まれた。ただエネミーをティムしている、そこまでなら何の問題もないように見えるのだが、なんとそのティムはアイテムを使わないティムらしいのだ。専用アイテムを使わないとティムできないはずなのだが、不思議な事にそんな事案が相次いでいるのだとか。

さらにさらにそのティムしているエネミーがなんと軒並み巨獣級ビーストエネミーだと言うではないか。俺もかつて巨獣級エネミーをティムした事はあるが、ティム用アイテムの『幻想の手綱』がめちゃくちゃ高い。王と呼ばれている俺も少し躊躇してしまう程度にはバーストポイントを失うのだ。

つまりそんなことができる奴、もしくは奴らが弱いわけ無いのでハイレベルのプレイヤー以外に任せられない。しかもカレント調べでは、ここ最近連日決まった時間に大型モンスターの生息地（主にダンジョン）でティムを行っていることが判明した。

ならば大部隊で突撃すればと聞けば、ティムされた巨獣級エネミー二、三体が常にそのダンジョンの入り口付近を徘徊していて近づけないと返される。一度無理矢理突破したことがあるらしいが、その時は既にもぬけの殻だったらしい。

突破するまでに激しい労力を割き、それなのに成果は0だった経験があるならば誰もやりたがらなくなるのは必然だ。

そこで白羽の矢が立ったのが俺というわけだ。姿が見えないのでエネミーとの戦闘を回避できる。そのうえ敵にバレないので逃げられる心配もなくなる。万が一戦闘になったとしても逃げきるなど俺には容易いと言われた。

面倒ではあるが、巨獣級のアイテムを使わないティムも少しばかり

気になる。あわよくばその技術を……。

なんて下心と共にそこまででもない距離を走り続けた。

「あそこか……」

たいした時間もかからず、目的のダンジョンが見える場所までたどり着いた。

今回の目的地は「善福寺公園」。地下にある洞窟のようなダンジョンで、所々に巨大な川や池が存在し、そこを住処とするエネミーも多い場所だ。

「うっわ、いるわいるわデカイのが」

ダンジョンの入り口には俺の何倍も大きい百足に蠅に……ありやゴキブリか？…帰っちゃダメっすかね？いや見つからないだろうけど生理的嫌悪ががが。

「……とつとと終わらせて帰ろう」

そう決意し、ダンジョンの入り口へと駆け出した。

…地面に突き刺さる小さな針に気がつかないまま。

☆☆☆

ダンジョン内、その最深部付近。巨大な湖と岸が存在するそこでは、四人のアバターが思い思いに寛いでいた。

一人は手の中にある複数の針を弄び、一人は石に座り微動だにしない。もう一人も石に座っているが、暇なのか左手の触手のようなもので近くの石を砕いておもちゃにしていた。

異様なのは最後の一人。他2人と同じように座っているのだが、座っているものが問題だった。鋭い目に鋭い牙を持ち、皮膚すら柔らかい物なら傷がつくであろう。その姿はまさしく鮫。肉どころか硬いアバターも噛み砕いてしまいそうなエネミーが、まるで借りてきた猫のように大人しく水上を泳いでいる。まるで真上の主人の機嫌を損ねないように細心の注意を払っているかのようだ。

そんな静かな時間を過ごしていると、針を弄んでいた少女が口を開いた。

「……！姐さーん、もう来たみたいですよー」

「もう来たのかー。いつもより早いね。何人？」

「反応は……一人みたいです。あ、なんかすつごい早い」

「一人？笑えますねえ、僕達に対してたった一人とは」

ほへえーと感心するような声に割り込んだのは、石から立ち上がり触手を操っている少年だった。

「放っておいて良いんじゃないですか？入り口に配置してあるエネミーを突破出来なくて終わりですよ」

「そうですねー。ダツカー君が出来ないのは当然として、私も難しいと思いますし。生理的に」

「…前から思ってたんですが、そのあだ名止めてくれませんかねえ針娘。酷く不愉快です」

「レベル4に上がったばかりのひよっ子をなんて呼ぼうが私の勝手ですよ。ダツカー君が私に追いついたら名前前で呼んであげるよ」

「…ほう、それはいい事を聞きました。ならその針、全部奪ってあげましょうか？魔王デモニック・コマンドレイア徴発令で全て奪い取れば僕より下になるでしょうし」

「その前にダツカー君が針鼠なるのが先だと思えますけどねー。あ、針蝮の間違いでしたっけ？」

「貴様ツ……！」

「はーいはい。喧嘩はそこまでだよー」

一触即発の場面に釘を刺したのは、いつの間にか鯨から降りてきたF型アバターだった。たったそれだけで二人は争いを止め、少年は舌打ちをしながら再び石に座った。

「ナツツちゃん。さつき来たって言ってた一人は今どうしてる？」

「へ？そりゃあ……あれ!?？もうダンジョンの中に入ってる!?？しかもさつきより早いです！このままだとあと5分もしないうちにここに着いちやいます！」

「…ふふ、来たんだ」

ワタワタと慌て始める少女。しかし女性の方はむしろ楽しそうに笑った。

「三人は先に帰っていいよ。私はこれから来る人にちよーつと用事があるからさ」

この言葉により、狼狽えていた少女はさらに狼狽え、話を聞いていた少年も一緒に慌て始めた。

「危険ですよ！巨獣級エネミー三体を潜り抜ける人と二人つきりなんて！」

「今回は針娘に同意です！あなたに何かあつたら…」

「大丈夫だって。ね？」

「……！」

そんな二人の心配も一蹴し、女性は二人に笑みを向けた。これが二度は言わないという警告なのか、心配は要らないと言われているのかを判断できるほどの感性は二人にはない。しかし、確かな強迫観念を植え付けられたのだと理解させられた。

「……わかりました。行きますよダツカー君」

「…あなたが僕に命令しないで下さい。では、お気をつけて」

それだけ言い残し、少年少女はついに最後まで会話に参加しなかった一人の元まで行き、影に溶けるように三人の姿は消え去った。

「さて、ゆっくりお話でもしようかな？ウルフ君」

三人が消えるのを見届けることすらせず、白いアバターはじっと入り口を見据え続けた。

失敗の過去、未知の現在、不安の未来

加速世界には様々なダンジョンが存在する。

迷宮のようにあらゆる罫が仕掛けられている物もあれば、ひたすらエネミーを突破しなければならぬモンスターダンジョンのような物もある。さらに言えば大きさもピンからキリまであり、大きいものでは何日も潜らないと踏破が不可能なのや少し進めばすぐにボス部屋に辿り着けるほど小さいダンジョンもある。

今回潜ったのは比較的小さいモンスターダンジョンだ。川、湖、海などの水系のエネミーが多く存在し、そこまで広くない洞窟内に小獣級エネミーがちよくちよくいるので下手をすると小獣エネミーに囲まれて大変な事になるダンジョンである。

そんな中でも俺は特に気にすることもなく、モンスターの間を通り抜けながら疾走していく。そも小獣エネミー一匹ですら平均的なレベル7プレイヤーと同じくらいの力量があるのだから一々相手になんぞしてられない。めんどいし。

さて。今俺が目指している場所だが、それは当然最深部：ではない。

一時期エネミー狩りに没頭していた事があり、その時に近場であるこのダンジョンも攻略したので構造は大体把握している。

だから知っているのだが、このダンジョンのボスは最深部の一つ手前の部屋に存在している。ボスそのものはただなのでかい鮫なので問題は無いが、最深部にはかなり大きな部屋の中心に宝箱を模したトランプが仕掛けられている。開けると警音が鳴り響き壁に空いている穴から多種多様なエネミーが這い出てくる仕掛けだ。子獣エネミーばかりならともかく、野獣系や下手すりゃ巨獣系が出てくることがある初見殺し極まりないダンジョンなのだ。

まあ全滅すれば巣穴に戻るので無限EKに陥る心配がないだけマシと言ったところか。

「……さて」

敵をすり抜け足音を殺し、辿り着いたのはボスの部屋。そこには扉がある訳でもなく、本格的なボス部屋というよりは野生のボスとも言えるお粗末な部屋だった。

でもそれは現在では好都合。扉があれば即ばれてしまうので、戦いに来たわけではない身としてはありがたい。しかし中からは戦闘音もしなければ話し声すらしない。中を軽く覗いたが人っ子一人見当たらないではないか。代わりにボスエネミーと思われる鮫型エネミーだけは悠々と泳いでいたが。

「……えー、もしかしてもう帰った？てかそれ以前に来てない？いやそれならそれでいいけどさ」

「いやー残念ながらまだいるし来てるんだよねー」

バツと自分でも驚くような速さで後ずさりする。声の発生源は入り口からちようど見えない死角に位置する部分からだ。さらに加えるならば聞いたことがある声であり、その人物は俺が途轍もなく苦手としている人物である可能性が…

「もう、逃げるなんて酷いなあ」

……悪い予感ほどよく当たると言うが、本当にその通りだ。目の前に現れたのは白く怪しく妖しい存在だった。胸に宿る一つ目に全てを見透かされるような錯覚を抱くのは、俺が彼女の能力を知っているからだろうか。

「……なんでいるんすか？スピリットさん」

「つれないなー。ウルフ君が来るまで何度もエネミー達と遊んでたんだよ？」

クスクスとマスク越しに聞こえる声が、薄ら寒い感触を俺の背中に与えてくる。既に俺に対して『読心』アビリティを発動されていることだろう。それだけでも全てを掌握されている錯覚に陥ってしまう。だがここまでできたら搦め手は不要、というより無意味なので正面から切り込んでみることにした。

「……最近巨獣級エネミーが何匹もタイムされてるって事で来たんですけど、あれってスピリットさんの仕業っすか？」

「ん？そだよ」

あつさり告白、か。

「色々調べてたらさー、面白いことが分かってね。ちよつと試してみたくなったんだ。エネミーの感情を利用したティムを、ね」

「エネミーの……感情？」

正直告白だけで十分だったのだが、動機すらペラペラ喋ってくれとは思わなかった。この人はもつと口が固い人だと思ってたが……。

しかしそれは置いといても話題的には結構気になる話だった。

「まあ正確にはエネミーの感情はAI、作り物だろうけどね。それでも多種多様なものがあるの。純粋な好意や好奇心だったり、目の前でチラチラ鬱陶しいだったり、さらには絶対に敵わないっていう降伏心だったりね」

……エネミーの感情。パツと何かを思い起こすわけではないが、心当たりは幾つかある。なんというか、エネミーも行動が違うのだ。

活動範囲に入った瞬間嬉々として襲い掛かってくるものもいれば、逆に此方に敵意がない限り見て見ぬ振りを貫くエネミーもいる。…当然攻撃すれば全てのエネミーが襲ってくるが。

「調べた結果だと、アイテムなしのティムが出来るのは相手に好意を持つている場合と敵わないと悟った諦めや恐怖を抱いた時なんだよね。ま、大抵のエネミーは最後までどつちも感じないことの方が多いけどね。ティム用のアイテムは感情の揺れを促して、好意によるティムを可能にしてるって感じかな。まあこっちはどうでもいいけど」

スイツと手を横に振るようにして、この話は終わりだと言外に告げてくる。

「そんなことより、重要なのは2年ぶりにウルフ君と話が出来たってことだよね。お姉ちゃんも忙しくてさー、ロータスちゃんが戻ってくるまでもう少し掛かると思ってたから焦っちゃった」

「……ロータスが戻ってくるのは予想してたんですか？」

「もちろん。ウルフ君だって知ってるでしょ？ロータスちゃんの強情さや単純さ。それに、脆さと強さも」

…知っている。1年以上見てきたんだ、全てを理解しているなどと

は烏澁がましくて言えないが、ある程度は理解しているつもりだ。

入学した当初、あいつが既に学校と家以外の場所でグローバル接続を切っていた時の話だ。学校では嫌でもグローバル接続しなければならぬ関係上、同じ学校のバーストリンカーからは逃れる事は出来ない。俺の事前調査で二年と三年にはバーストリンカーは存在していなかったことは判明していたが、一年に関しては全く分からなかったのほぼ運任せだった。

：そして学校に足を踏み入れて直ぐの俺の気持ちを、誰が理解できるだろうか。その場で即加速した俺がみたもの、それはマッチングリストに存在する『Black・Lotus』の文字。その場で頭を抱えなかった俺を褒めて欲しい。八王会議でロータスが宣言したレベル10到達、そしてロータスの懐に飛び込んでくる^{極上の餌}レベル9。嫌な未来しか見えなかった。

当然と言えば当然なのだろう。入学式が始まった瞬間、ロータスに戦闘を挑まれた。即座に学校外に逃げ出した俺を誰が責められようか。開幕1秒で心意を使って学校をバターののように切り裂く奴の相手をする自信もなかったもので、その日から毎日30分ロータスの刃から逃げる日々が始まった。対戦に一日一回の制約が無ければ俺は今頃全損していたかもしれない。

それからおよそ一ヶ月経った頃だろうか、ようやくロータスからのドロー申請による話し合いが催された。為された提案は、互いのリアルを公開してブラックロータスと『ロスト・ネメシス』：と言っても俺だけなので、俺とロータスの間に不可侵条約を結ぼうというものであった。現実世界におけるアドバンテージを互いが持つという危険性もあるが、現状を考えると願ったり叶ったりなのでロータスに先に集合場所である食堂の食堂の一番奥、そのさらに真ん中の席というリア充の中でもトップカーズトしか座れない場所に行ってもらおうことを条件にその提案を受けた。

明らかに相手のテリトリーなのだろうが、俺のテリトリーだとしても人気は少なくなってしまうので仕方ないっちゃ仕方ないが。

座っていたロータスの顔は思い出すだけでも恐ろしいくらいに鋭

かった。親の仇を見るような目で直結ケーブルを渡してきた黒雪には、下手なことをすればぶつ殺すという鉄の意志が感じられた。直結中は同じ相手との対戦は一日一回という制約を無視できるので、既に覚悟を完了してきたのだろう。

しかし、俺にはその覚悟がとても脆く見えたのだ。恐怖と後悔を押し固め、自分の逃げ道を無理矢理塞いだかのような、そんな弱さが。だからだろうか、特に警戒することなく直結し、何事もなく和平を結び、そのまま飯まで一緒に食べる仲になったのは。いや最後のは違うな、俺は飯は一人で食べたい派だ。翌日からも誘ってきたのはあっちだし。

「ふふっ、色々思い出してるみたいだけどお姉ちゃんを無視するのはいただけませんかあ」

「うおっ」

かなり深く考え込んでしまっていたらしく、普段なら警戒を解けないスピリットさんが眼前にいることにすら気づかなかった。不機嫌そうな声色なのに、どこか楽しんでいるような雰囲気醸し出す。見えるのに見えない不思議さが、俺は苦手だ。

「過去を懐かしむのもいいけど、これからは未来を見た方がいいんじゃない？今までが準備期間だとするなら、今は本番当日くらいだよ？」

「それなら問題ありませんよ。当日なら裏方で待機してるのが俺の役目ですから」

「それは現実世界の話でしょ。加速世界でみれば、ウルフ君は主役を張れるくらいの立ち位置にいると思うけどな」

「名も知られてない王が出てきても盛り上がりませんよ。ナイトやソーンが暴れてるくらいでちょうどいいんです」

そもそも過去とは懐かしむものではなく後悔するものだ。あの時なんでこんな事言ったんだとか、なんで俺は難聴系主人公じゃなかったんだとか考え始めて死にたくなるものだ。

かといって未来を考えればいいと言われても、まるつきり分かってないものとか考えるだけでも不安で鬱になるので、やはり今を何も考

えずに生きるのが一番だと思いました。結局考えてないし。

「……ま、ウルフ君がそういう考えならそれでいいけどね。でも気をつけてね。…舞台裏は、客席から見えないだけで舞台の上であることに変わりはないんだから」

「……」

一瞬、ほんの一瞬だけ真剣味が出たと思いきや、それも即座に霧散し、スピリットさんは俺の横を通り抜けていった。

「バイバイ、ウルフ君。物語の冒頭、それに相応しいこわ〜い敵が出てくるまでは舞台裏で待つてね」

そのままヒラヒラと手を振りながらダンジョンの入り口へ去っていく。スピリットさんの言葉を信じるならば、目的は俺との対話だったらしいので、これ以上モンスターがタイムされることもないだろう。

だが、やはり嫌でも耳に残ってしまう。《本番当日》、そして《こわ〜い敵》。まるでこれから起こることを見透かしているような言い草を、わざわざ俺にしてくる理由がまるで分からない。それでも、警戒を強要された。

世迷言だと切り捨てられたらどれだけいいだろう。だが俺には無意識的かつ意識的にあの人を警戒している。その人から受けた警告は俺の心に、まるで蛇のようにヌルリと入り込んでしまった。

過去の失敗、現在の無知、未来の不安。その全てが俺を覆うように渦巻いている。それを実感しながら、来る時とは違いゆっくりと入り口へ歩き出す。

舞台裏で待機している俺、舞台の上に再び上がったブラック・ロータス、そしてその横に付き従うシルバー・クロウやネガ・ネビュラスの仲間達。役者はだんだん揃っていく。なら、脚本家達はどうなのだろうか。これから『何か』を起こす者は、既に準備を終えているのだろうか。

スピリットさんが何をしようとしているのか、誰と、誰を、何を、なんで。そのすべてに俺は答えられない。そして未知は何も作らない。そのくせ未来だけは勝手に作り上げていく。未知は不安を生み出し、

不安は失敗を作り出す。そして失敗が積み上がり、過去が生じる。
やはり未来は、不安ばかりだ。

災禍の鎧く赤と透明く
それが、君の望みか？

『八幡……世の中にはな、【本物】なんてものはないんだよ……。【本物】に見えても、そいつは【偽物】なんだ』

妙に悲しそうな顔と声をした親父が、不思議な絵を弄びながら俺に言った。

これは確か俺がまだ保育園の時、親父が俺の迎えをしていた帰り道で綺麗な女性に騙されて贋作の絵を買わされた夜のことだったか。詳しく会話は覚えていないが、女性は本物にしか見えない笑顔で親父に近づき、巧みな話術で絵を進めていた気がする。何を持って親父が絵が偽物であるか気づいたかは知らないが、実体験からの言葉が嫌に耳に残ったのを覚えている。

だがその頃はまだまだ子供で、大人に出来ないことが出来る自分がカッコいいと思っていた。だから見つけてやろうと思ったんだ。親父のいう【本物】ってやつを。

曖昧な意味なので正確にどんなものかは分からなかったが、とにかく正しいものだと思った。キラキラ輝いているかもしれない、見るだけで幸せになれるような、そんなものだと。

しかし、俺はその翌日に親父の言葉が真実であると知ることになる。

その日はみんなが楽しみにしている運動会だった。ニューロリンカーで電腦化が発達してきても、身体を動かさないと不健康であるのは今も昔も変わらない。

みんなが楽しみと言ったが、当然俺も例外ではなく朝どころか前日

の夜から興奮して、親父の悲しみなど頭の片隅に追いやっている程だった。

事が起こったのは運動会最後の種目、クラス対抗リレーの時だ。当時の俺は足が速く、なんとリレーでアンカーを任されるレベルだった。まあジャンケンで勝っただけのものではあるが今はいいだろう。

さて、対抗リレーは予想以上に盛り上がった。子供たちが必死に走り、互いに抜き抜かれを繰り返しては手にあるバトンを次の子に渡していく。そしてついにアンカーである俺の番になった。俺の前の走者である女子が一瞬俺に近づくのを躊躇ったので、少し遅れそうになったが現在俺たちのクラスは一位。このままいけば優勝も難しくないだろう。バトンを受け取った俺は全力で走った。チラツと後ろを見ても追いつける距離にはいない。十分安全圏内だった。

これはいける、と思った時だった。子供にとって、寝不足というのはかなりの強敵である。つまりはそういうことだ。襲いかかる眠気が、足元のバランスを崩した。一瞬早く表示された警告も間に合わず、俺はそのまま地面にダイブした。なんとかかすぐに起き上がることはできたが、その間に抜かされてしまい、俺たちのクラスは2位になった。

『みんな、ごめん』

俺は泣きそうになりながらみんなに謝った。俺が転けなければ一位になれたのに、と。

『気にすんなよ、比企谷』

『そうそう、惜しかったって。また頑張ろうよ』

『それより足大丈夫？』

『うわー痛そう』

そんな俺にみんなは攻めるでもなく普通に接してくれた。先生も一緒に、むしろ励ましの言葉をかけてくれた。当然嬉しかった。親父に向かって本物なんてこんな近くにあるじゃないかと言ってやりたくなったほどだ。

『おーい比企谷！足擦り剥いてるだろ。保健室行ってこい！それ以外は教室に戻れー』

担任の声に促されて俺は保健室に向かい、他のみんなは教室に戻っていった。とはいえ足の傷も大したことはなく、消毒とガーゼを貼るだけでみんなと合流するよう保健室の先生に言われた。

教室の前に辿り着き、もう一度だけ謝ろう。そう決意して扉に手をかけた。

『あくあ、比企谷がいなけりや勝てたのになー』

教室の中から聞こえた声が、俺の動きを全て停止させた。

『ほんと、あそこで転ぶとか…』

『みんな頑張つて一位になれそうだったのに…』

『私なんか比企谷にバトン渡したくなかったけど、一位になりたくて頑張ったのにく。あいつに少し触れちゃったよー』

『うわー。洗った方が良くない？バイキン…いや、比企谷菌が移っちゃってるかも』

『やだー。比企谷菌タッチ！』

『わっ！いまバリアしてたもーん』

『比企谷菌にバリアは効きませーん』

僅かに空いていた扉の隙間から中を見て、愕然とした。あいつらは、本当にさつき俺と話していた奴らなのか？さつきまで悔しそうでも同情の視線を向けていた奴が、今では嘲笑うような笑みで笑いあっている。

…ああ、これが、【本物】に見える【偽物】か。

一字一句変わらず親父の言葉が思い返る。気づけば俺は教室を離れていた。

無意識のうちに保育園を彷徨い、職員室の前に来てしまっていた。といつても職員室に用はないので、そのまま通り過ぎようと歩みを進めた。

『くっそ、比企谷め。なんであそこでコケるんだよ…』

また、身体が止まった。

『いやーあの時はもうダメかと思いましたよ。んじゃあ約束通り、今日の晩飯ゴチになります』

『ちっ。やっぱり比企谷なんかアンカーは失敗だったか。ジャンケ

ンじゃなくて俺が決めればよかったぜ』

『ははは、結果論ですね。そんなこと言っても奢ってもらいますよ』
『わーってるよ。来年は他の奴にアンカーやらせるから今度こそ奢らせてやる』

ハハハハ。中から聞こえる笑い声が、いやに薄気味悪く聞こえる。あいつは、本当にさつき俺を励ましてくれた奴なのか？気にすんなと肩を叩いてくれた奴が、今では吐き捨てるような扱いをしている。

これもか。また、【本物】に見える【偽物】か。
気づけばまた、俺はその場を離れていた。

☆☆☆

『おーい比企谷。何してるんだ？そんなところで』

教室に入る気にもならず、少しの間だが保育園内を彷徨っていた俺に後ろから声をかけてくる人がいた。

『はーん。さてはまだ転んだことを気にしてるんだな。大丈夫だって！もう誰も気にしてねーよ。教室戻るぞ』

そいつは、俺の担任だった。さつき職員室で話していたのが嘘のようにいい笑顔で、俺に笑いかけてきた。

(…気持ち悪い)

何事もなかったかのように笑えるこいつが気持ち悪い。偽物を、まるで本物のように貼り付けられるこいつが気持ち悪い。偽物が本物のようになっていいるこいつが気持ち悪い。

そう思っても、担任の意思を無視するわけにもいかず俺は教室に戻された。

『あ、比企谷。足、もう大丈夫なのか？』

『もう痛くない？』

教室に戻れば、さつきまで比企谷菌と嘲笑っていた姿を何処かに隠したクラスメイトが心配そうな顔で近寄ってくる。

(…怖い)

怖い。目の前の仮面を貼り付けたこいつらが怖い。本性を、まるで蓋をするように隠せるこいつらが怖い。偽物を本物のように見せられるこいつらが怖い。

それからは、誰の姿も偽物にしか見えなくなった。

『あれ面白いよね！』

『わかる！あれすっごい感動した』

『名作って感じだよね！』

ずっと楽しそうに笑っているのに…

『ねえ、あいつ最近ウザくない？』

『わかる。ちよつと知ってるからってテンション上げ過ぎ』

ふとした時に仮面がずれる。いつの間にか、偽物のメッキが剥がれる瞬間を探すのが得意になっていた。全くもって嬉しくない。そんなことを続けていたら、そのうち裏があるのが当たり前という結論に達してしまった。

そう、裏があるのが当たり前……それを当たり前と思っている時点で、俺は自分が毒され始めていることに気づいた。偽物だらけの世界で、偽物である事が当たり前でないことが、どうしても許せなかった。

自分勝手な願いであることは分かっている。全ては自分の為で、そのくせ浅ましいくて愚かしくおぞましい。その上「それ」が何なのかと正確に言えないほど曖昧なものなのだ。

でも、それでも望まなくては行かない。親も、子も、友人も、隣人も、知り合いも、他人も、全てが偽物で出来上がっているかのような世界で。可能性が低くても、それを得るのが困難でも、そもそも存在しなくても、手にすることも触れることも出来なくても、望むことすら許されなくても。それでも、それでも俺は……

「俺は、本物が欲しい」

『ーそれが、君の望みか？』

比企谷八幡の日常は少しずつつ動きだす

ーそれが、君の望みか？

耳に残らないのに、嫌に不快な気分になる言葉を言われたような気がする夢。そもそも夢を見ていたのかも定かでないが、見ていたとしたらきつと悪夢だったのだろう。そう思えるほどには、身体中を汗が舐め回していた。

時計で確認した時刻は午前3時ほど。起きるには早いですが、妙に目が冴えてしまい二度寝は難しく思える。そんな時にこそ、変な思考が働くというものだ。第一に思い浮かぶことと言えば、やはりスピリットさんと最後に話したあの日のことだろう。

「気をつけて、か」

そう警告されてからおおよそ二ヶ月。年がもう変わってしまったというのに、未だに怖くい敵とやらは登場しない。結局あの日スピリットさんに言われた言葉の意味を、俺は全く理解できていないようだ。

「……平和を喜ぶべきか、平穏を訝しむべきか。まああれ以来何も起きてないみたいだが」

そう、結局あれからは何も起きていない。カレントには問題がないことだけ告げて終わらせてある。そもそもタイムは個人の自由だし、エネミーを使ってEK、エネミーキルをしていたわけでもないのだからこまでキツく取り締まる必要も元々ないのだ。

「……平和が一番……」

そうだ、平和が大事。悩んでも仕方がないことで悩み続けるなんて、俺には向いてない。悩んでダメなら諦める。きつとそれが楽に生きる方法に違いないのだから。とはいえ……

「結論が出たとしてもやることがないなあ」

脳内会議が終着点を見せたとしても、時間は早く進まないし眠たくなるわけでもない。結局、俺はそのまま朝日が昇り小町が起こしに来るまで天井を眺め続けるしかできなかった。

☆☆☆

「……うん、平和だ」

バクツとパンをかじりながらぼやいてみる。今朝の焼きましをする気はないが、ここはそうつぶやいてしまうほど静かで気持ちがいい。俺が最近昼食を取っているのは、校舎裏に存在しているさほど広くない中庭である。中庭といってもただ生えっぱなしになっている林もどきがあるくらいで、リア充達のお気に召すものは少ない。だからこそ人が寄り付かず、静かに独りで昼食を食べるには最適な場所だった。

「えーとなんだっけ？モノを食べる時は、誰にも邪魔されず、自由でなんといいか救われてなきやあダメなんだ、だっけ」

独りで美味しい飯を食うのはなんとも素晴らしい。多少肌寒くはあるが、木々の音や遠くに聞こえる喧騒、目に見える緑に加えて…

『比企谷八幡、比企谷八幡君。至急、いや大至急生徒会室に来なさい。来なかった場合、時間休みごとに校内放送をかけます』

……突然起こる校内放送。あるえー？最後だけ飯を邪魔されて不自由で救われないんですけど。というか今の絶対教師の声じゃなかったぞ。いや生徒会室を指定するのだから当然生徒会役員。

…そうなると黒雪？いやあいつとはもう二ヶ月全く話してない。むしろ目が合うと勢いよく顔ごと逸らされる程度には離れている。むしろ無関係まである。それ以前にあいつなら自分で校内放送をかけるから違うだろう。

「……わからん」

わからんが、とりあえず呼び出しには応じたほうがいいだろう。経験則だが、大抵俺に用がある奴はやると言ったことは必ずやる奴ばか

りだ。今回もその例に外れないのなら間違いない。何度か放送を繰り返すに違いない。

「…めんど」

せめてもの抵抗に小さく溜息を吐き捨て、俺はゆっくり生徒会室に向かった。

☆☆☆

「来たわね。入って」

のっそり歩いて辿り着いたわ生徒会室。本来生徒会役員しか入れない場所なのだが、職権乱用はよくあることなのだろうか。

しかし放送の声からして女子であるのは予想していたが、まさか見知らぬ女子に個室に呼び出されるなんて！この流れは間違いなく告白……に見せかけた罰ゲーム！くっ、まさか生徒会まで敵に回っているなんて……。空気になりきるスキルがまだまだ足りなかったか。

「なにしているの？早くして」

「アツハイ」

見るからにご機嫌斜めで、罰ゲームじゃなくてリンチを勘繰りたくなる八幡である。しかし最近は誰とも話さぬ毎日が続いていたのに急にこの展開はどういうことなんだ。昨日何かあったんですか？私、気になります！

「呼び出したのは他でもないわ。姫の件よ」

「姫？」

「ええ。あなた、二ヶ月前までは姫と直結してお昼ご飯を食べていたでしょ。なんで急に辞めたの？」

……あ、姫って黒雪のことか。って黒雪姫でも痛いのにそのうえ友達に姫って呼ばれてるのかあのお姫様は。いや、それ以前になんぞそんなこと知ってるんだ？まさか俺のこと好きな（以下略。ないな、ありえん。

「なんでって言われてもなあ。流れで、としか言えないが……。てかさ、

「こつちも聞きたいことがあるんだけど…」

「?なに?」

「だれ?」

ピシツと、何かにヒビが入ったような音が聞こえた気がする。まあ何かの比喩ではあるが、間違いなく目の前で固まってしまった女子から響いたのであろう。

「わ、私を知らない? 姫が親友である私を放っておきながら直結したりお昼ご飯を食べたりしているあなたが、知らないですって? 姫しか眼中にないとでも言いたいのかしら。直結しているあなたや有田君に私がどれだけ嫉妬したと……」

ぶつぶつと呪詛でも吐きそうなレベルで黒くなってる女子に半歩引いてしまった俺は悪くないと思う。これが…気!? 怖い、怖いよ。

「……………ふう。申し訳ありませんでした。私は若宮恵。生徒会の書記をやらせていただいていますわ。比企谷君のことは何度か姫から話に聞いています。随分姫に好感を持たれていたというのに、最近食事に同伴していないので気になり生徒会にお呼びしました。」

改めて、姫と何があったのか教えてください」

……………お、おう? なんか口調変わってません? 疑問系がなくなってるのは慣れてるからいいとして、一瞬お嬢様口調になったよな。黒雪の親友というくらいだしどつかのお偉いさんの娘なんだろうか。

「……………何があったと聞かれたら、そうだな。勘違いを正した、ってことだな。黒雪が勝手に感じてた罪悪感だかを取り除いたただけだ」

「罪悪感?」

「ああ。それがなにか、は勘弁してくれ」

というかここまで言っただけで出血大サービスで出血死するレベルなんだ。初対面の女子相手にここまで話せるなんて、これも成長というやつだな。最近話した相手が小町とレイカーだから無意識に鍛えられているのかもしれない。小町マジ天使。……………おや、寒気ががが。

「……………それって、入学してすぐのこと?」

「はっ…」

入学してからすぐなんてむしろ一番恐怖状態の頃だろう。俺も含めて。俺は黒雪を、黒雪は俺を互いに警戒していた時期で、停戦を決めるまでは毎日いつ対戦を挑まれるかビクビクしていた。おかげで対戦が終わるまで授業中も居眠りできなかつたな。

「比企谷君は一年生の頃は姫と違うクラスだったのよね。私は姫と同じクラスだったんだけど、姫って入学してから一ヶ月くらいの間すごい怖かったのよね。なんというか、常に警戒してるとでも言うのかしら？それなのに一日に一回必ず爆睡したりしてて、よく分からなからない状況があつたのよ」

わかる、わかるぞ黒雪。一日一回対戦という縛りは厄介ではあるが、逆に安心感もある。一回戦えばその日は絶対（直結された場合を除く）対戦を挑まれない。なので緊張感が一気に切れ、その後の授業を爆睡してしまうのだ。俺も毎回やってたわ。

「それが急に、というか君とご飯食べたしてから少しして収まったのよ。初めは警戒続けてたんだけど、授業中に眠ったりとかトゲトゲしさとかはまるつきり。なにをしたのよ？」

「なに、と言われてもなあ。話以外してないが」

「ふくん。秘密ってことね。やっぱり妬けちやうかも」

「いや、妬けないから」

今妬くべきは俺じゃなく有田だろう。あれ以降も黒雪と食事してらしいし、盗み聞きした噂じゃ登下校まで一緒にだそうじゃないですか。さぞやお楽しみなんでしょうなあ。爆発すればいいのに。

「ま、いいわ。今の姫は有田君の方に夢中みたいだし。ドジっ子の中に乙女っぽさも出てきたからそれについてはいいのよ」

「隠れドジっ子だからなあいつ。たびたび片鱗見せるわ」

「そうなのよねえ。普段は周りに凜として見せてて可愛いんだけど、たまにドジって照れ隠ししてまたそれが可愛いのよね。その上有田君の前ではさらにかっこつけようとしててそれがまた…」

「若宮さんや、色々ギリギリだからそのへんにしてくれ」

え、何この人あっちの人なの？ゆるゆりしちゃう人？ガチの人なら黒雪に避難勧告くらいしてあげようかなと思える程度には危険を感

じる。

「姫の魅力はこれからののに。とにかく、姫の変化はいい方向に向いてるから問題ないわ。それでもたまに乙女の方じゃない悩みを見せるのよ」

「乙女じゃない方の悩み？」

「ええ。入学直後の姫みたいに、何処か不安げなところを見かけるのよ。それも退院する前から、しかも貴方が原因でね」

「は？退院する前なら俺関係なくね？」

「私がどれだけ姫の親友やってると思ってるの？姫がわざわざクラスメイトを見舞いに来ないようにさせるなんて、どう考えても貴方しか考えられないじゃない」

「俺以外にも有田と二人つきりになりたいとか…」

「姫はクラスメイトなんか構わず、有田君とイチヤイチャしてるわ。そのために一々人払なんてしないもの。なら残りはぼっちの気がある比企谷君のためでしょ？」

「す、鋭い。こう簡単に当てられると、『面白い想像だ。君は小説家にもなればいい』とか言いたくなる。遠回しの自白ですわわかります。」

「だから比企谷君のせいなのは間違いないの。かといって比企谷君が何かしてるのかと言えばそうでもないのよね。少し比企谷君のこと見てたけど、本当に姫に関心失くしたみたいだったし」

「俺が原因なのは確定ですかそうですか」

「だが俺が原因というのはないだろう。俺と黒雪の関係はリセットされ、もう無関係同然になっている。だったら黒雪の悩みも俺以外の、あるとすればシルバー・クロウやシアン・パイルとか加速世界関連だろう。子を持って悩むのはよくある話だ。」

「そう結論付けた、のだが目の前の若宮がじいくと此方をジト目で見つめ続けているのは何故だろうか。俺の目に何か付いてる？いえ付いてるんじゃないかって腐ってるんですよ。こいつは一本とられたZ・E！H A H A H A！」

「……比企谷君って隙がないのね。もうちよつと簡単に話してくれる

「思ってた」

「隙を見せると人に付け込まれるからな。常に完全防備してないと目がさらに腐っちまう」

「あはは。姫の言ってた通り捻くれてるね」

「世界が捻じ曲がってるから真っ直ぐな俺が捻くれて見えるんだよ。だから俺は悪くない、世界が悪い」

「スケールが大きいのか小さいのかわからないわ」

「そう言いながら若宮は笑い続けた。今の話に面白い部分があったのかは心底疑問だが、まあ気持ちえられるより千倍マシだからよしとしよう。」

「…でも、その不思議な安心感が比企谷くんの個性なのかしらね」

「しかし若宮はそれで終わらずさらに意味深のことを言い放った。

「不安を持たれるのはよくあるが、安心感を与えたのは初めてだ」

「そう？ 姫も同じことを感じてたと思うわ。今の不安そうな様子も、やっぱり比企谷君がいなくなったからかしら」

「過大評価のし過ぎだ。俺はそんな大層な奴じゃねえよ」

「それは言えてるね。なんか小物っぽいし」

「褒めてるのか貶してるのかどっちだよ」

「もちろん褒めてるよ。あ、褒めてるついでにお願い」

「ジト目でも真面目の表情でもなく、親友を想う優しい笑顔を若宮は浮かべた。」

「いつか、姫が困ってたら、助けてあげてね」

「それは、俺が見ていたら汚れてしまうのではないかと錯覚するほど真っ直ぐな目だった。本気で、誰か自分以外のためのお願い。それを直視することができず、俺は目を逸らした。」

「……機会が、あればな」

「ええ、それでかまわないわ」

「とても満足そうに頷く若宮を前に、予鈴のチャイムが鳴り響く。ああ、また一つ昼休みを消費してしまった。」

「鳴っちゃったわね。それじゃあまたね、比企谷君。お願い、忘れないでね」

そう若宮が言った後、生徒会室を出た俺は生徒会室に鍵を閉める若宮と別れ教室に向かう途中、なんであんな約束をしたのかと今更ながらに後悔していた。でも仕方ないだろう。

「……あの顔は、反則だよなあ」

あんな優しさを前面に出しまくった顔、その優しさの対象が俺じゃないと分かっているも惚れそうになる。勘違いだと確定しているのに、それでもなお勘違いしそうになるのだから、男というやつは救えない生き物だ。そして俺もその救えない生き物の一匹なのだ。だから、仕方ないのだろう。

やはり、優しい女の子は、苦手だ。

災禍の鎧、急襲

天災は突然襲ってくるものだ。晴れていたはずなのに急に雨に打たれたり、地震が起きたと思ったら棚にしまっていた黒歴史本が飛び出してきたり、しかもその後慌てて部屋に入ってきた妹に見られたりもする。

だが、天災も怖い何より怖いのは人災だろう。誰もいないはずの廊下で行われた告白がいつのまにか知れ渡っていたり、みんなが楽しみにしている給食のカレーをうっかり転んで零してしまったり、しかもその後の昼休みにふて寝したら授業にすら遅れて笑い者にすらならなかったり。おかしいな、天災も人災もみんな経験している気がする。そして後半の犯人俺だし。

まあ何が言いたいのかというと、告白の時は周りに気をつけろってことだな。

「ルウオオオオオオオオ!!」

「待て！まだ現実逃避が終わってな…うお！」

メーデーメーデー！こちら比企谷、現在帰宅中の乱入により理性失ってんだろこの化け物と言い放ちたくなるクソ野郎と遭遇！しかもクツソ硬い鎧にクツソ鋭い剣持ってるんですよ助けてくださいへルプミー！

「あつぶねえ、一発でも切られたら体力全部もってかれる自信あるぞこの野郎め。つーかなんで俺に乱入してくんだよ乱入とか何ヶ月ぶりだよちよつと嬉しく思った気持ち返せよちくせう。てかほんとだ

れ？『チェリー・ルーク』？だれだよ知らねえよ怨み買った覚えも会った覚えもねえよだから見逃してくれませんか：ねつと」

興奮からか混乱からか口数がいつもの数倍多くなってる気がする。でもようやく落ち着いてきた。これはあれだ。回想でもう一回ゆっくり今までのことを思い出すんだ。じゃないとほんとやってられねえ…。今でもやってられないんですがね！

☆☆☆

あれは今から五分前、校門から出て少しした時。

バシイイイン！

加速音とともに身体が透過していき、目の前には《HERE COME A NEW CHALLENGER!!》の文字。そして猛スピードでこちらに向かってくるであろう対戦相手。と思いきやいきなり上空からすぐ近くに落下してきやがった鎧のお化け。上からとか予測できるわけないので、思わず声を上げてしまったんです。そしてロックオンされ、今に至る、と。

☆☆☆

回想みじけー。まあただ対戦挑まれたっただけなら回想すら必要ないが、そうでもしないと目の前の現実をうけとめきれないんだ。

未だ攻撃をしてないし受けてもない俺は完全な無色透明なわけだが、なぜか相手は普通に攻撃してくる。蝙蝠のような音でも出しているのか、それとも単純に足音とかで判断しているのかは不明だが、どうやら相手には俺の存在を認識できる何かがあるようだ。

それだけじゃない。今の今まで絶対に認めたくなかった現実、実を言うとそれは対戦を挑まれたことじゃない。ハイランカーに急襲されるのは極々稀に以前もあった。だがこいつの鎧、そして剣、さらに攻撃力に凶暴性に至るまで、俺はこいつそのものではないが、過去に

これと同じような存在に出会ったことがあるのだ。

「お前：《クロム・ディザスター》か？」

剣戟が一瞬止まり、相手が体制を立て直している間に問いかける。とはいえ相手が本当にあのクロム・ディザスターなら返事を期待するだけ無駄だろう。そう分かっている一回は聞かないと気が済まなかった。なぜなら、あいつはかつて王達全員で加速世界から追いやったはずなのだから。

「いや、ある意味予想通り、なのか？」

だがそれと同時に納得の感情も出てきた。このクロム・ディザスターとは《災禍の鎧》とよばれる強化外装を着装した者に与えられる名だ。そして災禍の鎧には様々な特徴が存在する。一つはこの鎧を着装した人間は、何故か異常に凶暴になる呪われたアイテムであること。他にも強化外装は稀に、持ち主が全損する折に自身を倒したプレイヤーに譲渡されることがあるのだが、この鎧に至っては譲渡率が今回含めて100%であることなどだ。かつて譲渡された回数は今回含めて四回。つまりこいつは五代目災禍の鎧所有者というわけだ。

そして四代目まではプレイヤー達が結束し倒していたわけだが、俺たちが四代目を倒した後、全員のアイテムストレージを確認しても誰もその強化外装を持っていないと言った。前例に従うならこれはありえないことだ。疲れたからと特に何も考えなかった自分を少しばかり殴ってやりたい気分になる。

「ふう。ようやく落ち着いてきた。あと、いい加減鬱陶しくなってきたぞ」

この回想中や思想中、ずっと目の前の剣ぶん回してる奴の攻撃をひたすらに避け続けているのだ。しかも吠えまくるから超怖い。だが戦っている感じを見るに、こいつは完全に俺の姿が見えているというわけでもなさそうだ。縦斬りは殆どなく、広範囲を斬れるように横斬りを多用してくる。それさえわかればこちらとしても反撃に出るのもやぶさかではない。こちらら目が腐ってもバーストリンカーなのだから。

「まずは逃げだな」

とはいえこの硬い鎧相手だと通常攻撃はまるつきり意味をなさないだろう。いくら速く動けても殴れば痛いし、相手が硬ければ攻撃は通らない。ならば必殺技に頼るしかならう。幸いにも今のステータスは壊しやすい《風化ステータジ》だ。数少ない俺が素の攻撃力でも壊せるステータジなのだからこれを利用しない手はない。

「ルアアアア!!」

後ろから雄叫びと共に足音や建物が壊れまくる音がするが、正直あまり気にならない。ここだけの話、一時期、というか小町全損のすぐ後荒れていた時期に、ひたすら強くなりたいたい速くなりたいたいという向上心とも考えなしとも言える理由で、なんと四神に定期的に挑んでいた時期があったんだ。定期的といってもレベルが上がったり行き詰まった時などの限定的な期間ではあったが。それでも馬鹿だろ、と今では俺自身すら思う。しかし決してマイナスではなかった。あの経験からどんなにデカく速いエネミーも怖くなくなった。ごめん嘘、やっぱ怖いのもいるけど恐怖で動けなくなるような事態はなくなってきたと言っている。

『スザク』ほど威圧的で広範囲に即死レベルに熱い炎を吐いてくる奴はいないだろう。

『セイリユウ』ほど厄介で多種多様な特殊技を使って来る奴はいないだろう。

『ゲンブ』ほど重くて硬くて暑苦しい奴はいないだろう。

『ビヤッコ』ほどデカイクセに速い奴はいないだろう。

あいつらと戦ってからすぐでも巨獣級程度では大した恐怖もなく自然体で戦えるようになっていた。それだけ四神の強さを身にしみさせられたわけだ。いやほんと強かった。だからレベルドレインはやめてください強くなれません。むしろ弱体化一直線。真っ先に行くのやめたね。

「こんくらいでいいか」

視界の端にある必殺技ゲージにはもう7割ほどのゲージが溜まっている。チェリー・ルークに至ってはフルチャージだ。しかしその点は大した問題はない。何故かは知らないが、クロム・デイザスターに

なると必殺技を発動しなくなるのだ。ひたすら叫ぶだけで人語を話さないで、必殺技コマンドを言えないのだと勝手に判断している。その代わりアビリティなどは普通に使うので、そこを見極めるまで油断できない。というか油断したら喰われるから絶対に出来ない。トラウマ（物理）とか笑えもしない。

軽く開けた場所まで逃げ切り、改めてクロム・デイズスターと相対する為に振り向いた。しかしそこに奴の姿はなく…

「上かー」

殆ど転がる形で、飛来してきたクロム・デイズスターの着地を回避する。方法は分からないが奴はこちらの居場所がある程度分かるらしい。対戦時間が半分近く過ぎたとはいえ互いのライフは共にMAX。つまり未だに俺は完全な無色透明だ。それでも攻撃を仕掛けているということはまだあの鎧には俺たちの知らない性能が隠されているのだろう。

当のクロム・デイズスターはこちらがようやく対戦の意思を見せたからか、今度はすぐ飛び掛らずこちらに向けて手を突き出してきた。

ワン・トゥ・ランナー
「独走者」

それと同時にこちらは必殺技を発動し、突き出された手の射線上からズレるように超スピードで移動した。

ボコン！

そんな鈍い音が俺が元いた場所から響いた。見ると、背にしていた建物の一部がクロム・デイズスターの元にまるで吸い込まれるように飛んでいくではないか。あのままそこにいたら、吸い込まれたのは俺だっただろう。そのあとは…正直考えたくない。

だが今のは収穫と言える。前回の討伐にも参加していたが、あの様な技は使っていなかった。それは二回に渡って行われた上空からの奇襲もそうだ。前代災禍の鎧はミミズのような身体で、酸を吐いたり触手を出したりするアバターだった。共通点といえばあの巨大な剣を使っていることぐらいだ。むしろ他の共通点がないまである。ないのかあるのかは想像にお任せしよう。

（近接戦はもう嫌になるくらい見たしなあ。あとは…また他の王達と

の会議とかありそうだし、言い訳程度に善戦が好ましいか)

伊達に加速世界最速の名を他称されているわけではない。避けに専念すれば太刀の一本や二本、いや一本なら避け続けるなど昼飯前だ。むしろそれくらいできないと、黒雪恐怖の一ヶ月を切り抜けることなど出来なかったことだろう。必要に迫られれば人間なんでも出来るもんだ。

(正直ドロでもいいんだけど、それだとレディオ辺りがウザそうだから却下。勝つならまずはあの硬い装甲を剥がす必要がある)

チラツと必殺技ゲージを見ると、まだ半分ほど残っている。

(いけるな)

身体を反転させ、今度は自分からクロム・デイザスターに突っ込んでいく。待望の餌が懐に飛び込んでいくのを感じたのか、クロム・デイザスターは勢いよく巨大な剣を振り下ろしてきた。

遅くはない。むしろ速い。そして強い。そんな一撃だが、俺は人型アバターから狼型アバターに変化することにより剣の下を突っ切った。

「グルウ…」

今度こそ当たると思っていたのか、小さく呻き声をあげるクロム・デイザスター。狼型に変形したことすら気づいていないだろうが、今のこいつは隙だらけだ。容赦なく行かせてもらおうとしよう。

「色彩捕食」

必殺技コマンドを唱えると同時、俺は目一杯に口を広げる。そして何かを吸い込むような感覚を携え、下顎をクロム・デイザスターの身体を斜め上に削るように通過させた。

「グルア…?」

俺は必殺技が終わる瞬間を見計らいクロム・デイザスターから距離をとるが、当のクロム・デイザスターは驚愕の声色で自らの腹を見ている。

まあ当然といえば当然だろう。なんせ、鎧の一部分。正確に言うならば俺の口が通った場所が消えているのだから。

もちろん本当に消えているわけではない。触ればそこに感触はあ

るし、そこを殴られたとしても透明部分から見える本体に攻撃が行くわけではない。色彩捕食とはその名の通り色を喰う必殺技だ。強化外装の場合は色が消えるだけで俺に影響はないが、アバター本体の色を喰うとそのアバターの色を奪うことも出来る。というかそれしかできない。相手へのダメージもない。が、これがなかなか使える。

どう使えるのかというと：

「ロンリィ・スレイヤー孤高狼の殺戮爪」

今度は離れた場所からこちらがクロム・デイザスターに手を突き出した。すると俺の指先に存在する爪が勢いよく伸び、クロム・デイザスターの腹にある色が消えている部分に向かっていく。

だがまあこんな遠くからこんな攻撃しても普通に避けられるか防がれるだろう。あたりまえのようにあっさり反応したクロム・デイザスターは剣を振りかぶり爪を叩き折ろうとする。しかし、それは俺に對してしてはならない行動だ。

ガギインと音を鳴らし、爪と剣がぶつかり合う。しかし爪は何にもないかのようにそのまま突き進んだ。

これは俺の必殺技の特徴でもある。ようは『相手の干渉を受けない』のだ。例を出すならば、ワン・トップランナー独走者を発動している間は速度を落とす系の効果を受けず、ナイフ・エスケープ・ゾーン臆病風の発生地はどんな突風が吹いていようと真っ直ぐ吹き続けるわけだ。俺の無事が前提条件ではあるが。

「グルルルオオオオ！」

しかし敵もただではやられてくれない。振り下ろした状態であるにも関わらず、体をひねり爪の射線上から自分の身体を外した。

それに対し、俺はほんの僅かに手をずらした。それだけで爪はそれが本来のコースだったかのように軌道をズラした。俺の必殺技は全て俺を中心として発動しているからか、追従性がとても高く扱いやすくて助かる。

だがクロム・デイザスターの方は助からなかったようだ。再び爪が正面にきた結果、俺が先ほど消した場所に爪が突き刺さった。

本来なら俺のような低攻撃力の必殺技に当たっても鎧に阻まれ、ただ吹っ飛ぶだけで済んだだろう。だが、あそこは色が消えている。さ

らにさらに、孤高狼ロンリール・スレイヤーの殺戮爪には貫通属性が備わっている。

前にも説明したが、このブレイン・バーストにとつて『色』とは『強さ』であり『長所』だ。それがなくなれば、元がいくら強いものでも簡単に破れる紙装甲となる。つまり、全ての属性が弱点になった部分に貫通属性が付属した必殺技を喰らえば：

バギイイーン！

元が神器級の防御力があるうと、こんなあつさり突破できる。

「悪いな、今回はここまでだ」

腹に爪を受け、爪をめり込ませたまま吹っ飛んでいくクロム・ディザスターに声を投げかける。

俺の必殺技は元々効果が地味な分、必殺技ゲージの消費が少ない。多くても二割くらいで大抵の技は発動できる便利な仕様だ。まあ一部例外はあるけどそれはいいだろう。

現在俺の必殺技ゲージはまだ二割ちよいのこっている。そして残り時間は既に30秒をきった。逃げに徹すれば負けは間違いないだろう。

「あー。会議、あるよなあ。肩凝りそうだ」

それから試合が終わるまでの数十秒は、今よりもこれからの面倒臭さに嘆息していた。そして、少し遠くから聞こえる雄叫びを上げている存在とまた戦うことが確定しているという事実を再び、ため息をついた。

八王会議

「……………」

日曜日。週一度の頻度で訪れる学生の救済日、そんな日に俺は遠く離れた千代田区に訪れていた。

「…あと15分か」

視界の端に映し出される時計を見て小さく呟く。

今俺は千代田区に存在する図書館の個人ブースの中にすわっている。デジタル化が進み本ですらデータ化が行われているとはいえ、紙の本というのも一定の人気がありここは紙の本が存在する貴重な図書館だ。

しかし今は本を悠長に読んでいる余裕はなかった。なぜなら、これから行われるのは《純色の八王》全員による《災禍の鎧討伐》会議なのだから。

「…俺あれ嫌いなんだよなあ」

俺の領土で会議が開かれるのはまだいい。千代田区は二十三区で唯一戦域が分割されていない広大な戦域であり、なおかつここをホームグラウンドとするバーストリンカーはほぼ皆無だ。隣には秋葉原や新宿といった対戦し放題の場所があれば当然そっちに流れるだろう。

よって千代田区のマッチングリストは常に閑散としている。俺としては領土にしようと思っただけの理由でもある。まあ領土として持つてれば対戦を断れることを知ってどうでもよくなったんですね。

まあそれはともかく、広大でありなおかつバーストリンカーが少ないここは交渉の場にぴったりの分かってはいる。

問題は来るメンツだ。嫌味ったらしいのやら喧嘩っ早いのやらの集まりであり、なおかつ皆が皆対戦の強さは一流だ。さらに今回は黒雪も呼ばれているらしく、他の王達と一触即発となることも十分ありうる。

そこまでなら無視していればいいのだが、災禍の鎧に対戦を挑まれた俺は当然その時のことを事細かに話さなきゃいけないわけで、会議中常に無言を貫き通すことは不可能なわけだ。普段会話していないと自分の言葉で周りがどうという反応をしてくるか分からない。「…なるようになるか」

ピツという音が一瞬鳴り、時計の長針が頂点を指し示す。その瞬間、世界が暗転し始める。

《HERE COMES A NEW CHALLENGER!!?》

そして目の前に炎文字が浮かび上がり、最後に《FIGHT》という炎文字と1800の数字が動き出す。

「百秒以内に東御苑に集合だったな。少し急ぐか」

一番乗りなら誰にも挨拶しなくて済むだろう、そんな打算を打ち立てつつ霧が立ち上る《魔都ステージ》の大地を蹴った。

☆☆☆☆

「始まってから30秒しか経ってないのになんでお前こんな早くに着いてんだよ」

鋼鉄の円柱が大きな輪を描いている東御苑。中々の速度でフィールドを駆け抜けたはずなのだが、集合場所には既に先客が座っていた。上座に陣取り「俺こそ王!」とでも言い出しそうなほど堂々としたただ住まいをした、全身真っ青なアバター。

「部下達がうるさくてな。真の王は誰よりも早く来て他の奴らを待たないといけないんだってさ。そういうウルフこそ、開幕一発目がそのセリフってのはどうにかならないのか?」

《ブルー・ナイト》。《剣 聖》^{ヴァンキッシュ}だとかの中二心をくすぐるものや、

《神獣殺し》^{レジェンドスレイヤー}といった恐ろしさを示す二つ名を数多くもちあわせている奴だ。

「始まるまで誰にも会わないで過ごそうとしてた計画がパーになったんだ。これくらいいいだろう」

「それなら話しかけずに静かにしてればよかったのに。やっぱ変なところで律儀だよな、ウルフは」

「うっせ」

気さくな態度で軽口を叩き合う。リアルぼっちである俺にも普通に話せる雰囲気を作れるあたり、こいつはリアルでもリア充ではないかとおもえてくる。

だが今回は会話が目的ではない。しかし他の王たちが集まれば、きつと好き勝手に喋り出すだろう。なら俺は静観を貫かなければならない。主に俺のために。

黒雪達ネガ・ネビユラスの存在する場所にソーンの奴が混じったら一触即発、核融合が発生するまであるかもしれない。ソーンがかつて黒雪が全損させた赤の王の恋人だったのだから仕方ないといえれば仕方ないのだが、何故かその矛先の一つが俺にも向かってるのが問題なのだ。領土戦に度々ハイランカーを投入してくる程度には嫌われているからな。だから俺は鉄柱の一つにもたれかかり空気に徹しよう。そう思い、足を進めた時だった。

「さて。じゃあウルフ、コバルの色を写し取ってくれ」

そんなことを大剣馬鹿が言い出した。

「いやいらねいだろ。透明こそ俺のシンボルだ。そのまま存在感すら透明になってこそその俺だろう。むしろここに存在しなくなるまである」

「いやいやなんのためにお前とコバルで対戦させてあると思ってるの？ 今日メインで喋るウルフがいつまでも虚空から話してくるホラーは誰も望んでないんだよ。今でも自分が何もいないところに話しかけるのに違和感あるんだぜ？」

「早くしろ。剣聖のお手を煩わせるな」

「その通り。お前の戯れに付き合っている時間はない」

ブルー・ナイトに続いて両脇の二人も声を上げる。

共に細身で群青色と青緑色の鎧を身を纏い、ポニーテールとツイン

テールの違いはあれど姿かたちや左腰に備えている刀も瓜二つの武者姿。まさに双子といえるアバターだ。付け加えるとポニーテールの方が《マンガン・ブレード》でツインテールの方が《コバルト・ブレード》なので間違えないように。

軽く気圧されていると、ツインテール武者が刀に手をかけ歩み寄ってきた。

「どこにいるのかわからんからお前が来い。来ないというなら、先に剣をくれてやろうか？」

「わかった。すぐ行くからその手を離せ。さもなきや逃げるぞ?」
「偉そうに宣言するな!」

素早くコバルトに近づき肩に手を触れ、色彩模倣トレリスを唱える。そしてそれに気づいたコバルトが何かを言おうとする前に、すぐさまそこから安全圏まで後ずさった。

「なぜ逃げる?!?」

「おまえが剣から手を離さないからだよ!」

むしろ手に力を入れてるように見える。いやそれは今だからかもしれないが。というかナイトの方はともかくその側近の二人は事あるごとに怒鳴ってくるので多少苦手意識がある。腰の剣も相成っていつ斬られるか気が気でなくなってくることもしばしば。

「まあこれで満足だろ?これで…」

「それで、もう茶番は済んだのか?」

コバルトと同じ色になった身体を見ていると、俺の言葉に被せるように鋭い声が重なった。

リイインと振動音を微かに響かせ、鋭い切っ先を地面に向けながらさらに鋭いアイレンズをこちらに向けているアバター。全体的に黒く尖ったフォルムは触れただけで切れてしまいそうだ。

「相変わらず仲が良いな、ウルフ、ナイト。私達も呼ばれたから罨でも仕掛けてあるかと思えば、随分楽しげじゃないか」

「あんたも相変わらずツンケンした人だな、ロータス。二年ぶりだつていうのに。パイルも久しぶり。頑張ってるみたいだね」

「は、はい! 《ヴァンキッシュ剣聖》の懐の深さに救っていただいたこと、感謝して

います」

《ブラック・ロータス》。説明以下略。

後ろで縮こまつてるクロウとパイルを無視して談笑しているのは威圧か余裕か判断に困る。だが今のところ一触即発という雰囲気ではないから一安心だ。まあ、それもあいつが来るまでだろうが。

「それはそうと、ナイト。自分だけ座ってないで、こちらにも椅子を用意してくれないか？」

「おっと、こりゃ失礼」

ナイトが手を振ると、コバルトが腰を低くし今度こそ抜刀の構えをした。咄嗟にナイトとロータスの中間あたりに避難したのをコバルトが見届けた（かは知らない）瞬間、青白い閃光が一度、二度とステージを斬り裂いた。

そして一泊置き、周囲に聳えていた7つの鉄柱が膝あたりの高さを綺麗に残して真つ二つになった。多少硬いが魔都ステージで話し合いが最もやりやすい場所になったことだろう。

「椅子の用意が出来たか。なら私達もいい加減参加させてもらうぜ」
一息つく暇もなく次の乱入者が現れる。

全身を紅に染めた俺の腰ほどしかない小さなアバター。初代に変わわり二代目赤の王と呼ばれている《スカーレット・レイン》。その体躯に似合わず《不動要塞》イモビル・フォートレスの二つ名を持ち、強化外装をフルに使った殲滅が得意。中身は上月。

「《プロミ》からは王と私の二人だけ。挨拶は省略」

「どっかの誰かさん達が寸劇始めたせいで時間が勿体無いしな」

その後ろからはまるで豹のような造形と血のように赤いアバターが現れる。《ブラット・レパード》という赤の王の側近であり、口調が少し妙だがあまり喋らないので特に目立つところはない。あ、同じ四足歩行型になれるアバターにシンパシー……ないな。

「クツ、クツクツク……」

今度は耳に触るような嫌らしい声色と笑い声が響き渡る。なんとも特徴的でわかりやすい。

「クク、いやあその通り。あまりに退屈な寸劇のおかげで居眠りをし

てしまうところでした。しかし突然舞台に登っていないかった者が現れるシヨールは面白かったですよ？もちろん、ただ私が見逃してしまうほど影が薄かったとかなら、話は別ですがねえ」

嫌味とともにポワンと白い煙を立てて現れたのは全身真っ黄色のピエロ型アバターの《イエロー・レディオ》。自身の目に悪い色に刺激されたのか、そいつ自身の目が細くなっている様は妙に滑稽に思える。

「きつと見逃してたんだろ。俺を見逃すほど目を細めてないでもうちよつと開いてみたらどうだ？目が悪いならバナナをオススメしよう。ほらお前の頭に生えててちようどいいだろ？」

「……ククク。これがバナナに見えるとは、目の悪さなら深海魚と比べられますよあなた」

いつものように突つかかれるが、なんかこんなやり取りにも慣れてきた自分がある。そも悪口を言われ慣れてくると言い返しも慣れてくるもんで、それも気にならなくなるもんだ。やだ、慣れてって怖い。

「……………」

……無言がうるさいとはこいつの事を言うのだろうか。がつ、がつ、と硬さと重さを感じさせる足音が霧の向こう響き渡る。基本的なアバターより比較的大きい程度とはいえ、全身がまるで分厚い板のような姿に加え、左手には巨大な大盾が携えてあることで凄まじい重厚感を生み出している。

《グリーン・グランデ》。その身に纏う色は深く鮮やかな緑色。インバルナラブル《絶対防衛》の二つ名に恥じぬ立ち振る舞いと、その存在感全てを持って硬さに特化したアバターであると証明しているようだ。

「よう」

「……」

一声だけ投げかけ、それに小さく頷くグランデが用意された円柱に座るのを見届ける。

…そういえばコバルトの斬撃から避難したままだった。ふと思いつき出し、元の円柱に戻ろうとする。するとタイミングが悪いのか、それともタイミングを凶られていたのかは分からないが、席に着いた瞬間

真横から凄まじい殺気が放たれた。

「久しぶりだね、ロータス。まさか、こうしてもう一度あなたと口をきく日が来るとは思ってたな」

開幕一発、刺々しきは皆無だが氷のような滑らかさと鋭さでロータスに拒絶を投げかけた。カッ、と手に持った錫杖が床を小さく鳴らす。その杖はアバター本人と同じ紫色の紫電を散らしている。

《パープル・ソーン》。かつてロータスが全損させた初代赤の王、《レット・ライダー》の恋人だった王。その件でロータスを完全に拒絶の意を示したこの会議で最も危険な人物だ。

「……そうだな。私もだ、ソーン。次に会う時こそ、どちらかの首が落ちるのだと確信していたからな」

一瞬言葉に詰まったかのような僅かな間があつた気がしたが、ロータスも落ち着いた口調でソーンに返した。その影響故か、心なしか隣の冷気が増した気がしてくる。

「……そうなるかも、ね。たとえば、この場に集まった全員が《バトルロワイアル》へのモードチェンジに同意すれば……といっても、あなたがいるからそれはありえないかな、ウルフ？」

「……」

矛先がこちらに向いたが、それに対しては無言を貫く。それに答えなくてもソーンは分かっているからだ。レベル10や仇討ちに巻き込まれる気も、加担する気もない。それを実際に体現した前例があるのだから。

「ロータスが来るって聞いて、ちゃんと準備はしてきたんだよ。でも、無駄になっちゃったな」

「……そうだな。俺は何があつてもバトルロワイアルに同意はしない。そういう面倒な事に、俺を巻き込むな」

「……うん、君は変わらないね。残念だよ、君がもう少し情に熱かったら、二年前にロータスの首を落とせたのに」

「……買い被り過ぎだ」

ソーンが俺に多少なりとも敵意に近いものを向ける原因は二年前にある。ロータスが初代赤の王を殺した時、ロータス対全ての王とい

う構図が出来上がったわけだが、ロータスも他の王も死なずにその日の会議は終了した。

だがここにはわずかな語弊がある。正確に言うなら、ロータス対俺とコスモスを除く全ての王だ。そう、俺はロータスの討伐に手を出さなかった。コスモスに止められたのも一因ではあるが、それがなくともきつと手を出さなかっただろう。

きつと、ある種納得していたのだと思う。コスモスに渡された銃を受け取った時、衝突は避けられないのだと実感した。コスモスにどんな思惑があれ、あれを作ったのはライダーに間違いはない。

ライダーにしるロータスにしる自分の言ったことを曲げることはない奴らだ。特にライダーのような情を重んじる奴が、抗争に賛同することはありえないだろう。ならば、あそこで最低でも二人の道は別れた。そしてあの結末は遠からず起こりえたことだ。ロータスが王達と戦い続けるなら、それが他の王かロータス自身かの違いしかない。

だから俺は『参加しない』という選択肢に走った。ロータスと戦い、ロータスが勝つようなことがあれば敵の認識に俺が含まれてしまう。他の王達が勝つなら多少睨まれるだろうが、そうになったら関わらなければいいだけのこと。どうみても、戦いに入り込むメリットが存在していなかったんだ。戦争なんてことになったら、最小レギオンである自分の敗北は想像に難くないのだから。

「……昔話は終わりにしないか？全員揃ったんだ、そろそろ始めろよ」「えっ？？」

俺の言葉にクロウが驚愕の声をあげる。

ソーンからそらしていた視線の先、そこにはいつのまにか他の王達同様に円柱に座っている細身で象牙色をしたアバターが座っていた。どのタイミングで座ったかは知らないが、白の王である《ホワイト・コスモス》は自らは参加せず代理を送り込んでくるので、あのアバターが白のレギオン代表代理で間違いないだろう。

「レギオン《オシラトリ・ユニヴァース》所属の《アイボリー・タワー》と申します。白の王の全権代理としてこの会議に参加させていただきます。

きます。よろしく」

かくりと腰を折り一礼する。どこと無しか雰囲気が悪くなったような気もするが、それも今更だろう。

アイボリー・タワーの礼が済んで一泊開け、中央に座るナイトが鎧を鳴らしながら立ち上がる。

「よし、これで全員揃ったな。それじゃあ会議を始めようか」

その一声をきっかけに、加速世界の王が集う会議の幕が上がった。

白い脚本家の影

「……まあこんなところだな」

挨拶や唾み合いもほどほどに始まった八王会議。誠に遺憾ながら、此度は俺が話をしないと会議そのものが成り立たない状況だ。なので俺は簡潔に今現在判明している『災禍の鎧』について他の王達に説明した。

鎧の所持者のアバター名が『チェリー・ルーク』であること。方法は不明だが、空を飛んだり遠距離にある物体を手元に引き寄せられることなどだ。

「……なるほどな。んじゃあチェリー・ルークについてからいくか。誰かそいつについて知ってることはあるか？」

司会進行を務めるナイトの言葉に殆どが肩をすくめるか不動を貫く中、一人だけ立ち上がった奴がいた。

「発言させてもらうぜ」

それは赤のレギオンマスターであるレインだった。

「チェリー・ルークはうちのレギオンのメンバーだ」

爆弾発言としか思えないセリフを悠然とした様で言い放った。自分のレギオンの不祥事を何事もなく言えるところは二代目とはいえ流石王というべきか。俺のように不祥事を起こさないとどこか、存在すらしていないメンバーなしとはまるきり違う振る舞い方だ。

「おやおや、まさか赤のレギオンとは。しかしおかしいですねえ。そもそも『災禍の鎧』は『四代目クロム・ディザスター』の討伐の際に完全に消滅したのを確認しませんでしたっけ？」

「それはこっちが聞きてえよ。あたしは前回の鎧の討伐に関わっちゃいねえから知らないが、本当にあんたらは鎧の消滅を確認したのか？」

ギロツと周りの王全てを睨みつけるようにレインがアイレンズを

光らせる。自分のレギオンメンバーが災禍の鎧に呑み込まれ、しかもその原因がほぼ間違いなく俺たち王ときてる。かといってレインも分かっているのだろう。その問いかけの意味が全くとってないということを。

所詮は口約束。自分のアイテムストレージに鎧が存在しようがしまいが、それを知るのは本人のみ。結局真実を知るのは鎧を手に入れた奴だけなのだから。

「……まあ、鎧が本当に消えたかは分かりませんが、私としては幾つか気になることがあるんですがねえ」

ニヤリ、とでも聞こえてきそうなほど愉快的顔をしたレディオがこちらへ笑みを放つ。

「災禍の鎧ことクロム・デイザスター。過去にも鎧の所持者は存在してきました。ですが……その全てが狩場を無制限中立フィールドとしていました。しかし今回に限って、しかも一度きりだけ、通常対戦を行いました。それによって災禍の鎧の発見はこうして早まったわけです。

ですがしかし、例外というのは何かしらの意味があつてこそ起こると、私は思うんですがねえ。そこらへんについて、何か心当たりはありませんか？……特に、お二人は」

チラツとこちらに視線を流してくる。言外にお前らが犯人じゃねえの？と言いたいのだろう。実際無罪の証明など出来はしないので言うだけタダ。表立った動きが起きなくても、疑惑をこちらへ押し付けることが出来るとふんだのだろう。相変わらずいい根性してやる。

だがこちらも中々にいい根性をしているらしく、チャリつと自らの刃を鳴らし応戦する奴がいた。

「…ほう、つまりはアレか。通常対戦が行われたのは杉並区。そして襲われたのはウルフ。しかも隣は赤の領土だ。鎧を纏わせるに近く、逆に誘き寄せせるも容易い。暴論を言うならばすぐさま飼犬に手を噛まれたとしても不思議はない、と。

…なるほどな、確かに私とウルフが一番の容疑者のようだ」

具体性のない問いかけにペラペラと自分を追い込む説を築き上げていくロータス。そしてさりげなく巻き込まれる俺。

いやまあ犯人扱いを受ける覚悟はしてたさ。でもね、わざわざ自分ごと火の海に飛び込む必要はないと思うんだ。

「待て待て。いくらなんでも状況証拠過ぎるだろ。領土云々言ってるが、ここは東京なんだ。行こうと思えば端から端までいける程度の距離しかないだろうが」

「それはその通りだ。うん、もつともだな。」

だがなウルフ、私は私の領土で暴れられて少し気が立っているんだ。襲われたのがウルフだったからよかったものの、もしうちのレギオンメンバーが襲われていたらすぐにでも彼奴の首をはねに行っていたことだろう」

「あーはいはい襲われたのが俺でよかったですねー」

「拗ねるなよ。感謝しているのは事実だ」

いま感謝してたんですか全く気づかなかったです。お前が襲われてよかつたって言葉は絶対に感謝する時に使わないと国語学年3位は思うんです。

「まあなんにせよ、災禍の鎧をのさばらせておくわけにはいかない。また被害が出る可能性も高い、というより確定的だろう。ならばこちらから出向いた方が手間が省けるといいうものだ。」

ま、つまり何が言いたいのかというのと、私とウルフが災禍の鎧の討伐に立候補しようということだ」

「ふーん、たった二人であいつやつつけてくれるんだ？こつちとしては願ったり叶ったりだけど」

「煽るなよソーン。俺嫌なんだけど。」

そもそも待ち伏せでもしないと全損させるのはキツイのに、それを二人だけでなんて……」

無茶無理面倒無謀と言おうとしたが、相当昔に忘れ去っていた存在が思い起こされた。

「…あ、いや、その手があったか」

「気づくのが随分遅いじゃないか。レギオンマスターの自覚が足りな

「いんじやないか？」

「レギオンメンバーがいないもんでな。自覚しなくても弊害はないんだよ」

ロータスはとづくに考えついていたらしいが、レギオンマスターには幾つか他のプレイヤーには使えないシステムが存在している。そのうちの一つである断罪のジャッジメント・ブロー一撃が今回のキーパーツとなる。

断罪の一撃とは、レギオンマスターが自分のレギオンメンバーにのみ使用することが可能で、その攻撃を受けたメンバーはバーストポイントで0にし強制的にブレイン・バーストを消滅させられてしまう恐ろしい技だ。

つまりこれがある以上レギオンメンバーはレギオンマスターに逆らえず、逆にレギオンマスターは気に入らない奴を好き勝手断罪出来るわけだ。これの事を考えると、レディオのメンバーとかよくあいつの下でやっていけるものだと感心する。バナナの王様のあいつとか見てるだけで笑ってしまうだろうし、嫌味だったらしい言葉を聞いて舌打ちでもしてしまうもんならレギオン追放や断罪の流れになつてしまわないだろうか。あいつ陰謀とか完全犯罪とか好きそうだし。

「…ようするに、俺とロータスにチェリー・ルーク所属レギオンのマスターであるレインで討伐つてことか」

「そういうことだ。事態の解決に最も適してると思うが、異論はあるか？」

他の王を見回しながらロータスが問いかける。真っ先に反論（俺が参加することについて）したいのだが、いかんせん突破口が思いつかない。問題があるとすれば、ロータスは過去に裏切りの経験があり、俺はレギオンメンバーの不在による力不足が否めないこと。さらに言うならばレインは災禍の鎧との対戦経験がないことも含められるかも知れないが、断罪の一撃の存在によりここは安パイだろう。

あれ、前者二つが凄い反論の材料になりそう。でも理由の一つが悲しくなるからやめておこうしよう。

「あの、発言いいですか？」

沈黙を破ったのはこれまでもずっと無言を貫くどころか、フィールド

でも貫いてるんじゃないかと思えるほど不動を保っていたコスモスの代理、アイボリー・タワーだった。

「先ほど黒の王は自身と無色の王が災禍の鎧を所持していた可能性が高いと示唆してましたけど、それなら鎧討伐の途中の裏切りの可能性を考慮すべきと思うのですが」

アイボリー・タワーの無機質な声に会議全体の空気が固まる。なぜならそれはかつて実際に、目の前で起こったことだ。この場に存在するブラック・ロータスによる、初代赤の王レッド・ライダーが全損させられるという事象をもって。

「……確かに。既に前例がある以上、警戒をするべきなんだろうが……。うーん、なら俺も行くか？流石に三対一で暴れる奴もいないだろう」

「剣 聖！それは危険です！王自ら行くくらいなら私達が……！」

「そのとおりです！災禍の鎧など、我々にかかれば……」

「いや、その必要はない」

突然のナイトの発言に慌てたコバルトとマンガンが起こしたわずかな喧騒だが、ロータスが何の躊躇もなく言葉を遮った。

「赤の王はともかく、私とウルフは互いに重大な秘密を握り合っている。少なくとも私とウルフの間での裏切りはないと思っ……」

「へえ。二人とも随分と仲が良くなったんだね。いいんじゃないかな？一回任せてみれば」

「おや。貴女にしては珍しいことをおっしゃる。いいんですか？哀れな仔犬が凶刃の餌食になつても……クックック」

仕方のないこととはいえ裏切るとしたら俺ではなくロータスというのはいつらの中での共通意識のようだ。つまり俺が裏切らないと思われているわけで、これは信頼されているということになるのではないだろうか。違うか違うね。てか仔犬って俺のことかよ。

「まあね。私としては……どっちが裏切られても構わないかな、つてね。むしろ推奨？」

「いやせめて隠せよ」

敵意満々どころか殺意満々である。しかし黒雪が裏切るとは今更

感があり考え辛いですが、他の王が付いてくる場合これ幸いと首を斬りにくる可能性もある。というか考え辛いだけで黒雪に殺られる可能性も当然ある。土壇場になってレギオンメンバーを見捨てられないとレインが裏切る可能性だってなくはないのだ。

同じ卓を囲もうが、何年来の知り合いだろうが敵であることに変わりはない。その事を改めて思い出させるという意味では、この会議も無駄ではなかったと言うべきか。

「ま、思うところはあるだろうが一応満場一致つてことで。災禍の鎧討伐はウルフ、ロータス、レインの三組で行つてもらおう。異論はないな」

ナイトの言葉で締めくくり、それに言葉を挟むものはいなかった。頭上のカウントを見ると、残り3分を切っているのでこれ以上続けると第二回戦突入の流れなのでそれは全員遠慮したいのだろう。

こちらとしてもレインもロータスも連絡先はあるので、危険を犯した話し合いになることもない。レギオンメンバー同士の観戦で話し合いが行われるセッティングでもしてやれば勝手に決めてくれることだろう。メインはレインだしアタッカーはロータス。サポートに徹して攻撃を受けないようにするだけの簡単？なお仕事です。やらなくていいことなら、やらない。やらなくちゃいけないことは手短かに。最高だと思えます。

とにかく終わったならここにいない必要もないだろう。コバルトのドロー申請にYesを押し、帰れるよう自由の身となる。

「バーストア……ん？」

スイツと軽く視線を左に寄せる。なんとも言えないが、僅かな視線を感じた。自意識高い系としては勘違いの可能性もあるが、目線の先的人物的に勘違いではないと思う。

そこには会議が終わつたと言うのに、体制も崩さずピシツとした姿勢のまま真っ直ぐに聳え立つ、いや聳え座る？アイボリー・タワーがこちらを見ていた。

『物語の冒頭、それに相応しいこわい敵が出てくるまでは舞台裏で

待っててね』

…此処にいないはずの、スピリットさんの声が聞こえた気がした。そうか、ついに来たのか。物語が動き出し、舞台裏から引きずり出される時が来たようだ。

ゾクツと背筋に悪寒が走る。今回の話にスピリットさん、それに付随する誰かがいるとしたら、きつとタダで終わることはないのだろう。脚本家達がいつから動いているのかは分からない。だが、野に野獣を放ち、それすら台本に加えてくる奴らに俺はどう立ち向かえばいいのだろう。そもそもその目的すら見えてこないミステリー。

気づけば30分前に見た個人ブースの中で冷や汗をかいていた。この状態を見られたら冷たい目で見られそうではあるが、現実の質感が今は妙に安心できた。

しかしゆっくりはしてられなそうさ。汗を拭い立ち上がる。少しばかり忙しくなりそうさ、そう思い図書館を出ようとする、視界端に小さなアイコンが浮かんでいることに気づいた。

「…メール？」

受信に気づかなかったと言うことは、会議中の2分間に来たことになる。随分とタイムリーなメールだ。

「差出人は…：だれだ、これ。内容は…」

軽く調べてもウイルスなどの反応はない。悩んでも仕方がないので、恐る恐るアイコンをタップした。そこには……

「……………はあ？」

黒と赤の邂逅

八王会議も終わった翌日、学校が終了して早々に家に帰った俺は、現在とある戦いに専念していた。対戦相手は天使であり美少女でもあるマイラブリシスター小町である。

「だからな小町、ここに図書券1000円分がある。これをお前にやろう。しかも夜にはケーキを買ってきてやろうじゃないか。喉が渇いたらジュースも付けよう。だから今から2・3時間外で時間を潰してきてくれよ」

「いやだからさあ、急にそんなこと言われてハイいきますなんて言うわけないでしょ。理由を分かるようにはつきり教えてよ。お兄ちゃんが怪しい事してたら見逃せないよ？通報しなきゃだし。あ、今の小町的にポイント高い」

「どこにもポイントが高い部分が見当たらないが…。てか理由はさっきから言ってるだろ？俺の知り合いがちよつと大事な話があつてうちに来るんだよ」

「ハッ」

…こんにやろう鼻で笑いやがった。いや気持ちは分からんでもないよ？家に人を連れてくるのは常に小町だったし、むしろ知り合いの存在をほのめかしたのも今回が初めてだったたりするし。でもその嘲った顔はやめれ。

「あのね、ごみいちゃん。よく知りもしない人をお家にあげちゃいけないんだよ？学校で嫌な事があるなら一緒に遊んであげるから、現実見よ？ね？」

その目は優しかった。まるでいい加減この話飽きてきたなー、と目が雄弁に語りかけてくるようだ。内包された思いが全く優しくない。お兄ちゃん泣いちゃう。

「……よしこうしよう。俺の言葉が嘘じゃない場合、ようするにこれ

から俺と約束した人が来たら、小町は大人しく図書館でも行って勉強しててくれ」

「ならお兄ちゃんの妄想だったら今年中に義姉ちゃん候補を家に連れてくること。本当だったら大人しくさっきの条件で許してしんぜよう。おーけー?」

「……ま、まあいいだろう。多分もうすぐだと思うから」

小町の要求を叶えることは正直不可能なのだが、間違いなく自分が勝利すると確信しているので不安も薄れるというものだ。

そもそも災禍の鎧討伐の作戦会議だってわざわざ俺の家でやる必要などないはずだ。ファミレスでもいいし有田や黒雪の家でもいいだろう。なのに今回に限って有田の家は水道の工事が云々、黒雪は女性の方に恋人でもない男を上げるなど云々と流れ流れて俺の家集合になった。俺はあいつに住所を教えた記憶はないのだがどうするつもりなのか。

ピンポーン

「……はーいー!」

ピクツと猫の如き反応を見せた我が妹は駆け足で玄関に駆けつけていく。勝てば兄の嫁候補、負けてもケーキやジュースと妹に得しかないこの賭けごと。そんな中で一番小町が望んでいるのはとりあえずの結果なのだろう。まあ自主的に動いてくれる分には問題ない。ハズレだった場合の面倒を任せられるし。

「おっにいちゃーん! お客さーん!」

……来たか。

「わかった、こっちに通してくれ。お前は図書館へ行ってこいな」

「はーい! もう、そうならそうと言ってくれればいいのに! あ、でもまだ手は出しちゃダメだよ? そしたら犯罪だかね? お茶は奥の棚に入ってるから! じゃ、お邪魔虫は置いて後は若い二人でよろしくう!」

「……は?」

ハイテンションにハイテンションを掛け合わせたかのような様相で出て行く小町を呆然としながら見送る。ツツコミどころが分からない、ツツコミどころが多過ぎて分からない。その代わり嫌な予感が脳裏からガンガン溢れてくる。

しかも小町はなんて言った？二人？予定だと黒雪と有田にシアン・パイルの中の人も連れてくると言っていたはずだ。なら、今来たのは…誰だ？

トットツと軽快な足取りでこちらに近づいてくる足音からして、そいつが黒雪でないことは明らかだ。そしてこの状況このタイミング、来るとしたら…あいつしかいない。

「おにーちゃん。久しぶりだね♪」

数ヶ月ぶりに見たそいつは、天使のような笑みを浮かべていた。

☆☆☆

「……………久しぶりだな、上月。帰れ」

「はあ？せっかくわざわざこんな家までご足労してやったのに、いきなり帰れってのはないだろ。こちとらレギオンメンバーがクロム・デイズスターになっちまって気が気じゃねえんだ。ゆつたりしてる暇はないんだよ」

「そっちの事情も分かるが今はタイミングが最悪なんだよ！一応連絡先も交換してんだからそれでも意思疎通はできるだろ。だから今のところは帰れ。一刻一秒レベルで時間が惜しいんだ。お前も刻まれるのは嫌だろう？」

「さっきから何言ってるんだ？別にロータスの領地にいるからっても、ローカルネットワークには接続してないからいきなり斬りかかられたりはしねえよ」

違うんだよ、刻んでくる本人が今まさにこっちに向かってきてるんだよ。ローカルネットを飛び越えて現実の生身で突撃してくるんだよ。リアル割れ御法度のブレイン・バーストで王と王の邂逅とか笑えないんだって…。

ピンポーン

…：噂をすれば影。忍び寄る刃を首に突きつけられたかのように背筋が冷たくなる。…いやまだ分からない。ロータスかと思つてたらレイカーでした！みたいなオチがあるかもしれない。いやレイカーでも誰でも困るな。だったら…：ダメだ、この状況で呼び鈴鳴らす人間が全く思いつかない。家の呼び鈴を鳴らすような友達とか皆無ですので俺。

「…おい、上月。お前、俺の部屋に行つとけ。で、今から俺がいいって言うまで絶対に降りてくるな」

「は？…なんで…」

「いいから。ほら、いったい」

上月を追つ払い、覚悟を決めて玄関への道を進む。一步一步が心なしか重く感じる。これが背水の陣、違うか。むしろギロチンに向かう死刑囚の気分なんだろうな。

一応外にいる人物を確かめるために玄関に設置してあるカメラに接続する。そしてそこにいるのは黒雪と有田とかつてのイケメン。これ以上の時間稼ぎも無駄のようだ。観念してニューロリンカーを操作しロツクを外した。

「…：よう」

「ああ。悪いな、遅くなった」

「二「お邪魔します」」

「ん。こつちだ。適当に寛いでくれ」

とりあえず黒雪たちをリビングに押し込む。上月が大人しくしているかは賭けだが、ここは信じる以外ないだろう。

(お茶は奥の棚だったな)

お湯を沸かし古くなった急須に茶葉を入れ、湯呑みを四つ携えてリビングに向かう。

「ふうん、アンタが《黒の王》か。なるほど、こりやあ黒いや、夜だったら目の前にいても見えねーな」

「そういう貴様も実に赤いぞ、《赤の王》。交差点にぶら下げたら車が止まって面白そうだ」

信じた俺がバカだった。

ちよつと目を離れた隙に上月はリビングに突入したらしく、既にそこでは赤と黒の睨み合いに発展していた。王相手でも臆さずリアルをぶちまける胆力は恐れ入るが、うちで戦争をおっぱじめないで欲しい。後輩二人も怯えてるじゃないか。俺もだが。

「……………上月、待つてろつて言っただろ」

「待つてねえつて言っただろ」

「言つてねえよ」

捏造いくない。それにしてもまた面倒なことになった。現状を考えれば目的は全員災禍の鎧討伐だから仲間割れはしらないとは思う。しかしこのメンバーが違う勢力の混合だから内輪揉めはたびたび起こることだろう。刺さりそうなほど鋭い視線を向けてくる姫さまを筆頭に。

「……………はあ」

一つため息を落とし、不機嫌極まりない姫達への弁明に取り掛かった。

☆☆☆☆

「…なるほど。ご自慢の妹君が偶然連れてきたお友達が、奇跡的にも赤の王だったと。それはそれは奇遇なことだな」

「まったくだな、運命感じちゃうぜ。つーかそっちもなかなかじゃねえか。違う区を支配してる王と隠密中の誰かさんが不可思議にも同じ学校の同学年とはな。その上今じゃクラスも一緒ですってか」

大雑把に黒雪と上月に俺と二人がなぜリアル割れしているかを説明し、和やかとは言えないがひとまず落ち着いて会話を成立できる場を作ることができたようだ。目から火花が散る事はたびたびあるが、まあ女子同士ならきつと自然だよな（目逸らし）

「…落ち着いたことですし、まずは自己紹介をしませんか？リアルでの対面は比企谷先輩とも初になるので、改めて」

タイミングを見計らい、イケメンことシアン・パイルの中の人が話を切り出した。眼鏡の縁をくいつと上げる姿がなんとも様になってるのがなんかムカつく。

それに共感したかは知らないが、上月が小さく舌打ちをした。それについて指をパチンと鳴らすと、目の前に真紅のネームタグが現れる。そこには上月のフルネームと顔写真が貼り付けてあった。

「ま、飛び入り参加だからな。あたしからやってやるよ。あたしはニコ。コウツキユニコだ」

名前と顔が記されているこれは、言うなれば身分証明書のようなものだ。これを偽造するのはかなり困難なため、偽名の可能性を消し、多少の信頼も得られる優れものだ。

「じゃあ次。比企谷八幡だ」

指先を滑らせ、念のために全員にネームタグを送信する。何気にこの機能を使ったのが生まれて初なので不手際があったらと不安だった。

「僕は黛拓武です。どうぞよろしく」

目の前にイケメンのネームタグが浮かび上がる。イケメンの名前は黛だったのか。顔がかっこいいと名前もなんかカッコよく見えてくるこの不自然現象はなんだろうか。イケメンって怖い。

「えーと、有田春雪、です」

チラツとこちらをみてからネームタグが送信されてくる。気を使わなくてもいいのだが、既に名前は分かりきっているのでネームタグを画面端に放り、最後の人物に目を向けた。

「ん？ああ、私か。私は黒雪姫だ。宜しく見知り置け」

「おいコラ、それ本名じゃねーだろ！」

即座に上月が噛み付くが、黒雪は涼しい顔でネームタグを送りつけてきた。

【黒雪姫】

……お、おう。ハッキング済みつか。

「くっ！あーもーイイよなんでも！姫とか自称する図太い女だっただけだけ覚えとくよ！」

「王と自称するよりはるかに可愛いものだろう？」

うがーつと憤る上月にふふんと鼻で笑う黒雪。色も高さも違うが、中々に相性はイイのかもしれない。うん、なんとも微笑ましい光景だ。

でもな、

「…お前ら何しに来たんだよ」

結局話し合いが再開されたのは二人が騒ぎ始めてから10分以上過ぎてからとなった。

と言つても、王三人に加えて羽根つきのクロウもいるので戦力面は問題ないとされ、災禍の鎧が無制限中立フィールドに潜るタイミングについても上月が請け負った。

なので全員の連絡先が交換されて明日またここに集合、とはならず、今度は有田の家に集合となった。毎日受験生である小町を家から追い出せるほど俺の心は強くないんです。

まあ俺の心云々は置いておけば、概ね好調にいつていると言えるだろう。玄関に集まり、外出届を出していないらしい上月と黒雪達を見送りながらそう思った。

「…何も起こらないといいたがなあ」

誰もいなくなった玄関で、小さく呟いた。

喰ラエ、強クナルタメニ

時間が経つのが早く感じる。そんな経験をしたことがないだろうか。授業を受けている時とゲームをしている時。寝ている時と起きている時。まるで普段の時間を無視したように時が進んでいく感覚は、おそらく誰もが知っているとされる。

嫌なことがある時はなぜか早く、嫌なことが起きている時は遅く。どこか理不尽な人体の不思議を本当の意味で理解できるのは、人間そのものを創造した神様くらいのもだろう。科学者という人間の不思議を解き明かす存在は、既存の法則を見つけ出すことかそれに新たな刺激を与えるくらいしかできないものだ。つまり見つけ出すことすら出来ない一般人な俺にそんな体感時間を操作することなど不可能であることは確定的に明らかであって…。つまり何が言いたいかというと、

はい、授業さん終わるの早いっす。数学しか寝ないからもっとゆっくりしやがれください。

☆☆☆

「よし、全員揃ったな」

やっぱり時間には勝てなかったよ…。

そんな後ろ向きな気持ちを抱きつつ、新たな集合場所となった有田の家にお邪魔していた。有田の親は夜遅くまで帰ってこないとの事なので、迷惑を考えなくていい点ではありがたい。まあ他人の家にいるという状況だけで精神ダメージが発生するが。

「今んとこまだ大丈夫だ。チェリーに動きはない」

方法は分からないが上月がチェリー・ルークの動向がある程度分かるらしい。なので暫くはここに待機。それから上に行き、飛ぶなり走るなりして災禍の鎧に奇襲をかける作戦だ。

「そーいやそいつの動きが分かるのはいいけど、移動はどうするんだ？俺はともかく中でエネミーに引つかかるのも怠いと思うんだが」

無制限中立フィールドは大型のエネミーがうろついているし、なにより有田はまだ潜った事すらないという。見られないし見つかったとしても逃げられる俺ならともかく、一体ずつ捌いて焼いていくのも手間だろう。なにより災禍の鎧がその間に狩りを終えてしまう可能性もなくはないのだ。

「んー、中からでいいだろ。このメンツならエネミーにも引つかからねえだろうし。もし引つかかったら…」

「引つかかったら？」

「お兄ちゃん、先によろしくね♪」

「……やっぱそうなるのか」

ちなみに今のよろしくね♪は先に災禍の鎧と戦って足止めしとけ、という意味だ。見えない俺にエネミーを任せるのは得策ではないという考えだろう。むしろエネミー相手なら何度も経験あるからそつちを一人で受けたいくらいなのだが。

「…いやそれなら上月もこないダメだろ。断罪の一撃が今回のキーアイテムだからお前が来ないと意味ないし」

「……ああ。分かってるよ」

今度は真剣味を増した表情で上月は答える。状況が状況だから仕方ないとはいえテンションの上がり下がりが激しくて反応が辛い。自分のレギオンメンバーを全損させると言うキツイ事態故の事だろうが、なんとなくこいつらしくないと思った。上月の内側はこいつ自身が意図的に隠している節があるのではつきりとはいえないが、どことなく追い詰められている気配がする。ただ所属しているメンバー以上の感情があるのだろうか…。

「…来た！チェリーが西武池袋線上りの電車に乗った。今までのパターンからして今日の狩場はブクロだ」

「池袋か。中から行くならとつとと加速しちまおうぜ。あいつが潜る時間がどのくらい分かるか？」

「大体2分つてとこだ。今から潜れば一日以上は余裕がある」

現実の2分なら大体三十時間ちよい。移動中になにも起こらなければ大目に時間を考えてもなんら問題はない。だが、今回は確実に何が起こる。そんな確信を持てる不確定事項が俺の中で存在している。スピリットさんが今回のことに絡んでいることは明らか。そこにコスモスもいるのか、それ以外の勢力がいるのか、はたまたスピリットさんの単独で行っているのか。それがわからない以上は警戒して事を進める必要がありそうだ。

「それではハルユキ君。キミに我々バーストリンカーの真の戦場へとダイブするためのコマンドを教える。バーストポイントを10消費するが、問題はなからうな？」

「え、ええ。10ポイントくらいなら。それより、真の戦場って…?」
「言葉通りだ。我々が加速世界と呼ぶものの本質がそこにある。私のコマンド通りに、続けて唱えろ」

一人慌てる有田を横目に、それ以外の人間は経験済み故にゆったりと待機する。その一人である俺も、有田ではなく上月を見ながら黒雪の号令を待った。隠しきれない闘志、後悔、決意。ここまで大きな感情を体感した事はあまりないが、見るからに危うい。今にも暴走しそうな目だ。

(…最悪、背中から撃たれる覚悟もしとかねえとな。あっちもこっちも敵だらけで嫌になるな、ほんと)

「行くぞ、五代目クロムデイズター討伐。ミッション・スタートだ！」

心の不満は届かない。心の叫びも届かない。心の内の感情は何処にもいかずに押し込められている。せめて、それらが暴発しないことを祈りながら、小さく口を開いた。

『アンリミテッド・バースト!』

☆☆☆

変化しきつた視界が開けると、そばには4つのアバターがいることから初めて無制限中立フィールドに昇ったクロウが置いて行かれたという事態は免れたようだ。

「……ここが、『無制限中立フィールド』」

「そうだ」

呆然としたようなクロウの呟きにロータスが簡潔に答える。加速した場所がマンションの内側なため、まだ普段の対戦フィールドとの違いが分かりにくいのもかもしれない。

「あちらが出口だろう。実際に見た方が早い」

「だな、行こうぜ」

ロータスが先導し、それに皆がついていく。俺も定位置の最後尾をゆつたり歩きながらそれに続いた。

「そーいやルークは池袋のどこらへんに出るんだ？池袋つて一言に言ってもかなり広いだろ？」

ふと気になり前を歩くレインに問いかける。その瞬間前を歩いていた4人全員がビクツと肩を震わせたのは何故だろう。クロウなんか一瞬浮きかかってたし。

「…いきなり喋んなよ。びっくりするじゃねえか」

「そーだぞウルフ。目に見えないというのは人がそれから意識を外す最大の理由なのだぞ」

「…無色の王。都市伝説の類と思ってましたけど、本当に見えないんですね。会議の時は色が付いていたので改めて驚きました」

「……知ってても気を抜くとビククリします」

「……………」

ねえなんなの？喋っただけでこの言われようって俺人権否定され過ぎじゃない？いきなり喋るなってならどうすればいいんだよ。喋るなってか。得意だけどき、得意だけどきー！

「…………で、どうなんだよ」

「あー、これまでのパターンからしてサンシャインシティの周辺だよ」
「そうか。なら俺ゲージ溜めてくるわ」

それだけ言い残しそこいらにある彫像や格子を蹴り壊していく。そこまで硬くない貴重なオブジェクトを行き場のない遣る瀬無さと共に破壊する作業は、少なからず楽しさを感じる。なにより喋らなくていいからな。ほら、俺ぼっちだから。

「…ふう。よし、満タンだな」

辺りがグチャグチャになり、俺の必殺技ゲージも溜まったのであいつらが行ったと思われる場所に戻っていく。少し歩くとロータスとレインが騒いでいる声が聞こえてくる。それを頼りにいくと、やけに広々とした部屋に着き二人の王が怒鳴りあっていた。

「私が抱えてもらおうしかならう、この腕なんだから。貴様はシルバー・クロウの脚にぶらさがれ」

「冗談じゃねー！なんでそんな屈辱的な真似しなきゃなんねーんだ。あんたがそんなデザインなのが悪いんだろが、一人だけ電車でいけよ！」

……あー、なるほど。移動手段にクロウにぶら下がろうって話か。前から思ってたんだけど、真のリア充って有田なんじゃないかなあ。加速世界だけならともかく、現実でも黒雪がいるし。ヤバイな爆発させたい。

「落ち着いてくださいマスター、赤の王。せめて無色の王が戻ってきてからに…」

「今戻った」

「うわっ！」

「……………」

「……………す、すみません」

「…いやもう慣れたわ」

イケメンパイルの叫び声に毒気を抜かれたのかロータスもレインも一度怒鳴り合いを辞めた。クロウも今しがたゲージが溜まったように、改めて全員集合準備万端といったところか。

「えーと、改めて移動方法なのですが…」

「俺は走ってくから抜いていいぞ」

「そうですね。でしたら、マスターがハルの右腕に。赤の王は左腕に抱えてもらう。そして僕が両脚にぶら下がります。いけるかな、ハル？」

「あ、うん。スピードは出ないだろうけど。それより、ウルフ先輩はいんですか？」

「一回対戦したろ。あれ見ても不安か？」

「そ、そうですね。すみません」

「いや別に謝らなくてもいいけど」

基本低頭なクロウが軽く頭を下げてくるが、雑な扱いに慣れつつあるこの頃だともうにも接し辛い。もちろん高圧的に来られてもアレだが。氣遣われないのが一番なんだなやっぱ。

「じゃあ先降りてるから先導頼むわ」

氣遣われないためには一緒にいない、つまり物理的に距離を取るのが一番と言えるだろう。幸いここは二十三階相当。地上からの声も上空からの声も聞こえない。普段のソロプレイに戻るわけだ。

「よつと」

軽く助走を付けてマンションから飛び降りる。一人なら「イヤッホオオオオ！」と叫びたくなる風を浴びながら地面に向かって進んでいく。俺の耐久力なら当然この高さから直撃したら即死なのは間違いないな。しかも命綱なし。自覚すると怖いです。

「臆病風の発生地」

ある程度の高さに来たところで真下に必殺技を放つ。俺の口から突風が発生し、みるみる落下速度が下がっていく。攻撃力は皆無だが

人を吹き飛ばせる程度の風力は余裕であるので、こんな使い方もできたりして地味だけど便利だ。

「……行くか。独走者」
ワン・トップランナー

特に体力を減らすこともなく着地に成功し、そのまますぐに走り出す。四足歩行に姿を変え、必殺技も使用して風を切り裂くように駆ける。

(クロウ達は重量的にすぐに池袋に着くことはない。そもそも時間の余裕を考えるとまだまだ何も起きない可能性の方が高いが…)

ダメだ。スピリットさんに洞窟の奥でされた警戒が未だに身体に染み付いて離れない。普段の生活で忘れる事は何度もあったというのに、ここ数日はこびり付いているかのように消え去る事はなかった。『何か』は分からないが、『何か』ある。ただの直感だが、どうしても外れる気がしない。だが俺が解決できるとも限らない。なのに足が動く。抑えられない危機感が背中を押し、焦燥感が首を引いていく。取り越し苦勞であることを祈りつつ、サンシャインシティまでの道のりを全速で走り続けた。

☆☆☆

同時刻。とある加速世界の一角で、一つアバターが口を動かしていた。ガリゴリと硬い音を立て、目の前の物を喰らっていく。

「ユルウウウウ…」

呻き声をあげるアバターの周りは数多の光が浮かんでいる。その光は一つ一つに数字を持ち、しばらく経つとそれが1ずつ減っていく。遠目に見れば光が集まり綺麗に見えたかもしれない。

「……ニコ」

それが、この加速世界において死亡マーカと呼ばれる一時的な墓でなければ、だが。

「…喰ラエ、モット喰ラエ。強ク、モット強ク…」

その喰い終わった残骸を投げ捨て、また別の場所に向かっていく。巨大な剣を抱え、飢えた獣のように徘徊し、彷徨う。

「強く、ナルんだ」

獣の願いは、誰もいないフィールドの中に消えていく。最速の王が災厄の鎧と激突する時は近い。

孤立したレギオンマスター

クリア・ウルフこと比企谷八幡は風を切り裂くかの如きスピードで駆け抜けていた。よく当たる悪い予感、今回も裏切ることなく的中したらしい。その証拠に少し前から転々と死亡マークが地に散らばっている。マークはプレイヤーが殺された時間から数えて一時間で消えるので、数多くのマークが残っているということはそれを行なった者がまだ近くにいるという証拠に他ならない。

「……上月め、なにが一日以上あるだ。こりや電車乗った瞬間加速してるぞ」

走りながら小さく毒吐く。この時間、このタイミング、そして何よりのこの死亡者の数が下手人の正体を教えてくれている。というか、こんな惨状を作り出せる存在がそうやすやすといてたまるかという思いもあるが。

「……ッ！見つけた！」

近辺を走り回ってようやく見つけた。あの身の丈を超える大剣、あのドス黒いアバター。そして今にも死亡マークを更に増やそうと大剣を薄緑色のアバターに振り下ろそうとしている姿勢を見、すぐさま突っ込んだ。

「ステル・ス・シャッター認識不能の捕縛者!!？」

そして必殺技コマンドを叫ぶ。狙いは当然クロム・ディザスター。発動した事だけ念頭に入れ、次はディザスターを無視して狙われているアバターに目を向ける。そしてそのままディザスターの剣の軌道に割り込むように身体を割り込ませた。

「キヤアアアアア!!」

「ユロオオオオ……ッッ!?」

そして俺に大剣が当たる寸前、ディザスターはまるで電池が切れたかのように行動の全てを急停止した。

「ちよっと待ってろ。ちゃんと相手してやるから」

デイズスターを横目に襲われていたアバターを抱えて勢いのまま走り去る。きつちり三秒後にデイズスターは再び動き始めたが、先日の対戦を見るに縦横無尽の動きはしても直線運動では間違いなく此方に部がある。なら最優先はこいつをどこか安全な場所に送る事だろう。

「な、なに!? 浮いてる!?」

「落ち着け。今からあいつの見えないところまで運ぶ。その後は早めにポータルで脱出しろ」

突然の事態についていけない少女に用件を簡潔に伝える。さすがに目の前で仮想世界とはいえ死にかけてるやつを見捨てるのは忍びなかったから助けたが、これで誘拐犯的な扱いはないよね? 見えてないから特定はされないだろうけど。

「え? あなた...誰?」

「名乗るほどのもんじゃない。...よし、ここでいいな。早く逃げろよ」

聳え立つビル群の間に下ろし、すぐに元来た道を引き返していく。といってもやはり追いかけてきていたのか思った以上に早い衝突となった。

「オラアッ!」

「...ユルウ」

地を走っていたデイズスターに向けて蹴りを打ち込む。当然それはあつさり大剣に阻まれた。それを踏み台に距離を取り、これからの行動を考える。

さつきまで常時必殺技発動状態だったため、俺の必殺技ゲージは尽きている。つまり現状最も簡単なのはロータスやレインの救援が来るまでの時間稼ぎという事になる。戦っていれば先ほどまでのように他のアバターが巻き込まれる事もないだろうからな。

「...クリア...ウルフ」

「...ん?」

わずかに見える程度に色を付けながら時間を稼ごうと思っていたら、何故かデイズスターに名前を呼ばれた。

……いや、え、ちよつと待って。

今度は何をどう言おうとしてるのを聞き逃さんと聴覚に意識を張り巡らせ、ディザスターに耳を傾ける。何故かディザスターは俯くように動かないという不思議な行動を取っているので、警戒を切らなければ問題ないだろう。なにより、ただの聞き間違いであつてくれと願う俺がいるのが事実だ。

「……レベル9。倒せば、僕ハ強クなれル。……強ク、もつト強ク」

困惑する俺の心境を知る由もなく、ディザスターは人の言葉を話し続ける。さすがにこれ以上俺の聞き間違いを疑うことは無理そうだ。

「……………お前、もしかして」

そして最悪な予想が頭をよぎる。というか、現状が既にありえない。災禍の鎧は使用者の精神を丸ごと乗っ取り、まるで獣のように使用者を支配する。そこに理性があるはずがないのだ。

過去に何度も災禍の鎧討伐に駆り出されてきたが、喋る奴など見たとがない。圧倒的な凶暴性を秘め、目の前に敵獲物がいるのに動きを止めるなど考えられない。だが目の前でそれが起きている以上、それを組み入れて考える必要がある。つまり……

「……………意識があるのか？」

「……………」

その返答は……

「イニューマラフル・エッジ
鳥群の爪痕！」

必殺技のコマンドと、ディザスターの手から伸びる大量の鉤爪によって行われた。

「……こりゃあ、レインが来るまでにどうかしないとヤバいな」

☆☆☆

クリア・ウルフが災禍の鎧と戦闘を開始した頃、クロウ達は真下にウルフが付いてきていると信じて疑わず、相変わらずゆったりとしたスピードで空を飛んでいた。といつてもすでに目白通りも通り越し、池袋の中心地はもう目と鼻の先だ。

「おっと、ここで停まりな。まだチェリーの奴がこっちに来んのはだいぶ時間があるはずだけど、念を入れて地上から行こうぜ。飛んで行ったんじや下から丸見えだ」

レインに頭を引かれ、多少グラつきながらクロウは高度を下げていく。地上にある程度近づいたところでパイルが手を離し、それを確認するとクロウもゆつくりと着地。二人の王を地面に下ろした。

「さつてと、んじやゆつくり行くか」

「そうですね。ところで、無色の王はここにいますか?」

パイルの言葉に全員が身構える。いつ、どこで言葉が発せられようとも今度はビビらない心構えが出来ていた。

しかしそれを裏切るように辺りからの反応は何もない。声が聞こえることもなければ足音が響くこともない。ウルフの性格的に、こちらの反応を楽しむという悪趣味なこともしないだろうという思いから全員が首を傾げた。

「う、ウルフ先輩いないんですか？僕達を見失ったとか？」

「…追いつけない速度ではなかった、というかむしろ我々が置いていかれる程度のスピードしか出してなかったわけだし、その可能性は高いな。かといってあいつがそんな間抜けな真似をするかと言われると、それもなんとも言えんな」

「そーか？よく知らねえけど結構適当な感じするし、見失ったなら見失ったで別行動でもいいとか思っただんじやねえの？」

「……それも否定はできませんが、基本あいつは全体の一番後ろをついて行く人間だからな。考えなしに逸れるとも考え辛い。まあこれ以上は本人がいない以上無駄な論議だ。あいつは放っておいて先に進もう」

薄情というべきか信頼と呼ぶべきか、特に心配されることなく四人はサンシャインシティに向けて歩き出した。そして然程も歩いてないところで、クロウは奇妙な物体を見つけた。

「……あの、先輩。あれもここのオブジェクトか何かですか？」

遠目に見る限り、あれには何かの文字と数字が浮かび上がっている。もしかしたらドロップアイテムかも…！などとクロウはゲーム脳丸出しで近づこうとするが、それは三人の手によって制止された。

「辞めた方がいいよ、ハル」

「うむ。大方アイテムか何かだと思ったのかもしれないが、そんな素晴らしいものでは決してないからな」

「そーそー。むしろ、あんたもなる可能性がある代物だぜ？」

クツクツク、と笑うニコに戦慄する。どういった物かは分からないが、自分があの物体に変化するとすると妙に背筋が寒くなるのだ。

「ハル、あれは『死亡マーク』なんだ。この世界で体力が0になるとアバターからあのマークに変わる。そして一時間経つと、また元の姿に戻るって寸法さ」

「な、なるほど。ここで死んだら強制的に現実に戻るのかと思ってたけど、そういう仕組みだったのか」

つまりあれは一時的な墓なのだろう。マーカーの状態で自分がどうなるのかは分からないが、元に戻るまで意識もないなんて事はないはずだ。つまり今もあそこではそのアバターが此方を見ているかもしれないわけ…。

そう考えると近づかなくてよかったとホッとする。誰だって自分が死んだ姿をジロジロ見られるのは嫌だろう。それにここは無制限中立フィールド。元々不可侵条約を結んでない身で関係ないが、ここでは誰を襲おうと許される本物の無制限地帯。そんなことで恨みを買う必要はないのだから。

「つて、あたっ！」

考え事に夢中になって、何故か目の前で停止していたパイルにぶつかってしまった。

「タク、どうしたんだ？急に止まったりして」

「……ハル、前を見てごらん」

メットに覆われた鼻をこすりながらパイルの横をすり抜けて目の前に広がる景色を一望した。

「……なんだよ……これ」

そして、絶句した。ほんの僅かだが、開けた通り。そこには点々と続く光の道が出来上がっていた。それもただの光じゃない。その全ては先程見かけた死亡マーカーにより出来上がっていたのだ。

「……かなりの数がある事から狩りの途中だったか、あるいは他に目的があったのかは定かではないが近場にエネミーの気配はない。ということは……」

「まさか、もうチェリーが来てるってことか!?!？」

ロータスの仮説を引き継ぐようにレインが声を荒げる。何故ならこの四人が加速したのはチェリー・ルークが電車に乗った事を察知してすぐの事だからだ。加速している間は当然身体は放置したままとなる。それを人の密集する電車で行うなど正気の沙汰じゃない。

「……………まさか、あいつはこれを知っていたのか?！」

沈んだ様子のレインが呟いた言葉は、この場の全員の耳に届いていた。ここでいう『あいつ』とは、言うまでもなくウルフの事だろう。この場にはいない現実、イレギュラーが発生している現状、底う事はできても否定することはできないだろう。

「……なんにせよ、急がなければならぬ。これがウルフの思惑だろうとそうでなかつたら、今はこの惨状を作り出した張本人を見つけ出すのが先決だ」

「……ああ、分かっている。分かっているさ」

噛みしめるように前を向くレインを見ながら、クロウは何も言えずに黙っていた。今のレインがウルフへの怒りを燃やしているのか、それとも他の事を考えているのかは分からないが、今自分に出来ることは王である二人の手助けを最優先する事だと自分に言い聞かせた。

「なら急ぎましょう！まずはこの先……に……」

光を辿ればその先にウルフかチェリーがいる。そう思い、自分に言い聞かせるように叱咤激励を飛ばそうとするも、それは突如現れた巨大な影に阻まれた。

「シュロロアアア！」

今の今までどこにいたのか、それを感じさせないほどの存在感を醸し出しながら、赤黒い獅子はビル群の上に鎮座していた。そしてその瞳は間違いなく此方をロックオンしている。

「巨獣級だど!? クソツ、なんでこのタイミングでこんな大物が！」

「言ってる場合か！ 全員構えろ！ 気を抜けば、体力すべて持っていかれるぞー！」

その時には巨獣級エネミーはすでに動き出していた。高く跳躍し、そして口からドス黒い炎を覗かせ、それをクロウ達にピツタリと向けている。そこから何が放たれるのかは言うまでもないだろう。

「避けろおおおお!!」

戦いの火蓋は、高く上がる火柱により切って落とされた。

戦場にダイブしたなら…

「ねえ二人とも。災禍の鎧がどうやってできたか、知ってる？」

加速世界のどこかのいつか。暗闇入り混じる場所で白いアバターが問いかける。

「どうやってできたか、ですか？いえ、新参の僕にはなんとも…」

「私も詳しくはないですねえ。とはいえ、えっらい憎しみに塗れてるのは一目で分かりましたけど」

その問いに各々の手が弄っていた物を止めて返答する。一人は蝟の足のようなもの、もう一人は鋭い針という違いはあるがどちらもその答えは知り得なかったようだ。

「そう、憎しみ。それで正解だよ。あれは巨大な憎しみを加速世界最強の鎧と高攻撃力の剣が合わさって生まれた物。まだ心意を発現できる者が殆どいなかった頃、その憎しみは途轍もない負の心意が生み出したの」

見た感じの答えはそこまで外れてはいなかったらしい。いや、これは単なる暇潰しなのだろう。ただ受け答えする壁役が欲しかっただけなのかもしれない。だが二人はある組織の末端。唯一それとかけ離れている彼女の口滑りはとても興味深く、それに関心を傾けていた。

「……あーでも、憎しみって言ったらこのゲーム内かなりありますよね？PKなりEKなり人の悪意グイグイ入り混りのごった煮状態じゃないですかあ。そんな中で何代も残せる恨みが籠ったアバターが出来るんですか？」

「普通は無理だね。そんなことが出来たらこの世界は二、三十の呪いアバターが溢れかえっちゃうよ」

さも当然と肯定する。ならばなぜあんな悍ましく恐ろしい鎧が加速世界に放たれたのか。いや、そもそもそれは何者なのか。

「けど、そこで例外となるのがメタルカラー。そもそも考えてみて欲しいんだけど、基本メタルカラーは防御力が物理か効果に強い人型しかいない。でもー、硬いアバターなら緑がいるし近接型が欲しければ青がいる。言っちゃえば、メタルカラーなんてこのゲームには必要ないんだよ」

その言葉を受けて二人はほう、と改めて考えさせられる。数は多くないが二人もメタルカラーとは戦ったことはある。だがそこに必要なはそのメタルカラーにはどんな攻撃が効くか、または効かないかくらいでその存在価値など考えたこともなかった。

「……つまり、そのメタルカラーにはこのゲームに関わる何かがある、とお考えなのですか？」

「いやいやここまで意味ありげに言ったけど、私的にはメタルカラーなんてどーでもいいの。というか、ある程度の仮説と実験はもう済んでるしね。」

そ・れ・よ・り・も……

一旦言葉を切った白いアバターを前にした二人にゾツと悪寒が走る。ああ、これはアレだ。この人特有の、面白いオモチャで、それも壊れるまで遊ぼうとしている残虐性が溢れ出ているんだろう。短くもない程度には接している二人はそれを肌で感じていた。

「メタルカラーよりもさらに希少な、そもそも色なのかすら分からない彼はなんなのか、気になるんだよねえ」

フワツと白いアバターの胸に浮かんだ瞳が薄く輝きだす。それには何が写っているのか、それは本人にしかわからない。何も知らない二人は静かに、その彼に同情した。

☆☆☆

突如巨獣級エネミーに襲われたシルバー・クロウ達は、逸る気持ちは抑えながらも慎重に回避を優先しつつ戦っていた。だが王が二人

いるというのに予想以上に対処に手間取っていた。

「……おかしいな」

そんな中、エネミーがビルの上に戻っていったタイミングでブラック・ロータスが口を開いた。

「…おかしいって、あのエネミーがですか?」

無制限フィールド初加速のクロウがロータスの独り言を聞きつけるが、いかんせん初めてのものに違和感を覚えるはずもなく、詳細を尋ねる以外には他の人達に頼る他なかった。そもこの世界のエネミーは最弱の小獣級エネミーですら単独討伐適正レベルは7以上。空を飛べると言っても瞬間速度は明らかにあちらが上なので気軽に飛べるわけもなく、クロウも地上戦を強いられていた。

「ああ。エネミーにしては動きが理知的すぎる」

ロータスの言葉にはて、と首を傾げる。エネミーはAI搭載であるのだからある程度理知的なのは当然なのではないだろうか。そう尋ねる前にロータスは再びエネミーに突っ込んでいく。

「もう少し細かくエネミーの動きを見ながら行動してみるんだ」

「は、はい。わかりました」

すれ違いざまにそう言われたが、見ながらといってもどうすればいいのだろうか。とりあえずエネミーの動きを追うことにした。

ロータスが斬りかからんと突っ込むと即座に跳躍し、ビルの上に飛び乗り火球をロータスに向けて吐き出した。ロータスはそれを回避するがその時にはエネミーは固まっていた。パイルとレインに飛び掛っていく。それをパイルとレインの二人が別々のビルの間を転がり込むことでそれを回避したところへ、着地により隙ができたエネミーにロータスが斬りかかるも、それから距離をとるように跳躍を……

「……あれ?」

それは長年のゲームで培った経験故か。なんとも言えない違和感だった。そう、あのエネミーはまるでプレイヤーのように戦い方を選択しているのだ。近距離戦が得意なロータスには遠距離攻撃を、遠距離が得意なレインには近距離攻撃を繰り返している。

このゲームがどうかはわからないが、ゲームのエネミーは基本的に一番ダメージを与えたプレイヤーかスキルでヘイトを集めたプレイヤーを優先的に狙うはずだ。そうでなくても目の前に獲物プレイヤーがいるのに躊躇いなく回避に移るといふのはあまりにも人間味がありすぎる、AIらしからぬ動きだ。

「ギャアアアオオ!!」

そしてビルの上で咆哮。まるでインターバルのように戦いの最中に挟むそれは、本気で狩る気がないようにも見えてきた。現にあの大きさのエネミーと戦っているのに、互いに決定打どころか碌にダメージが入っていない。ロータスに至っては目に見える限り一太刀も与えられていない。その全てが近づく前に逃げられているせいだ。

「……まさか、アレは人の手によるものなのか?」

クロウはそんな結論に至った。純然なるAIとしてではなく、人の意識や思惑が入り込んでの行動だとしたら、今までのエネミーの不可思議な行動に説明がつく。

ならば、その誰かはこのエネミーを使って何をしたいのだろうか。ターゲットがこの四人のうちの誰かなのか、それとも一人だけなのかはわからない。だが誰も死に落ちしていないところを見ると、四人とも目的の人物ではないのではないかと思えてくる。

「……いや違う!」

そうだ。今僕たちは何をしにきているんだ。そう、災禍の鎧討伐。そんな前提条件を一時的ながら忘れていた。八王会議の中、それ以外ではリアルでしか災禍の鎧討伐についての情報は漏れていなかったはずだ。

つまり、王の誰かが此度の事を仕組んだ事になる。その目的まで考えつくほど頭は良くないが、相手の思い通りに進んでいる今の状態はマズイと言わざるをえない。

そう結論をつけたクロウは火球を避けているロータスに近づき抱えると、一旦エネミーの近くから離脱して近くのビルの間身を隠した。

「先輩!あのエネミーはきつと時間稼ぎです!」

「……ふむ、君もそう考えたか。だがそれはそれで色々困った事になるな」

「なんでですか？ここはエネミーを引きつける役とウルフ先輩に助太刀に行く役で分ければ……」

「そのウルフがアレを操っていたらどうするつもりなんだ。彼奴が消息を眩ました今、最も怪しいのはウルフだ。その場合助太刀役だけで災禍の鎧と戦うことになるやもしれない」

その言葉にはつと息を呑む。この場におらず、未だアバターが謎に包まれているウルフなら可能なのではないかという思い。そして、もしやそれをロータスは知っているのではないか？

「……先輩はウルフ先輩がこのエネミーを操っている方法を知ってるんですか？」

「……いや、ハッキリ言って皆目検討もつかないよ。この世界にはエネミーを操る方法があるにはある。しかもある程度レベルが高い者ならそう難しくもない方法だ」

「だったら……」

「だがそれはこの場にいる必要がある。先ほど赤いのに情報圧を調べさせたが、彼奴の反応はなかった。となると遠隔操作の類だろうが、そんな複雑怪奇なことをウルフが出来るとも考え辛い。とはいえ……」

「なら今はそれでいいじゃないですか！」

ロータスの言葉を遮るように声を張り上げる。先輩に面と向かって怒鳴るなど自分でも驚きだが、今は一刻を争っている時じゃない。確かに先輩の言う通り、ウルフ先輩が何かをしているのかもしれない。だが、していないかもしれない。そして自分はそれを信じたいんだ。二ヶ月前からロクに関わってないし、むしろ会ってからも殆ど話していない。でもあの人は、昔僕が忘れた何かを持っている気がしてならないんだ。

「……僕が行きます」

「……なに？」

「僕がウルフ先輩のところに行きます。僕一人ならウルフ先輩が何かをしていても、逆に何もしていなくても被害を一番抑えられます。こ

「ここからの離脱も数が少ない方がいいでしょう?」

必殺技ゲージは二割ほど誌が残っていない。誰かを伴って行くには安全圏までの距離に不安が残る。当然鎧の元にエネミーを連れて行くわけにもいかないのです、こちらとしても足止めをされてくれないと困ってくる。そしてやはりこの中で一番機動力があるのは僕だ。だったら、僕がやるしかないじゃないか。

「……災禍の鎧は、今まで君が戦った何者よりも強く、恐ろしい物だ。そこにウルフも加わるかもしれない。それでも君は……」

「僕はあなたと約束しました。前人未到のレベル10。そこにあなたを連れて行くと。だから、これくらいどうってことないです。それに……」

……本当はすごく怖い。かつて手も足も、翼さえ使い立ち向かっても足元にすら届かなかった相手と再戦するかもしれない。最低でもかつて王全てを相手取ったアバターとは戦うことになる。ウルフ先輩が王の中で最弱だと先輩は言ったが、その人にすら何もできなかったのだ。そんな人達に挑むなど死に行くような行動かもしれない。

「僕は……ブラック・ロータスの子ですから」

強く、真っ直ぐで、絶対に引かない。そんな親を誇り、力になりたい。期待に応えたい。色んな思いが混ざり合っている。だがそれらが全てこの先の戦いを望んでいるのだ。

「……そうか。なら、任せてるぞ」

「はいー任せてくださいー!」

「うむ。なら、親として一っだけアドバイスを授けよう」

おおっ!と声に出しそうになる気持ちを抑えて耳を傾ける。やる気満々とはいえ無制限中立フィールドは初めてなことにかわりはない。どんな些細な事でも力になるのだから。

「君は…戦っている時に雑念が入る傾向にあるな」

「えっ!? あ、いや、その。どうしても、こうなったらどうしようとかって思考が入ってしまった……」

「別に思考する事が悪いと言ってるわけじゃない。いかに勝つか考え続けるのは大事な事だ。だが君は、過剰な程に敗北を恐れる傾向にあ

る。だからそんな君に必要な事を今ここで伝えよう」

一泊置き、微笑みかけるように続けた。

「負けたら…なんて余計なことを考える必要はない。クレバーな撤退なんざ尚更さ。そんな物に価値はない。一度戦場にダイブしたならば、相手が誰であろうとひたすら戦闘あるのみだ」

では、行ってこい。最後にそれだけ言っただけ先輩は再びエネミーに向かっていった。逆に僕は、その場に立ち尽くしていた。

「……ひたすら戦闘あるのみ、か」

ストンと心に落ちた言葉は、先ほどまで渦巻いていた余計な感情を拭い去った。肩に乗っかっていた重荷が全て抜け落ちたかのように、今ならどこまでも飛べるような気すらしてくるじゃないか。

「……よしー」

気合を入れなおしたクロウは、エネミーに見つからないようにその場を飛び立った。

能ある狼の隠されし牙

加速世界で踊る一つのアバター。災禍を纏い、透明な王と対峙しているチェリー・ルークは剣を振りながら感動していた。この鎧を纏うまではレベル6で完全に停滞してしまっていたというのに、それが今ではニコに聞いたレベル8到達ポイントまであと12ポイントというところまで来ているではないか。そう、つまり目の前のレベル9を、王と呼ばれるクリア・ウルフを、かつて時間切れという不本意なものとはいえ負けた相手を倒せば。自分はレベル8というニコの足元までたどりつけるのだ。

その想いが気分を高揚させる。そして今のチェリー・ルークには負ける気など微塵もしなかった。

《攻撃予測／通常攻撃／打撃系・脅威度／3》

視界に文字列が横切る。さらに同時に赤い軌道予測ラインが映り込む。それに重ねるように剣を振るうと、剣の側面に軽い衝撃が走る。恐らく剣を蹴る事で軌道を変えられたのだろう。

イニニューマラフル・エッジ
「鳥群の鉤爪」

必殺技を発動し四方八方に掌から鉤爪を伸ばす。するとウルフは避けているのか鉤爪はただ地面やビルの側面を掴むしかない。だがルークはニヤリと笑うと、地面やビルを掴んでいる鉤爪ごと強引に振り回した。それだけで破壊不能と言われているはずの地面の一部が、ビルの一部屋にも及ぶ大きさの瓦礫が鉤爪に追従してくるではないか。今までの自分では考えられない、ありえない現象だ。

だが今はそれが起こる。否、起こせる。自分の力で、自分の意思で、自由自在に引き裂き、喰い千切る事ができる。かつて強者に舐めさせられていた辛酸を、自らが相手に強要できる。

《攻撃予測／必殺技／特殊状態異常系・脅威度／20》

それどころか相手の知らない手の内すら今の自分には透けて見える。前回ウルフに挑んだときはなぜかここまでの余裕がなく苦戦したが、今の自分はおつての、すべての自分に勝っている！

「…ユルオオオオオオオ!!」

歓喜の咆哮が口から漏れ出す。その叫びが獣になっている事に、既にルークは気づけなくなっていた。

☆☆☆

side：ウルフ

「……ふう。手詰まり、だな」

息を吐きつつ目の前にいる災禍の鎧を睨みつける。前回は時間切れとはいえ勝てたので今回もいけるだろうと高を括っていたが、今日のあいつはどうにもこちらの動きを全て見切っているかのように対応してくる。見えていないはずなのに当然のようにカウンターを仕掛け、《色彩捕食》で色を奪おうとすると避けたり剣を盾にしたりと完全に防いでくる。

別に打つ手が完全になくなっていくわけではない。元々俺は《対強者用》の技で、弱者として戦ってきた。だから反撃用の必殺技はある。だが忘れてはいけないのは、俺が今ここで災禍の鎧のHPを0にしたところで何も生み出さない。むしろ全快のあいつが蘇ってくるだけのジリ貧に陥る。だから動けない程度に痛めつけようと思ったが現状それは難しい。しかも時間的にそろそろレインが来ると思いたいのだが一向にその気配もないときた。

「むしろ一回体力をなくしてやるべきか…」

いや、それはダメだ。口に出た言葉を頭の中ですぐに否定する。目の前のこいつを見れば確信できる。こいつは、半分ほどとはいえ意識が残っているのは確定だ。だが、やはり半分ほどしかないのだ。大半が強くなりたい、強者を喰らいたいという狂的なまでの欲望に囚われ

ている。

こんな状態でレインに会わせてみる。まだ鎧を壊せば助かるかも、などという幻想を抱くに決まっている。そしてそれがあっさり裏切られるに違いないこともわかる。

俺は知っている。これを仕組んだ人物の一人を。その人がそんな甘っちょろいことを許すはずがないということも。だから早く目の前の存在をこの加速世界から抹消しなければならぬ。だがその為にはレインの銃が必要という手詰まり具合。なんとも頭の痛い話だ。(…時間を稼ぎながら少しずつ体力を削るしかない、か)

やはりそれしかないかと嘆息する。とはいえ進歩がないわけじゃない。俺という限定的な奴を相手にしているとはいえ、攻めも守りも全て腕を起点にしていることは明確になっている。だから……

「そろそろ、一本貰おうか」

代わり映えしない特攻。代わり映えしない反撃。それもここまでは。ちようど嬉しい誤算も見つかった。

振り回される瓦礫を掻い潜り、ある一点を目指して突き進む。当然のように剣を振り下ろしてくる災禍の鎧に口の端が吊り上がった。完全にこちらの思惑通りだ。

「……」

今までのリプレイのように剣を振り下ろしてくる災禍の鎧の攻撃に、小さく必殺技コマンドを唱える。変わったところはそれだけだ。だが、それだけで俺は勝てる。相手が強ければ強いほどに、俺の必殺技は効力を増す。

「ル、アアアアアアアア!!、!?!」

目の前で悲鳴をあげる災禍の鎧と、その頭上へ飛んで行ったそいつの片腕を冷たく見つめる。そして一步、後ろへ飛んだ。

「そこ、危ないぞ?」

最後まで聞こえただろうか。そう思えるほど絶妙なタイミングで、シルバー・クロウが放った上空からの蹴りが災禍の鎧の顔面に突き刺

さった。

☆☆☆

side：クロウ

エネミーに見つからないように低空飛行を続け、すれ違いざまに崩れかけているオブジェを破壊しながら必殺技ゲージを溜める。滑空するだけならゲージを消費せずに一定距離を飛べるが、現状では少しでも多くの必殺技ゲージが必要になるので、なるべくスピードを抑えないようにしながら無制限中立フィールドを突き進む。

先輩の元から発ってからどれくらい経っただろうか。そんなことを考える。それから何度も何度も先輩に言われたことを頭の中で復唱した。

オオオオツ!!

「ツッ?」

ただ飛んでいるだけだと、身体が怯え、震え、今にも逃げ出したくなってしまうからだ。そう遠くない場所から響いてくる獣の雄叫び。それがハルユキに得体の知れぬ恐怖を投げかけてくる。

その対象は自分ではない。それが分かっているのに、その場所に近づくと自分に自分を火中に飛び込む羽虫のように錯覚してしまう。

「ッ怯むなー」

自らを叱責し、両頬に平手を食らわせながらさらに速度を上げる。響く咆哮で距離と方角は判明している。自分の仕事は、まず一発、災禍の鎧に一撃を喰らわすことだ。ウルフ先輩が敵であろうと味方であろうとそれは変わらない。どっちであろうと、鎧が敵という事は変

わからないのだから。その後1対1対1となるか1対2となるかはその場次第だ。

「見つけたー！」

視線の先には災禍の鎧と思えるドス黒いアバターが剣を振り回し、ついでに瓦礫や岩も飛回っている。周りに他のアバターの姿が見られない事から恐らくウルフ先輩と交戦中なのだろう。

スウーと大きく息を吸い、ハアーと大きく息を吐く。これより先に進めばそこは戦場だ。一度入ったらそこから逃げ出す事は出来なくなる。だが、それでいい。一度戦場にダイブしたなら……

「あとは、ひたすら戦闘あるのみ！」

加速。一度高度を上げ、落下スピードをプラスしながら必殺技ゲージを全て使い切るつもりでの全力飛行。風を切り裂く音を感じながら足の爪先を災禍の鎧に向ける。そして、勢いを殺さずに狙いを定めた蹴りは、寸分変わらず鎧の頭部分に突き刺さった。

「…ユ、オオオ」

呻き声を上げ、災禍の鎧は蹴りの威力を受け止めきれずに十メートル程の距離を錐揉み回転しながら吹き飛んだ。いかに強固な鎧でも、あれほどの攻撃を喰らえば堪えるようだ。

ハルユキは自分の蹴りが有効打になった事に安堵した。だがそれも一瞬、頭に硬い衝撃が加えられるまでのことだった。

ガンツ！と金属と金属をぶつけたような音が頭に衝撃と共に響き、ウルフが敵かもしれないことを思い出す。まさか不意打ち!??と近くにいるのは間違いないウルフからの攻撃を受けたものと思い、反射的にぶつかってきた物体を掴み取りながら遠ざけた。

ヒョイっと予想以上にあっさり退けられた物体にハルユキの頭に疑問が浮かぶ。スイツと自分の手の中にある物体に目をやると同時、

「うっひゃああああ、!!！」

ハルユキは現状の全てを忘れ去り、みつともなく悲鳴をあげた。なぜならそれは、鋼鉄を思わせるほど硬いが、間違いなく誰かの腕だったからだ。

「なんだこれ!??えっ、ほんとなにこれ!??そうだ、ウルフ先輩！いま

すか!?!?」

即座に投げ捨てるが、混乱は解けない。いったい何がどうなったら頭の上に腕が落ちてくるという非常事態に陥るというのか。わたわたとしながらいるはずの存在に呼び掛けた。既にクロウの頭の中では敵だなんだと細かいことが根こそぎ抜け落ちてしまっていた。

「……いるぞ。遅かったな」

締まらねえな、なんて幻聴が聞こえそうな声色で虚空から声が響く。だがなんとも言えない物言いに咄嗟に反論した。

「ウルフ先輩が先に行つちやうからですよ!みんな心配して…」

「悪いな、事情があつたんだよ。それよりレインはあとどのくらいでくる?あいつが来ないと終わらないんだが…」

「それがエネミーに襲われて…。予想以上に強かったので僕だけ先に増援に来ました」

「…つまりいつ来るかは分からないんだな?」

「……はい」

どこからか聞こえてくる溜息に萎縮しながら、認知できないウルフではなく災禍の鎧に目を向ける。予想以上のダメージが入っているのか、未だに立ち上がれずに膝をついている。が、目だけはギラギラと鋭く光り殺意を此方に突きつけている。

「…ジャ、マフ、スルナ」

だから純粹に、此方に言葉を伝えてきた鎧に意表を突かれた。

「え?あの鎧、喋って…」

「クロウ、手伝え。レインが来る前に喋れなくなる程度には弱らせるぞ」

「え、でも。まだ意識があるなら、もしかしたらまだ…」

「そう思わせないために、だ。災禍の鎧を装備した時点でそいつは鎧を受け入れた。なら、こいつはそこまでだ」

訳が、わからない。冷たく言い放つウルフ先輩は何かを知っているようだった。ウルフ先輩が敵かもしれないという考えが再燃する。

しかし今何かができるとも思えない。ウルフ先輩が災禍の鎧と敵対していることは間違いないにしても、悠々と話している時間がある訳でもない。むず痒さを覚えながら、再び災禍の鎧と向き合った。

「いくぞ」

「は、はいー」

行動を起こすのはまず一段落ついてからだ。そう考え思考を研ぎ澄ませる。それと同時に、視界の隅に落ちている先ほどの腕が目についた。片腕がないのでアレの持ち主は間違いなく災禍の鎧だろう。ならば当然、アレをやったのは……

(ウルフ先輩があ腕を切り落としたのか!?!?)

だとしたらおかしい。色付きの時も見ただ事あるが、剣や刀のような武器の存在はなかった。いやそれ以前に、ウルフ先輩に災禍の鎧を切り裂けるほどの高攻撃力があるということが不思議でならなかった。

ブルツと身体に寒気が走る。ウルフの底の知れなさを分らないなりに感じながら、何度も竦み上がる身に鞭を打ち災禍の鎧に立ち向かった。

裏切りの先に見えぬ希望

高い高い丘の上。目を光らせて今が今かと待ち構えているアバターがいた。その身を巨大な強化外装で覆い、視線は数キロ先を見通せる望遠レンズの先を見据えていた。指先は何時でも引き鉄を引く準備を怠らず、口は何かを食いしぼるように固く閉じられている。

そのアバターの目に映っているのは漆黒のアバターと白銀のアバター。片腕を失っている漆黒のアバターを翻弄するように白銀のアバターが飛び回り、漆黒のアバターが不可視の攻撃を受けバランスを崩すと同時に白銀のアバターが攻めに転じる。その一つ一つがこのアバターをイラつかせた。純黒のアバターの子である白銀のアバターは親の期待に応えようと格上の相手に攻めかかっている。親から伝えられた助言を体現しようとしている。

『一度戦場にダイブしたならば、相手が誰であろうとひたすら対戦あるのみだ』

偶然聞いてしまったアイツの言葉が思い返される。アレは、自分の子を信じている言葉だった。そして子もそれを受け止め、ああしてそれを実行している。動きに怯えはなく、逃げ腰にもなっていない。

私は、あいつらみたいに親を、信じられていただろうか。いや、信じていた。当たり前のように信じ、そして、当たり前のこと気づかなかった。信じていたから、知ろうとしなかつたんだ。親が、チェリー・ルークが、自分を超えた子の後ろ姿に何を思っていたかを、前しか見ていなかった自分は気づかなかった。常に近くにいた親がすぐ後ろにいと信じて疑わず、振り向いた時には目で見えないほどに離れていた。

「……まだ、まだあの鎧を壊せれば……」

あの頃に戻るかもしれない。そんな不可能な現実を幻視し、覗いていたスコープを熱源感知に変更する。視界に映る人数が2人から3人に変化する。幻に縋り、自らの罪から目を背けるように、小さな小さな赤いアバターは、ゆっくりと引き鉄を引いた。

☆☆☆

sideクロウ

ひたすら戦闘あるのみ。それを心に刻みながら隻腕の鎧に対峙する。相手は王に匹敵する強敵だ。片腕を失ってもそう簡単に勝てる相手ではない。だから油断など欠片もなく災禍の鎧に挑んだ。

だが、予想外の展開が目の前で巻き起こっている。否、その役者に自分も入っているのだから巻き起こしている、というべきか。

「シッ！」

小さく息を吐き硬い鎧に拳をぶつける。あまり効いていないのだろう、すぐ振り下ろしてきた剣を予測しながら右翼のみを高速で振動させて刀を回避する。その勢いを殺さないように空中で半回転しながら僕は頭に向けて蹴りを放った。

「ユルア！」

ガパツと突如開いた鎧の口は迫り来る足をそのまま喰い千切らんとしている。しかし僕はそれで蹴りを止めることはなかった。

突如ガキョツと不思議な音を立てて、足を喰おうとしていた顔は正面ではなく強制的に右に向けられた。つまり、なんの躊躇いもなく蹴りが放てるようになったということだ。

「リアッ！」

掛け声一つ、十分な手応え、否、足応えを感じ鎧から距離を取る。先程から似たような光景が繰り返されていた。僕が攻める時、決まってウルフ先輩が絶妙に攻撃のサポートをしてくれる。まるで僕の心を読んでいるんじゃないかと思えるくらい、ウルフ先輩は的確に助けてくれた。鎧の攻撃が当たりそうになると必殺技で鎧の気を逸らし、攻撃する時は相手の反撃を封じるように小さな変化を与えてくれる。たったそれだけで今までの何倍も動いているように感じた。

(……………いける！)

絶対的な強者に対して善戦、むしろ押しているような状況について勇み足になる。体力をなくしてはいけな、弱らせるだけ。分かっているはずなのに休む間も無く攻めに向かう。

前を見るのに夢中になっていたせいだ。鎧に肉薄した僕は、横からくる巨大な力の奔流に気がつかなかった。

視界が、真っ赤に染まった。

☆☆☆

sideウルフ

増援（一人）が来てからは多少なりとも気を落ち着かせられた。なぜならクロウが率先して前衛を受け持ってくれるからだ。過去の災禍の鎧全般に言えることだが災禍の鎧はギリギリの戦い、そうでなくても激しい戦闘をしていると何故か不意打ちや今まで見切られていた複数攻撃が当たりやすくなる。先ほどまでの俺との対戦にもう一人追加で、どうやらその状態に陥っているらしい。

そのせいかは知らないが鎧はだんだん喋らなくなっている。我武者羅に剣を振るい、クロウを叩つ斬ろうとしている。一人で戦っていた時よりも判断力が見るからに衰えているのだ。

この状態なら無理に二人で攻めるより、俺はサポートに徹して確実にダメージを与え続けてるべきだろう。クロウも慣れてきたのか、危なくなっても逃げずに進んでくれるおかげでだいぶ行動も読みやすいしな。

「さて、もう一回か」

いや正直ね、サポートはするし真っ直ぐ突っ込んでもらって構わないんだけどさ、張り切り過ぎじゃない？クロウはヒットアンドアウェイを基本に危なげなく鎧に渡り合ってるから文句はない。でもそのインターバルがあまりにも短過ぎる。おかげで身体が薄っすらと見

えてくるほどになっている。災禍の鎧の腕を切り落とした必殺技は色の侵食が発生しないので問題なかったが、通常攻撃は別だ。攻撃力と防御力に歴然とした差があるので一気に染まりはしないが、そろそろ不味いかもしれない。

それにクロウの状態も気になる。何も考えずにただ倒すことだけを考えるのは通常対戦ならともかく、無制限中立フィールドでは通用しない考えだ。乱入に不意打ち、闇討ちなんかも当然ありのここは前だけ見てたらやられる場所。特に今回のような……ッ！

「噂をすればってか！」

四方に気を配っていた視界に、彼方から襲い来る光の濁流が映り込む。その光の色は…赤。やはり、と言うべきか。俺はギリギリ範囲外だが、クロウは巻き込まれる距離だ。そして災禍の鎧にぶち当たれば間違いなく奴の体力は底をつくだろう。それは今の状況では最悪と言わざるを得ない。またあんな化け物と最初から戦うなんてごめんだ。

「クロウ、ちよつと借りるぞ。あと少し隠れとけ！」

光の存在感に吞まれ、動きが固まったクロウを押しつけるように光の直線上に身体を割り込ませる。そしてクロウから手が離れる寸前に大声でコマンドを唱えた。

「多彩変色！」
シャッフル・カラー

瞬間、一人のアバターの姿が消え、他の場所からもう一人のアバターが現れた。消えたアバターはカラスの姿、現れたアバターは狼の姿をしている。そう、ウルフの色彩模倣トレスと同系統のアビリティにより、二人の色が入れ替わったのだ。

異変は終わらない。銀の特性を得たとはいえウルフは元々紙装甲。下手すればこの一撃だけで体力を持って行かれかねないというのに射線上に身を投げた。当然考え合つてのことだが、やはり死にかねない光線に身震いしながらもう一度コマンドを唱えた。

「……さらに、色付透明物体!!」
ノンインセンスリフレクション

右手を光線に、左手を虚空に伸ばし光線が訪れるのを待ち構える。数秒未満の時間内に災禍の鎧の位置を再度確かめる。

(体表色彩度100%。よって屈折操作方向、全方位！)

物理の授業で一度は目にしたことがあるだろうか。凹レンズや凸レンズに光を差し込んだ時、その光はレンズに指示されるように道筋を変える。この場で起きたことはまさにそれと同じ光景だ。今まで全てを焼き尽くさんと直進し続けていた光線はウルフを起点にあらゆる方向へ折れ曲がり、加速世界の空へ打ち上げられた。近くにいる存在に当たらないように約2秒、その身で光を捻じ曲げたのだ。

「ウルフ先輩！」

(クツソ、間に合わねえ！)

それはつまり、後ろにいる存在に、災禍の鎧に、自らの敵に2秒もの間完全無防備な背中を晒したことと同意となる。

「ユツラアアアア!!!」

後ろから振り下ろされる剣からできる限り距離を取ろうと地を蹴る。だが、足りない。先程の意趣返しだろうか、さっき似たような光景を見たなあと半ばヤケになりながら己の右腕が空に飛ぶ姿を確認した。それと同時に襲い来る激痛。

「ぐう、ああ」

「ウルフ先輩！そんな……嘘だろ……。いったい誰が……」

狼狽えるクロウは見えないが、言葉から相当の動揺が伺える。きつと気づいているのだろう。気付いた上で、信じられないのだろう。あんな威力で、あんな距離から、そしてあんな色を持っている存在。

ザツ

足音が響く。果たしてそこに立っていたのは俺とクロウの頭の中の中心にいる存在。赤い装甲に、赤い銃。

赤の王、スカーレット・レインがその場に立っていた。撃つたと思われる距離から来たにしてはヤケに早い。：いや、薄っすら過剰光が見えるから心意を使ってここに来たようだ。人の事言えないしクロウにはバレていないとはいえ、堂々と使用している姿に痛みと共に笑いが湧いてくるようだ。

「……なんでだ、なんでなんだよ……赤の王。いや、スカーレット・レイン！」

震える声がフィールドに響き渡る。レインの登場で災禍の鎧の動きも止まった。静寂の中にクロウの声だけが大きく存在していた。

「裏切ったのか!? 対処法があったから良かったにしても、レベル9のウルフ先輩は君に倒されたらポイント全損してしまうんだぞ！」

「それがどうした。どういう仕組みでお前の姿が消えてるのかは知らねえが、退いてな。今のお前らに用は無い」

「そん…な」

クロウの言葉に聞く耳も、悪びれる事すらせずにレインは災禍の鎧と向き合い、右手に握った小さな銃を向けた。震えた指が引き金に掛かる。ちようど相手は動かない。そのまま撃ち貫いてくれればこの右手程度気にしないんだが…。

「……………に、コ」

「……………ッ！」

どうやらそうは問屋が卸してくれないらしい。災禍の鎧が名前を呼んだだけで、目に見えるほど震えてレインの動きが停止した。

「……………チェリー。まさか、意識が…」

「……………ニコ。ボク、コンな二強クナッタよ」

災禍の鎧が今までの暴れっぷりを潜めている。レインはまるで死んだ人間が生き返ったかのように驚き、一歩ずつ災禍の鎧に近づいていく。

「意識が、あるんだな!? 災禍の鎧に呑まれたのに、意識が！ハハッ、まさか、本当に！」

カシャンツと、ついには《断罪の一撃》である拳銃を落としてしまった。両腕は災禍の鎧、いやチェリー・ルークを迎え入れるように広げている。

「ニコ。ボク、頑張ってモウスぐレベル8にナレソウなんだ」

「……………そうか」

「キミは、喜んデクレる? ボクを、助けテクレる?」

「…ああ。私はチェリーが、お前が戻って来てくれるだけで……………」

ヒュン

言葉は、最後まで続かなかった。近づいたレインの首を両断する軌道に、災禍の鎧が剣を振り抜いたのだ。

「……チエリー。……なんで」

呆然、それ以外の言葉で言い表せない声色で、レインは口以外一切動かさない身体で災禍の鎧を見つめていた。

「……………ニコ。ナンデ逃ゲルノ？」

幸いなのは、レインが俺の左腕の中にいて死んでいないってことか。

「…アト12ポイント。ソレデ、僕ハ強クナレルンダ。レベル9ヲ倒セバ。ニコヲ倒セバ。レベル8ニ、強ク、モット強ク…」

災禍の鎧は、元チエリー・ルークは、既にレインの事など見ていなかった。ただ自分が強くなる事以外の全てが、こいつの視界の中には存在しないのだろう。

これが嫌だったんだ。下手な希望、淡い望み、可能性の片鱗。そしてそこから訪れる絶望。上げて落とす、希望を与えられそれを奪われる。昔からある、初めから望みが無い状態よりさらに深く絶望させる方法だ。

「ユラアアアアア!!」

巨大な咆哮。これは、今度こそチエリー・ルークとスカーレット・レインとの決別の証の如く、フィールドの彼方まで届く。だがそれほどの咆哮も、眼前にいるレインにだけは届いていなかった。常に目の中に存在していた光が消え失せている。

《ゼロロファイル零化現象》。アバターを動かす心の熱、魂と呼ばれる処からでる信号がゼロで埋め尽くされてしまったアバターに起こる現象。傷と向き合えず、闘志を失い、立つ事すらできなくなるシステム外バッドステータス。外部から治す方法は、ない。本人がこの傷と向かい合う以外に、この状態から抜け出す事は不可能だ。それはつまり、災禍の鎧消滅が不可能になった事を意味する。他人の強化外装を使う事はで

きる。だが、《断罪の一撃》はレギオンマスターからレギオンメンバーにのみ適応される。そいつを他人が使用する事は不可能だ。

「…万事休す、か」

ここで失敗すればもうリアルタイムで災禍の鎧のダイブ時間を知る事は出来なくなる。待ち伏せができない以上、大人数での討伐は不可能。この人数でも失敗したのにさらに少なくしてすぐに成功する可能性は少ない。

「……クソッ」

「ほう、お前は諦めたか。なら、次は私が挑むとしようか」

斬ッ！遠くから鎧に向かって飛翔してきた斬撃が災禍の鎧に一字の傷を刻んだ。それだけに留まらない。高速で鎧に突っ込んでいく黒い影、そして鎧と共に剣戟を繰り広げる。間違いなくあのお転婆お嬢様だ。

「……やけに遅かったな」

「なに、寄り道がてら子犬の世話をしていたものでな。少し手間取った。しかしようやく来たというのに情けない姿を見せてくれるじゃないか」

「押してダメなら諦めろが俺の主義なもんでね。今んとこ、押す扉が見あたんねえんだ」

「……ふむ。《零化現象》か」

災禍の鎧の猛攻に怯むことなく剣を重ね、着々と鎧に傷を増やしていくロータス。片腕がなくアンバランスの奴が相手だからか、多少会話をする余裕すらあるらしい。だがそれで一度倒したとしても、それ以上の意味を見出せない。レインが動けない以上…。

「押してダメなら諦めろ、だったか？ならば、押す気はあると見て良い

「のだな?」

「あ? まあ、な」

「なら私がお前に扉を授けよう。そこで寝ている赤の王を起こせ」
「はあ!??」

ロータスの言葉に柄にもなく声を上げてしまう。ロータスが《零化現象》について知らないわけがない。なにせ、それによってブレイン・バーストを去ってしまう人間が毎年現れているからだ。その解明だって相当の時間をかけて研究され、公表されている。

「…いや、無理だろ。《零化現象》は…」

「私はお前なら救えると信じている」

大音量の金属音に混じってえらく自分勝手に俺に不可能を要求してくる。レインの傷に向き合わせるなんて、やはり本人じゃないと不可能だ。

「信じてるって言ったって…」

「何故ならお前は、そいつと同じ苦しみを知っている存在だからだ」
「……ッ」

「最愛の存在が加速世界から消える悲しみを、お前は知っているはずだ! クリア・ウルフ!」

斬ッ斬ッ!! 怒声と共に放たれた両手剣で鎧の胸元に十文字が刻まれる。流石の鎧も限界なのだろう、とうとう膝をついてしまった。

だが今の俺にはそれすら考えられない。最愛の存在。当然、小町だ。小町が全損した時に俺が《零化現象》に陥らなかつたのは、現実世界での小町の安否を確認せずにはいられなかつたからだ。恐らく小町が加速世界のことを覚えていないとわかつた瞬間に加速世界にいたら、俺は間違いなく《零化現象》になつていただろう。

(……今のこいつは、あの時の俺と似たような気持ちなのか)

同じ体験、同じ立場、そして同じ絶望。そんな境遇の人間が目の前で打ち拉がれている。それを放っておくなど、できるはずもなかつた。

「グルア!」

「なに!??」

無理難題に挑もうとしているのに、挑む時にすら邪魔が入るようだ。まだ逃げるだけの力を残していたのか。蹲っていた災禍の鎧がまるで何かに吸い寄せられるように空へ飛び上がった。

「ひ、《飛行アビリティ》!?？」

「いや、飛行アビリティは君以外確認されていないはずだ。恐らく似て非なるものだ。：行け、クロウ！アレは、君にしか止められない！」

「はいー！」

クロウが飛び上がる音を聞き届け、ロータスはゆっくり此方へ振り向き、一言。

「ウルフ、お前を頼るぞ」

そう言い残すと、クロウを追って猛スピードで駆けて行った。残されたのは俺とレインだけ。災禍の鎧を食い止めているだろうクロウもそしてロータスも、俺みたいな奴を頼るなんて考えなしが過ぎているだろう。だが、ああそうだな。仕方ないよな。

「…………おう、任せとけ」

孤王の独白

「これは…俺の友達の友達の話なんだが」

レインを背負いクロウ達が向かったであろう方向へ歩き出す。遠くから聞こえてくる僅かな音をBGMにし、背中で《零化現象》に陥ったレインに向けて俺が俺のトラウマを語る時の定型句を紡ぐ。

「そいつには妹がいたんだ。社交的で明るくて、ちよつとバカだけどそんなところも可愛らしい妹がな」

ロータスに頼ると言われ、俺は了承した。かといって、俺にできる事など俺の過去を語ることで引き攣った笑いを起こす程度だ。だから少しばかり聞いてもらおう。その間に僅かでも反応があれば万々歳だ。

「妹と違ってそいつはボッチだった。学校でも一人だったし家でも両親は基本放任主義だったからほとんど一人。そんなだからブレイン・バーストはそいつにとつて最高の暇潰しだった。四六時中プレイして、現実がかなり薄くなるほどにはな」

そう、一戦一戦が楽しくてしようがなかった頃だ。毎日毎日外に出では対戦に打ち込んでいた。

「そんな時に『子』を作るシステムを見つけちゃった。大喜びで妹に教えたよ。まだ小さい妹に自分が時間かけて見つけたコツを教えたり、やられそうになった時は紙装甲で盾になったりもした」

「…」

背中小さく動く気配がした。しかし、それを無視して話を進める。

「楽しかったよ。唯一大好きな存在と共有するものができたんだ。『兄』と『妹』、『親』と『子』。他に親しい奴がいなかったからそれが唯一で絶対の絆だった。それがさらに深まったんだと小さいながらに思ったもんさ。」

「だがある日、妹は加速世界から消えた」

自分の口から出た言葉を噛み締めながら、続きを口にする。

「無制限中立フィールドに行っていた妹はプレイヤーキルにあったんだ。馬鹿みたいな話でな。あと五分、いや、一分早く帰ってりや助けられたんだ。それも普段なら、いいやその日だってできたはずなんだ」

もうレインに話しているのか自分を責めているのか分からなくなってくる。それでも口を止める事だけはできない。なぜなら、俺がレインに伝えたいことはここからだからだ。

「加速世界から戻った時、もう妹は加速世界のことを全部忘れてた。その日は枕を濡らして泣いたもんさ。俺たちが積み上げてたもの、思い出とか絆とか、そういうもんが一瞬でなくなっちゃった。もう俺の知ってる妹はいないんだ、てな」

繋がっていたものが切れた。だから俺たちの関係はなくなった。あの日の俺は、純粹にそう思っていた。

「それで次の日。泣き腫らした顔を洗おうと思って部屋から出た時にちようど妹と鉢合わせしてな。そんな時に言われたんだ」

『おはようお兄ちゃん！』

「……これだけで、昨日泣いてた俺が馬鹿だったことに気づかされた。なんせ、そんな時の顔が今までずっと見てきた笑顔と寸分違わず同じだったんだからな。思い出だの繋がりの、それだけに囚われてあいつ自身をちゃんと見てなかったのは俺の方だった」

レインを背負い直し、少しだけ立ち止まる。

「なあレイン。このゲームに現実よりのめり込みまうのは分かる。このゲームがお前とあいつとの最も強い繋がりでってのも、まあ分かるつもりだ」

もう分かっている。スカーレット・レインとチェリー・ルーク。この二人は親子だ。鎧に吞まれてなおレインを認識できるルーク。《零

化現象』に陥るほどルークに思い入れがあるレイン。さらに言えばレインがルークの加速時間を把握していたことからしても確定的だ。

だからこそ、俺は知っていてほしい。

「だから断言してやる。」

人は変わらない。環境が変わっても、周りが変わっても、記憶が変わったとしてもだ。もう一度、ゲームで覆われた表面じゃなくて、『親』や『子』っていう立場を通さない、本物のあいつを見てやってくれないか？

きつと、そいつはお前の知ってるそいつと何も変わらない」

前回は何も感じなかったが、今日会った災禍の鎧からはとても懐かしい何かを感じていた。強く、ひたすら強くなりたいという願望。暴力的な言動に惑わされていたが、あいつが望んでいたのは本当に強さだけだった。過去の災禍の鎧のように喰らうことは目的ではなく、それを手段にしかせずに強さだけを追い求める。それはまるで小町を失ったばかりの俺のようだった。

ダメな自分、弱い自分、そんな見たくない所から目が背けられるほどの、失敗した自分より強い力をつけて過去を塗り潰そうとしている。それを後悔の発散にしていた俺と違い、あいつは今をまだやり直せると信じて、否、妄信して突き進んでしまっている。

「だから救ってやれ、とは言わない。ゲームで培った絆は無くなるだろうし、改めて関係を作るのは難しいだろうし、鎧なんでもので無理矢理変えられたあいつは、現実でも変わってしまったかもしれない」

あの鎧による影響がゲームの中だけならば、きつとレインはルークを止められただろう。『親』と『子』である以上リアルをお互い知っているはずなのだから。

そこまでくるとそれはもう呪いだ。ゲームの中だけでなく現実ですら悪影響を及ぼしてくる。それも使ってる本人の意思すら蝕んで、だ。弱い辛さと追いつけない苦しみ、誰もが通る苦痛に囚われてしまったルークにとって、もうこのゲームは楽しいものではなくなってしまうことだろう。

「それでも、もう目を逸らすのは辞めてやってくれ。このゲームの呪

いに侵されたあいつの苦しみは、たぶんお前が一番よくわかってんだろ」

望みを捨てきれない。当たり前だ。誰だって大切な人が望む形で願いを叶えたいと思うことだろう。だが今回のことを解決せずにルークが災禍の鎧としてこのまま加速世界で狩りを続け、強くなつて強くなつて、もつともつと強くなつて、ついにレベル10に達したとしよう。そうなればルークはレインと仲直りして、鎧に打ち勝つて、みんな笑っていられるのか？

：無理に決まっている。鎧に呑み込まれるだろう、周りに恨まれるだろう、今日この日のことだつて禍根が残るかもしれない。

呪いは解けない。鎧の呪いを解いても、今度は人間に呪われる。負の連鎖を断ち切らなければどこまでだつて呪いは付き纏う。そして、その呪いを断ち切る最大のチャンスは、解放してやれるチャンスは、今だ。

「だから、立ち上がってくれ。もう、解放してやれるのは、お前だけなんだよ」

途轍もなく歯痒い。『断罪の一撃』を俺が使えたら、恐らく俺は率先してルークを撃つだろう。そうすればレインは俺を恨み、俺に怒りをぶつければいい。だがそんなことは不可能。だからみつともなく、そして残酷に、レインにルークを撃つよう促している。

いつまで経つても無力な自分に幾百度目の後悔が襲いかかる。その中で、後悔の波の中から小さい声を拾い上げた。

「……………わかってるよ。もう、あいつにとってブレイン・バーストが呪いでしかないなんてこと」

後悔を噛み締め、責め苦を呑み込んだような掠れた声だ。同時に首に回された腕の力が強められる。

「あたしは、こんな性格で学校でも馴染めないからいつも独りでVRゲームやってたんだ。そんな時に、真っ赤な顔で笑っちゃうほど一生懸命な声で、もつと面白いゲームがあるからやらなかつて誘われたんだ」

腕の力がさらに強くなる。声や体から震えが伝わってくる。俺はそれを誤魔化すかのように再び歩き出した。

「ほんと、すげえ真剣にあれこれ教えてくれて、『子』として大事にしてもらったよ。なのに、そのうちあたしのレベルが追いついて、追い抜いて、気づけばレベル9なんかになっちゃってさ。レギオンマスターなんてもんになってからは、学校であつた時に様子が違うことにすら気付けなかつた…！あいつの真面目さは、あたしが一番よく知つてたのに……！」

『親』と『子』。リアルを知り、直結をし、これまでの時間を積み重ねてきた存在。それほどの関係になつてすら、相手のことは分からな。い。どちらも互いを想っているのに、どちらも正確に理解することなどできはしない。例えその相手が、すぐ隣にいたとしてもだ。だからこそ、今回のような事件が起きてしまった。

近過ぎる故に見えなくなる、見え過ぎる故に見なくなる。強すぎた関係は、脆くなつても気づけない。それが常にそこにあり、自分はまだそれを持っていると思ひ込み、誤つたことにすら気づけない。間違つたと無理矢理自覚させられて、レインは今ここにいるんだ。

「……今は一つ前の選択肢を誤つて『あの時こうしとけば良かった』、なんて思う時じゃない。まだお前がやるべきこと、いや、やらなきゃいけないことがあるだろ。愚痴るのも泣くのも、その後だ」

レインは間違いを自覚した。ならばこそ、自覚を後悔で塗りつぶすべきじゃない。後悔は過去を否定するためのものではなく、過ちを自認することで肯定していくものだ。間違つても、今この時を逃避するために使い潰すほど軽いものではないはずだ。

「…ハハッ、キツツいなあ。つたく、悲しむ暇もありやしねえ。」

…よし！んじゃあチェリーのところまで急ぐぞ！黒いの達だけじゃ逃げられちゃうかも知れねえからな！」

「ああ、しつかり掴まってるよ。」

「……あー、それと……」

空元気だろうし、まだルークを撃つ覚悟は出来ていないかもしれない。だがロータスに頼まれたレインを起こし、連れてくること。これについてはこれで達成しただろう。

「……まあ、その、なんだ。終わったら愚痴聞いたりするくらいならしてやるから。だから、えー、あれだ……」

だから少しくらい俺の事情で御節介を焼いてもいいだろう。妹ではないが、年下のせいやお兄ちゃんスキルが働こうとしているのだ。口が上手いこと回らないし、俺に愚痴ること自体愚痴りたい事かもしれないが、何かしらしてあげたいと思ってしまう。

そんな俺への返答は、後頭部への頭突きだった。

「……ッ！痛え……」

「……ケツ。お前があたしの話し相手とか10年早いんだよ！あたしを最大限のもてなしが出来てようやく相席できるかどうかってとこだー！」

「……そりゃ悪かったな。って最大限のもてなしってなんだよ」

「ふん、そりゃあ……」

そこで一度言葉を区切った。その先が続く前に、俺の顔の隣にレインの頭が現れる。それに続いて抱きしめられるように腕の力が強くなる。先程より密着したレインの感触、その小ささと儂さを感じる。そのまま耳元で囁くような小さい声で、絞り出すような細かい声でこう言った。

「あたしの独り言を聞かないでくれ」

「おう」

「あたしの顔を見ないでくれ」

「ああ」

「それと……今みたいに背中を貸して、絶対振り向かないでくれ」

「分かった」

それは強気な王の、最大限の甘えの言葉だった。

「……サンキュ」

「……おう」

言葉

sideレイン

風を切るスピードで加速世界を駆ける一個二色の存在。その一色であるスカーレット・レインは四足歩行にシフトチェンジしたクリア・ウルフの背にしがみつきなから思考の渦に巻き込まれていた。

『人は変わらない』

ウルフはそう言った。先刻はボンヤリとしか耳に入っておらず言葉すら発することができない状態であった故に、ウルフからの懇願に近い言葉にしか反応を返すことができなかった。

しかし、この言葉にだけ疑問が残ってしまう。目を閉じなくても思い出せるチェリーの変容。チェリーは変わらなかったかもしれないが、様々なものに変えられてしまった。ブレインバーストに、災禍の鎧に、そしてあたしにすら変えられた。

本人が変わらなくても他人が変えられる、変えてしまう。これからあたしはチェリーに『断罪の一撃』を撃つ。変えられて変えられて、歪に歪み、崩れてしまったチェリーを元に戻すために。

……それにあたしは耐えられるだろうか。今回の件で、最も大きな責任はあたしだ。チェリーを変えた時責任、変わったが故に出てしまった被害の責任。その責任を弾丸一発で済ませることができない。言葉にすると、なんて軽々しいんだろう。

ギョツと目の前の背中を強く抱き締める。温かくも冷たくもない、銀色に光る硬い背中。この背中に言いくるめられるわけでも言い含められた訳でもない。それでも、目の前の自らの子を亡くしてしまった者の背中から語られた言葉は、実感しか籠っていない、哀愁と悲哀

が込められていた。それから語られた現実世界での再会に、心が動か
なかつたと言えは嘘になる。亡くしてしまつた絆をもう一度作り上
げる機会が得られる。それは、それはとても魅力的だ。

「……なあ、ウルフ」

気がつけば、目の前の背中に呼びかけていた。頭によぎる程度の疑
問が、これからを予期してか自然と口が動いていく。

「お前さ、なんでレギオンなんて立ち上げたんだ？加速世界こっちで亡くし
ちまつた妹と現実でまた繋がれたなら、妹と離れちまつたブレイン
バーストを辞めたくなつたりとか思わなかつたのかよ」

あたしみたいにレギオンマスターだったわけじゃないのにレギオ
ンを立ち上げ、そのくせレギオンメンバーなんて一人もいないのに領
地を確保する。あたしには考えられない選択だ。

加速が与える影響は理解している。上手く使えば現実でのカンニ
ングや思考年齢を引き上げてくれ、加速という他の人が持つていない
物を持つているという優越感もあるだろう。

それでも最も親しい友人や兄弟を亡くし、その記憶や存在を知覚で
きない世界。レギオンのような他の繋がりの無かつたこいつには、加
速世界を去ることを止める存在もいなかつたはず。なんの縛りもな
く、悲しみが置かれていく世界にこいつは、何を想っているのだろう。

「……辞めよう、と思つた事は、まあ、ある。あん時はまだ子供だつた
からな。ストレス全部発散して、弱つちい身体使い倒して、それで俺
もアンインストールしちまおうつてな」

「…なら、なんでそうしなかつた？」

一字一句聞き逃しまいと耳を傾ける。他人に左右される訳じやな
いが、チエリーを、『親』を殺す以上、こいつと同じ悩みを抱く事があ
るんじゃないか。それと同時に、いつもより口が軽くなつていてこい
つ自身の事も気になつていて自分がいた。話していると、先の事の不安
が紛れているせいかもしれないが。

「……なんていうか、否定できなかつたんだ。無くなつちまつたけど、
確かにあつた物を、俺も忘れたら知つてる奴が消えちまう。

それは過去を否定した事になるんじゃないかと思つたら、辞めれ

なくなった」

「過去を否定、つて。…間違った過去は、否定しないとダメじゃないのか？」

過去は過去、今は今。今起きてることは、そんな簡単に忘れ、割り切れるものじゃない。自分を悔いて、自分を恥じて、間違った自分を正し、未来の自分は間違えないと誓い、自分を変えるべきじゃないのか？

「…過去の自分を否定して、今の自分を否定して、そのくせ未来の自分を肯定するなんてできるわけないだろう」

悩む頭に出された言葉は、またも哀愁と悲哀が混じり合い、

「昔最低だつて自分を、今のどん底の自分を認めてやれなくて、いったいいいつ誰を認めることができるんだよ。否定して、逃げて、何もかも忘れたつて変わらない。変わった気に、成長した気になってるだけだ」

そして、不思議なくらい心に引つかかりる。

「だから俺は変わらないつて選択をした。過去を認めて、今を認めて、それでも過去を忘れない。だから俺のレギオンは、妹の存在を加速世界に刻み込むために作ったんだよ。あいつが忘れても絶対に俺は忘れない、つてな」

言つてから恥ずかしくなつたのか、走りながらブンブンと顔を左右に振り出す。ちよつと気持ち悪い。それに釣られて進路も僅かにブレて酔いそうになり、二重の意味で気持ち悪い。

…だが、なんとなくだけど、ほんの少しだが、分かつた気がする。これから自分がどうするのか。チェリーになんて言うのか。変えてしまったあたしが、変わろうとしたチェリーへの行動を。

そう、意気込んだ時だった。

カツ！と前方から爆発が起こる。光り輝く派手なものではなく、まるで隕石が落ちたかのような荒々しい爆発。それを引き起こしたのは誰かは分からない。しかしそこにチェリーがいることは間違いないだろう。

「…急ぐぞ」

「……………ああ！」

☆☆☆

辿り着いた先には巨大なクレーター。そしてその中心地、ボロボロで焼け焦げてはいるが間違いない。この世界で何度も、幾度となく見てきたアバター。鎧が破壊され、左手と右足が欠損しているが、その中から顔を出しているのは、昔と変わらないチェリーの顔だった。

「…そうか。お前がやってくれたのか。…サンキューな、シルバー・クロウ。あとは、任せな」

クレーターの淵に蹲り、ダメージにより動けないクロウに声だけかけてチェリーの元へ向かう。右手に身体と同じ色の銃を携え、『断罪の一撃』を装填する。

「……………チェリー」

「……………ニ、コ」

クレーターの中心に二人きり。あたしは立ち、チェリーは横たわっているという違いはあるが。

……真っ直ぐにチェリーの目を見て話したのはいつぶりだろうか。不規則に点滅しているチェリーのアイレンズだが、その視線は此方から外れることはない。

もう一步、踏み出した。

「……………ゴメン、ニコ」

「……………なんで謝ってんだよ」

「僕、強く、なりたかったんだ」

「……………分かってる。今なら分かる。チェリーはさ、変わりたくなくて、変わろうとしてたんだよな」

人は変わらない。変わるのは環境だ。ずっと同じレベル、同じ位置

にいることなんてできやしない。同じ関係でも、立ち位置が変われば同じにはなれない。だからきつと、この不器用で真面目な『親』は変わろうとしてたんだ。また同じ位置に立ちたくて、ただただ愚直に、強くなることで、変わろうとしていた。

「多分さ、チェリーからしたら変わっちゃったのはあたしなんだと思う。レギオンマスターなんかになって、今まで頼ってたくせに忙しくなったらそっちを優先しちゃう。ほんと、親不孝者だった」

昔レギオンマスターになって間もない頃、一度だけチェリーに応援されたことがある。それは何の気もない、多分自然と出てきた言葉だったもの。

『ニコちゃん、頑張つてね』

それを言われたあたしは馬鹿みたいにやる気になった。先代がいなくなつて無法地帯になつてた赤のレギオンを纏め上げて、そんで先代の頃よりデツカくしてやろうつて。そうすれば、チェリーが喜ぶと信じて疑わなかった。

「今更遅いつて思うかもしれないけど、それでも言わせてくれ」

でも、そんなことじゃない。そんなことよりも、何よりも、チェリーに言うべきことがあった。照れ臭がつて、無い見栄張つて、ハリボテのプライドを建てる前に、たった一言。伝えるべき言葉があった。

「チェリー。こんなことになつちまったけど、あんたはあたしの…世界でたった一人の親だ。それは永遠に…レベルが変わろうが、現実だろうが、記憶がなくなつたつて…それは変わらないよ」

遅過ぎた一言。だけでも絶対に告げなければいけない一言。こんな間際で、こんな瀬戸際だったけど、どうしても言いたかった。

チェリー以外を親だと思つたことなどないし、チェリーのことをど

うでもいいと思ったこともない。けど、口にしなければ伝わらない。行動ですら示せなかった自分が、相手に何も言わずに分かれというのは横暴だろう。だからきつと、これも自己満足に過ぎないのと思う。ギリギリになって言いたいことだけ言って、それであたしがチェリーに何を求めているのか、あたしにも分からない。けれど、今の言葉は捻くれ者のあたしの嘘偽りのない本音だった。

「……ありがとう」

そう言うときチェリーは、ずっと合わせていた目線を上にあげて空を仰いだ。いよいよ、お別れだ。これ以上の言葉は蛇足にしかならないだろう。近づき、寝ているチェリーの身体を抱き起こして抱き締める。きつとこれが、この世界での最後の触れ合いだ。

「バイバイ、チェリー。現実で、今度こそ、ずっと遊ぼう」

右手の拳銃をチェリーの胸まで持ち上げ、その引き金を引いた。音も光もささやかな銃弾は、チェリーの身体を無数のコードに分解して空に巻き上げていく。この中にはチェリーの記憶も含まれているのだろう。それが空に呑まれた時、現実のあいつはこの世界を忘れてしまう。

最後の『ありがとう』に、どんな思いが込められていたのか、その答えは分からない。でも、最後に空を見上げたあいつは、笑っていた気がした。都合がいい想像をしているのかもしれないけど、最後の最後で、あたしはあいつと繋がった気がしたんだ。

「……ッ」

そう思っても、チェリーの存在が消えゆくたった十秒の間、何かを叫びたくなる衝動を抑えるのに必死だった。本音を話し、別れを口にした。なら、それ以上の言葉で濁しちやいけない。

噛み締め呑み込み身体に抑え込んだ言葉は、一筋の雫となって両の目から流れ落ちた。

舞台を降りた後

「…終わったようだな」

「……ああ」

視線の先、クレーターの中央で立ち尽くしているレインを見ながら呟かれたロータスの言葉に相槌を打つ。長かったようでやはりとても長かった災禍の鎧討伐は、レインの手によって幕を下ろした。あとはストレージに災禍の鎧が存在しなければ加速世界的にはめでたしめでたし、他の奴らから何か言われることもないだろう。

「……ないな」

一足先にアイテムストレージを確認するが、鎧は存在しない。問題は最も怪しいルークにトドメを刺したレインだが、今のあいつの元へいつて不躰に聞くわけにもいかない。しばらくは待機か。

息を吐き、身体の色を抜く。

「……………なんの真似だ？」

しかし、それは直ぐに戻された。常に抜刀されているロータスの片腕が、音もなく俺の首筋に突きつけられたからだ。レーザー系の攻撃だからこそレインの攻撃に耐えられた俺だが、王の一撃なんて食らえば死ぬ。間違いなく一撃死する。逃げようにもこの距離で一か八かを選びたくないなので疑問を口にするだけに留める。

「…いやなに、鎧は一時的か恒久的かはわからんが討伐された。ならばこそ、今がお前を詰問する絶好の機会じゃないか。」

正直に答える。ウルフ、お前は何故か私達の後を追わずに先行し、勝手に災禍の鎧と戦った。その理由、包み隠さず答えてもらおうか」

嫌な予感がしたからです。なんて、正直には言えない。こういう輩は右と左のどちらかを選べと聞かれて右と答えれば、なぜ右と答えたかとさらに問いかけてくる。そこになんとなくとか勘だとかそんな曖昧なものを許す許容量はないのだ。

「……………白のレギオン」

「!?」

だから曖昧なことは言わない。分かりやすく、端的に、相手が欲しい情報を叩き込んだ。

「……………の一人が今回の事を予見したようなことを言ってた。あの人達が絡んでて良いことが起こるわけがないのは、お前もよく知ってるだろ?」

「……………ッ!」

ロータスがライダーを全損させるに至るまでの背景を俺が把握していることをロータス自身が知っているかは知らないが、加速世界の頂上を巻き込んだ波乱を白のレギオンのトップはあっさりやってのけた。関係者以外には少しも露呈せず、関係者にはまるで答え合わせをするかのように全貌を明らかにする。規模も思考力もオレ達とはかけ離れている人達への悪足掻きに、被害者であるロータスやレインを巻き込みたくなかった。

「……………応念押ししとくけど、このことはレインには言うなよ。予測でしかないけど、あいつは今回の件の中心地だが、本質的などころでは無関係かもしれないんだからな」

「……………分かってる。だが此度の事を予見したという時の事は話してもらおうぞ」

「また後でな。…おい、クロウ」

「……………え、あ、はい!」

「色だけ交換するからこつち来い。あとパイルはどこに行った?」

「パイルなら直接離脱ポイントに向かって貫っている。逃げ方の予想はしていなかったが、少なくとも挟み撃ちにできると踏んでいたからな。爆発を見て恐らく戻ってくるだろうだろう」

焦げ焦げになったクロウに輝く銀色を返却すると、ああなるほど。確かにサンシャインシティの方角に青いアバターの小さな影が見えた。この中で唯一重量系のアバターなのに一番遠い場所に派遣されるとは可哀想に。イケメンじゃなかったら同情してた。

「……………あ、変遷」

パイルの方をぼうつと見てみると、その後ろからパイルを呑み込もうとしているかのような勢いで迫り来るオーロラのような幕が現れた。その幕が通った場所は今までいた鋼や荒野を塗りつぶすように姿を変えていく。太い幹を持つ大樹が連なり美しい自然が溢れかえる。ついにそれは俺たちの所にも訪れ、ゴツゴツした足の感触がどこか柔らかい物へと変わっていく。空気すら美味しいと思える程爽やかだ。

「…へえ、こんだけの景色は久しぶりだな」

後ろから聞こえた声に振り返る。そこにはクレーターから這い出たレインが頭のツインテールをピョコピョコ動かしていた。

「……もういいのか？」

「おう。こんな景色見せられちゃメソメソなんてしてらんねえしな」

ハハツと軽快に笑うレイン。足取りも軽く、影も感じられない。完全に乗り越えたかは分からないが、それでも笑える程度には受け入れたようだ。

「んじゃあエネミーが沸く前にストレージ確認してとつと帰るか」

パイルが息を切らしながら辿り着いたタイミングで、初めてのの変遷に戸惑っているクロウや嬉々として説明に走っているロータスに提案する。あれだけの死闘を繰り返したのにまだ騒ぐ元気がある若者達にほとほと呆れるが、鎧があるかもしれない状態で気を抜くのは下策だろう。

「そうだな。では、全員ステータスを開きアイテムストレージを確認しろ。そしてそこに災禍の鎧があったのなら、絶対に消し去れ。二度と同じ事が起きないように」

ロータスの言葉に従い、改めてストレージを確認する。真新しい項目は見つからず、それらしいアイテムは存在しなかった。

「俺はないな」

「……ありません」

「あたしもだ」

「僕もです」

俺、クロウ、レイン、パイルが順々に結果を報告する。そして自然

と視線はロータスに集まる。俺たちのところはないということは、必然的にロータスの元か、あるいは……

「……………私もない」

ロータスの報告に全員が沈黙する。持ち主が全損した時に一定確率で倒した相手のストレージに移動する災禍の鎧。それが無いということは、ついに何処にも移動せず消滅したということになる。

「……………消えたんですよ、今度こそ」

「ええ。あの爆発はサンシャインシティの方からも見えました。消滅したって証、でしょうね」

どこか確信めいたように宣言するクロウに同調するパイル。確かにこの面子で嘘を平然とつける奴はいないと思う。怪しいのは俺くらいだ。そして俺が俺である以上俺が嘘をついていないことがわかってるので、きっと本当のことなんだろう。

「ならば、ミッションコンプリートだ。諸君、帰って祝杯をあげようじゃないか」

「お、いいね！シャンパン開けようぜシャンパン！」

「馬鹿者、子供はジュースを飲め」

可愛らしい言い合いをしながら二人の王が歩き出す。それに付き従うようにクロウとパイルが後を追ひ、最後尾に俺がついていく。団欒を聞きながら変遷によって出来上がった世界樹の根元に着くと、青い光が渦巻きながら輝いている離脱ポイントにたどり着いた。

ようやく帰れる平和な我が家が目前にある。前々から振りかけられた重荷も解かれた。ならば足が軽くなるのも仕方がないだろう。寸分の狂いもない結論を端に、光の中に消えようとしている王達の順番待ちをしているクロウ達と距離を詰めた。

「……………え？」

するとまるで惚けたような、息が僅かに止まったかのような反応をクロウが起こした。

「……………どうした？」

「あつ、いえ。あの…先輩、今何か言いました？」

まるで答えが分かっているかのような問いかけ。独り言が漏れる

ことなどプロボツチたる俺がする訳もない。独り言は予想以上に教室で響くのでヘイト集めが捗ってしまうことを、俺以外のボツチを見て知っている。

「いや、何も言っていない。なんかあったか？」

「…た、多分気のせいだと思います！お腹が空いたからかな！あはは…」

誤魔化すように笑いながらクロウもポータルの中に消えていく。声なき声でも聞こえたのだろうか。あれ、ならそれ俺じゃね？俺超少数派だし。むしろ最小まである。

「っと、俺もとつとと帰らねえと」

フヒツと不気味な笑いが湧き出そうな顔を引き締めてポータルに向かう。現実時間的にほんの僅かだろうが、遅れたら遅れたで文句言われそうで怖い。多数派のあいづらに俺の声は聞こえないのである。そんなことを思いながら足をポータルに踏み入れた時だった。

「ようこそ舞台の表へ」

背中を押される感触と同時に聞こえてきた声。バツと反射で振り返った時には、既に俺の家で椅子に座っていた。突如奇行に走った俺を皆が訝しげに見ていたが、それを気にしろというのは今の俺には難しいだろう。あの声を聞き間違えるほど難聴に陥っているつもりはない。

…あれは、間違いなくスピリットさんの声だった。

『舞台裏は、客席から見えないだけで舞台の上であることに変わりはないんだから』

『物語の冒頭、それに相応しいこわい敵がでてくるまでは舞台裏で

待っててね』

……本当にあの人はどこまでも心を縛ってくる。《物語の冒頭》《こわい敵》そして《舞台の表》。かつて言われた言葉で今まで頭に入れていなかった事が全て繋がる。今日は一度もスピリットさんを見ていなかったのにあの一言で頭を支配するのは流石というべきか。

詰まる所、俺は脚本家たるスピリットさんの手のひらから逃げられていかなかったという事だろう。それも今回の事件は《物語の冒頭》と来たもんだ。そしてスピリットさんの言う通り俺が舞台の表に引き摺り出されたということは、彼女らが書いている脚本の主人公がこの中にいるのだろう。そしてそれもまた、言うまでもない。

プロローグ、または第一章で早くも怪物を倒した姫の物語。そして次からは更に強大な敵が現れることだろう。そしてそれは、舞台の表に出た俺にも降りかかる。脚本家はそれを躊躇わないだろう。台本通りに動かされるキャラクターが、脚本家に対抗するには何をすればいいのだろうか。

考えることに夢中になっていた俺は背後から近づいてくる一人の少女に気づかなかった。突如バシーン！と背中を叩かれる。驚きのあまり身体が縮むかと思った。恨めしげに横を見るとレイン……いや、上月が快活に笑い、俺を叩いたであろう右手をプラプラさせていた。「辛気くせえ顔してんなよ！ほら、お前も早く混ざれ！」

もう片方の手には何の変哲もないオレンジジュース。押し付けるようにそれを押し付けてくる。気づけば黒雪や有田に黛も同じように片手にジュースを持ち、笑っていた。

「…………ハッ」

思わず俺からも笑みが漏れる。そうだ、あの人達のこととは、舞台から降りてまで考えることじゃない。脚本家たる彼女らがだって、こんなところまでストーリーに含めたりはしないだろう。第一章が終わって、その打ち上げだ。だったら今くらい、考えるのを止めて楽しんでもいいに決まってる。

「…コホン。では、八幡もコップを持ったところで。災禍の鎧、クロム・ディザスター討伐を祝して、乾杯！」

「乾杯!!」

軽くコップを上げて音頭に合わせる。

何はともあれ、俺たちは帰ってきたわけだ。情報の仮面に顔を隠した加速世界じゃない。隠した仮面を剥ぎ、素顔を晒せる、現実世界に。「うっまー!」

隣で馬鹿みたいに笑っている上月を見てまた笑ってしまう。言葉遣いこそ変わっていないが、その笑顔は天使モードの時と遜色ない程に輝いている。憑き物が取れたような爽快さだ。この笑顔が見れるんなら、現実世界も悪くない。

馬鹿げているが素直にそう思える不思議な笑顔から目線を外し、俺もコップを傾ける。それは、今まで飲んだ中でも格別に美味かった。

舞台裏のエピローグ

全てのものには始まりがあり、全てのものに終わりがあるという。ならば逆説的に始まりがないものに終わりはなく、終わりがないものにもまた始まりはないということだろう。ならばこそ、災禍の鎧討伐という一つの終わりを迎えた今、俺は誰とも始まっていない状態。つまり鎧討伐に関わっていた全ての人物達と無関係であるはずではないのだろうか。もしそうであるならば、この状態はあまりにもおかしいと言わざるを得ないだろう。

「あんたさつきからなーにブーツとしてんだ?…あ、ジユースなくなった!おいお兄ちゃん、ジユースとつてくれ!オレンジでいいや!」

俺の前にはベットの所で寝転んでいる少女が一人。赤いツインテールを揺らして天使の笑みで俺をパシらせようとしております。その姿がうちのエンジェルである小町とつても被るので反射的に動いてしまう。お兄ちゃんスキルは今日も絶好調だった。全然嬉しくない。

「なあ、事後報告だとかつて来た筈なのになんで俺の部屋で寛いでんの?マイホームなの?俺がホームでアウェイなの?」

「何わけわかんないこと言ってるんだよ…。話してる途中で小町ちゃんが帰って来ちゃったらやべえじゃん?だからわざわざ場所を移したんだろうが」

「ならもう寛ぐ意味なくないか?もう少しダラけるなら俺プリキュア見たいんだけど」

「あたしの話はプリキュア以下か!…:…ったく、しゃあねえな。ほらよ」

起き上がった上月がベットの上を軽くスライドし、隣をポンポンと叩く。それはまるでここに座れと言っているようだ。ってかこいつそこで勘違いとはいえ襲われかけたの忘れたんじゃないだろうな。めちやくちや無防備なんだけど。さつきからチラチラとスカートの中が見えそうで見えなくて引力に逆らうのに超必死。万乳引力以外

の引力も予想以上に強い。ここは俺の為にも告げたほうがいいのかもしれない。

「……なあ」

「おい、早くしろよ」

「アツハイ」

……やっぱり、年下には勝てなかったよ。ちょっと強く言われるとあっさり従ってしまう下僕体質はほんとにどうにかならないだろうか。小町が天使である限り無理ですなはい。

一瞬で結論を出し、渋りながらも上月の隣に座ると、今度は上月が立ち上がる。わざわざ隣に呼んでおいて自分はそこから立ち去るとは、ボツチのイジメ方を分かっているなこいつ。言外にお前の側に居たくないというこのメツセージは『キモい』か『口臭い』かのどっちかだ。今度人に避けられたら口臭のチェックをしてみるといい。多分分からないから。

「よつと」

立ち上がった上月はそのまま俺の背中に寄りかかってくる。構図で言うと俺は部屋の扉の方を向き、上月は窓の方を向いて互いに背中合わせ、というか身長の関係で上月が上半身丸ごと俺に預けている状態。前にも違う人と似たような構図になった気がするんだが女子はこの体勢が好きなんだろうか。それとも俺と顔を合わせて話したくないというメツセージなのか。前者であると信じたい。

「んー、あー」

唸りながら言葉を探しているのか、頭を俺の背中に擦り付けるように顔を振るう気配を感じる。これから始まるのは恐らく『独り言』だ。俺はそれを聞かず、振り向かず、背中を貸す。それが加速世界のスカーレット・レインとの約束。俺は暫くの間背中で動き続ける上月の反応を待っていると意を決したのかようやく口を開いた。

「……寮に帰ったら、すぐにあいつに会ったよ。最近は授業出ないし誰とも口きかなかったんだけどさ、あん時会ったあいつは、初めてあたしに声かけてきた頃の顔だった」

堰を切ったように話し出す。それを俺は聞くだけだったが、不思議

と重い雰囲気は存在していない。

「けどさ、あいつ来月福岡に引越しまうんだって。遠い親戚つづうのが今更引越したいつづうって名乗り出たらしい」

引越し……。しかも福岡か。東京以外の場所にバーストリンクカーは殆どいない。その場合強くなつて上月に追いつきたいルークにとつては死活問題だったわけだ。だからその残された時間の焦りで鎧を……ガツ!??

「……痛え」

「……さつきから反応悪くね?」

「おま、人がせつかく独り言に対応してるのに頭突きはねえだろ……」

「独り言?……ツ!??バツ、ちげえよ!事後報告だつただろ!つてか別にあたしは涙や寂しさ抱えてきたわけじゃねえ!」

はあはあと息を切らして顔を真っ赤にしてお怒りの上月は、見てる限り完全に威嚇してくる仔犬である。問題は噛み付いてくる歯が揃っているところとかだろうか。動物は好きだけど噛む動物は苦手である。

「……あたしが今日きたのは、あんたにちよつと協力してもらいたかったんだよ。あたしは他のゲームが詳しくないから、ブレイン・バースト以外のゲームが知りたくてな。ブレイン・バーストつて繋がりは無くなつちまったけど、ゲームはそれだけじゃねえからさ」

「他のゲームを一緒につてことか?」

「ああ。最後に言つちまったからな。現実で今度こそずっと遊ぼうつてな」

……そう言つて笑う上月の顔は太陽のように眩しい。言つちまった、なんて上月は言っているが、むしろそれはルークとの新しい繋がりの始めという喜びの照れ隠しだろう。受け入れ、そしてこれから目を向けた上月は子供っぽく、そしてカツコよかった。

「……それは構わねえけど、多分俺役に立たねえぞ?」

その顔から目をそらしながら指を動かし、展開した画面を上月のニューロリンカーに転送した。

「お?……『S A O』《黒のソロプレイヤー》、『バカとボツチの

ソード・アート・オンライン

リア充爆破』、『ラブプラス』。

……見事なまでに一人用ゲームばつかだな」

そう、今送ったのは俺の持つてるゲームの一覧。パーティーゲームはもちろん、最近ではオンライン機能のあるゲームを殆ど買っていない状態。だってゲームは一人でやるものだから。将棋もチェスも人生ゲームも一人でできるのになんでみんなやらないんだろうか。俺も3回くらいしかやってないけど。

「……まあ無いなら探さねえとな。おら、手伝えお兄ちゃん」

「お前お兄ちゃんっていえば俺がなんでも言うこと聞くとか思ってたんだろうな。俺はアレだぞ。親父から土産を頼まれたら親父のを買わず小町のだけ買うような男だからな？」

「……やっぱり妹に絶対服従じゃねえか」

だって当然だろ？ 千葉の兄妹なら！……まあ背中を貸す動かない石像の役目は今のところ果たすことはできなそうだしな。そのくらいなら手伝うのも吝かではない。むしろ俺も小町とゲームを始めてみようか。上達すれば小町に『わーお兄ちゃんキモい』って言われ……ダメだ、褒められる妄想すら出来ない。妹からの罵倒は八幡的にポイント低いからやはり止めておこう。

「……で？ どんなゲームがいいんだよ。上月とルークの中の人の需要が分かんないと探せねえぞ」

「あー。……あー？」

「お、おう？」

「……ああそつか。そっぴやずつとそうだったな」

うんうんと頷きながら再び俺の背中に寄りかかる、というよりは背中におぶさるようにもたれかかってきた。

「前から思ってたんだけどよ、上月って呼び方やめろ。ニコでいいよニコで」

「え、お前って自分で考えたニックネーム他人に強要するタイプなの？ ごめん俺誰かをニックネームで呼ぶと友達が減る呪いにかかっているんだ」

「0から減ることはねーから。てか黒いのこと呼んでね？ あいつ確

か黒雪姫だったよな？それを黒雪って…」

「……いやあいつのことフルネームで呼んでるの有田くらいだからな？学校の奴らは基本『姫』だし、パイルは『マスター』だし。なんなら今度話しかける時に『黒雪姫』って言うてみる。不思議な拒否感が生まれるから」

「……やめとく。つてちげえ、今はあんな奴のことはいいんだよ。ちゃん付けしないからスルーしてたけど、苗字で呼ばれるつてすげー違和感あんだよ。ニコかせめて由仁子つて呼べ。いいな？」

有無を言わせぬ威圧感（見えない）。なぜ女子という存在は呼び方一つにこうも拘るのか。別に苗字でも名前でもどっちでもよくないか？むしろ名前呼びとか変な緊張感が漂うからむしろ苗字推奨だろう。苗字ならヒキタニと呼ばれようがヒキニクと呼ばれようがギリギリ分かるし。逆に名前だと小町に『バカ、アホ、八幡』つて感じで悪口か呼ばれてるのか分からなくなるといふ問題が生じる。

しかしそう言ってもすぐ横でジト目を寄越している娘には通じないだろうことは確定的に明らかであり、結局そう呼ぶ以外の選択肢はないのだろう。諦めが肝心だと言うのなら、腹を据えて慣らすことに腐心していくべきなのだ。

「……に、ニコ？」

「お、おう」

「……」

「……」

沈黙。なあにこれえ。こっちはこっちで気恥ずかしいし、あっちもあっちで何かの琴線に触れたのか顔を赤くして向こうを向いている。今すぐにも離脱したい。が、現在俺の身体は上月…いや、ニコによつて軽く拘束されている。今できる抵抗はひたすら視線を虚空に漂わせることだけであつた。

「……そ、そうだ！あんただけ名前前で呼ばせんのも不公平だよな！ずっとお兄ちゃんだのウルフだのでもややっこしいし。あたしも名前前で呼んでやるよ！」

「はっ…いらな…」

「たしか、八幡、だよな。うし、これからは八幡って呼ぶわ」
「……いや、いいけどさ」

よし決定！と耳元で喚くニコになんと言えればいいのか。確かに黒雪に八幡と呼ばれているが、あいつは初めからさも当然のように呼んでくるので違和感はない。名前呼びもむしろザ・リア充、むしろリア王！って雰囲気漂わせてるのだが、ニコはむしろ『リア充氏ね！むしろ死ぬ！』とか言ってる方が似合ってるせいだろうか。ファーストネームより『おい』や『お前』で呼んでないのがむしろ不思議？

そう思っているとクイクイと後ろに服を引っ張られる感覚。振り向くと未だ顔を赤くしたニコが口を籠らせている。モゴモゴと口を動かす姿がまたも小動物に見えて笑いが溢れてしまう。

「……っ……は、八幡！」

「お、おう」

「……」

「……」

沈黙。焼き増しのような沈黙に顔を俯かせる。それは俺だけじゃないらしく、ニコも肩に顔を沈めている気配がある。それも長く続かず、プシュツと何かを吹き出したかのように息が吹き出る。

「く、くひひ」

「……く」

「き、気持ちわりい声出すなよ八幡。……くふっ」

「おま、それブーメランだろ。……ぷっ」

心地よい沈黙に居心地の悪い沈黙。俺はその二つしか知らなかったが、その中に笑いを堪えられない沈黙が付け加えられた瞬間だった。

そう、そもそもだ。俺とニコが知り合ったのは完全な偶然、奇遇、奇跡といった遜色ない。小町という運命の女神が引き合わせなければ知り合うことすらなかったであろう出会いだ。どこの世界に友達の家に行ったら同じゲームのダブルトップがリアルで出会えるというのか。そんな運任せで阿呆な巡り会いをした二人が今では名前を呼びあつて笑っている。

…この笑いは暫く抑えられないだろうし、きっとニコともまだまだ顔をあわせる機会があるのだろう。隣で馬鹿みたいに笑う小さな小学生在が頑張っている限り、きっと俺は力を貸してしまうのだと思う。曇っていた顔がこんな綺麗な顔になると知ってしまったなら、こんな淀んだ目をした男の助太刀くらい捧げないと小町神に叱られてしまうだろう。

自然と伸びた手がニコの頭を撫でる。笑うのに必死なのかそれを振り払う気配もない。ならばこの手が振り払われるまで、少しばかり満喫しよう。

今度こそ終わる、鎧に振り回された日々を。

そして、少しくらいは期待してもいいのかもしれない。勝手に始まってしまいうだろう、これからの日々を。

暗躍する影く王の居ぬ間に？く 最低から始まる入学式

学生にとって一年の初めとは二回ある。一回目は一般的な年の初めである元旦、正月である。普段話題にも出ないくせに律儀に毎年顔を見せる親戚に愛想を振りまき、お年玉を寄越せと要求する忙しい数日であろう。

二回目こそは学生特有のもの。そう、入学式である。一年生にとっては顔見知りや名も知らぬ奴らが入り混じり、新たな生活に期待に胸を膨らませる者、不安で胸が縮んでいく者が初々しく並び立つ。二年生は部活動の後輩を確保せんがために優秀そうな新入生に唾をつけようと目論み、三年生は最高学年に至ったことで受験生であることを突きつけられ絶望する。それが入学式だ。

詰まる所この行事で嫌な思いをしていないのは二年生のみ。いや帰宅部もいるからそれよりも少ないかもしれない。というより眠いし絶対少ない。ということとはだ、学生の3分の2はこの行事に反対ということになる。校長の長い話も、来てくださったらしい来賓の方々の言葉も、代表挨拶だって誰も望んでいないことだろう。

結論を言おう：

「……だりい」

前振りしまくりの尺稼ぎで悪いが。そう、今日は入学式である。去年まで小学生だった存在が制服に着られて先輩達に見られながら歩く行事だ。

『怠い』。この一言に限る。来賓挨拶で去年も一昨年も似たような言葉を聞いたのは記憶違いではあるまい。皆が皆長つたらしい言葉で『く入学おめでとう』の一言を言うために壇上に上がり、礼だけさせて降りていく。新入生のみにされる礼に何度も返礼をする一年生達。それを見るだけでどんどん憂鬱になっていく。あの中に何人のバーストリンカーがいるのだろうか。一昨年の入学式当日に対戦リストに『ブラック・ロータス』の文字があったのは比較的新しい俺のトラ

ウマだ。鼻先き数センチを掠めたあの剣戟を俺は忘れないだろう。

眠い頭を叩き起こしている間に式は校歌斉唱に突入しようとしていた。これが終われば教室で校内のローカルネットに接続するためのアカウントが配布される。そこに知らないアバター名があれば……

「……………はあ」

掠れた溜息は歌に混じり、新入生を歓迎した。

☆☆☆

「……………はあ」

「どうした、溜息なんてついて。気分が優れないなら保健室へ行け」

「……………命令口調さすがです」

入学式が終わってもすぐ帰れるわけではない。が、精々年間予定表や宿題の提出くらいなもので既に帰宅可能時間だ。しかし一年生が学内ネットワークに接続するまで待機するのにわざわざ移動するのは億劫だ。騒がしい周囲を尻目に再度溜息をついていると前の席に移動してきた姫様に絡まれたのが現状である。

「…で、なんで来たんだ？帰んねえの？」

「分かりきったことを聞くな。それに私は生徒会だ。部活動紹介に便乗しての二学期にある選挙アピールや単純な雑務などやることは山ほどある」

「なら生徒会室に行けよ」

「私は既に仕事は終了済みだ。わざわざ仕事をもらいに行くことほど馬鹿なものはあるまい」

「あー、違ういな」

「ん」

「ん？あ、おう」

前に陣取られ、さらに話の流れ？で直結用ケーブルを渡されてそれ

を首に装着する。自らの流麗な動作に惚れ惚れしたくなるが、完全に慣れてしまっている自分に嫌気がさす。嫌気よりも色気が欲しいです。

『聞いているかは知らないが、焦る要因を一つだけ取り除いてやろう。つい先ほど連絡があった。倉嶋君がブレイン・バーストのインストールに成功したようだ』

『いや誰だよ』

『ああ、まだあったことはなかったか。倉嶋千百合。ハルユキ君とタクム君の幼なじみさ』

『…それで、アバター名は？』

『あの子達も新一年生にいるかもしれないバーストリンカーが気になるらしくてな。そのチェックと並行してお披露目会だそうだ』

『…：一年生にバーストリンカーいたら区別が怠いだろうに』

誰もいなけりやともかく、リストに新しい名前が二つ以上あった場合はわざわざその倉嶋何某に再加速させることになる。山勘で外した場合『俺の島で何してんだああん？』と威圧していることと同義だ。まあインストールしたばかりというしレベル1のアバターを選択すればいいが、例外というものがあるかもしれない。ぼっちは用心深いのだ。他人の不幸については興味深さが勝るが。

『未確定な未来を憂いても仕方あるまい。もっと近場で確定した話をしようじゃないか』

『確定した話？』

『修学旅行さ』

『…：…：あー』

この学校は修学旅行を四月に行う。二年生でいく学校とあれば、三年の夏にいく学校もあるらしいのでそこは特色と言えよう。しかし修学旅行と聞いて誰もが色めき立つと思つたら大間違いだ。最後まで残されるグループ決め。誰とも話さず外を眺める移動時間。グループの最後尾を付いて回る現地見学。ぼっちからしたら何も嬉しくないイベントが修学旅行には所狭しと押し込んである。

『…：で？修学旅行がどうかしたか？』

『うむ。八幡のことだ、まだ回るグループは決まっていらないだろうか？』
『すげえ決めつけてんな。その通りだけだよ』

『そこでだ。私のグループに来ないか？』

聞きましたか奥さん。この人一緒のグループじゃなくて私のグループって宣いましたよ。実際黒雪メインのグループなんだろうし自覚もあるんだろうけどさ。そしてこういう場合俺以外のメンバーは完全にこいつの取り巻きだろう。なのでここでとる行動は限られている。

『断る』

もちろん理由なく断っているのではない。ほら、あれだ。甘い言葉をかけられたらとりあえず断れって親父に教育されてるんだ。それに余り物グループっていつても悪いことばかりじゃない。余り物にされるだけあつて皆が皆ソロで時間を潰す術に長けている。なので互いが互いに全くと言っていいほど気を使わない。沈黙で取るコミュニケーションはぼっち同士の高等技術と言える。やだ、誰もコミュニケーション取ってない。

『……一応、理由を聞こうか』

『いやほら、お前のグループってリア充やキョロ充とかの塊だろ？普段からつるんでる奴らの中に不純物が混ざるのは良くないと思うんだ。何事も99%より100%の方がいいに決まってる。そうだ、そうに違いない』

『いやに必死じゃないか。なんだ、私の誘いは不満か？』

『不満か不満じゃないかも聞かれりや不満だろ。何が悲しくてアウェイからハイアウェイにランクダウンせにやならんのだ』

『どちらにしろアウェイなのか……。あとそのハイアウェイの使い方は間違っているぞ』

知ってる。でもハイとか超とかスーパーとかつけるととりあえずパワーが上がった気になるのはアニメの見過ぎでしょうか。しかしパワーが上がってもランクダウン扱いになるとは。日本語って不思議。

『……そもそもだ。なんでわざわざ俺を誘うんだよ。気を使ってるな』

ら辞めろって病院で言つたら』

『うむ、それなんだがな。あれから私も考えてみたんだ。なぜ八幡と関わり続けていたのかをな』

『……はあ』

『なに、難しいことでもない。単純に、私が八幡を気に入っていたからだ。打てば響くし投げれば投げ返す。そんな友人のような関係が、思っていたより気に入っていたから。無論今回もそうだ。お前と修学旅行を回れば楽しめそう。そんなくだらない理由さ』

『……気にいる要素ないだろ。ただのぼっちだぞ?』

『前から思っていたが、八幡は物事を難しく考え過ぎだ。人間の行動全てに意味や理由がある訳じゃない。気紛れで進むこともあれば無意識に止まることもある。その全てを考えて行動しているのなら、人間はもつと賢い存在だったろうさ』

そう言つて笑う黒雪から思わず目を逸らす。それからふと思う。今俺は意識して目を逸らしただろうか。いや、確かに黒雪の笑顔を直視できないと思いはしたが目を逸らそうと意識したわけじゃない。

……ああ、そういうえば経験があつた。子供の頃に失敗して親に怒られた時、ひたすら「なんでこんな事したの?」と怒り気味に聞かれたもんだ。それに「やりたかつたから」と答えても何を考えてそんなことをしたのかと何度も問答が始まったもんだ。

意味も理由もない。ただ気に入っただけ、か。

『……分かつた。黒雪のグループに参加させてもらう』

『そうか。まあそんな顔をするな。私のグループといつても班行動は一日目と最終日の移動のみ。その後は誰と組もうがほぼ自由行動だ』

『……ならやつぱ俺じゃなくていいんじゃない』

『ふとした時に話したくなる存在を隣に置いておきたいんだよ。八幡ならどこにいても同じ行動をしているだろう?なら、それが私の隣でも問題あるまい?』

『……もう好きにしてくれ』

我儘お嬢様の手綱を握るのは、俺では力不足だ。むしろ手綱を握られて振り回されるのがお似合いなのだろう。それに黒雪も言ってい

たように俺の行動は場所では変わらない。隣に誰がいようと好きな時に寝るし見張りがいようとダラける時はとことんだラけるのが俺だ。邪魔はさせない、俺の心にノーエントリー。

『……む、そろそろ一年生がネットワークに接続する頃合いか』

話が一段落済んだからか時計を確認した黒雪曰くそうらしい。俺も時計を確認すればまあまあいい時間が経っている。新一年生をチエックするには十分な時間帯だ。

『んじゃあ一旦確認するか』

『そうだな。では早速…』

『『バースト…』』

バシイイイイン！

合わせたわけではないが重なる筈だった俺たちの声。その声は最後まで紡がれることはなく、聞きなれた加速の音で打ち消された。世界は打って変わって白く移りゆく。これは《氷雪フィールド》だ。気づけば俺の体はいつもの透明な姿へと変わり、隣には白によく映える黒いアバターが立っていた。俺も黒雪も観戦者としてこのフィールドに呼ばれたのだろう。

「対戦者はシルバー・クロウに……」

もう片方のアバター名は知らない名前。でも軽く記憶に引っかかる、なんか見たことがあるような……。

『Chestnut・Needle』

右上の名前にはそう表示されていた。上げていた視線を前に向けるとそこでは二つのアバターが対面している。片やお馴染みのシルバーカラー。そしてもう一つ。

「初めまして！本日より入学しましたナッツです！みなさん、よろしくお願いしまーす！」

栗色のアバターはピシツと敬礼をすると、あざとさ全開の声で高らかに声を上げた。

詰まるところそういうわけで、面倒そうな奴が入ってきたことだけは確信した俺は、小さく口を引き攣らせた。

歓迎戦

僅かばかり時は遡る。入学式に伴いクラス替えの結果が張り出された紙に従い、ハルユキは配属された2年C組みに足を向けていた。(今年はブタ君呼ばわりする奴やパン買って来させる奴がいないクラスにしてくれ！)

この科学世界でも生き残っている神に願いながら扉を開ける。重い扉に顔を顰めかけた時、後ろからの一撃で重い扉は勢いよく開け放たれた。

「ハル、おーっすー！」

「ち、チユ。お前……もここか」

盛大に背中を叩いてくださりやがったのは、八重歯をのぞかせてニマリ笑う幼馴染の倉嶋千百合。ちょうど昨日ブレイン・バーストをインストールしたばかりなので、恒例の悪夢を見たはずなのだがその顔はいつもと遜色ないくらい輝いていたことにハルユキは首を傾げる。

「やあ、ハル。チーちゃんも」

そこに続いて先ほどの十分の一以下の威力で再び背中を叩かれた。今度も現れたのは幼馴染、去年だけでも語り尽くせぬほど色々と共有した黛拓武だった。相変わらずのイケメンフェイスを眼鏡で飾りながらそこで微笑んでいる。

「うっす。タクもC組みか」

「三人同じクラスになるなんて凄い確率だよねー！」

「そうだね、確率的に九分の一。世の中のいろんな偶然は計算してみれば印象よりも案外そうなる確率が高いのかもしれないね。だから、一応用心しておきなよ？」

「へ？何に？」

突然の話題転換についていけなくなったハルユキに顔を近づけ、いつそう小さい声で囁いた。

「新一年生さ。あの百二十人に、未知のバーストリンカーが混じっている可能性に」

☆☆☆

「……なんて話はしたけど、まさかこんな事になるなんて……」

一時間目のホームルームが終了し、チユのアバター初公開と洒落込もうとした瞬間にコレだ。いぎ、という時に加速音が鳴り響き、いつものシルバーカラーで氷雪ステージの雪に吹かれた。タクとチユには自分が加速すると言っておいたので二人ではないだろう。というか、対戦相手の名前に見覚えがない時点で相手は決まりきっていた。(新一年生。いるかも、とは言っていたけどこんなすぐに……?)

この学校のバーストリンカーは五人。うち二人は王だ。ハルユキだったら椅子から転げ落ちてもおかしくない場面だというのに、相手は臆さず加速してきた。余程腕に自信があるのか、それとも先輩絡みか。いや、先輩が目的ならわざわざごつちに対戦を吹っかける意味がない。となると、前者か。

一旦相手の姿を確認しようと窓が消えた校舎から羽根を広げて飛び出ると、予期していたのか校庭の一点に白に目立つ赤みがあった存在を発見する。遠目で見る限り女性のような膨らみがあり、完全な人型。アバター名『Chestnut Needle』。名前と色からして中・遠距離の針をメインとしたタイプといったところか。決め付けはよくないが飛び道具には注意を払うべきだろう。

滑空しながら着地までの間に相手の分析に勤める。ブレイン・バーストでは名は体を表すし、体は技を表す。三十分しかない以上時間は無駄にできないのだ。

スタツと一分とわからず相手から五、六メートルほどの距離に着地する。普段の対戦なら殴りかかっているとところだが、今は相手の出方を見るのが大切だ。

空から降り立つハルユキの存在を確認すると、対戦相手はぐるっと一周辺りを見回して全員揃ったのを確認すると、すうっと息を大きく

吸った。くるかつ!??と身構えるハルユキとは裏腹に、相手は大きく声を上げた。

「初めまして！本日より入学しましたナッツです！みなさん、よろしくお願いしまーす！」

はえっ、と変な声を上げたハルユキだが、幸運にも誰にも聞かれなかったようだ。宣戦布告どころかただの挨拶。敵対どころか全然友好的じゃないか。

(そ、そうだよな。行った学校の相手にくらい挨拶するよな！)

学校に在籍する以上学内ネットワークには必ず接続しなくてはならない。ならば相手に目をつけられる前に友好関係を築くのは賢く、至極当然の選択だ。

「というわけで、お手柔らかにお願いしますね！クロウさん！」

「あ、えっと、こちらこそ」

「ふふ、では行きますよー」

とはいえ対戦を挑んでおいて挨拶だけしてハイ終わり、なんてこともありえない。相手のレベルを確認すれば自分より僅かに高いレベル5。片手にはいつの間に取り出したのか、アバターと同じ赤みがかった15センチほどの針を指に挟んでこちらに突撃してくる。名前にニードルとまでつくのだからアレが彼女のメイン武器なのだろう。実にトゲトゲしくて痛そうだな。

「ふっー！」

そんな痛そうな物に刺さってやるわけにはいかない。最近練習を重ねている黒雪姫先輩直伝の合気。相手の攻撃に合わせ、流し、利用する技。相手が針を突き刺そうとしてくるのを逆手に取り、針の先端にだけ気をつければその先には本人の腕が待っている。そしてそれを包み込むように受け流し、引き寄せる。

「え？わったったー！」

それにより前屈みになるようにバランスを崩したナッツさんの隙だらけの胴体に手の腹を叩きつける。すると身体をくの字にし、持つ

ていた針をばら撒きながらナッツさんは後方に吹き飛んだ。

「きゃあー！」

雪のクツションで横転時のダメージこそ無いものの、一撃で二割もライフを減らせた。黒雪姫先輩の技も上手くできていたしこれは先輩としてナッツさんにいいところを見せられそうだ。

「いったーい。：クロウさんって空飛べるだけじゃないんですね」

「ふふん。僕だっただけの物珍しい奴ってポジションのままじゃ嫌だからね」

「あ、そういうの気にしてたんですね」

実際加速世界初の完全飛行型アビリティといっても弱点はかなりある。遠距離攻撃がないことや、それにより遠距離からの攻撃に近付くまで対処できないこと。今でこそそうやすやすと撃ち落とされはしないが、一時期はスナイパーに撃墜されまくったのは記憶に新しい。そして遠距離対策しまくっていたら、逆に近接系相手に飛び込みプチつとやられたのだったって気にしてないわけじゃないのだ。

「まあだからちよつとだけ、最近編み出した技を見せてあげるよ」

存分に調子に乗っているハルキは、自身の武器を見せびらかすようにシルバー・クロウの象徴である銀翼を広げる。始まったばかりで必殺技ゲージは10%弱程度しか溜まっていないのに翼を広げたクロウにナッツは首を傾げる。

「ふっふっふ。今度はこっちから行くよー！」

先程の自分のように真っ直ぐ突進してくるクロウにナッツは薄く目を細める。相手を持ち上げるのは得意分野だが、あまりに調子に乗られるとイラッ☆つとくるのは当然だからだ。

「……クロウさくん。もしかして今は自分が有利だ、とかもう勝った、とか思ってますんよねえ」

突っ込んでくるクロウに先程手に持っていたのと同じ長さの針を一本、クロウに向けて放る。速さもないそれは容易に避けられ、自分のすぐ横を通り過ぎていく。

だからだろうか。針に目を向けていたクロウはナッツのアイレンズがニタリと形を変えたことに気づかなかったのは。

「私とクロウさんって、結構相性悪いと思いますよ♪」

え、という声を発する暇はなかった。バギン、という鋭い音が響いた時には、クロウの左翼に1メートルを超える巨大な針が突き刺さっていたからだ。その針は、目の前で笑っている少女と同じ色をしていった。

それを認識したところで下方の針が雪の下に隠れた地面を抉った。自分の支配下にならないソレはクロウの体勢を容易く崩していく。

「ほらっ！余所見してる暇はないですよ！」

今度は容赦もいらないとばかりにクロウめがけて7・8本の針を投げつける。あれら全てが翼に刺さっている針と同じ物だとすれば……

「こ、こんのおおおお!!」

その瞬間にクロウは足で立つのを諦めた。地に足をつけたまま勝てる相手ではないならば、地に足がつかない場所に行けばいいのだ。それだけ判断し、翼を振動させて翼に付いている針ごと飛ぶつもりで力の限り後ろに飛んだ。

「エラー・ギフト生贄の針殿」

技名と僅かに揺れた右端をよそに、目の前の針達はブービートラップが作動するかのように一瞬でその長さを数倍に変化させた。そのうちの一本がクロウの脇腹を抉り呻き声が漏れるが、今の攻撃でクロウはある事を看過する。

「ツ！体力を削って針の大きさを変えてるのか！」

違和感を覚えた視界の端。二割ほど減らしたナッツの体力が、何故か今では三割はなくなっている。それなのに必殺技ゲージは減っていない。あの僅かな攻防の間で一割も減ってしまうとは、何とも諸刃の剣的なアバターだ。しかし体力ゲージを必殺技ゲージの如く使えるというのは継続して攻めに回れる、中々に考えさせられる相手といえよう。

「ありや、気づかれちゃいましたかあ。でもー、クロウさんの専売特

許は封じちゃったも当然ですよ?」

ナッツはクロウの左翼を指差す。そこには拳より一回り小さい風穴が堂々と存在を誇示している。こんな有様では軽々しく飛ぶ事も難しいだろう。そうナッツは笑みを深くする。それは勝ちを確信した、先刻のクロウと同じものだ。

そして、そのクロウも先刻のナッツと同じように不敵な笑みを返した。

「……もう勝ったと思ってるなら悪いけど、こんな状況って結構あったんだよね!」

翼が輝き始める。必殺技ゲージの準備は万端だ。そもそも、師は刃をつけていて、親友は杭を持つている。そんな環境で部位破損を考えない馬鹿がいるわけがないだろう。飛びにくくても、僕が、飛べないなんてありえない!

「いっ…けえええええ!!」

上ではない。翼力の弱まっている左翼の力を補うように反時計回りの軌道をもつて地面を滑空するようにナッツとの距離を狭めていく。今だけは鴉クロウではなく燕スワローのようだ。

「…っ。けど、そんな単純に突っ込んでくるなら!」

焼き増しのように突っ込んでくるクロウに向けて、今度は十本ほど向けて放り投げる。このまま針の中に突撃すれば、まさしく針の筵となる。

「まだまだ!」

予期していたかのようにクロウは今度こそ軌道を上に向けた。地面に近い事を利用して地を蹴り飛ばすことでその身を上空に押しやる。その姿は枯葉のように不恰好に飛び、しかし確実にナッツの上を取った。

「ひっ…」

「う、おおおおお!!」

本気の全力で両翼を震わせる。今まで絶対のアドバンテージとして獲得してきた場所。その高さこそが、シルバー・クロウの存在を加速世界に刻み込んだ場所こそがあるべき場所。そこからのハイダイ

ブで負けるつもりはなかった。

爪先をナッツに定め急降下する。風を裂く感覚。そこから見える景色と共に時間が遅くなっていく感覚。下で針を構えなおしているナッツが見えるがもう遅い。左翼の力を補うように身体がスパイラルを描き、その軌道上にいたナッツの体力を根こそぎ奪い取った。

「……………よしー！」

クロウのガッツポーズを梅郷中学のバーストリンカー全員が目にし、誰からともなく拍手を送った。勝者のクロウと挑戦者のナッツ。数の少ない拍手をもって、全員がナッツを梅郷中学に迎え入れた。

日常リタイア

突如始まったクロウとナッツの対戦。それ自体は終わったが、入学してきたバーストリンカーがナッツとやらだけと確信できるわけではないので、結局再加速して対戦リストの確認をした。そこには先ほど対戦していたナッツともう一つ見慣れない名前があったが、それが恐らく有田達の幼馴染なのだろう。後で確かめる必要があるが、以外の名前はなく積まれていた荷が一つ降りた気分になる。

しかし一つ荷が降りたとしても黒雪同行の修学旅行が迫ってる時点でなんとも言えない。話しかけてくるのが黒雪だけとはいえ、間違いなく不快な視線がこちらに向くだろうことは想像にかたくないのだから。

「……本屋にでも行くか」

ふと思いついた事を小さく口にしてみる。この情報社会のご時世、紙媒体の本はほぼ一掃されて久しく、存在していても年齢制限などのフィルターは最低限でも付属されている。なので家にある親父のアカウントで買う方が効率もいいのだが、人間は時に効率悪く無駄なことをしたくなるものだ。紙媒体の本だって探せば普通にあるし、本屋の端にレトロコーナーとして数は少ないが置いてある。たまにはそんな片隅の仲間を漁りに普段行かないところに行ってみたくなったのだ。

地図アプリを開き行ったことのない本屋の場所を探してみる。一番近いところだと中野第一エリアと杉並の間。少し遠いが歩いて十分いける距離だ。気分転換を兼ねている今では丁度いい距離といえるだろう。

「……そーういや、あん時のこと聞くの忘れてたな」

歩いていると思考が暇を訴えだす。ふと思いついたことを小さく口に出すと頭はそれでいっぱいになった。これは道中のいい暇つぶしになるだろう。

(黒雪が入学式の在校生代表挨拶をした時、一瞬目つきを変えて新入生に視線を回した時があったんだよな)

アレがあつたからわざわざ時間がかかるのを覚悟で教室待機を決めていたのだ。アレがなければ来賓挨拶も聞いてたし入学式に眠ることもなかっただろう。嘘だ。

しかし黒雪の奇行が存在したのは事実。あの御仁なら敵意にも敏感そうだしそれを察知したのではないか。サツちゃんも察知……。寒ッ！

「……………おっ？」

目の前を横切る小さい存在。高さは膝より低く、まるでよちよち歩きをしているかのように歩を進めている。犬だ。しかも首輪がついていることから飼い犬と見て間違いないだろう。というか飼われている動物には例外なくその存在を確立させるチップが埋め込まれているので、そちらでも判断できている。だがそれならおかしな話だ。もう何年も前から屋外でのペットの放し飼いは禁止されている。それなのに一匹でぬくぬく歩いているところを見ると、散歩中に逃げ出したのだろうか。チップのおかげで飼い主が判別できるので捨て犬や捨て猫の可能性はありえないが。

「……………おつかねえな」

ぼーっと見てるとその犬はさも当然のように車道に向けて一直線。車にも対物センサーがついているし事故を起こす方が難しいのだが、いかんせん動物が危険な場所に向かってるのを見過ごすのも気がひける。それに万が一にも車のセンサーや制御AIを切っているバカがいなくても言い切れないのだから。だから走るスピード上げんじやねえ！

「おい、ちよつとま…」

「サブレー！どこー？」

そして同時に聞こえる少女の声。それも車道の反対側から。ああ、飼い主見つけたから走ったのか、と進めそうになっていた足を止める。のも、束の間。

「は？」

偶然とは重なり合うもので、バカとバカは引き寄せ合うのか。今まさに車道に飛び出した犬と、向こうから急いでいるのか分からないが

目測で明らかに制限速度ギリギリのスピード、限界の時速80km近くに達している運転手が同時に目に入る。

気付いた時には走り出していた。その足は普段加速世界で体感してるスピードより遥かに遅く、現実という縛りを実感させられる。そのくせ犬を助けられないほどの距離ではなく、横から響くブレーキ音すら聞こえてくる。

「……フィジカル・バースト」

意識を加速する。体は遅くなる。否、体だけではない。世界の速度も同時に遅くなる。意識を肉体に止めたまま3秒間のみ知覚速度を10倍にする。……のだが、困った。車が速い。肉体が追いつけない。その上加速の寸前にバランスを軽く崩したのか、下手すりゃ『フィジカル・フル・バースト』ですら間に合わないかもしれん。

「……ハッ」

掠れた笑いが漏れるが既に車は目の前。俺が逃げるのは不可能ならば……

「おら、もう飛び出すなよ」

右手で掬いあげるように犬の腹を持ち上げて前方に押し出す。ミニチュアダックスフンドなので大きさは大したことはない。フィジカル・バーストでタイミングや力の加減もまあまあできる。高さと強さを間違えなければ怪我もしないだろう。

そんな驚くほど冷静な思考があっても車は急には止まってくれない。事故を起こす方が難しいと言われるこの時代で自分以外も含めて二回も人身事故の存在を目の当たりにするとは、付いていなさすぎでなけてくる。そしてフィジカル・バーストも時間切れのようだ。意識の加速はなくなり現実が迫り来る。

(……こりゃ修学旅行はいけn……)

ガンツ！と車から音が響き、その音に吹き飛ばされるように意識を失った。

「……………二週間入院か」

天井を見上げながら小さく呟く。吹っ飛ばされたあと気を失った俺は、気づいたら病院のベットに寝かされていた。三日間寝っぱなしだったとか運転手や犬の飼い主がお見舞いに来たとか医者の方に聞かされたが、残念ながら記憶にないので放置が安定。むしろ修学旅行に絶妙なタイミングで行けないことに笑いすら溢れてくる。

「…暇だ」

足いてーとかゲーム三昧だぜーとか色々言っつてやりたいのだが、吹っ飛ばされた衝撃よりも着地の仕方が悪かったらしく、右手と左足を骨折したのでニューロリンカーの操作が上手いことできない。昔左利きってカッコいいと思っていた時期に練習しておくべきだったとちよつと後悔。

フルダイブすれば現実の怪我など関係なくなるのだが、病院のローカルネットに接続している以上患者の方々がログインしまくっているだろう。知り合いのいない不特定多数の場所にはいたくない。学校ですらろくにフルダイブしないのだからなおさらだ。

ならゲームでもするかと画面を弄ろうとすると、そのタイミングで病室の扉がノックされた。何故かは知らないが個室をいただいている身であるので客の目当てが俺であることは間違いない。かといって俺に見舞いに来てくれる相手がいるだろうか。

「……………どうぞ」

「邪魔するぜー」

控えめに返事をするると豪快に扉を開けて下手人がおいでませ。背丈は低いのに蛇でも睨み殺さんとばかりにこちらを睨みつけてくるのは、悲しいかな知り合いだったりする。

「……………ニコ」

「よー。ひっさしぶりだなあ八幡。三ヶ月ぶりってどこか。なのに

なっさけない姿みせやがって。あつちでのカッコつけはどうした」

「現実でカッコつけた結果がこれなんだよ。速さが足りなかった」

加速世界でなら車の速さも貧弱貧弱ウ！と鼻で笑ってやれるのだが、現実だとそうはいかない。重力は重いし俺は鈍いしぼっちだし。ぼっちは現実でもだがそれは言うまい。というより本当に何故犬のために突っ込んだのか今でもわからない。俺の中に未だ静まらぬヒーロー願望やシュミレータードリァリテイ症候群にでも陥りかけているのだろうか。そのうちアイキャンフライしそうで怖い。ここが病院だから特に。

「……っーか何しに来たんだ？というか、なんで入院したこと知ってんだよ」

俺の頭がお花畑説を考えることよりも、今はそちらの方が重要だ。災禍の鎧事件以来、関係が全くなかったわけではない。暇だと送られてくるメールやチェリー・ルークの中の人の愚痴のような惚気話の相手をしたりもした。だが今回の件は言いふらすことでもないの誰にも言っていないはずだ。犬を助けて轢かれるとか世代が古過ぎるもの。

「あん？小町ちゃんから聞いたに決まってんだろ」

オーマイシスター。何故俺の恥を広めるのですが。というよりニコと関係が続いてたことにビックリ。うちの妹には一度あつたら皆友達みたいなリア充の御触書でもあるのだろうか。旧世代型ぼっちの理解の外に存在している代物だ。

「っーより、あたしが八幡に用事があつたから小町ちゃんにアポとつたんだよ。八幡だと逃げそうだし。そしたらうちの寮の近くの病院に入院してるって聞いたからな。門限ギリギリなのに来てやったってわけよ」

「なんでわざわざ？会って言う必要がある話なのか？」

「おう、多分お前の想像以上にな」

そう言うのと懐から直結ケーブルを差し出して来る。躊躇いなくソレを首筋に刺すと、ニコはなんとも言えない表情になるが今はそれより大事な話があるのだろう。小さく咳払いするとベッドの側の椅子

に座り込んだ。

『単刀直入に聞け。さっきも言ったが門限が近いからな』

『ああ』

『八幡はいま梅郷中で起きてる事についてどんだけ知ってる？』

『は？』

突然の問いかけに首をかしげる。そも事故ってから学校の話など欠片も耳にしてないのだ。精々が黒雪からの呆れの含まれた吠えメール程度のもの。それに加えて上月は梅郷中とは無関係と言っている。なのに梅郷中について聞いてくるといふことはだ、必然的に何が起こつてることの裏返しだ。

『……何があった。ここに來るつてことは俺より知ってるから來たんだろ？』

『まあな。つっても聞いたのは一つだけだな』

キツと視線を鋭くする。さっきから回りくどく言っているのは偶然ではないだろう。何を意図しているかは分からないが、早く言えと目に力を込める。それを見ると諦めたように小さく息を吐き、真つ直ぐ。こちらを見据えた。

『梅郷中の新生にバーストリンカーが現れたらしい。それもマッチングリストに現れず、さらに心意を使う、な』

蒼い可能性

『梅郷中の新入生にバーストリンカーが現れたらしい。それもマッチングリストに現れず、さらに心意を使う、な』

ああ、啞然。無情でもある。ああ神よ、なぜ俺に試練を設けるのですか。あれか、修学旅行サボれるのを喜んだからか。それとも学校そのものを休めるのを喜んだからか。どんだけ俺の一喜一憂に敏感なんだよオーマイゴッド！

『……まてまて。意識飛んだからちよつと聞き逃したつぽい。新入生にバーストリンカーはまだいい。初日に休んでたかしてたんだろう。心意？馬鹿な親でも居たんだろう、うちの親父もそうだからそれもまあいいさ。マッチングリストに出ない？バツクドアっていう前例がある。また何処かのアホ天才が抜け道を見つけたんだろ。なんだ、何も問題ないじゃないか』

『……まあそんだけならわざわざ来なかったんだけどな。もうちよい厄介なことになってる』

『厄介？』

『シルバー・クロウの翼が奪われた』

『はあ!?!?』

入院してるからーとか考えてた言い訳が全て吹き飛んだ。リアルな口から声を出さなかった自分を褒めてやりたい程に。

有田の翼。アレは、ダメだ。アレがあの中以外に生えるなんて考えられない。あの空を飛ぶ姿に俺が、アイツが、いや俺たちだけじゃない。それこそオリジネーター達すらもだ。あの自由な姿にどれだけの、どれだけの希望や羨望を感じたか。

『……事情は分かった。それで、それを伝えて俺に何をさせるつもりだ？』

自己分析は得意な方だ。たった一言で動揺したのは恥ずかしいが認めよう。が、それをニコが知るはずもない。ならばこそニコがここに来た理由があるはずだ。そも梅郷中の事態をニコが知っていることがおかしい。ということはそれらをリークした梅郷中生徒、主に有

田か黛が後衛に潜んでいるのは明らか。だが今俺は言い訳云々を抜いても動ける状態にない。件のバーストリンカーを何一つ知らない俺に行動を起こすのは不可能だ。

『そいつについては外にいる奴に聞きな。言っちゃなんだが、あたしは仲介役だ。事情は聞いても対応はできないといった立ち位置に關しちやあたしも似たようなもんだしな。門限も近いし』

そういうと直結ケールを引っこ抜き、病室の外に出て行った。さらばの一言すらない流れるような退室。どうやら門限がヤバイのは本当だったようだ。そして閉じた扉がまた開かれる。今度は眼鏡のついた優男風の梅郷中生。

「黛か」

「ええ。そんな状態なのに、申し訳ありません」

「ほぼ自業自得だ、気にすんな。で、結局俺がやることはなんだ」

「無色の王よ。単刀直入に言います」

バツと腰を90度に曲げて頭を下げる。俺が例のあの人だったら絶賛するお辞儀だ。だが相手が誠意を出してくる。それすなわち厄介ごとであるということが分かりきっている。そして当然、黛の口から出たのは厄介な注文だった。

「僕に、心意を教えてください」

☆☆☆

side???

空間に一人の少女。その対面には少年が一人。青い世界が広がる加速した世界で二つの影が各々のアバターに身を包み、ティータイムを楽しむかのようにゆったりとしていた。

「倉嶋先輩は相変わらずの笑顔ふちよー。有田先輩は半ベソで、眼鏡先輩は悲劇のイケメン。黒い先輩に至っては未だ何も知らずに笑ってて？透明先輩は布団のお化けくつと。よくもまあ一人でこれだけやれることで。透明先輩は自爆だけど、リアルの手の速さはさすがじゃん？ダツカー君」

亜麻色のドレスを着たお姫様が嗤うように口火を切った。対面の真つ黒な鎧を着込んだ少年も吐き捨てるように応答する。

「ふん、当然ですよ。あとその名で呼ぶな針娘」

「有田先輩のは脅しビデオにプラスして翼までとつたんでしょう？なら単独行動は辞めて、そろそろ姐さんに…」

「いいえまだです。お前も余計な手出しは無用ですよ。翼も、黒の王も、全て奪ってしまえばいい。あの回復アビリティですら今や僕の手駒に等しい。それら全てをあの人に捧げるまで、手を借りるつもりはない」

ねつとりとした、そして嬉々とした声で言葉を振るう。声には幼さが消えきれていないのに、狂気だけは滲み出ている。そんな目の前の青年に少女は苦々しく口を歪めた。

「あーキモいキモい。女の子従えて喜んでる変態ですかっつての。しかも絶賛調子ノリノリ。そんなんだからあの子もどつかの誰かさんに奪われ…」

「黙れ」

ガコンツ！と鎧から剣を取り出し姫君に斬りかかる。武士道も何もない。仮初めの姿に価値もない。そんな見せかけの姿を嘲笑うように少女はその剣を楽々避ける。

「あれ〜？凶星突かれて怒っちゃった？ダツカー君もまだまだ子供っぽーい」

「何度も言わせるな針娘。僕はダスク・テイカーだ」

ギリつと唇を噛み、吼える。このダスク・テイカーという少年こそが前述した梅郷中の見えざる加速者であり、シルバー・クロウの翼を奪った張本人なのだが、その威厳も余裕も今は薄れている。そんな彼を尻目に少女は針のように鋭い傘をクルクル回す。

「なら私も何度も言わせないで欲しいなあ。私達は加速研究会。ダスク・テイカーも、そして私も、加速利用者である前に姐さんの為にこのゲームをやってる。今更言っちゃなんだけど、慎重に動いた方がいいんじゃない？リアルで調子に乗るのも姐さんが何も言わないから私も言わないけど、そろそろ痛い目に遭うよ？」

「はっ。そんなことありえませんか。僕が奪われるなんて、ありえない。奪い、奪い、奪い奪い奪い奪い取る。その為の、力なんですからね！」

腕に光る過剰光。意志の力はバトルアバター以外にも纏わりつく。まごう事なき心意の力。そう、奪う力だ。

「……………ま、私は暫く観客しとくからね。ダツカー君が失敗したら、次は私の番」

「次はない。その呼び方にも次はない事を覚えとくといいですよ」

「ダツカー君♪」
「死ね」

心意の剣を躊躇いなく振るい、同じ過剰光を纏った少女の傘とぶつかり合う。どちらも濁ったようなドス黒い色を携え、合わさった二つの力が互いを喰らおうと蠢き合う。

「……………」
「……………」

その光は動かない。味方同士、の筈なのに殺伐とした雰囲気。それらに二人は違和感を抱かない。どちらも一人の人間に心酔して行動しているだけで、互いの事が大嫌いなものだから。

「……………」
「……………」

「……………バーストアウト」

そして示し合わせたかのように、二人の姿は消え去った。梅郷中学のネットワークに歪な跡を刻んだままに。

「……さて、やるか」

「お願いします」

場所は無制限中立フィールド。目の前には黛ことシアン・パイルが存在する。今回ばかりは特に何もなく協力することに決めた。というより有田の翼もそうだが、相手がバーストリンカーである以上俺の身元が突き止められてる可能性が高い。主に事故のせいだ。

かといって俺は怪我で動けない。なら多少の申し訳なさを感じるが二年生ボーイズに頑張ってもらうしかないだろう。打算するのはお手の物。計算はできないけど。

「その前に確認しとく。お前、心意についてはどこまで聞いた」

「必殺技ゲージが減らないこと。光ること。心の闇と向き合うこと。心意には《射程距離拡張》《移動能力拡張》《攻撃威力拡張》《装甲強度拡張》の4種類が存在すること。そしてこれらの心意は各々のデュエルアバターの性能に適したもののしか習得できない。

……こんなところでしようか」

「全部合ってる。習得方面はどうだ。ニコのところから説明だけであるまま来たのか？」

「一応初歩の初歩は習得しました。……《蒼刃劍》！」
シアン・フレード

コールを響かせるとパイルが鉄杭の切っ先を握りこみ、過剰光を発生させる。そしてその手を頭上に掲げると、右腕に存在していた杭打ち機が消え去り刀身一メートル半に及ぶ剣が現れた。

「……基礎も十分。言っちゃなんだが、それ以上は自分次第の領域だ。心意は欲望や願いの顕現。本人以外にそれは出せない。なのに何故俺に教わりに来た」

聞くと、パイルはどこか躊躇うように黙り込む。それも数瞬。決意を決めたように顔を上げる。

「……赤の王は、真正面から僕に心意を叩き込んでくれました。ハル

は能見とは比べられないほど綺麗な心意を使って、真っ向から戦っています」

心意。それには二つの性質がある。正の心意と負の心意。勇気や希望に基づく正の心意と怒りや憎しみに根ざす負の心意。有田達は正の心意で件の能見とやらは負の心意を活用しているのだろう。

「心意を習得した時、僕には二つの思いが湧き上がりました。一つはハルと同じ力を持って隣に立てる喜び。……けれどももう一つは」

強く強く拳を握りしめ、吐き捨てるように言い切った。

「……この蒼い輝きより、能見の使うドス黒い心意の方が強そうだと……そう、思ってしまったんです……！」

パキンツと蒼い剣がひび割れ砕ける。

なるほど、ようやく理解できた。その葛藤は黛のような理性が強く、そのくせい奴であるのに清濁合わせ飲める輩には辛いものがあるだろう。こいつは有田のような愚直一直線じゃなく、自分の優秀さや効率の良さを理性で判断できる奴だ。だからこそ、去年のバツクドアを堂々としかけることが出来たのだろう。頭が良く、それを使いこなせる自信があり、目的のために手段を選ばない強引さも兼ね揃えている。

そしてそれ故に、ただ正しいと信じているもののために自分が強い力を振るうことに違和感を覚える。頭のイイこいつのことだ、理解しているのだろう。自分が有田より能見や俺に近い人間だということ。

「……オーケー。約束だ。心意、享受してやる」

「……ありがとうございます。でも、僕が教わりたいのは……」

「言わなくても分かっている。お前が教わりたいのは『負の心意』だろ？自分にはそっちの方があっている。けど正の心意よりのニコや有田には頼めない。なら、人間的に負の属性を持つる俺に焦点を当てたわけだ」

「そ、そこまでは言っていないですけど。……だ、大体合ってます」

「そうかい。ならそんなお目が高いお前に、もうちよつと先の心意を教えてやるよ。習得できるかは知らないけどな」

「もう少し、先？」

「ああ」

首を傾げるパイルに向けてニヤツと歪んだ笑みを浮かべる。

「正の心意と負の心意。両方同時に扱える方法を」

黒蒼の劣等感

「正の心意と負の心意の、同時使用？」

心意について素人とはいえ、また新たに出てきた言葉に首を傾げる。既にうつつすらと負の心意を纏った無色の王は原始林ステージの中でもよく目立つ。気怠げにこちらを向き、それでも真っ直ぐ教授しようとしていた。

「そうだ。んじゃあ先に負の心意の習得、と言いたいところだがこつちに関しちや教えることは殆どない。正の心意が使えるならその応用だ。そのアバターを作り上げるに至った欲望や願望を感情のままに振るえばいい」

そう言った無色の王は身体中に負の心意を纏い振り上げること、黒々とした過剰光が加速世界に一筋の線を作り上げた。破壊不能オブジェクトである大地すら捲りあげんばかりに一閃された跡を見つめ、自分がゴクリと唾を飲む音を鮮明に感じる。

それと同時に、やはり負の心意の方に親和を覚える。あの光り輝く心意を否定するわけではない。むしろシルバー・クロウとの和解を果たした時に自分は心を入れ替えた。ならば負の心意ではなく正の心意、正しい心を持つてこの世界を生き抜くべきだ。

……そう分かっているとしても、人は簡単には変われない。右腕に宿るこの杭打ち機。これはかつて虐められていた自らの傷跡だ。何度も何度もこの首を突き抜かれ、何度も何度もその首を突き貫き返してやりたいと願ったその願望。ハルの翼とはえらい違いだ。

バックドアプログラムでハルが虐められていたのは知っている。それなのにハルのアバターは前に進む翼を宿し、僕はその痛みと恐怖に囚われやり返すことしか考えていないかの如き強化外装。いったいどこで此処までの差がついてしまったのか、

「おい」

「っ。なんでしよう？」

「妄想はいいが心意使う時にそれはいらん。とりあえずやってみろ。正の心意が出来たなら簡単にできるはずだ」

「そう、ですね」

ふう。と小さく呼吸をし、心を鎮める。これは剣道で習得した技術だ。明鏡止水、とまでは言わないが雑念を払い集中力を高めていく。正の心意を獲得した時に必要だったもの、それは強いイメージ。打ち倒され見下され、嘲笑われ逃げ出そうとした時にも立ち向かい、剣を振るった過去の自分。正々堂々真剣勝負を貫かんとした自分の姿。

でも今イメージすべきなのはもつと醜い自分だ。打ち倒された相手を跪かせたい。見下された相手を踏み潰したい。嘲笑った相手の喉元に風穴を開けてやりたい。冷静を装った自分の顔の下に常に被っていた薄汚い自分を鮮明にイメージする。右手にあるのは喉元穿つ新鉄杭。あの痛みを、苦しみを、屈辱を……！

その怒りがたまりきった時、右手の杭打ち機は禍々しい過剰光を現した。

「……たいしたもんだ」

「……僕も、ビックリです」

正の心意を習っていたとはいえ、こうも容易く習得できるとは思わなかった。赤の王との修行の時は体感時間で二十日間。ほぼみっちりやってようやく初歩の初歩を習得できた程度の自分が、負の心意に至っては一日も使わないとは。

「……首シャルフ・ビーズ・ネックレス無牙突！」

ガツンツ！と右手に備え付けられている杭を発射する。前方にあるのは原始林ステージの巨木。その胴体目掛けて深い深い蒼色の光が突き進む。

カツと、発射音より小さい音で大木を貫く。その後も断続的にカツ、カツ、と音が遠ざかりながら響き続けた。しばらく伸ばし手元に杭を戻すと、残るのは拳大に残されたたった一つの丸い穴。それが向こう側をずっと遠くまで見通せるように真っ直ぐ伸びている。これが他のアバターの首元に迫れば……きつとこの大木のように綺麗なまん丸型の穴が刻まれることだろう。こんな憎しみに染まった心意を見たらハルはなんて言うだろう……。

……いや、その覚悟はしているはずだ。見栄を張るより実利を取

る。カツコつけて守れないよりずっとマシだろう。なにせこれから王の教鞭を受けられるのだ。葛藤するより時間は有意義に使うべきと意識を入れ替える。

「……………これで、正の心意と負の心意。両方会得したことになりますか?」

「おう、十分だ。それにお前の心意はどっちも常時展開が基本みたいだからな。難易度は変わらんが使いやすさならそっちの方がうえだと思っぞ」

「では、御指導お願いします。王の手を煩わせるのは心苦しいですが、明日にでも能見と戦うかもしれないと思っぞと…」

「ああそういうのいいから。そんなこと言ったら俺なんか明日も食つちや寝のグータラ生活確定なんだ。むしろ人任せにしやがって少しは役に立て程度に扱ってくれていいぞ」

「……………そういうわけには…」

そう言われても正の心意と負の心意の同時使用がイマイチしつくりこない。単純に正の心意のイメージと負の心意のイメージを重ねるだけならば、そんなに強くなるとは思えない。むしろイメージが不十分になり威力が落ちるのは目に見えている。

……………正々堂々とした自分と怒りに満ちた自分。同時に二つの心意を使う。自分で考えた通りやってみる。……………が、あつさり輝いた心意は消え去りドス黒い蒼色だけが存在を強調していた。

ならば次は、と再び試そうとし始めた僕を笑う小さな声が聞こえて、まだ話の途中であつたと慌てて前を見る。どうにも今日は思考が迷子になることが多い気がする。

「冗談だ。つってもこっからはあつさり習得、つてわけにもいかねえぞ。下手すりゃ1ヶ月かけてもモノにできませんでしたーなんてこともありえる」

負の心意そのものについては何も言わず、むしろ飄々とした態度で会話をしてくれることに安堵を抱く。それと同時に、目の前にいるのにまたも居ないかのように扱っぞになる自分になんか驚く。無駄に熱心な親の教育上、会話をしている相手から意識を逸らしながらで

も会話ができる術は身につけている。愛想のいい笑顔を浮かべるのもほぼデフォでできる程度には鍛えられているのだ。

なのにこの先輩といると目の前よりも自分自身に視点を持って行ってしまう。まるで全ての目から解放された自分の部屋のように。考えだけに集中できる空間が不思議と今もここに存在していた。

なんとというか、遠いんだ、距離が。肉体の距離は近いのに、当然のように心が離れてる。そのせいで遠くよりも近くを見ようと、先輩よりも自分を見てしまう。

殻にこもった城壁のような頑丈なものではなく、底なしの谷のように互いが見渡せるのに近づけない。一定以上近づくことは許さない、そんな距離感を常に置かれている。それなのに向こうからはまるで観察され、見透かされ、してほしい対応をされているような違和感。今まで対面した青の王とも黒の王とも違う。最弱と他称されてもぼっちだと自称していても測れない人間性。やはり彼も王の一人なのだ、という納得と悪寒が背筋を撫でる。

「……それで、どうすればその心意を使えるようになるんですか？」

「その前に、一つだけ聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「はい、なんでも」

享受ではなく質問。質問とは、答えを知るために行うもの。僕の何かを聞き、それを知るといふ行為。さっきの言ったような心の距離が遠い先輩にはなんとも不似合いな……

「お前、自分は好きか？」

……訂正しよう。むしろ、これ以上なくお似合いな質問だった。この質問を受けて『ナルシストですか?』なんて回答ができるバーストリンカーはいないだろう。一部、いや相当数の人間が怒り落ち込む問いだ。何故なら僕たち全てのバーストリンカーは、自分の最も醜い部分で戦っているからだ。

僕がいい例だ。『相手の首を貫きたい』。親すら知らない自分の劣等感の塊を、あろうことか顔すら知らない他人に晒しながら僕はこのゲームの中で存在し続けているのだ。王であるマスターことブラック・ロータスですら自らのアバターを醜悪と一言言つてのけたとハルから聞いている。

自分しか知らない劣等感。それを肌身に感じるこのゲームは、どれほど熱中しても『自分』という枠から逃げられない。その醜さは、どれだけ強くなっても消えることはない。それが現実にまで足を伸ばし始めるのが更に問題だ。

バックドア・プログラム。未だ消えない僕の罪。一生背負うと覚悟した自分の愚かさ。ゲームのために、ポイントのために、欲望のために、恋人であったちーちゃんを裏切り、親友だったハルを踏みにじりながら、僕はただ現実を荒らした。そのあとこの罪からすら逃げようとしたこともあったつけ。それすら許したマスターとハルへの感謝は今も忘れていない。そう、あの時から僕はこの身をハルとマスターのために……あれ?でも今の状態はどうだ?ハルは翼を奪われ、マスターのいない梅郷中は能見に荒らされ、それどころか絶対を守ってみせると誓ったちーちゃんすらも巻き込んでしまっている。

「……………そうですね、自分が好きか、ですか」

こんな状況だからと言い訳して、周りを見ることで自分は冷静だと言いついて、人伝でさらに他の人に頼らなくちゃ何もできない。その上博士とか呼ばれているくせに能見に対する妙案も思いつかない。なんて無能で無力で無価値なんだ。

自覚した愚かさが全身の血を冷たくする。思い出せば出すほど自分が何のために存在しているのかわからない。ハルがレベルアップ時に全損しかけた時のように、あらかじめ説明しておけばと思う事だっけ。いづくも湧いてきた。心の闇と向かい合わなくても、自分の弱さが身にしみる。抑えきれない負の気持ち。がまるで呪いのように体から湧き上がる。深くドス黒く染まっていく蒼色。劣等感で染め上げられた負の心意は、イメージで固めたものよりずっと強く硬い力をもたらしている。

……ほんとに、聞くまでもないでしょう。僕は、こんな僕が…

「……………大っ嫌いです」

その答えを待っていたとばかりに、視界を黒が覆っていく。立つ気が起きず、自分の存在すら不要と思える。足が動かない。手が上がらない。目が……開けられない……。地面が……近く……。

ドサッ

「……………十分だ」

倒れた僕の耳には、もう、何も聞こえなかった。

勧誘

黛に心意の先を教え込んだ翌日。俺は非常に満足しながら惰眠を貪っていた。

自覚するというのは大事なことだ。例えばテストの時、何がダメだったかを認識することで次に備えることができるだろう。それがわかれば確信を持って前に進んでいける。

そう、確信を持つことが大切なのだ。だから俺が黛に教えたことは単純なこと、自分が何をするためにいるのかを自覚させること。自分の弱さを見つめ、ゼロファイル現象に至るまで心の弱さに向き合えなければ、その心の意思を一つの方向に向けられる。

実際に一ヶ月近く向こう側に潜っていたせいで俺は足に不便がある状態であることを忘れかけていたが、黛は何一つ忘れることなく現実世界に戻っていった。今日にでも……は無理だと思うが能見との対決となればただの心意しか使えないと思われるそいつに負けはしないだろう。多分、恐らく。フラグじゃない。

……まあともかくとして、黛を送り出した時点で俺の役目は終了したに等しい。足の骨を折っているのにさらに骨折って働く必要はないだろう。むしろ俺のために誰かが働いてくれて、さらに養ってくれるまであるはずだ。……はずなのだが、最近学んだことがある。俺の周りの女子はどうやら俺の望んだとおりには動いてくれないようだ。何言ってるんだ当たり前だろと言われればそこまでなのだが、彼女らはむしろ望んでいることの真逆をついてくる。思考回路までマイノリティに陥ってしまったのかとぼっちとしてあまり誇りたくならないところだ。

「お久しぶりです！先輩！」

「……………どちらさま？」

しかしそれは俺の知っている女子の話だ。他の女子は彼女らより何をしたいのかわからないので真逆も何もないのだが、この女子生徒

は見事なまでに俺の望みの逆をついた。もしかして探偵か小説家なんだろうかこの子は。ただ俺の言葉にピシツと青筋を浮かべるあたりヤクザの間違いだったかもしれない。

「え、えつと。お、覚えてませんか？少し前に小町ちゃんとニコちゃんと一緒にお家にお邪魔したんですけれどー」

「……………おお」

「ほんとに忘れてたんですか!?!?」

いや、忘れてない。今思い出したんだ。脳の引き出しの奥にしまっていただけ。人間の脳は100年以上分の記憶を蓄積できるらしいから忘れてない。ただ出てこなかっただけである。たしか名前は一色……………うん。

まあ思い出した。災禍の鎧での上月のインパクトが強すぎてすつきりさっぱり忘れてた。しかもあのアバター名もどつかで見たと思ったらそんなところだったとは。

「いや、ほらあれだ。あー、うん。それだ」

「どれですか?!?もう、こーんな可愛い後輩の知り合いがお見舞いに来てあげたっていうのにそんな失礼な態度を取るなんて。私が来るなんて同じクラスの男子なら発狂ものですよ?」

「さらに可愛い妹が見舞いに来た後だったんでな。早さが足りなかった」

「へー。まーいいですけどー。こんな話に来たわけじゃないですしー」

思いつきり顔を顰め、今にも唾をぺつとしてきそうな顔だが水に流してくれたようだ。まあ俺の対人記憶容量は妹・妹・妹で埋まっているから仕方がない。自分に対してのみのアナリストである。

「じゃあ早速本題いっちゃいますね」

一色は近づくと鞆の中から水を取り出して一口飲むと、直結ケーブルを互いに入れた。なぜみんな流れるように直結してくるんだろう。今度イタズラ用のアプリでも流せば止めてくれるんだろうか。

『…なんで直結?』

『は?…そんな他の人に聞かれないようにするために決まってるじゃ

ないですか。まさか直結したからってもう彼氏面ですか？ごめんなさい2度しかあったことのない人と付き合うとか無理ですごめんなさい』

『言っていないから。あとごめんなさい二回言うなよ傷つくから。……なんで俺告白してもない相手にフられてんの？』

入院しても世界が俺に優しくないのは変わらないようだ。というより直結したということはまた加速世界絡みなのだろう。もう一喜一憂するのも面倒と思えてくる自分に関心すら覚えてくる。

『まあそんなどうでもいいことは後にして。では…バーストリンク』

名探偵は俺かもしれない。

☆☆☆

加速の後、いつも通り透明になった俺はカーソルに従いすぐに合流したのだが、広くなっているところでお相手さんは大地よ滅べと恨み言を吐きながら泣き言をこぼしていた。

「うええ。腐食林ステージですかあ…」

嫌だ嫌だと声から分かる嫌悪感。そのアバターは入学式に見たのと全く同じで、右上には『Chestnut・Needle』の文字。これで一色が自称ナッツであることが証明されたわけだ。ほんの少し残された憂いが取れたことに安堵すべきだろうか。それとも厄介ごとの気配が消えないことに悩むべきか、迷うところだ。

「……………おい」

「えっ!??キヤアアアアアアア!」

「あぶなっ!??」

声をかけると同時、ナッツが手にしていたらしき針が一斉にこちらに伸びてきたのをギリギリ避ける。というより距離を取る。方向が

適当だったせいとか直撃コースがなかっただけで、向きが違えば当たってたぞこれ…。

「…おいこら、私の本題は闇討ちでしたー☆とでも言う気じゃないだろうな?」

「違いますよ!乙女の目の前に気安く立つから悪いんじゃないですか。しかも透明で。なんですか、スケルトンで覗きし放題の変態ですか気持ち悪い」

「…ここまでこのアバターを馬鹿にされたのは生まれて初めてだ。あとマジトーンの気持ち悪い止めろ」

こいつ本当は敵なんじゃないだろうな?俺に対する暴言とか悪口とか

友好的に來たと思えないんだが。

「はあ、まあいいですよ。こつちも時間ないんですから手間かけさせないでください」

「手間の全てがお前のせいなんだが…」

「ほーらまた話を脱線させるー」

「…ぐぬ。……んで、なんだよ」

口で対応できない相手には黙るしかない限定的なコミュニケーション。相手が感情論しか使ってこない時に使う苦肉の策である。ちなみに言葉が通じる相手にも使える万能ツールでもある。あらゆるだ全然限定的じゃない。

……そんな悪ふざけは、ぴよこんと指を立てて放たれたセリフに一瞬で弾き飛ばされた。

「先輩をお願いします。今日の夜、能見君と有田先輩達がブレイン・バーストをかけて戦います。だから先輩には有田先輩達の手助けをして欲しいんですよ」

「……待て。なんでそれをお前が知ってる」

さも知っているのが当然のように言い放たれた言葉に、俺は遅れな

がらに反応する。ああそうだ、なんでこいつがそんなこと知っている。確かにこいつは梅郷中の生徒でありバーストリンカーだ。だが今の梅郷中は件の能見とやらに引っ掻き回されている。ただのバーストリンカーで事情を知っているのなら、『既に巻き込まれているか』『不干渉を貫くか』のどっちかのはずだ。

入学して日の浅いこいつが能見と有田達両方と関わりを持っていくとは考え辛い。そもこいつは女子だ。噂のチーちゃんとやは有田と黛の幼馴染らしいのでまだ分かるが、男子と女子で活動範囲が違う上に有田達に至っては学年すら違うというのに。

「ああ。そういえば、先輩にはまだちゃんと言乗ってませんでしたね」

思考の渦に嵌り込んでいる俺を見て？嘲笑うかのようにポンっと手を叩く。その姿にイラっとくるも、そんなものは次の言葉で全て吹き飛ばされた。

「私は加速研究会所属、チェスナット・ニードルこと一色いろはです。仲良くしてくださいね？」

堂々と、言い放った。『加速研究会』。それこそまさに、今有田達を陥れている能見が所属していると言っていたサークルじゃないか。なんだよおい、冗談なんかじゃなくて、こいつはまさに敵も敵じゃねえか。

「…なんで加速研究会の奴が俺に頼むんだ。能見とやらが身内の恥だつてんなら、それこそ自分達で処理しろよ」

「くふふ。私としては正直それでもいいんですけどねえ。姐さんがダメだーって言ってるんでできないんですよ。でもよく、やっぱりお灸は必要じゃないですかあ？それも敵に圧倒された、っていう大きなのが」

「それこそ思い通りにはいかねえだろ。梅郷中は俺の学校でもあるんだ、不安要素でしかねえ奴をそのまま学校に放置なんかできないぞ。そいつを全損させる可能性とか考えねえのかよ」

「そつちもそつちで考えてありますけど私、というより姐さんはその可能性は方に一つもないと考えてますよ」

「……それこそ甘く見過ぎだ。俺が相手を全損させるのを躊躇うとでも?」

「いーえいえう?先輩は決める時はビシつと。そう、嫌で嫌で仕方がないことでもできちやう人です。だからちやんとそのことも考慮に入れて先輩にいい案を持ってきたんですよ。」

それが今日の私の本題の本題。ゼーんぶ解決のウルトラCです」

につこりと、顔も見えないのに笑っているのがよくわかる。その姿に、一步後ずさつてしまう。こちらが見えていないはずなのに、何もおかしいことはない中で全てがおかしいと感じてしまう。こいつの一挙手一投足が毒蛇に対してするような警戒心を芽生えさせる。

それなのに、

「先輩、私達の仲間になってください。加速研究会は、スピリット姐さんは先輩を歓迎します」

それなのに、その警戒を全てすり抜けてこちらの思考回路を乱してくる。ああ、そうだこの既視感。何度も、この気配を俺は受けているはずだ。一色じゃない。もつと、もつと危険な人を相手に。こちらの警戒の全てを見透かし、その警戒を上から叩き潰す達人が。

ちくしよう、会ってなくてもこれかよ……!警戒は強要するくせに、それ自体を無意味にして嘲笑う。まさしく、あの人のやり方だ。

「は、はは。いや、ねえだろ。怪しげな事してる奴が仲間で、怪しい人物筆頭の傘下とか、ありえねえよ」

多分、この抵抗すら無意味なのだろう。口だけの否定を、あの人が想定してはいないはずがない。その否定全てを叩き潰すくせに、こちらをオモチャのように甚振ってくるのだろう。

…今回も、あの人は変わらずに魔王なのだ。

「――」

一色の示した言葉に、抵抗できる心は俺には存在しえなかった。

開幕の火花

side 黛

無色の王の修行から翌日。昨日のことを思い出しながら、僕はひたすら頭を回していた。というのも、どうにも予想外なことをしでかしまくる幼馴染であるハルからのダイレクトメッセージが大変頭の痛くなる内容だったからだ。

「…BIC。ブレイン・インプラント・チップか。頭の中に言わばもう一つのニューロリンカーが存在しているから、マッチングリストの表示の有無を自在に操作できたわけだね」

『ああ。それを今日能見に問い詰めてきた。そしたら無制限フィールドで俺とタクと能見の三人で、ポイント全てを賭けた一回きりの決闘。それでケリをつけようって…』

その言葉に少しばかり黙り込む。事は重大だ。ハルが更衣室に侵入したという映像を握られ、ハルの翼を奪われ、チーちゃんすら奪われた相手をようやく追い詰められる場所に来た。だが、そう簡単によし行こうと言えるわけでもない。

『……………どう思う？』

「……………危険だ」

今度ばかりは即答する。無制限フィールドとは、安易に自分の全てを賭けられる場所ではない。常に不確定要素が蔓延り、なにが起こるかかわからない。相手が能見なら尚更だ。あの男がこんな危険な賭けを嬉々としてふっかけてきた以上、間違いない罠を仕掛けてくるに決まっている。それが想像の範囲内であるかは別にしても。

「……………でも、このチャンスを逃すわけにもいかない。またどんな手で僕達に干渉してくるかかわからない以上、口約束で終わりにできる地点を僕達は既に通り越している」

『そうだよな。よし、決闘を受けよう。正直一発勝負のほうがありがたいしな』

「あはは。ハルは一極集中型だからね。始まったら速攻で終わりそう

だ」

『せっかく心意の修行をしてきたお前には悪いけどな』

そう言って二人で笑いあう。昔から何度もこうして楽しく笑いあった。笑って、泣いて、一緒に進んでいく。

…そして、いつの間にかハルが一步前にいるんだ。その背につけた翼を広げ、僕に背中を見せつける。きつとこのままい能見と戦いにいけば、またいつものようにハルが先陣を切り、再び僕に背中を晒すのだろう。

「うん。だからハルにお願いがあるんだ」

『お願い？なんだよ、急に改まって』

ハルの背中を見るのは嫌いじゃない。だけどね、ハル。僕も男の子なんだ。カッコイイ姿を見せつけられて、黙っていられるほど僕は大人じゃないんだよ。

「能見との決闘。初めは僕に任せてくれ」

そろそろ君も、僕が頼れる男だってことをこの背中で知ってくれ。

☆☆☆

その日の夜9時。世界の全てが白で染められた《月光ステージ》の中を右手の釘打ち機を揺らしながら梅郷中の校庭を目指して歩いていく。ここまでにちーちゃんやハルの家に突然訪問してきたりと小さなアクシデントもあったが、それ以上に自分が全く動揺も緊張もしていないことに驚いている。まるで明鏡止水の境地にすら達していると思える集中力が心に訪れているようだ。

「……まだ、能見は来ていないみたいだね」

梅郷中の校庭を見渡せ、逆に校庭からは見つかかり辛い場所に隠れて様子を見る。待ち伏せの気配もなく、能見の姿も見当たらない。だが

それで油断もできない。能見にはハルを貶められ、ちーちゃんを苦しめられた。その策略を前に気を抜ける時間などありはしないのだから。

「…五分待って来なければ一旦離脱しよう。罠を仕掛けられる可能性が……いや、待った」

これからの行動を決めようとすると、少し離れた場所から風切り音が耳に入る。無音の月光ステージにその音は一際大きく響き、そしてその音の発信源である黒い影。それは優雅に空を舞いながら螺旋の軌道で校庭の中央に降りていく。そして最後は月光ステージに解けるように、音すら立てずに着地を果たした。

それは言うまでもなく、親友の翼を奪った略奪者。能見ことダスク・テイカーだ。

「……行こうか」

能見の動向を観察しつつも一分間、何もせずただずむ姿から目を逸らさずにこちらも校庭に向かう。互いの距離が初めの中程まで来てからは互いをにらみ合うように警戒を強めていく。

そして二十メートル程の距離を開けて僕達は歩みを止めた。ブレイン・バーストでの戦う前の最低距離は十メートルだが、今回はそれに習う必要もない。

そして数秒の間を空け、能見はやれやれと言いたげなポーズで切り出した。

「……まあ確かに？対戦の時間を決めていいと言ったのも、いくらその時間を寸前で延長してもいいと言ったのも僕ですけどね！まさか一時間も引つ張るとは思いませんでしたよ。

アレですか？こそこそ周りを這い回るネズミの浅知恵ってやつですかね？こないだまで蝙蝠のようにパタパタしてた先輩にしてはとでもよく似合ってますけど」

「お前相手に警戒は幾らしても足りないってことは学習したからな。その成果がこの決闘だよ」

「くくく。足をかじった程度で勝利宣言とはね。いいでしょう、早始めましょうか。ネズミからただの豚にしてさしあげますよ」

そう言うのと能見は右手を掲げるようにこちらに突き出した。その指先には真つ赤な一枚のカードが挟まれ、その存在の危うさを主張している。

「これがこの戦いを飾る《サドンデス・デュエル・カード》です。僕対お二人の全ポイントはこのカードにチャージし、僕かお二人両方のHPゲージが0になったら終了です。僕か二人のうち片方が勝利すればポイントの総取り。先輩両方が生きていればポイントは半々に分けて与えられます。

ああ、そちらはチームにしてあるので最後の一人になるまでーなんてことはないのご安心を」

「……なるほどね。つまりはこういうことか」

ルールを把握し、飄々とした態度を崩さない能見を睨みつける。

「この決闘は、誰かが死ななきや終わらない」

「ええ、その通り。そしてその場合必ずどちらかはブレイン・バーストを永遠に失う。一切の憂いも保留もなくね。

ああ言っておきますがポータルから離脱したらその時点で敗北なので、お忘れなく」

「退路もなし、か。君らしい徹底ぶりだね」

「お褒めに預かり光栄ですよ。先・輩？」

腰を折り曲げニヤニヤとした笑みを浮かべているだろうマスクの下から笑い声が漏れる。これで僕達が受け入れればもう後戻りはできない。それは能見にとってもだ。

「よし、いいだろう」

ハルと目配せしあい、それを受け入れる。それに能見が頷き、左の指先でカードに触れた。何度か操作を行い、それをこちらに投げつける。それを受け取りカードを確認する。

能見がいつていた通りのサドンデスルール。イエスカノーかの確認を二回。躊躇うことなく指を打ち付け、それをハルに投げ渡す。それを受け取り緊張した動作でカードを眺める親友から視線を外し、能見の様子を見続ける。

まるで余裕綽々といった姿は揺らがない。腕を組み、自分が絶対強

者であると確信を持ったまま。負けるわけがないと分かっているような姿だ。

何かある、そう確信めいたものが頭に浮かぶと同時に目の前にカウントダウンを告げる数字が現れる。参加者全員の許諾を得たシステムが働き出し、ゴングを鳴らす支度を始めた。カウント10から徐々に減り、それがゼロへと到達すると同時にデュエルの開始を告げる炎の文字が目の前を赤く染める。

それが起きても能見は身動き一つ取らない。初撃を躲す算段があるのか、まるで早く攻撃を仕掛けてこいと言っても言わんばかりの格好を崩さない。

「……じゃあハル。初めは僕が行かせてもらうよ」

「……ああ。でもタク、やっぱ二人で一緒にやったほうが…」

「ダメだよ。あの能見が、何もせず、何も仕掛けずにここに立つわけがない。ハルはそつちを警戒してくれ」

能見はあいも変わらず動かない。心意も発動しないところを見るに初めは遊んでやろうとでも考えているのだろう。

なら、それに乗ってやる意味もない。

「……………へえ」

目の前の相手からの嘲笑を無視して右手の杭打ち機に心意の光を込め、その先端を胸の前でもう片方の手を使い握りしめる。

「《蒼刃剣》！」

その杭を右手な杭打ち機を吹き飛ばしながら引き抜く。そこには過剰光を先に宿した大剣が握られ、明るい蒼色の存在を主張していた。僕の始まりの心意にして、正の心が宿った剣である蒼刃剣。

「…ふーん。一丁前に心意を習得してきたわけですか。お二人とも付け焼き刃がお好きなようだ」

「安心しなよ。僕のは確かに付け焼き刃だけど、それを打ってくれた人は君以上の心意使いだからね」

「……………素人が。ならお望み通り剣で相手してあげますよ」

ようやく腕組みを外し、能見はその両手に濃い紫の心意を纏わせる。さらに腕の先からまるで剣のように光が伸び、実態を伴って現れ

る。それを振り上げ、剣を構えて相對する。ようやく戦いのムードが出てきたというものだ。

「さて、用意はいいですか?」

「いや、まださ」

「……………は?」

いざ尋常に、とでも言えそうな雰囲気の水を差されるとは思っていなかったのだろう。惚けたような声が実に面白い。

「言っただろう?これは付け焼き刃さ。単純な剣の腕でなら君に負けることはないけどね。でもここは、初めから全力で行かせてもらおうよ」

両手に抱えた大剣を左手一本で抱え直す。片手で扱うには重たい代物だが、これはただの前準備だ。

空いた右手に再び想いを込める。でもそれは蒼刃剣のような綺麗な心じゃない。もっと醜く、もっと弱々しい負の心。勝ちたいし穿ちたいし貫きたい想いが止まらない!

「アン・ライトニング・シアン・スパイク
《穿 光 蒼 杭》!」

砕け散ったはずの杭打ち機がどす黒い蒼色の光によって蘇る。鉄の輝きは存在せず、だがその先は鉄よりも尖っている。首を貫くことに関してはここにこれ以上の存在はいないだろう。この光が証明してくれているようだ。

これで右手に負の杭打ち機を、左手に正の大剣を装備して正負両方の力がこの身に宿った。だがこの姿を見て何を思ったか、嘲りと驚愕を十二分に含んだ笑いを能見は浮かべた。

「……………は、ハハ。なんですか、それ。二刀流にでもなったつもりですか?そんな正と負の心意を両手に持って、それで強くなったおつもりで!??わざわざ分けてあるものを同時に使ったところで一つと一つ。中途半端にしなければならないとなぜ分からないんです!??」

「そうだね。この状態で戦っても、多分途中でどちらかが維持できなくて僕は負けるだろう」

「…それが分かっているのにそれですか。いやあ残念だなあ。先輩はそっちのネズミと違ってもっと、それこそ、僕と同じくらい頭が回る

人だと思っただけなんですけどねえ。まあ僕より固い頭であることは間違いないでしょうけど」

腹を抱えながらどこまでも笑いを抑えない。それが今の僕にはどうしようもなく哀れに見える。正負両方を抱えている今、僕にはどちらの自分とも正面から向き合っている状態だ。それ故に、とてもよく見えるよ。醜悪な自分と、まるで瓜二つな能見の姿が。

「……頭が固いか。まあ、生来の性^{さが}ってものは簡単には変わらないよ。頭で理解できないと違う答えを見つけたくなる。それが教えられた答えでも、納得したくないんだよ」

「……………なんの話で？」

「1+1は1と1じゃなく、2だって話だよ！」

ガツン！と両手の武器をぶつけ合う。大剣と杭打ち機が重なり合い、そして互いを拒絶し合うかのように反発が始まる。正と負。相反する属性同士がまるで水と油のように合わさることを嫌悪しているのだ。

けれどもこれは両方僕だ。もともと一つで、それが分かれたに過ぎない。どちらも僕で、どちらも大切な心の一つ。今はただその気持ち^{きもち}がそっぽを向いているに過ぎない。だから一つの方向に全てを向け合わせてそれが一つに重なる時、それはより強大な力となる。

手に剣を、身に鎧を、心に意思を。

ただ、友を守る力に！

「《蒼騎士》！！？」

蒼は蒼く、元の色がただ輝き出す。否、輝いているのではない。純度が100%にまで至り、色そのものが輝いて見える。身には蒼々と

した甲冑が、右手にはレイピアを太くしたような先の鋭い剣が。左手には身を半分は隠せる巨盾が。元のアバターより若干細めに変わった姿は、しかし存在感を数倍に増し加えて壁のような圧迫感を生み出している。それは眼前の能見を三歩下がらせ、真後ろのハルとちーちやんが唾を呑むことすら忘れるほどに。

「……待たせたね。決着をつけよう。」

……ダスク・テイカー」

『守る』ということ

sideシアン・パイル

「意志の統一、ですか？」

時は無色の王に師事を乞い、それに伴い零化現象から立ち直った後。つまりは前日まで遡る。

「ああ、それが正と負の心意を扱う上で最も重要、というかそれができないとそもそも使えないまでである」

「……統一、といってもピンとこないんですが……。何かをしたい、みたいな願いとは違うんですか？」

「それはどつちかかっていうと正の心意の方向だな。そもそもだ。なぜ心意が一般に出回ってないか知ってるか？」

王の問いかけに顎に手を当て頭を回す。といってもそんなことをするまでもなく回答は浮かんだ。

「ゲームバランスが崩れるから、ですか？」

そう、心意は心意でしか防げない。つまりは心意を知らないプレイヤーは逆立ちしても勝てないということだ。言うなればチートツールを堂々と使用しているのと大差ない行為だろう。

「間違つてはないな。だがそれは理由の一端だ。」

お前自身分かったと思うが、心意つてのは自分の傷と向き合う行為だ。当然心の傷なんてマイナスな物と向き合うわけだから、そこから力を引き出すなら負の心意のほうが簡単で単純に強い」

「……ええ。まさかあんなに簡単だとは思いませんでしたよ」

自らの右腕に渦巻いたドス黒い蒼色が脳裏を掠める。ただ感情のままに解き放つことの開放感や力を持った優越感が頭の中を支配していくような感覚だった。

「だが当然そんな力がタダで手に入るわけじゃない。心意は思い込み、言っちゃえば自己洗脳に近い。負の心意は例えるなら鏡に向かつて『自分は弱い、自分は弱い』と言い聞かせ続けているのと変わらない。だからそのうち心の闇とか呼称されてるものに吞まれちゃう。」

逆も然りな。正の心意も『自分は強い』って言い聞かせてるもんだと
考えていい」

心意は思い込み。それは赤の王からも習ったことだ。心意は現実
すら塗り替える思い込み、信じる力であると。ならば、負の心意を僕
が覚えることに意味はあるのだろうか。

「……なら正の心意を使い続ければ……」

「そも問屋が卸してくれない。なぜなら負の心意だけじゃなく、正
の心意を使い続けて心の闇に呑まれた奴が何人もいるからだ」

言い放たれた言葉に小さく息を呑む。何人もいる、ということとは心
の闇に呑まれなかった人も何人かいるということだろう。結局心の
闇に呑まれるかどうかは本人の心のキャパシティ次第ということだ。
かといって自分は大丈夫、などと楽観的なことは言っていられない。
「…おかしくないですか？正の心意は自分にプラスの言い聞かせをし
ているわけですよ？なら心の闇に呑まれるなんてことは……」

「あくまで言い聞かせてるだけだ。とことん突き詰めれば正の心意つ
て奴は、究極の現実逃避なんだよ。……こんなこと言ったらあいつに
怒られそうだけど」

究極の現実逃避。よく、分からない。心意は自分の願い、弱さを乗
り越えてその先にあるものに手を伸ばす力だと教わった。それは現
実を直視しなければできないものではないのか。

「簡単に考えればいい。正の心意はできることをさらにできるように
する力だ。」

例えばだが。岩を破壊する行為を、もつとできるという思い込みで
さらに強く現実としてそれを表す。全てはその応用だ。

だがそれは、さらにできる自分を心意によって誤魔化す行為になる
時がある。普段の自分にはできないけど、心意を使った自分にならで
きる、ってな」

「……やっぱり分かりません。それはつまり、今よりも前を見ている
ということでしょう？逆に負の心意は後ろを向いてしまっているわ
けだ。なら、やはり正の心意の方が……」

「言い方が良過ぎるんだよ。弱さを乗り越えてさらに前に進んでい

く。いい雰囲気聞こえるが、つまり乗り越えた弱さを過去のものにして捨てちまつてる。忘れてるんだよ」

……弱さを捨てる。無色の王はそういうが僕は現実の、過去の傷を直視して乗り越えた。だったら過去より今や未来だろう。むしろ弱さは捨てるべきもので、考えることは強くなることや守る力をつけること。

……そう、もう僕はあの頃の僕じゃない。ズルをしているのに周りを見下していたような、そんな自分を脱ぎ去ってその罪を償おうと僕は……。

「……失敗した過去はなくならない。例え自分がどれだけ変わったつもりでも、どれだけ自分が強くなったつもりでもな」

「っ……！」

「よく考えろ、パイル。思考を放棄せずに考えろ？お前は、本当に変わったか？」

無色の王はまるでこちらの考えを見透かすように問いかけてくる。そも僕がさつきまで零化現象に陥っていたのは、自分があの時から、ハルに助けられた時から全く変わっていないと自覚したからじゃないか。

「…僕は、変われてません。いや、変われていないから貴方に師事を頼んだんです！僕は今までの僕から変わりたいくて……！」

弱いままでいたくない。守れないままではいたくない。守る力が欲しい。倒す力が欲しい。それこそ、王のような絶対の力が……！

「だから、そもそもその考え方が間違いだつて言ってるんだよ」

「……………えっ？」

無色の王から回答を却下される。これによる動揺は今日だけで何度しただろう。

「まず自分が弱い『せい』で『って考えを辞めるところから始めろ。お前はなまじ現実のスペックが高いからか、できないことは悪い事で、できなかった結果は全て悪いものだって思い込んでるように見えるぞ」

「……そ、それはそうでしょう！そんな言い方されたら、まるでできなかったからよかったことがあるみたいじゃないですか!?!?」

僕の力がなかったせいで守れなかった。それが今の現状だ。それなのに、なくていいことなんて……。

「ならお前が、いま俺なんかに教えを乞うほどレギオンのために尽力してんのは、元を辿れば何のおかげだ?」

「もちろんハルの……」

「違うな。お前が弱かった『おかげ』だ」

「は、はい?」

何言ってるんだろう、この人。言ってることが支離滅裂過ぎて、まるで理解出来ない。

「い、いやいや何言ってるんです?!?そりやあ確かにレベル4だった時にレベル1のハルに負けたおかげで僕はこうしてネガ・ネビユラスというレギオンに所属できてます。でも、それはハルの心が広がったからで……」

「自分で言ってるだろうが。負けた『おかげ』って。お前が弱かった『おかげ』で、今こうしてられてる。もしお前が有田より強かったら、下手すりや今頃青の王に『断罪』されてたぞ」

「……っ!」

その指摘に思わず唾を呑む。かつて使っていたチートツールのバックドアプログラムは、僕の親から貰ったもので、その親はそれを僕に渡した罪により断罪されている。

だがそもそも、考えるまでもなく実行犯は自分なのだ。物は使いようというが、それを悪用していたのは紛れもなく自分だ。だけどまるで密告者の如くバックドアを王に公表したおかげで僕はほぼ無罪。だがそのまま使い続け、ふとした拍子にそれが露見した場合はどうだろう。

……考えるまでもない。断罪確定だ。

「それだけじゃない。よく有田のため黒雪のためと言いながら行動してるが、本当に自分がすべきことを理解してやっていたか?」

「……………」

「ただ漠然と加速世界のことを教えるだけなら誰でもできる。というか、本来それは親であるロータスの仕事だ。今までのお前は他人の仕事を奪って立てた功績を誇ってるのとなんら変わんねえ。」

絶対に譲れない、お前だけができるお前がいる意味を確立しない限り、今回と同じで敵に付け込まれる」

「……僕が、僕だけが可以的、僕のいる意味」

「それが考えられないならもう帰れ。俺の教える心意の習得は無理だ。…賢いだけの奴は、考えるバカより見込みがないぞ」

「……っ！」

賢いだけの奴……。それはどこまでも僕の本質を突いていたのかもしれない。元のスペックだけが少し高くて、できることだけやって偉そうにしているような、そんな奴。ハルに全て勝っていると驕っていたころと成長していない。

そうだ、ハルは頑張ってる。空を飛んでいるが故に赤系の狙撃で落とされた時は銃弾を避ける練習をしたり、翼がなくなったなら新しい力を手に入れるために奔走していた。

なら、僕は？

「……僕に、僕だけにできることなんて、そんなもの、ありません」

「……それなら……」

「でも、守りたいんです！一回失って、自分で壊した場所が、ハルとちーちゃんが、今の僕には一番大事なんだ！見下して独りで嘲笑って居るより、僕はみんなと楽しく笑って居たい！」

そうだ、今回の能見の襲撃のおかげでようやく僕は自分にできること以上のことを望んだんだ。

王であるマスター。完全飛行能力のハル。回復アビリティのちーちゃん。そんなメンバーに比べて僕は個性もなく、アバターに至っては近接の青に遠距離武装というアンバランス具合。

べつに突出した個性がなければレギオンに入らないなんてことはない。そんな物がなくてもレギオンメンバーが僕を受け入れてくれ

ていることなんてわかってる。

でも、どうしても時折叫びたくなる。なんで僕は一つのことごととんできるようなアバターじゃなかったんだと。

全てを守る硬さには程遠い装甲。

全てを薙ぎ倒すには脆すぎる杭。

全てを置き去りにするには遅すぎる足。

全てを騙すにはあからさま過ぎる強化外装。

親友の隣に並ぶには、あまりに弱過ぎる。

「…初めてなんです。自分を使い潰してでも守りたいと思ったのは。間違った僕を見捨てず、親に逆らう決意を貰い、前に進もうと思える意志を与えられたのは」

虚しい慟哭なのは分かっている。言葉にしたことすらできていないのも分かっている。それでもやりたいことがあるんだ。自分が心からやりたいと思っただけだ。

「……なんだよ、ちゃんとあるじゃねえか。できること」

「……え？」

「えもなにも、『守る』んだろ？ならやりやいいだけだろ。あ、でも一つだけ訂正しておけ。『守りたい』じゃダメだ。必ず『守る』。確定系に変更しろ」

「あ、はい。ってそんな簡単な…」

先ほどまでと変わって少し雰囲気や和らいだ無色の王に動揺する。意志の統一だとか弱かったおかげだとか、難しかったり遠回しな言い方を選んでいたので結論が初めから何も変わっていないのはどういふことなのか。

「ま、あれだ。ようするに目標を決めるのと目標を達成するために何かするのはまるきり別だということだな。さらに昔の傷をどこまで目標のために利用できるかだって大問題だ。昔の傷に負けてたらどう足掻いても心意の先なんていけやしない」

自覚することが大事、に落ち着くのだろうか。確かに守りたい、だ

けで終わっていた前よりもやるべきことを、否『やること』を定められた気がする。

昔の傷を利用できるかという点も、剣道こそが傷であり力だと自覚すればこそそれを使うことに躊躇いはなくなる。

……首元への恐怖心は別だけど。

「つまり僕の心の傷を、どれだけその傷を基に力に変換できるか、ということですね？」

「そういうことだ。未来予想図の理想形じゃなく、過去から自分のできることを現実的にとことん突き詰めろ」

自分一人の力じゃ足りないと言われ叩きつけられた。

独りぼつちは僕にあっていないと言われとちーちゃんに教えられた。

……守ることは、近くにいないことではないと能見に刻まれた。

そこまで理解して、今、ようやく僕は前に進めそうだ。

「それが終わったら修行を始めろぞ。失敗は成功のもとだと理解したなら、もうお前にできないことはない」

そういつて無色の王は小さく笑った気がした。

鈴の音が聞こえる戦場

《蒼騎士》
シアン・ナイト

正の心意と負の心意を重ねた一人の到達点。その圧倒的な存在感を前にした、この場にいる誰一人として目が離せなかった。

シルバー・クロウもライム・ベルも、そしてダスク・テイカーは今まで浮かべ続けていた薄ら笑いすら引つ込めて心底信じられないと言った様でシアン・パイルを見つめていた。

「……待たせたね。決着をつけよう。」

……ダスク・テイカー」

ヒュン、と右手の剣を軽く振るタクムも能美を見つめ返す。もう目の前のアバターに余裕は感じられない。全身を震わせるように一目のアイレンズを片手の触手で頭を抱えるような動作は一体何を表しているのか。

恐怖か、それともまだまだ愉悦が消えないのか。

「………んで、……が」

聞こえない。掻き消えるような小さな声は目の前の奴から放たれた。コマンドではない。それでも油断なくタクムは左手の盾を構えた。不意打ちも闇討ちも相手の得意分野だ。

守ることを自覚した今、既に慢心は消え去っていた。

だが相手が起こしたのは想像とはかけ離れたものだった。

「………んで、なんで、……なぜ！お前がその心意を使っている!!!」

能美がぶつけて来た感情は恐怖でも余裕でもなく、ただ純然なる『怒り』だった。計画が崩れた時の怒りを堪えた状態ですらない。ただただ、受け入れられないと言わんばかりの癩癩。

「その力！その心意！なぜあの人が生み出した技術を、力を！お前如きが使ってるんだ！」

「………君の言うあの人が僕の師匠と同じかは分からないけど、なぜ使えるかというのは答えるよ。」

教えてもらったからさ。……まあ、及第点レベルとのお達しが下つたけどね」

「……嘘だ。あの人が、あの方が、ネガ・ネビユラスのメンバーに教えるわけが……」

そこまで言つて、急に能見は動きを止めた。

「……ああ。ああ、なるほど。その可能性をすっかり忘れてました」
そう言うと今度はまた狂ったように笑い出す。しかし今度の笑いは嘲笑ではなく、怒りを無理矢理笑いとして外に弾き出すかのような危険な笑いだった。両手で頭を覆い、現実なら顔を掻き毟るのではないかと心配するほど力が込められた手の隙間から絶えず笑い声が響き渡る。

「ク、ククク。……あーそうでしたねえ。彼は……無色の王はあの人のお気に入りでしたね。なら教えてても不思議はないですねー」

……あの人の力を？まるで自分の物のように？他人に教える？そもそもそれを教えられるほどに使いこなして？

……そんなこと、僕にもできていないのに!？」

「くっ!」

突如心意を纏い伸びて来た触手をタクムは盾で弾き飛ばす。

「……消してあげますよ、シアン・パイル。あなたなんかはその心意を使う。それが僕には耐えられない。あの人の存在すら知らないあなたが、あの人のために全てを捧げた僕が使えない力を使っているなんて。許せないでしょう?」

触手の形状を剣に戻し、嘲笑すら消して構えを取る。どうやらようやく、パイルを獲物ではなく敵として見做したらしい。

「その首、頂きますよー!」

距離を詰める能見は何を隠すことなくタクムの首元に切っ先を向け、今にも貫いてやろうと動き出す。

すぐさま左手の盾を突き出すことでその突きを防ごうとする。だが首元を狙われ、それを盾で防ぐということは自分の視界を大きく妨

げることには他ならず、待ち構えていたかのように能美はタクムの視界に潜り込んだ。

「チエエエ!!」

「セエアアア!!」

瞬時の送り足。後ろへ下がりがり剣を打ち合う。

普段の剣道と違い大きな盾が能美の行動を大きく阻害する。元々の強度の差は頭に入れている。この心意は自分の使う力とは全く違う。このゲームの根底にある恐怖すら力に変える心意。

……自分では未だ辿り着けない領域の力だ。だから心意の破壊は考えてはいけない。必殺技の魔王デモンニク・コマンディア徴発令で奪うことも無理。

ならばどうするか。能美は既にそれを破る手段を見据えていた。

「……へえ、随分戦えるじゃないですか。盾と剣だなんて、普段じゃ全く使わないでしょうに」

「まあ昔色々あってね。もしもの時を考えて少し練習してたんだよ」

スイツと盾を横に流す。見せたのは持ち手の部分。それはまるで竹刀と同じくらいの取っ手が備えられていた。

「『二刀流』をね!」

本領発揮とばかりに今度は盾を構えるのではなく振り始める。体全体を使った面の攻撃。面を打つ攻撃ではない。

それはまるで壁とぶつかったかのような衝撃を能美に与えた。吹っ飛ばされながら体勢を整え、無理矢理体を横つ飛びさせ振り下ろされた剣をみっともなく回避する。優雅さとはかけ離れた泥臭さ。タクムはようやく対戦らしくなってきたと闘志が湧き上がってきた。

「『予定通り』ですよ、黛先輩!」

が、そんなものは能美にとつてはクソ喰らえ。緊急回避で逃れた場所からはようやくタクムという巨大な壁が消え去った。その先には人質兼回復役であるライム・ベルが無防備に立っているのだから。

数メートル先にいるパイルが駆け寄ってくるよりも伸ばした触手がベルを捕まえる方が早いという確信を持つての行動だった。

「…ッ！クロウ！」

「ああ！任せろ！」

即座に反応したハルユキが右手に心意を触手の纏い躍り出る。不意をつかれてのアクシジョンではあったが、タクムはそこまで焦ってはいなかった。アクシデントを予想してわざわざ2対1というアドバンテージを手放して、前衛と後衛に別れてチーちゃんを守れる位置に陣取っていてもらっていたのだから。

「光線剣！」

心意は心意でしか防げない。だが一定の力さえあれば他人の心意と戦えるのは分かっている。しかも今の能見は伸ばした触手の行方だけでなく目の前のタクムの相手もしなければならぬ以上意識全てをこちらに向けることなどできないだろう。なら競り負ける道理もない。ハルユキは力の限り引き絞った右手を触手に叩きつけようと抜き手を放った。

……………イン……………チリイーン……………

しかしそれは、本当に何も起こらなかった時の話。警戒もしていたし何かあった時の備えもした。だが考えるべきだったのだ。能見という男が、シルバー・クロウが守っているライム・ベルに向けて何の躊躇いもなく触手を伸ばしたことの意味を。そして本当に今更ながら、二対一などという不利な条件を能見自身が提案したことの重要性を。

校舎の方角から届くその鈴の音はハルユキの聴覚を暖かく包み込むかのような響きで入り込んできた。ライム・ベルのようなリングーンという重低音ではなく、まるで今では実物はなくなりアニメでしか見なくなつた風鈴のような美しい音色だ。

この音を聞いていると今にも自分が戦いの場にいるということ

忘れてしまいそうになる。全身がほんわかしてきて風呂に浸かりながらため息でもはいているかのような安心感。

(……ああ、俺なんでこんなことやってんだろ)

そう思った時にはハルユキの能動的な動きは全て停止し、その横を能見の触手が通り過ぎてチユリのその細い身体を巻き付けていた。

「クロウ!? どうして……!」

「あつははは! 無駄、無駄ですよ! 彼女の鈴の音が響く限り、そのドブネズミはもう戦えない!」

タクムの声を無視して触手は一瞬で収縮し、元の居場所である能見の元まで引き下がる。当然巻きつかれたチユリはクレインゲームの景品のごとく能見の腕に収まった。

「形勢逆転、ってやつですかね? いやあ本当にあなた方は……! 僕の思い通りに動いてくれる! おかしくって笑いが止まりませんよ! その心意には驚かされましたがなんの影響もなく踊ってくれるんですからねえ!」

能見の顔が再び嘲笑に彩られる。仕掛けた罠に動物がハマったのをよろこぶ猟師が如く、腕の中のチユリを締め付けながら動けない二人のプレイヤーを見下していた。

「そんな……。なぜ、どうやって!? 無制限中立フィールドで待ち伏せなんてできるはずがない!」

「できるはずない? なぜそう思うんです? 僕とあなた達が同じ時間にダイブできるように、彼女にだってその権利があるだけだということに」

「それを防ぐために僕たちはダイブする時間を変更した! 一時間も始めの時間をずらしたのに! なら彼女は何年間もここで待機していたとでも言うのか!」

能見は梅郷中学校の、ひいてはネガ・ネビュラスを攻撃するために様々な攻撃を仕掛けてきた。今思えば剣道の試合で加速能力を使つたのも一部のバーストリンカーを罠にかける撒き餌だったようにも思えてくる。

ハルユキに写真を通してウイルスを流して盗撮動画を撮ったり、わ

ざわざ姿を見せての対戦でハルユキの全てと言つても過言ではない翼を奪い取つたりと用意周到さも垣間見せ、その上で友情を嘲笑いチユリをハルユキ達から裏切らせたりもした。

だからこそ、タクムとハルユキには能見にリアルでこんな決闘に付き合う人間がいるとは思えなかつたのだ。

「…………先入観に囚われ過ぎなんですよ。僕が《あの人》の許可なくポイントを全損できるわけないじゃないですか。そして《あの人》を崇拜する人間は僕以外にもいて、利害の一致があればリアルを晒すことも厭わない。そんな人間なんですよ、僕たちはね」

ヘラヘラ笑う能見にタクムは苦虫を潰したような表情を浮かべる。なんせ問題は増え続けている。チユリは人質に取られ、ハルユキは能見の言を信じるならば行動不能。さらに能見の後ろには想像以上の組織が存在していることも判明した。そして最後に、校舎から鈴の音を起こしている本人が来てしまったのだ。

「も〜。そんな言い方は酷いなあ。別に私はテイカー君の頼みならこれくらいいつでも聞くよ?」

タクムは違う意味で度肝を抜かれた気分陥った。チリンチリンと手に握られた風鈴のようなものを鳴らしながら歩いて来たのはぱつと見青くて美しい姿の女性型アバターでしかない。ほぼ完全な人形で膝より上に備えられた同色のスカート。そのスカートの端々には今彼女が手に持っているのと同じ風鈴がくっついていて彼女が歩きたびにリンリン小さく音を立てている。

だがそれはあまり重要じゃない。当然彼女も他に漏れずフルフェイスなのだが、能見とは笑い方が存在からして違っていた。見るだけで相手を安心させるようなほんわかした雰囲気を出し、むしろ敵のこちらですら安心させられるまであるかもしれない。

「さて。初めまして!『コンメリナ・ウィンドベル』つていいですよ!よろしくね!」

動かなくなつたハルユキの横で清々しいまでの綺麗な挨拶。もうそろそろタクムの脳が限界を迎えて来た。

(僕が思っているより、マズイ状況かもしれないな)

短い短い第一ラウンド。
運命の第二ラウンドは、綺麗な風鈴の音で幕を開けた。

『あの人』

side パイル

さて、現状は最悪だ。チーちゃんは人質、ハルも新手との距離を考えれば人質と言えなくもない。

その上敵は二人とも同じ場所ではなくある程度離れた場所にいるのも問題だ。同じ場所に居てくれれば一網打尽を狙えたというのに。(…まったく。守る意味を心に刻んでもこれか。ほんと、自分の無力さが嫌になる)

自己嫌悪にまた陥りかけるも、首を小さく振り叱責する。言われたはずだ。自分の弱いところを受け入れろと。

一回守れなかった自分が今回は守れる、という都合のいい出来事が起きなかったただけだ。むしろこれはあるべき状態であると言い切れる。

なら大切な守れなかった後のことを考えろ。人質が二人といつてもすぐに殺されるとは思わない。

あのお喋りな能美が、何も語らずに終わらせるわけがないのだから。性分も性格も、驕りも何もかもそう簡単には変わらない。だからこそ焦らずに思考の海に溺れることができる。

「……くくつ。いやあ、あつさり引つ掛かっていただきありがとうございます
ございます」

「……彼女も加速研究会とやらの仲間かい？」

「ええ、多少語弊はありますがまあいいでしょう。さすがの僕でも二対一で戦う以上アクシデントがあるかもしれない。それなら、もう一人を呼ぶのは当然でしょう？」

「……そうだね。君に仲間といえる存在がいると思えなかった僕らの失態だ。でも何故クロウは動かない？こんなことになったら直ぐにでも怒るのがクロウだ。それなのに動くどころか反応すらないなんて……」

会話を長引かせながら少しでも現状の把握を務めていく。とりあ

えずこれ以上の伏兵がないことは分かった。わざわざ『一人』を呼ぶと教えてくれる雄弁さが故の棚ぼただと小さく笑みを浮かべる。

「ああ、それは彼女の心意ですよ。所詮は付け焼き刃のちやちな心意。守りに回す技量もないらしいですね」

「くつ、やはりか。だが相手の動きを完全に停止させる心意なんて……」
「違いますよ、先輩。彼女の心意はそんな壮大なものじゃない。けれど、もしかしたらそちらの方がよかったかもしれないですね。なにせそれなら力尽くで破れたかもしれないんですから」

ニヤリと笑う能美に顔を向けながらチラリとウィンドベルと名乗った少女を盗み見る。能美の雄弁さ故に話に入らないのか、それともただこちらを見守っているのか。ニコニコしながら時折鈴を振りリンリンと鳴らしている。何故ニコニコしてるのかが分かるのか分からないが、間違いなくニコニコしている。

そんなニコニコとは程遠い愉悦を浮かべながら、能美はどんどん情報を吐き出し続ける。

「彼女がしているのはね、『闘争心』の消失ですよ」

そして盛大にして重大な事をもよこしてくれた。

「『闘争心』、だって？」

「ええ。戦おうとする力、怒ろうとする力、抗おうとする力、刃向かうとする力。それを彼女は無くしてしまうんですよ。」

彼女は僕たちの中では変わり種でして、争いを好まないラブアンドピースを信条にしている底なしのお人好しです。まああの人に關わることで以外ですがね。

しかしその純真故に心意に力が宿ってしまう！あのシルバー・クロウを見ていたでしょう!?今にも僕に襲いかかろうとしていた人間が今までの行動全てを否定し、何もしくなってしまうたー！」

能美の言う通りハルユキはダランと腕を下げて脱力し、何をすることもなくボーツとしていて動かない。

「何故動かないのか教えてあげますよ。何かをしようとするのは向上心が働くからです。向上心とは上手くなりたい、強くなりたいという気持ちであり、誰かに勝ちたいと密かに願う闘争心。そうでなくても

誰かと戦うなら最低でも負けたくないという闘争心が働く。それがたつた一合の斬り合いであつてもね。

それがなくなればどうなるか。言うまでもありません。何もしなくなるんですよ！食事や睡眠のような生命活動は闘争心ではありませんがここはゲームの世界。そんなもの、究極的には必要がないんですよ。

ようするに、彼は完全にただの木偶人形になってしまったわけです。ふふ、あの人の最期にはお似合いでしょうね！」

ケラケラと手の中のチユリを揺らしながら勝ち誇る。

：そろそろいいだろう。もう十分に考えることができた。あとは自分でできることをとことんやればいい。

「貴様あああああつ！」

「あつはは！怒っちゃいました？ほんと、もつと冷静になれないんですかねえ」

怒号をあげて馬鹿にするような能美の姿を納めるまでもなく走り出す。

ああ、本当に遅い足だ。能美がその気ならきつと手の中のチーちゃんを三回は殺せているだろう。右手に剣を、左手に盾を持ちながら俊足になれるほど僕にスペックはない。だからこそ能美はノってくる。屈辱を与えるにはどうすればいいか、あいつなら一瞬で考えつくだろう。

「うおおおおおっ！」

「……………ふっ」

能美に向けていた剣の切っ先の射線上に腕のチーちゃんを持つてくる。ああ、僕には効果的だろうさ。ちーちゃんは僕達のサドンデスルールに参加していないとはいえ、僕がちーちゃんを傷つけるなんてできっこない。

「……………えっ？」

「なっっっ！」

見えてるかい、ハル？闘争心がなくなったなら、驚愕でいいから思い出してくれ。

「……正気ですかあなた。まさか、本当に、一緒に貫くなんて……」

信じられないといった声で能美が問う。右手に掴んだ蒼い剣は、ちーちゃんの体を貫通して能美の肩口を貫いているのだから。

もちろん、承知の上だ。だから君に能美こう答えよう。

「ああ。正気で、本気さ」

「……このっ」

ライトニング・スクリュー・ボンド
「蒼 回 爆 槍!!」

ギュルルルル!!?

右手の剣が高速の紫電を帯びながら回転する。

回り、巻き込み、回り、回り、弾けた。

「ぐあああああっ!!」

爆発のような火力に巻き込まれた能美の左肩は弾け飛び、その傷は胸部すら巻き込んでついていた触手を再生することすら出来ないほどに抉れている。

「……クソがつ!」

結局、あなたはそういう人間でしたか！友情だの守るだのと謳っておきながら、邪魔になったら容赦無く切り捨てる……と」

能美の言葉が尻すぼみになっていく。左手に加わった重みを確かめながら、ゆっくりと彼女を地面に下ろした。

「……無傷、だと」

能美の驚愕は当然だろう。なんせ目の前には、傷一つないライム・ベルが立っているのだから。

「そうだ、僕は彼女に傷一つつけていないよ」

「そ、そんな馬鹿な！ありえない！確かに剣は貫いていた！それだけじゃない！あの爆発を至近距離で受けてタダで済むはずが……!」

能美の言葉が止まる。それと同時に、僕は膝から崩れ落ちた。

「……は、はは。やはりあなたは正気じゃない。狂ってますよ。ま

さか、自分を身代わりにしたんですか!？」

その言葉に自分の体を見下ろす。腹に丸く風穴が空き、背中には焼かれたような痛みが迸る。ほぼ満タンにあったHPも半分近くまで消滅していた。

「…たつくん」

ちーちゃんが不安そうな声を出す。無事な姿を見るだけで痛みで食いついていた口元に笑みが浮かぶ。どうやら、今回はしっかり守れたらしい。

左手の盾を支えに立ち上がり、未だ倒れている能美を見下ろした。

「……僕の心意は『攻撃威力拡張』が主体だ。僕は相手に誰かを傷つける暇がないほどの攻撃をすればいいと、初めは思っていたよ。でも、お前のおかげで理解できた。

…僕は弱い。圧倒できるほどの心意なんて、ありはしないんだ。でも守りながら戦うなんて器用な真似はもつとできない」

ここ最近では自分の弱さを突きつけられてばかりだった。でもそれでよかったのかもしれない。

「守りながら戦えないなら、守りきった状態で戦えばいい。大切な人達の全てのダメージが僕にしか来ないなら、誰かが傷つくことはないんだから」

そう、弱かったおかげで、僕は皆を守ることができるようになったんだから。

「……く、はは。いやほんと、計算外なことばかりですよ。でも忘れてませんよね、僕にはまだこれがあるってことを!」

能美が前屈みになり拳に力を入れると、バサッ!と音を立てて背中にハルから奪い取った悪魔のような翼を広げた。

……………右翼だけを。

「……………な、なぜだ?なぜ左の翼が開かない!」

「無い物は開かないさ。君が言った通り、忘れちゃいけないさ。親友から奪われた大切な物を、僕が忘れるわけないだろう？」

「…なら、さつき僕の肩を潰したのは、そいつを助けるためじゃなく…」

「助けるつもりだったさ。そしてもう一度言うが僕は翼のことを少しも忘れちゃいない。いつお前が空に逃げるかを常に警戒して、飛ぶ瞬間の隙を突く算段を立てていた。その翼を吹き飛ばせば、もう君が一度死ぬまで空は飛べないからね。それが同時になっただけさ」

その言葉に能美の翼がダランと、下を向く。

…もう能美に奥の手もなさそうだ。チラリと行動を起こす気配もないウインドベルと名乗った少女を盗み見る。能美がピンチだというのにハルを人質に取る気配はない。能美よりもむしろこっちの方が今は不気味だ。

早いところ能美を倒して憂いを断つべきだ。

「……………まだ、まだだ！おい！そのネズミを人質に…ツガア！」

「…させないよ。もう一度だ！ライトニング・スクリュー・ボンド 蒼 回 爆 ！」

「ぐ……………アアッ！」

意識をよそに向けた能美に剣を伸ばし、今度は右肩を弾き飛ばす。これで両腕が能美の体から離れ落ちた。

満足に立ち上がることもすら出来ずにもがき苦しむ姿に同情を覚えなくもない。けれど、君は僕たちの居場所を荒らしすぎた。

「……………さよならだ、能美」

「ま、待て！そ、そうだいい案がある！翼は返す！ポイントだって毎週貰いでやる！土下座だって望むならしてやる！」

そ、それにいいのか!?ここで僕を殺せばこの翼は二度と元には戻らない！彼の背中から未来永劫消えるんですよ！それが、あなたが親友にすることなんですか!?!」

上半身だけを起こしあげ、足だけで後退りして命乞いをする姿。それに強いデジャブを感じる。かつて親友に命乞いをしたとき、僕はこんな姿だったのか。

「……………やれるなら、やってみるといいや」

「…っ！う、受け入れてくれるんですか？ここまでやった僕を？」

「ここでクロウの翼を返し、このサドンデスを何の後腐れなく終わらせられるなら、僕は君を一度だけ許してみたくなるよ。」

「……できるのなら、ね」

「そ、それはもちろん…」

「無理なんだろう？君の能力は相手の必殺技やアビリティを奪うとても強力な技だ。だからこそ保有量に限界があるはずだ。そうできやわざわざライム・ベルを仲間として共に連れて行く理由がない。僕たちの弱みは既に現実で握られているんだからね。」

かといってその保有量を空けたからといってそれが所有者の元に帰るなんて、強化外装の受け渡しにすら直結を条件付けているこのゲームがそんな緩いことをするようには僕には思えないよ。」

だからさ、やってみるといい。クロウに翼を返し、このどちらかが死ぬまで終わらない戦いを終わりにできるなら、僕はそれを止めはしない」

かつて間違え、一度だけチャンスを貰った身としては、同じチャンスを目の前の男にも与えたくなる。それがただのエゴでも、そうでもない」と心が潰れてしまいうだ。

…きつと、今から見るのは昔の僕の姿だ。ハルの慈悲を与えられず、空から落ちてブレイン・バーストを失う、もう一つの可能性の僕。………クソッ！くそ！こんなところで、こんなところで終わってたまるか！ベル！お前ならその場でも全員を止められるはずだ！早く助ける！」

「うーん、やってもいいけど多分その蒼い人は止められないよ？私の心意は心意での防御を受けやすいし、私の心意じゃ攻撃しても威力ないし」

「役立たずが！ならせめて僕が帰るまでの時間稼ぎをする努力をしろ！効き辛くても足止めくらいできるだろ！」

「無理だよ。それに帰ったら帰ったでポイントなくなっちゃおうよ？そうしたらテイカー君何も出来なくなるけど、いいの？」

「……ッ！あああ！」

崩れ落ちる。見ていられない、見ていたくない。もう、楽にしてやろう、楽になりたいよ。

剣を構え、能美に定める。

「……待って」

「……ベル」

その射線上に出てきたのは、またしてもちーちゃんだった。今度は能美に操られてではなく、自分の意思で僕の攻撃を阻むように両手を広げて。

「……ベル。もうあいつに操られる必要はないんだ。もうこれ以上……」

「違うの、そうじゃない！ハルの翼、私なら戻せるかもしれない！ううん、戻せるの！」

リンゴーンと鈍く鳴る腕の鐘を見せながら、ちーちゃんは今までの全てを語り始めた。

「私ずっと考えてたの。なんで私に回復なんて能力が宿ったのかなって。私の心に回復だなんて傷は思い当たらなかったから。」

でも何日もこの力を使ってて思ったの。なんで壊れた強化外装まで元に戻るんだろうって。それじゃあ回復じゃなくて修理だかって思ってたら、ようやくわかった。

私の能力は『時間を巻き戻す力』なの！だから私思ったの！この力が強くなれば絶対ハルの翼を元に戻せるって！」

「そうか、だからずっと……」

「……うん。ずっとあいつに協力してるフリをして、レベルを上げ続けてた。それでようやく、ようやく翼を戻せるまでレベルが上がったの！だから今なら……」

「うーん、そこまでされちゃうと困るかも」

リイーンと鈴の音が鳴り響き、ハルと同じようにちーちゃんの動

きも静止する。下手人はもちろん今もプラプラと風鈴を鳴らしている彼女に他ならない。

しかしここで先程まで何もする気配を見せなかった相手の介入に少しばかり焦りが出てくる。いや焦るな。二人のダメージは全て僕に流れる。なら一撃で仕留められれば…。

「テイカー君。今回は辞めとこう？本当に翼まで取られちゃったら、あの人への言い訳も無くなっちゃう」

だがその介入は仲間の能美を助けるものではなく、むしろ降伏を促すものだった。

「…………どういうつもりだ？君達は仲間、ではなくても同じグループの人間じゃなかったのかい？」

「そうなんだけど。ほら、あくまで目的のための共闘っていうか。それに、あの人はテイカー君よりもっともくと先まで考えてるから。」

私っていうテイカー君が消えちゃった時のための保険も用意してたわけだし」

「ま、待て！僕がやっていることをあの人は知ってるのか!?今回のことも全部…!？」

「うん、ちゃんとして彼女が教えてくれたよ。だからさ…」

テイカー君もあの人の為の行動を取ってほしい、かな？」

ゾツと、背筋に寒気が走る。

さつきまでのゆるほわした声とはまるで違う。能美と同じ、狂信者を思わせる確固たる意志を感じさせる冷たい言葉。

「……………っ！」

能美はバタバタと所在無さげな片翼を荒げ、存在しない両手で頭を抱えるように蠢く。それでも否定の言葉を欠片も出そうとしなかったり、やはりこいつらはどこか狂ってる。そう、まるで洗脳されているかのような…。

「……………はあ。そう、ですね。僕の行動であの人の計画が上手くいく

のなら……………」

スルツと、先程まで反吐を吐きちらすほど全損を拒否していた能美が余った翼を首元に掲げる。そこには既に心意が宿っていて、それが通過するだけで能美の首は地に墮ちるだろう。

「待て！いいのか、それをすれば君は…！」

「僕とあの人の計画の一端。比べればどちらが重要なのかなど、比べるまでもない。そもそも、言っちゃえば今回ののは僕の独断専行です。事が上手く運べないなら、あの人にとって僕に価値はない。ならば、これが最適でしょう」

「まっ…」

静止を聞くこともなく、ボロボロの悪魔の翼を振りかぶり自分の首元へと一閃を走らせる。その刹那の間に、心の中で少年は懺悔した。(申し訳ありません。せっかく救ってもらったのに、僕はあなたへ何も返せませんでした。兄から全てを奪う力も、奴らを滅ぼす手助けも。)

……………少しでもあなたの役にたてたでしょうか？スピリットさん。

……………いや、)

「……………陽乃さん」

「……………」

目を閉じ懺悔を終え、自らの世界の幕を閉じた。そのはずなのに、いつまでたつても痛みも自分が消える感覚も襲ってこない。まさか僕はこの世界から消えることにすら失敗したのか？

恐る恐る、視界を開く。

眼に映るのは自分の翼。それを掴んでいる左手。その手は白く、そして見慣れていた色で…。

「うーんどうかなー？まだなんとも言えないから、これからも役立つてもらわないとね？」

そして頭上からは崇拜したあの人の声で。後ろを振り返れば彼女の胸にある大きな瞳の模様がこちらを覗き込んでいた。

「遅れてごめんね？まだ君は消えちゃダメだよ」

ホワイトトレド・スピリット。幾人もの信者を加速世界に生み出した『あの人』が、そこに立っていた。

白い瞳

side パイル

白かった。突如現れたその人は白く、そして美しかった。純粹な人型はその体型をそのままに表し、男子ならば引き寄せられる胸元には欲とともに全てを見つめ返されるように大きな瞳が描かれている。

その人から目が離せない。敵だとわかっていているのに、まるで見惚れてしまったかのようにその一挙手一投足を目で追ってしまう。

「まったく。私のために動くのは許すけど、勝手に消えるのは許容範囲外だよ」

呆れたような声で腕の無い能美の頭を小突き、そのまま手をかざした。

「戻りなさい。『存在^{リカーランス}復帰』」

スツと、能美から透明なナニカが浮き出てきた。

それは、何度も見た姿。ニルツとした触手のような腕、ギラリと輝く顔のレンズ。間違いなく出てきたのは五体満足の『ダスク・テイカー』そのものだった。透明は色を持ち、質量を持ちながら構成されていく。

さながら、『偽物』が『本物』に仕上がっていくように。

「復活させた…？まさか彼女も治療者^{ヒーラー}なのか!？」

「……。さて、こっちは消しとかないとね」

「……………う…つな!？」

彼女の傍から声が漏れる。こちらの声を無視して白い彼女が行ったのは、両腕の無くなった元の能美の消滅だった。首筋を薙ぎ払う心意の輝きをまとった一撃は確実に体力を削り飛ばすもので、回復するための過程とは思えない。何故なら、あの驚愕を含んだ声は間違いない能美の声だったのだから。

「……………さて、終わりつと。ベル、戻っておいで。もうその子たちは離していいから」

「は〜い」

ウインドベルがチリーンと一際大きい風鈴の音を鳴り響かせながら白い彼女の元へと歩いていく。そのまま三度音が鳴る。するとそれに連動するようにシルバー・クロウとライム・ベルの電源が入ったかのように動きを再開した。

「……？俺、何を……？」

「……あれ？なんで……？」

「クロウ、ベル、戸惑うのは後だ。こっちへ」

状況を把握しきれない二人の手を引きながら彼女達から距離を取る。もちろん心意は解かない。下手をすれば、このまま全滅すらありえるかもしれない。

三対三とかそういう問題じゃないんだ。彼ら彼女らの信仰を集める真ん中の白い彼女。あの人は、危険だ。

怖いし危ないし逃げたいし平伏したくなる。何故だ。彼女にもう過剰光は見られない。つまり心意を使っていない状態である威圧。

ゴクリ、意図せず唾を飲む。それを見咎めるように、彼女の胸の瞳と目があった。

「……………それじゃあ、帰ろうか」

しかし当の本人はこちらに欠けらの興味すら抱くことはなかった。

「…ま、待て！」

気づけば、呼び止めていた。ダスク・テイカーとコンメリナ・ウインドベル、そして白い彼女の視線が一斉に僕に集まる。六つと一つの眼に見つめられて敵対している相手だというのに体が萎縮してしまう。

白い彼女の言葉に即座に反応して帰宅する気満々だった両サイドの二人からの殺気のせいだろうか。それとも、白い彼女の視界に写り込んでしまったせいか。

「突然現れたくせに突然帰るなんて無粋とは思わないのかい？それにそのダスク・テイカーはポータルから脱出すればポイントを全損するぞ？それでもいいのか？」

「貴様、この人に対してなんて口の利き方を…」

「そうだね。……永眠、してみる？」

反応したのは両脇の二人。触手と風鈴を構え戦闘態勢に入る二人に僕とハルも構えを取った。張り詰める緊張感、しかしそれはすぐ後ろの素っ頓狂な声で散り散りになった。

「あれ!?翼が……戻ってる!?」

「なんだって!?」

バサっというの間にかあるべき場所にあるべきものが帰ってきていた。誰が、いつ、なんて答えるまでも無い。

これを行なった下手人に視線を向ける。それを受けた白い彼女は、始めと変わらず堂々としていた。

「……ん？まだ何かある？彼が心配なら大丈夫だよ？もうここから出ても全損しないから。」

ほら、証拠に君達のポイントが増えてるでしょう？おめでどうだね！今回の戦闘は君達の勝ちだよ！」

パチパチと心のこもっていない賛辞が気持ち悪い。いや、惑わされるな。まず結果を判断しろ。帰ろうとしているということはもう明らかに敵対の意思はない。そして白い彼女の言葉に彼らは絶対に従う。つまりまだ情報を引き出すチャンスはあるということ。

さらに言えばハルの翼が戻り、サドンデスルールの消滅でほぼこちらの勝ちと言っている。

……ここは踏み込むタイミングだ。せめて相手のアバター名だけでも掴まなければ。

「そんな言葉で誤魔化せると思っているのか!?そもそもあなたは自分が何者かも話していない。そんな乱入者の言葉を信じられるとでも？」

「……ああそつか。私の名前が知りたいんだね」

パチリ。白い目と僕の目があった。

「……ふふ。怒ったふりして情報を引き出そうってことか。強かでお姉さん嫌いじゃないな」

「……誤魔化してるのか？」

「いやいやあ、強がる男の子は見ていて面白いからね。ちよつとイジワルしたくなつちゃうんだ。ま、君の頑張りに応じて特別に教えてあげる」

一歩、こちらへ彼女が踏み出す。

「私は加速研究会副会長、『ホワイトレド・スピリット』」

長い付き合いになるといいね？」

クスツ。と、笑い声が漏れる。気づけば彼女は目の前に立っていた。腕を伸ばせば届く距離、足を振るえば当たる距離。

構えもない彼女に対して行なった僕の行動は、後退だった。

「ふ、副会長、だって？あなたより上の存在がいるのか……？」

「ま、そうなるねー」

三歩は後ずさった僕に反応を起こすこともなく、彼女は笑いながら会話に応じる。正直もう会話を打ち切りたい気持ちでいっぱいだが、ここで彼女を逃してはもう話す機会はそうないだろう。あと少しでも情報を持ち帰らなければ……。

「じゃあ、もういい？そろそろ帰りたいんだけど」

そんな意気込みを削ぐように、唐突に会話を打ち切った。

「ま、待てー！まだ話は……」

「んー、さすがにこれ以上のんびりするのねえ。それに私達って敵対してるわけだし、そんなにかつちのことばかり教えられないよ。」

そっちの烏ちゃんの羽は私が戻してあげたんだし、ここは見逃して
くれない?」

「ふざけるな!そっちの後始末を付けただけで何を…!」

「ああ、言い方が悪かったね。もうちよつと直接のほうがよかったか」
「やれやれとでも言いたげな態度で彼女はこちらを見据えて来る。
それだけで僕もハルもちーちゃんも、全員が戦闘態勢を構えなおす。
しかし相手はそれすら嘲笑うように、悪魔の取引を持ちかけて来
た。」

「見逃してあげるから、見逃してくれない?」

口から吐かれたのは傲慢の押し売り。『殺さないでやる』という上
から目線の忠告。頬に指をやり首を傾げながら放つ言葉は絶対を押
し付ける王のようで、知らずにまた一步後ろに下がってしまう。
だが、ここで引くわけにもいかない。

加速研究会。こんな人が所属しているグループの情報に接近でき
るチャンスがそうあるとも思えない。

ここは僕のポイントを賭けてでも…

「そんな言葉で見逃せるわけ…」

レミニッセンス
「想起」

言葉を発しきる前に、僕の全てを白い瞳に囚われた。

☆☆☆

『たくー!』

……誰かが僕を呼んでいる。

『たつくーん!』

……いや。だれか、なんて考えるまでもない。僕のことをそんな風に呼ぶのは二人しかいないんだから。

前を見ると、やつぱりハルとチーちゃん二人の小さな姿。あれは多分小学生くらいの頃かな？

……そうだ、この頃は「はい、終わり」

バキイイイイン!

「うわあああああ!」

……次に感知したのは何かを砕いた音と、削られるような背中への衝撃だった。

何故か僕は仰向けに倒れ、空を見上げている。さらに首元に激しい痛みを感じる。硬い手で押さえて見ると指一つ分ほどの抉られた跡が確認できた。

(……今、僕は死にかけてのか!?)

……ようやくここになって、僕はついさつき無抵抗に殺されかけた認識が追いついた。幻覚を見せている間にリアルアタックを仕掛けられた?

……やはりこの人、危険過ぎる……!

「……………スケツト登場。というよりも、本命のお出ましってところかな?」

しかし当人は倒れる僕を見ることもなく、おそらく首の傷の下手人であろう白い彼女は細い手を振り抜いた状態で宙を見ている。よくよく見ればその方向からは大地に一閃切り抜いたかのような剣線が一本道を描いていた。

……………ここになって、僕も彼女が見ている空を見上げた。

「……………私のレギオンメンバーに手を出すとはな。覚悟はいいか? スピリット」

「横合いから心意で一閃しといて今更じゃない? ローちゃん?」

そこには、天馬のようなエネミーに跨る黒の王。修学旅行で沖縄にいるはずのブラック・ロータスがそこにいた。

「……………ふむ。ライム・ベルからクロウの翼が奪われたと聞いてどうしたものかと思ったが、戻ったようだな」

「心配しなくても私がちやんとロードしておいたよ。独断専行だったせいでセーブ地点がかなり前だったのが幸いしたね」

「……………まったく、貴様の能力は未だにサツパリだ。やってることが一欠片も理解できん」

「まあまあ、そんなつまらない話は後にしてさ。何度も言うけどそろそろ帰りたいんだよね。これ以上は転がる首の数が増えるだけだよ?」

チラツとこちらに向けられる視線に急いで立ち上がり盾と剣を構える。この場面でいつまでも無防備な姿を晒していた自分が恥ずかしい。

今度こそ油断しないように構えを「レミニッセンス想起」

また、白い目と視線が重なった。

☆☆☆

目だ。真つ白な目がこちらを向いている。

竹刀だ。先の丸い竹刀が首に向けて狙いを定めている。

目だ。真つ黒な目がこちらを見つめている。

杭だ。先の尖った杭が首に穴を開けんと行き先を告げている。

それが一斉に…。

ヴォーバル・ストライク
「奪 命 撃！」

「相変わらず真つ直ぐだね。避けたくなくなっちゃう」

ビュンツと風切り音が耳を貫く。さっきまでは耳が痛くなるような静寂の中に居たというのに、今では激しい戦闘音で満たされる。それと同時に今日何度目かの恐怖が身を襲った。

警戒していた。心意だつて纏っていた。なのに、なんの抵抗もできずにまた殺されかけた。

今でこそマスターと白い彼女が正面から戦っているが、一瞬見えた白い残像はまたも彼女が僕の首を狙っていたものだろう。しかし今僕は彼女から5メートルは離れた位置で座り込んで……！

「……………なぜ、ここにいますか？」

幻覚かも分からない能力に当てられた思考回路がようやく戻り、またも視界の端に新しく存在していた人影に目を向ける。

「……………呼ばれたんだよ」

普段の透明色はどうしたのかと言いたくなるくらい黒々とした心意の色を纏い、気怠げに頭をかく無色の王がそこに立っていた。

囚われた王

sideロータス

遡ること3年前。黒雪姫にとって姉は自分の中で全ての憧れだった。文武両道、才色兼備を着飾っていく彼女を見て自分は…

――斬！

目の前に車が迫ってくる。すぐそばには愛すべき『子』がいて、運転席には金髪のイカつい男。助け出したと思っていたのに今は命の危機に晒しているなんて…

――斬！！

目の前の目の腐った男が離れていく。仲間とも、友とすら呼んではもらえなくとも気に入っていた相手が、目の前から消えて…

斬！！！！

「はあっ！！！」

目の前に広がる偽りの景色を斬り開き、迫り来る白い腕を払いのける。心意を纏ったその腕は『絶対切断』フルド・エンドの異名を嘲笑うように正面から両手に光る剣を受け止めていく。

「…っ。はあ…はあ…」

「あれー？ローちゃん大丈夫？息荒いよ？」

「何か嫌なことでも思い出した？」

「くっ。白々しい！勝手に私の記憶を弄るな！」

「私も心が痛むんだよ？でもほら、仕方ないじゃない？せつかく全員見逃してあげようしてるのに邪魔するんだもん」

キラリ、と胸の白い瞳が煌めいた。

「そうやって無駄な意地張っちゃってさ。その意固地で自分のレギオン壊滅させたのもう忘れたの？」

「……っ！黙れ！」

右手に心意の炎が踊り狂う。ソレを目の前にいる白い瞳に狙いを定め、限界まで引き絞った。

『奪命撃!!』

ギョーン！と風切り音すら置き去りにする炎の槍が空気すら燃やしながら瞬間で対象へ突き進む。

……はずだった。

「………終わりかな？」

貫くはずだった瞳は煌々と此方を見つめ続け、貫こうとしていた右手は白い右手に掴まれている。纏っていた炎は消え去り、白い瞳だけが現状を物語っていた。

視界がブレる。

またか、と思った時には左手に力を入れていた。

仮想空間では指ひとつない剣となった己の四肢は、何物にも劣らない立派な武器だ。そこに心意を纏わせれば相手の生み出す空間を切り裂くのも容易かった。

だから今回も腕をふるった。視界が明瞭になる。赤いシルエツトが浮かび上がるが関係ない。

ここは、偽物なんだから。

「えっ」

自分の声とともに、腕が止まった。

斬るのを止めようと思ったわけじゃない。

斬る必要が無かったのだ。

だって、自分はもう相手の首を斬った後なのだから。

黒く光る両手は交差され、その間には赤い首がひとつ。それはよく見知った顔で、それは見知った光景で。刹那に感じた相手を切り裂く感触は、とてもよく知っているもので。

「や、やめろ…」

それを抱きしめるように抱いているのは間違いなく自分で。首の重みが、周りの静寂が、そして：

『い…いやあああああ!!』

響き渡る叫び声が、五感を通して夢を現実へと侵食させた。

☆☆☆

sideウルフ

「あああああ!!!?」

「先輩(マスター)!!」

叫び声と共にロータスの身体が膝から崩れ落ちた。一瞬前まで目にも留まらぬ速さで殺陣を演じていた片割れが、電池が切れたように力が抜けている。

三人の下級生の叫び声がロータスの声と交わり加速世界の夜に響き渡った。その声にすら反応せずロータスの力は抜けたままだ。

スピリットさんが掴んでいる手を離せばすぐにでも地面に横たわってしまおうだろう。

「っ。ワンショット・ラン一撃走」

カツと、地面を蹴った音が響く前に加速の世界に入り込む。移動拡張の心意がロータスとの距離を0にした。それはスピリットさんとの距離をも詰めることになるのだが、今回は見逃してもらえたようだ。むしろ完璧なタイミングで手を離されたことで、完全に動きが見透かされていた。怖い。

寸分違わず元の場所に戻った俺は手の中で光を失ったロータスを

呆然としているパイルに投げ渡した。

「…はあ。おいパイル、クロウ、えーともう一人。ロータス連れてポータルで現実に戻っとけ」

「なっ！ウルフ先輩はどうするんですか!?それに先輩はどうして…」

「んなもん帰って本人に聞け。四人がかりでも多分倒せないからさっさと帰れ。おら早く」

いやほんと、早く帰ってほしい。元々あの人に喧嘩売らずにスルーしとけばそも戦闘にすらならなかったというのに。野生の動物も目を合わせたりするのが一番ダメだって…

『心撃』^{バン}♪

「やb『孤高狼の晩餐』^{アローン・ディナー}！」

手でできた拳銃から放たれた心意の一撃が心臓を撃墜しに迫ってくるのを喰らい尽くすように両手の心意で握り潰す。

……心読めるの忘れてた。野生の動物扱いはさすがに見逃してもえなかったらしい。しかも結構マジな威力が込められてる。ゲームの中で天国に逝きかけた。メーデーメーデー！

「いやマジでお前ら帰れ。状況説明も何もかもその姫様が立ち直ったら電話でもなんでも聞け。むしろ立ち直らせろ。俺の説明もあとでするから」

「……っ!!すみません!ありがとうございます、ウルフ先輩!」

羽ばたく音が背後で響き、三人の気配が消えていく。

……まったく、とんだ筋違いだ。

今の俺に、お礼なんて言われる筋合いはない。だって、俺がここに来たのは本質的にはクロウ達を助けるためなんかじゃないんだから。

「………うん、周囲に人影なし。ようやく、本題に入れるね?新入り君?」

「…そっすね。つっても疑心8割ですしまだ入るって決めたわけじゃ…」

「君は入るよ。だって、私が勧誘するんだもん」

「……………」

殺伐、なんて空気じゃない。ただ蛇がカエルを睨んでいるだけの状況に、水気のない喉が乾いてくる。

そう、病室で一色に唆されほしい現れた俺は一步間違えれば敵地のど真ん中に突っ立ってるわけだ。世界の半分を貰えるとかだったら絶対に来なかったのに…。

そう考えると魔王よりも交渉の上手いこの人は大魔王かなんかなの？ゾーマ？ピッコロ？

「……待ってください！」

そんな空気に水を差してくれたのはさっきまでパイルと死闘を繰り広げていたダスク・テイカーだった。

「どういうことですか、勧誘って!？」

こいつを？無色の王をあなたの『加速研究会』に入れるんですか?! 一人のレギオンとはいえ王を入れるなんて、どんな危険因子か!」

「あれ？ダツカー君に教えてなかったっけ？元々今回の騒動がドサクサに紛れるのにちょうど良かったから、前から目をつけてたウルフさんに手を出そうって話だったのに。……伝え忘れてたっけ？」

激昂する彼の返答は俺の後ろから聞こえて来た。そこにはチェスナット・ニードルが手を顎に当て可愛らしく首を傾げていた。もちろんそんな仕草に絆されるわけもなく、テイカーとナッツは口論を始めた。

しかしこれで揃ったわけだ。ナッツ、テイカー、ウインドベル、そしてスピリットさん。俺のこれからの加速人生を根幹から揺るがしかねない組織のメンバー。

『加速研究会』とレギオンではない集団。というよりスピリットさんが次席に甘んじてる組織とか恐ろしすぎて関わり合いになりたくないのだが……。

だが、どうしても、どうしても叶えたい望みができた。希望を、この組織に与えられてしまった。

……希望は麻薬だと俺は過去に、レイカーにクロウの翼を見せた時に結論付けた。先に見えるのが破滅だと分かっているのに、分かって

いても希望に縋ってしまおう。それは俺も変わらないようだ。

「……それで、結局『あのこと』は本当なんですか？」

「もちろん。君が私に協力してくれればちゃんど果たしてあげる。といつてもそう簡単には信じられないだろうし、実在してるって事は見せてあげる。」

「……おいで」

パンパンとスピリット手を叩くとギユンと景色が歪んだ。

目の前の空間に色が映り出し、輪郭を象っていく。

「か、カメレオン？」

「うわー、キモいですねえ。透明ですしウルフ先輩みたい」

「それはただ透明だからだよな？なんか悪意感じるんだけど」

というかなんで俺この空気に馴染んでるんだろう。

いつの間にかテイカーはスピリットさんの後に続いて長さ6メートルほどのカメレオンに乗り始めてるし、ナッツは既に仲間のような距離感。ウインドベルはほんわかな雰囲気醸し出している。明らかに昨日の敵が目の前にいる時の反応じゃないだろう。

「……ああ、そうか。」

「……マジで疑ってないのか」

そう、こいつらには疑問がカケラもないのだ。テイカーのように不満や杞憂はあっても、スピリットさんが自分の行為に確信をもって行動しているように、この場にいるやつらはスピリットさんの行動に間違いがあるなどと思っていない。

まさに盲信。洗脳でもしているのかと疑いたくなるほど徹底された隷属意識。だからこそ新たな奴隷が現れたところでご主人の意向によって配属された同類にカテゴライズされてるわけだ。

……スピリットさんに対して反抗意識を少なからず見せているのにこの反応とは……。洗脳度合いは半端じゃない。マジで俺洗脳されないよな？

しかし考え続けても拉致があかないので他のメンバーに続いて俺もエネミーに登る。全員乗ったのを確認するとスピリットさんはある方向を指差し、エネミーは指示に従い動き出した。

カメレオンに乗ってのっしのっしと歩いて五分程だろうか。梅郷中からも目視できる程にしか距離を取られていないビルに辿り着き、スピリットさん、テイカー、俺、ナッツ、ウィンドベルの順で階段を登っていく。

そして3階まで上がったところで正面にある一室に入る。

「部屋の中で待っててね」

スピリットさんがそう言うと言いつつ軍隊さながらにビシツと三人が入り口付近に直線で並び始めたので慌ててそれについていく。

こういう無駄に規律の取れた動きってどこで練習してるのだろう。体育？

「お待たせ。これがウルフ君の待ちわびてる物だよ」

スツと手のひらを差し出してくる。

目だった。ギョロギョロしてるし、黒いけど紛うことなく目だった。見下してそうな雰囲気とか特に目だ。超目。見慣れてるもん。逸らしてるけど。

「可愛いでしょ?」

「キモいっす」

「あはは。それでも君の望みを叶えられる証明になるものだよ」

ニコツともう一步踏み込んでくる。

「そう。君の妹さんを蘇らせることの、ね」

ごくりと喉がなった。

俺は今日、一人の本物のために他の全てを切り捨てる決意をするこ
とになる。

黒い瞳と白い瞳。二つの目に魅入られて、俺は加速世界に囚われ
た。

幕間2

一難去つてまた一難去つてまた一難

梅郷中学を襲った加速研究会との諍い。

結局、有田達とダスク・テイカー間での争いはスピリットさんの影響で有耶無耶になってしまった。

負けた方が加速世界から脱落するはずのバトルロイヤルルールを、知ったことかと踏み潰す様はまさしく魔王である。私がルールだつてか。

しかし、そんな状況は黒雪達からしたら見過ごすことなどできないだろう。なんせ敵の一人が、まあ一人ではないのだが間諜が紛れ込んでいるのだ。

なので修学旅行が終わった数日後、ネガ・ネビユラスと加速研究会下っ端その1である能美でこれからについての話し合いが行われることになった。一年組が互いにリアル割れしてるが故に行える例外だろう。

そしてその話し合いが行われているのは生徒会権限により利用可能になった会議室。そこで能美、有田、黛、倉嶋（黒雪から聞いた）の四人が集まっている。二年生組は未だリアル割れが起きていないかもしれない可能性があるなので、全体チャットと音声の受信のみで参加している。

そんな緊張感を伴った話し合いの第一声を放ったのは、気怠げに溜息をついた能美だった。

「……それで？何を話し合ってます？」

僕としては、こんな毒にも薬にもならない話し合いはさっさと終わらせたいんですがねえ」

「今までのお前の行動を省みる。

野放しになんてできるわけないだろ」

「野放しだのなんだの。」

僕のリアルを縛らないでもらえます？

それに心配しなくても、僕からこの学校の生徒に対してもう手を出さないようあの人がから厳命されています。

僕が何かすることはもうありませんよ」

「……でもその、あの人？から命令されればやるんだろ？」

「もちろん」

即答である。

まあ正直、ブレイン・バーストの定番脅し文句である『リアル晒すぞ』をお互いが使える時点で交渉材料にはならず、能美と何かしら契約や約束を結んだとしても、鶴の一声でそれがあっさり消滅することがわかりきってる現状だ。

それだけの狂信を、有田達はあの夜見ているのだから。

「それにですねえ。あなた方が知ってるか知りませんが、僕の転校がもう決まってるんですよ。

まったく。あの人によってあなた方の不安を全て取り除いていただけなんですから、感謝してほしいものです」

「……つまり、転校もお前の意思じゃないのか？」

「ええ。」

まあ未練もない学校ですし、あの人の決定に僕が挟む口なんてありません」

さも当然のように告げる能見に寒気を覚えるが、これもそろそろ慣れてきたな。

狂信者も何人も見たし、取り巻きだって幾人もいる。

あの人の求心力、カリスマともいべき人望は。

「能見！なんでそんなにあの人の言いなりなんだよ！

自分の意思で何かを決めようと思わないのか!?

間違いなく利用されてるじゃないか！

お前に自由とか、そういうのはないのか!？」

だが、それは俺だけの話。

机を叩いてその身を乗り出す有田には能美がただの操り人形や口ポットにでも見えているのかもしれない。

いや、有田だけじゃない。表情に出さないだけで倉嶋や黛も怒り、というよりは恐怖のような表情を浮かべている。

対する能美の浮かべる表情は分かりやすい。

…侮蔑だ。

「……………はあ。」

無知は罪、とはよく言ったものです。

いえ、僕からしたら、既知は宝と謳うべきですかねえ」

「…何が言いたいんだよ?」

「あなた方は知らないでしょうが、僕は知っている!」

あの人の、偉大さを!

奪われて、奪われて奪われて奪われて! 奪われて奪われて奪われて奪われて奪われて!!! 犬以下の畜生のようだった僕を、あの兄から救ってくれたあの人は!

奪う力のみならず、奪う機会も! さらに先を選ぶ自由さえも、傅く選択さえも与えてくれたんです!

利用されている? 違います!

利用してもらってるんです!

だからこそ、僕はここでこうして生きているのですから!

それこそ有田先輩、あなたなら分かるでしょう?

どん底から救い出される幸福感を、奪っていた奴が堕ちていく高揚感を、自由を与えられた全能感を!!

そして、その全てを救済者に捧げたいくなる、あの感情が!」

「な、なんで俺が…」

「知ってますからね。」

一年前に有田先輩が同級生にイジメられたことも、黒雪姫先輩に助

けてもらったことも、あの人は全部知ってるんです。

だからこそ分かります。あなたも同じ感情に至ったことがあるってね。

もつとも、先輩は隣で歩き、僕は後ろで付き従う。

そういう違いはあれど、根底のところは変わりませんよ。

崇拜です、信仰です。奉り、仕えたいという思いに、弱々しい意思の先輩と違い、僕には終わりがないだけなんですから！」

酔いしれるように演説を行う能美に、もう一同ドン引きである。

能美が過去に兄から全てを奪われ、ブレイン・バーストでもそれが続けられたのは聞いている。そしてそのブレイン・バーストにより能美が復讐を遂げたということも。

だが能美の話ぶりからすると、そこにはスピリットさんが一枚噛んでいるらしい。

恐らく心意を教え込んだとかそういうことだろうが、どうにも能美はその奪われたという過去を乗り越えきつてはいないらしい。

まるでトラウマを抉られているような、苦しみを誤魔化そうとするようなスピリットさんへの賞賛。過去の恐怖ごと能美を自分への崇拜で繋ぎ止めているのだろうか。

……なんつーか、性格の悪い、あの人のやりそうなことだ。

「……………ふう。」

まあそういうわけで、僕への警戒をするのは勝手ですがあまりオススメはしませんよ。一週間もすればもう居ませんし、命令は絶対ですから」

そう俺たちに告げ、最後に童顔をニコツと人懐っこい笑みで立ち上がった。

能美にとって話し合いはもう終わりだという合図だろう。

勝手に話し合いを切り上げられている状態だが、ドン引きして腰の引けている一年生、sは役に立ちそうにない。

だがスピリットさんの命令があるというのなら大丈夫だろう。あの意味一番信用できる命令で、さらにある意味一番信用できない命令だ。

なにせよ、能美が引越す一週間中は気をぬくことはできないだろう。

「ああそうだ」

恐らく皆同じようなことを考えて居ただろう時に、まるで見計らったかのように出口の取っ手に手をかけた能美が声をあげる。

ビクツと一年生、sの肩が震えながら恨めしげに能美の方に視線が向けられ、その視線を愉悦の笑みで迎え撃つ能美。どうやら性格の悪さは素のようだ。

そしてその愉悦の表情で右手の指を二本立てた。

「みなさん、二ヶ月です。」

二ヶ月の間、あなた方には猶予をさしあげます。

そこから僕たち加速研究会は再び加速世界での活動を再開します。

今回は僕が先走って余計な茶々を入れてしまいましたので、予めお伝えするようにとあの人から仰せつかってきました」

ナ、ナンダツテー！

いやマジでなんだって？

堂々過ぎる宣戦布告、いやむしろテロ宣言？

広過ぎる加速世界で、時間の流れの違いから同じ時間にダイブするのも少しばかり難しい場所で、何かを企て実行してやるとそう宣言したのだ。

心の準備が出来るぜやったー、なんて言えるわけもなく、面倒ごとが起きると確定してしまった。

……そしてなにより、今の俺はスピリットさんに唆されて一応加速研究会所属となっている。

つまり加速研究会が動くということとは、俺も何かしらやらされるということと同義であり…。

え、俺も転校させられたりするの？俺は圭一君だった？

「ど、どうい…」

「さあ？僕も詳細は知らされてませんので。

なのでご心配なく。二ヶ月は安泰ですよ。

それじゃ、失礼しますね」

「まっ…」

有田の制止も虚しく、能美は扉を閉めきった。

残るのは呆然とする二年生三人組と映像越しの俺と黒雪だけだった。

『……………なんにせよ、お疲れさん。』

で、黒雪。お前あいつが転校するって知ってたか？』

『……………知るわけがないだろう。』

修学旅行が終わってすぐに転校を決めるなど…。

能美だけの決定で可能なことではない。

親の都合、金銭の都合など多々ある問題を意に介さないなんて想定ができるものかッ！』

『だよな…。』

ゲームだけじゃなく、リアルの方もやばい相手かもしれないな』

『くっ…。』

とにかく、私は能美の転校が事実かの確認を急ぐ。

それくらいならすぐだからな。

…それからハルユキくん、タクムくん、チユリくん。矢面に立たせてすまなかった。

レギオンマスターなのにメンバーの窮地に何もできなかつた事を

謝らせてくれ…』

「そ、そんなこと…」

「そうだよ！先輩私達のこと助けにきてくれたじゃん！」

「その通りですマスター！」

貴方が来てくれなかったらどうなっていたか！」

能美という敵が消えたからかネガ・ネビユラスによる内輪ノリが始まってしまった。

当然レギオンの違う俺がその内輪ノリに混じれるわけもなく、ただただ居心地の悪さを味合わされることになりかけている。しかも長そうだし。

『……先落ちるな』

それだけ言い残して俺は繋いでいた通信を切った。

なんせ俺は足の骨が折れてしまった怪我人なのだ。ようやく今日退院できる程度には重症だったので、思ったよりもスケジュールが押している。

荷物はそこまでないとはいえ、数日間寝食を共にした病室だ。少しばかり名残惜しくもなろう。

ああ、愛しくも暇だった入院の日々よ。さらば食っちゃ寝の生活。やばい、出て行きたくないぜ。

「……にしても、これからどうすっかな」

いやほんとどうしよう。

加速研究会になったのは俺にとって必要なことだから割り切れる。でも別にスピリットさんはスパイをしるどころか、指示の一つもない。とかいつアバターの復活をしてくれるのかもイマイチわからない。それ以前にあの目玉何？黒い目玉がどうやってアバター蘇らせるの？

嘘やハツタリで交渉を進める人には思えないから勧誘にのつたが、改めて冷静になると問題事項が山盛りな気がしてくる。

その中でも一番初めの問題はこれから黒雪達とどう接してくかだ。今まで通りだと、加速研究会だとバレた時に殺されそうだし。かといつて黒雪に教えればなんの躊躇いもなく殺されそうだし。うわーいデット・オア・ダイ！俺は死ぬ！

「……バレなければもうまんたい。

見えたぜ生還ルート」

「病院の目の前でなーにぶつぶつ言ってるんです？

精神科行きます？・そこですよ？」

「……げっ」

「乙女の顔確認してからのげっ、はないんじゃないですー？」

暗闇に一筋の光明、と思いきや光が遮られた。

遮ったのはあざとさ満開で、そもそも一番大きな問題そのものである後輩。加速研究会さんったら梅郷中学カケラも手を引いてないじゃないですかヤダー！

「せーんぱいー！

退院、おめでとうございます！」

そう、加速研究会所属の一色いろはが満面の笑みで出迎えていた。

リアルの日常

「せーんぱい！退院おめでとうございます！」

満面の笑みで一色はそう言った。

なんていい笑顔だ。まるで俺への不幸を乗せる方舟のようじゃないか。

笑顔とは本来攻撃的な（ry。

「…で、なんでいるんだ？暇なの？」

「失礼ですねー。」

可愛い後輩が忙しい中わざわざきてあげたのに。

ほら、松葉杖突きながら歩くのとか大変じゃないですかー。

だから見守ってあげようかなーと思ひまして！」

「見守って楽になったら医者も看護師もいらねえんだよ」

体力低下を防ぐためかどうか知らないが、松葉杖にはそれ本来の機能以外ついていない。

どうせなら機械仕掛けの松葉杖にして転倒防止の機能でも付けてほしいものだ。なんせ運動不足のせいで折ってない方の足への負担が半端ない。

これ家に着くまで保つかな、俺の体力。

「で、マジで何しに来た？」

本当に退院を祝いに来たわけじゃないだろ？」

「…はあ。疑いすぎですよ。」

私だって現実では立派な女子中学生なんですよ？

私自身のコミュニティもあれば友情関係だって沢山あるんです。

どっちもない先輩と一緒にしないでください！」

「ばっかお前、俺だって友情関係の一つや二つ…」

「あるんですか？」

「……………ないです」

一瞬材木座の顔が頭をよぎったが、別にあいつ友達でも何でもないしな。ただの知り合い、むしろ知らないまである。

「えーと、結局私がここに来た理由でしたっけ？」

これから小町ちゃんと遊ぶ予定だったんですけど、思ったよりも時間が空いてしまったのでどうせならって思ってた来たんですよ。

可愛い後輩に退院した瞬間に会えるなんて、先輩は相当の幸せ者ですからね」

「あー確かに。」

家族ですら退院祝いどころか入院中のお見舞いにすら全然来なかったことを考えるとお前でも可愛く思えてくるから不思議だわ」

「まあ私は元々可愛いですからね！」

ていうか突然なんです、今の口説いてるんですか？

「ごめんなさい狙い過ぎで気持ち悪いので無理です」

「ちげえよ。」

他の奴よりマシに見えるっただけだ。

他の奴自体そもそもほとんどいないけど」

そして可愛いの頂点である小町と比べてしまえばお前は足元にも及ばないと断言しよう。

天使モードのニコと比べてようやく届くかもというところだ。あれ、結構高くない？

どっちもあざとい所とか裏がありありな所とか共通点が多いからかな。むしろ堕天使モードのニコより大人しそうだから相對評価が上がってる可能性が微レ存。あとなんで俺日常会話の中で振られるのん？

「……………あら？…比企谷さん？」

「え？…」

「ん？」

テツコテツコ松葉杖を突きながら一色と歩いていると、後ろから聞き覚えのある声が聞こえてくる。

俺の後ろに立つなああああ！と言ってみたくところだが、なんか後ろの威圧感が少しばかり大きいので辞めておくことにする。命拾いしたな！俺が！

「…倉崎先輩か。ども」

「ええ、こんにちは比企谷さん。」

それと…」

「初めまして！

一色いろはつていいます！先輩の後輩で、今先輩が危なくないかお世話してたところなんですよー」

「そうでしたか。」

初めまして、倉崎楓子といます。

仲睦まじいようでしたのでお話に聞く妹さんかと思いました」

「こいつは妹じゃない。」

俺の妹はこいつの数万倍可愛い」

「……………それ本人の前でいいます？」

「あらあら」

不満そうな一色を捨て置き、倉崎先輩の姿を見る。

制服ではなく清楚な私服姿で自然に立つ姿は思わず目を吸い寄せられるが、倉崎先輩の学校はこつち方面ではないはずだ。

ということは何かしら用事があることは間違いない。黒雪から修学旅行後に倉崎先輩との和解を果たしたことは聞いているので、恐らくそつち関係だろう。

ならこんな所で時間を無駄にさせるのも無駄だろう。

「…んじゃ、俺は小町のいる我が家に帰るんでな。」

またな倉崎先輩」

「こーら、待ってください。」

なんでせつかく会ったのにすぐ別れようとするんですか。

久しぶりに会えたんですよ？もう少し比企谷さんと私もお話したいんです」

「いやあ、ほら、俺足折ってるから立ってるのも辛いから早く帰りたいなーと」

「それについてもです。」

なんで知らせてくれないんですか？

聞いていたらお見舞いに行つたのに」

……え、怪我した時つて周囲に拡散するものなの？

昔から病気の時も見舞い人どころか家族すら気にしてくれる人が全然いなかったから、最初から最後まで自分一人で完結してたのでそういう経験なんてなかったんだ。

いや、黒雪のような有名人にいたつては本人の目が醒める前から入院の事実が広がつてたし、状況次第かもしれない。

あれ、でも俺も事故つたよな？

比企谷が事故つたつてよ！比企谷？誰？で終わる俺マジパネえ。

「えーと、先輩。」

私にも説明して欲しいんですけど。

こちらの方と先輩つてどういう関係なんですか？

まさか、かのじ…」

「ない。ありえん。」

ちよつとした関わりがあるただの知り合いだよ」

女子はすぐ彼氏だ彼女だと騒ぎたがるが、騒がれる方の身にもなるべきだ。

比企谷つてあの子のこと好きなんだつてー。えー可哀想ー。とか話してた女子達よ。一番可哀想なのは俺だ。

「そ、即答ですか…。」

それに私は比企谷さんを友人と思っていたのですが…、私だけだったようです。残念です」

「あー先輩泣かせたー」

「いや泣いてないだろ…」

泣いてはいない。でも少し悲しそうな顔をしているのは間違いないので少々困る。というかなんでそうなるんだよ。なに、俺の好きなの？

だが冷静に考えて俺と倉崎先輩の関係といってもイマイチ当てはまるものも特にないだらう。

違うレギオン同士仲間ではなく、一緒に加速世界でお茶したりはしているがそれは友人と言えるのだろうか。

気分的にはファミレスで相席した相手と話があつて盛り上がった的な関係なんだが、見下し気味の一色と拗ね気味の倉崎先輩の視線がとても痛い。

多分今そんなことを言えば視線の質がさらにもう一段階下がるかと請け合いだろう。困った、逃げ道がない。

……よし、覚悟を決めよう。

「えーあー、じゃあその、なに。

俺と、とも…」

「でしたらこれから友人になるべく遊びに行きましょう！」

俺の一世一代の覚悟が口から出てこようとした瞬間、その覚悟は横っ腹から打ち砕かれた。

しかもこの声、可愛く愛らしく可愛らしいこの声を俺が間違えるはずもない。

「なんでいるの小町ちゃん。お兄ちゃんの退院の付き添いなら少し遅いと思うんだけど」

「いろはちゃんから連絡が来たんだ！

綺麗なお姉さんとお兄ちゃんがいい感じだっけ聞いてたら、これはもう妹として合わないわけにはいかないでしょ！

あ、初めまして！

妹の小町です！兄がいつもお世話になってます！」

「あら、あなたが噂の妹さん？

聞いていた通り可愛らしいですね。

私は倉崎楓子といいます。お兄さんと仲良くさせてもらっています」

「そうなんですか！

兄がいったい何を話してたのかは後で問い詰めるとして、是非是非倉崎先輩とお話ししたいです！

うわーほんとうに綺麗ですね！大人っぽくて小町憧れちゃいます！」

「ありがとう。

そう正面から言われると少し照れくさいですね」

互いを褒めたり俺を貶したりしながら会話の応酬が続いていく。貶してるのは小町ばかりだが。

それにしても流石のコミュニケーション能力、次世代型ハイブリットボッチの異名は伊達じゃない。あの勢いで話し続けたら1日で俺と倉崎先輩が話した合計量越えるんじゃないかな。

というか…

「おい一色。

よくも余計なことしてくれたな」

「感謝してくれてもいいんですよ？

美少女三人に囲まれるなんて先輩の一生で一度あるかないかの奇跡といっても過言ではないですからね。

その機会を恵んであげた私とかまさに救世主、メシアと呼んで崇め

ても構いませんよ?」

「アホか」

このアホ娘は放っておくとして、このままの流れだとマジでどこかに出かけることになる。

忘れてるのか無視されてるのか知らないが、一応俺の足の骨はポツキリ折れてしまっている。その状態では遠出でなくてもキツイものがある。割と真面目に。

「盛り上がってるみたいだし俺は帰るぞ。

突っ立ってるだけでも足が辛い。いやマジで」

「うーん足だもんねえ。

移動範囲が狭まるのは仕方ないとして…」

「おーい小町ちゃんやい。

お兄ちゃん帰りたいんだけど…」

「うむむ。そうだ!

いろはちゃん、楓子さん!

ずっと立ち話というのもあれですし、ウチに来ませんか?

兄もこのように家で持て成したいと申してますので!」

「え、待って。俺そんなこと一言も…」

「あ、でしたら私が送りますよ。

こう見えて私、車の免許を持っていますし今日も母の車を借りて来ただけです。

比企谷さんのお怪我の事を伺ったのが昨日でしたので、お見舞いが遅れてしまいました…」

「むしろ小町的にナイスタイミングです!

今日も両親は夜まで仕事ですので少しくらいなら騒いでも大丈夫です、是非ゆっくりしてってください!

いろはちゃんも大丈夫?」

「じゃあ私もお邪魔するね小町ちゃん!

あ、それならニコちゃんも呼べばもっと楽しそう!」

「いいね！」

お兄ちゃんの女性の交友関係大集結！

これは小町的にポイントたかーい！」

「お兄ちゃん的にポイント低いよ小町ちゃん…」

あれよあれよと俺を無視して物事を進めていく女性陣。

しかし倉崎先輩が車で家まで送ってくれるという申し出は正直ありがたい。足の怪我なのに松葉杖突いてる手まで痛くなってきたし。移動が楽になるメリット、その後の予定を丸々潰されるデメリット。

それらを天秤にかけた場合、いったいどちらに傾くだろうか。

「お兄ちゃん、行くよ！」

「アツハイ」

答え、天秤ごと小町に持ってかれます。

ちなみに小町も退院した俺に付き添うために近くにいたそうなの。

流石にあの短い時間でここまでくるといふ離れ業はできなかつたと納得したが、つまりどうあがいてもこの展開からは逃げられなかつた。

知らなかったのか？大魔王からは逃げられない！

つまり我が妹は大魔王だったらしい。俺は配下のゾンビあたりだろうか。

つまりこれから帰るは魔王城。入ったものは出られません。

家から出ない専業主婦になりたい。

「お兄ちゃんはーやーくー！」

「無茶言うなー」

まあでも、こうして馬鹿みたいに小町が笑っていられるのなら、こういうのも悪くはない、かな？